

一般県道米子岸本線緊急地方道路整備工事（改良）に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県米子市

# 橋本遺跡群

橋本漆原山遺跡  
橋本徳道遺跡

2003

財団法人 鳥取県教育文化財団

## 鳥取県教育文化財団調査報告書 85

一般県道米子岸本線緊急地方道路整備工事(改良)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書  
『橋本遺跡群 橋本漆原山遺跡・橋本徳道遺跡』

## 正誤表

頁	行	誤	正
写真目次		写真2 作業員集合写真	写真2 作業員集合
写真目次		写真6 小型の地輪と火輪(小型品)	写真6 小型の地輪と火輪
7頁	12	米子平野辺縁	米子平野縁辺
15頁	12・13・20～ 22・24・29・36	赤褐色	暗赤褐色
35頁	2	赤褐色土層	暗赤褐色土層
37頁	図31		①黒褐色土
76頁	23	図版42—1	図版42—1、47、48
76頁	31	「妙年信女」	「妙念信女」
76頁	33	図版42—1	図版42—1、47、48
76頁	37	図版42—2、43、44—1	図版42—2、43、44—1、47、48
88頁	10・11	中・近世では	古代から中・近世では
99頁	4	超えて	越えて
102頁	7	調査区境を	切られているが
104頁	11	2層	3層
110頁	9・10	赤褐色土上面	暗赤褐色土上面



1. 調査区遠景（西から）

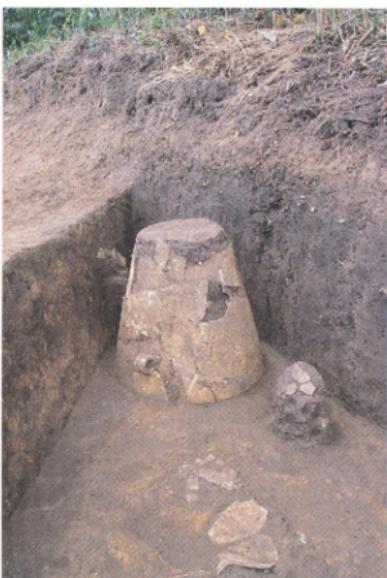


2. 調査区全景（北東から）

カラー図版 2



1. 橋本漆原山遺跡 竪穴 1 遺物出土状況（北西から）



2. 橋本漆原山遺跡 竪穴 1 内  
甑形土器出土状況（北西から）



3. 橋本漆原山遺跡 竪穴 1 出土土器



1. 橋本漆原山遺跡 土坑44遺物出土状況（東から）



2. 橋本漆原山遺跡 土坑44出土紙付着古銭



3. 橋本漆原山遺跡 土坑44出土土器

カラー図版 4



1. 橋本漆原山遺跡 ピット群2、溝6出土陶磁器



2. 橋本漆原山遺跡遺構内出土陶磁器

## 序

近年、鳥取県では『妻木晩田遺跡』や『青谷上寺地遺跡』など、全国に誇れる重要な遺跡の発見が相次いでおり、県民の方々の遺跡や文化財に対する関心もひと際高まっているように思います。

ところで、時として大きな話題を集めようとした文化財の発掘調査も、元をたどれば道路建設等のさまざまな土木工事を中心とした地域開発に関連して実施されることが大半です。

バブルの崩壊以降、従来型の構造物中心の地域開発があまり期待できなくなった今、新しい価値観に基づく、社会資本の整備の在り方が検討されてもよい時期に来たと言われるようになりました。

こうした折、こうした埋蔵文化財は、新しい地域開発の媒体として活用していく要素を多分に有したもののように感じられます。

なぜならば、発掘調査によって発見された文化財は、たとえ地域住民が無意識のうちに継承してきたものであったとしても、紛れもなくその地域に久しく伝わってきたものであり、必要な手続きを経ることによって地域住民の財産としての意識の共有化が図りやすいものと考えられるからです。

ところで今回、一般県道米子岸本線整備工事に関連して、(財)鳥取県教育文化財団が鳥取県から委託を受けて実施した「橋木漆原山遺跡・橋木徳道遺跡」の発掘調査報告書を刊行することになりました。この遺跡では、弥生時代から近世までのさまざまな遺構・遺物が発見されました。

この報告書が、今後さまざまな分野で広く利用、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査の実施に当たっては、実に多くの方々のお世話をなりました。ご指導、ご協力いただいた方々に対して心より感謝申し上げます。

平成15年3月

財團法人鳥取県教育文化財団  
理事長 有田博充

## 例　　言

1. 本報告書は、「一般県道米子岸本線緊急地方道路整備（改良）に係る埋蔵文化財発掘調査」として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本報告書に収載した遺跡の所在地は、以下の通りである。

橋本漆原山（はしもとうるしひらやま）遺跡：米子市橋本字漆原山357、361—1、362—2、363—1～4

364

字南ハケノ前355、356

字ハケノ前349—3、353—1他

橋本徳道（はしもととくみち）遺跡：米子市橋本字徳道455、456、457—1、458—3、459—1、461—1  
字徳道堤ノ上387～389

3. 本報告書における方位、座標値は、国土座標第V系の座標値である。調査区全域にわたって、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で南東杭を基準とする10mグリッドを設置した。また、レベルは海拔標高を表す。

4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/50000地形図「米子」を使用した。

5. 本発掘調査にあたり、現地指導を鳥取大学井上貴央氏、岡山理科大学白石 純氏にお願いした。また、出土した古錢付着紙の鑑定を鳥取県産業技術センター浜谷康郎氏に、石材鑑定を遠藤勝壽氏に、人骨鑑定を井上氏に、土器の胎土分析を白石氏にそれぞれお願いした。なお、井上、白石、浜谷の各氏には玉稿を賜った。記して感謝いたします。

6. 本報告にあたり、土壤分析、遺跡の航空撮影をそれぞれの専門業者に、現地における基準点測量および地形測量を測量コンサルタントに委託した。

7. 遺物の実測・清書は調査員および室内整理作業員が行った。

8. 掲載した図面は、調査員が作成したものを調査員および室内整理作業員が清書を行った。

9. 現場の写真撮影ならびに遺物の写真撮影は全て調査員が行った。

10. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

11. 本報告書の作成にあたっては、下江健太、伊藤 創の両調査員の協議に基づき執筆、編集を行った。文責は目次、および文末に記した。

12. 現地調査および報告書作成にあたり上記の方々の他、多くの方々、機関から御指導、御助言、御支援をいただいた。以下に明記して感謝いたします。

青島 哲（山口県教育委員会）、浅川滋男（鳥取環境大学）、穴澤義功（たたら研究会委員）、川上昭一（八雲村教育委員会）、小原貴樹（米子市教育委員会）、佐伯純也（財団法人米子市教育文化事業団）、下高瑞哉（米子市教育委員会）、高田浩司（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）高橋浩樹（財団法人米子市教育文化事業団）、長田康平（溝口町教育委員会）西尾克己（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、日本貿易陶磁研究会、原田倫子（広島大学大学院）、光本 順（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）（敬称略、五十音順）

## 凡 例

1. 本報告書で使用している遺構名と、発掘調査時に使用した遺構名は大幅に異なる。新旧の対照表は目次の最後に示している。

2. 遺跡の略称は、橋本漆原山遺跡をH U、橋本徳道遺跡をHMとした。

3. 本報告書における遺物の記号は以下の通りである。なお、番号は遺跡単位で通し番号をつけてある。

番号のみ：上器、陶磁器、土製品 S：石器、石製品 F：鉄製品、鉄滓、金銀製品 M：錢貨

4. 本文中、挿図中、および写真図版の遺物番号は一致する。

5. 遺物実測図内の、須恵器または須恵質の土器の断面は黒塗りで示し、それ以外は白抜きで示している。なお、土器、陶磁器の口径、底径復元について、基本的に残存率が $1/8$ を超える個体のみ反転復元を行っている。

6. 遺物実測図の縮尺については、土器は $1/4$ 、石器は $1/3$ 、五輪塔は $1/6$ 、鉄器は $1/2$ を基本とし、それぞれの大型、小型のものについては適度な縮尺で掲載している。

7. 遺物には基本的に、遺跡の略称、グリッド名、遺構名、取上げ番号、取上げ年月日を注記した。

8. 遺構、遺物に使用したスクリーントーン、ドットは以下の通りである。

地山： ■■■■ 炭化物： ■■■■■ 烧土： ■■■ 贼床： ■■■■ 磨面： ■■■ 砂目： ■■■ 木質部： ■■■■■

土器・土製品 ● 石器 ▲ 鉄器 ■

9. 遺物観察表は遺物の種類ごとに第4章末に掲載している。土器は復元した数値には\*印、残存値は△印をついている。石器、鉄器についての法量は最大長、最大幅、最大厚、重量を計測している。

10. 遺構、遺物の時期決定には主に下記の文献を参照した。

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』N.O. 2 日本貿易陶磁研究会

小野正敏 1982「15～16世紀の染付瓶、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』N.O. 2 日本貿易陶磁研究会

九州近世陶磁学会事務局編 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会

清水真一 1992「因幡・伯耆地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社  
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』N.O. 2 日本貿易陶磁研究会

八紘 興 1998「山陰における中世土器の変遷—供膳具・煮沸具を中心として—」『中近世土器の基礎研究』

X III 日本中世土器研究会

# 目 次

序  
例 言  
凡 例  
目 次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	(下江) 1
第2節 調査の経過	(下江) 1
第3節 調査体制	(下江) 2
第4節 調査の方法	(下江) 4
第2章 歴史的環境	(伊藤) 5
第3章 橋本漆原山遺跡の調査	
第1節 遺跡の概要	(下江) 8
第2節 調査区の土層堆積	(下江) 15
第3節 第1遺構面の遺構・遺物	(伊藤) 18
第4節 第2遺構面の遺構・遺物	
1. 弥生・古墳時代の遺構・遺物	(下江) 24
2. 中・近世の遺構・遺物	(伊藤) 31
3. 時期不明の遺構・遺物	(下江) 67
第5節 第3遺構面の遺構・遺物	
1. 弥生時代の遺構・遺物	(下江) 73
2. 時期不明の遺構・遺物	(下江) 73
第6節 包含層出土遺物	(下江・伊藤) 76
第4章 橋本徳道遺跡の調査	
第1節 遺跡の概要	(下江) 88
第2節 調査区の土層堆積	(下江) 88
第3節 第1遺構面の遺構・遺物	(伊藤) 90
第4節 第2遺構面の遺構・遺物	
1. 弥生・古墳時代の遺構・遺物	(下江) 92

2. 中・近世の遺構・遺物	.....	(下江・伊藤) 95
3. 時期不明の遺構・遺物	.....	(下江) 99
第5節 第3遺構面の遺構・遺物		
1. 時期不明の遺構・遺物	.....	(下江) 104
第6節 包含層出土遺物	.....	(下江・伊藤) 108
出土遺物観察表		

## 第5章 特論

1. 中世の地鎮における錢貨の取り扱いについて —中国地方を中心として—	.....	伊藤 創 125
2. 橋本塗原山遺跡から検出された火葬人骨について	.....	井上貴央 129
3. 橋本塗原山遺跡出土の五輪塔について	.....	下江健太 133
4. 橋本塗原山遺跡出土土器の胎土分析	.....	白石 純 137
5. 橋本塗原山遺跡土坑44出土古銭付着物の鑑定	.....	浜谷康郎 142
6. 橋本塗原山遺跡出土の合わせ口小皿内の土壤分析について	.....	パリノサーヴェイ株式会社 144

## 第6章 橋本遺跡群の評価 ..... (下江・伊藤) 148

## 図版

## 挿図目次

図1 調査区全貌	.....	3	図17 壓穴住居1	.....	25
図2 橋本遺跡群グリッド配置図、調査前地形測量	.....	4	図18 壓穴住居1出土遺物その1	.....	26
図3 周辺遺跡分布図	.....	6	図19 壓穴住居1出土遺物その2	.....	27
橋本塗原山遺跡			図20 壓穴住居1内P2および出土遺物	.....	27
図4 橋本塗原山遺跡遺構配置図その1	.....	9	図21 壓穴住居1内溝1および出土遺物	.....	28
図5 橋本塗原山遺跡遺構配置図その2	.....	12	図22 壓穴住居2、テラス3	.....	29
図6 調査区内土層断面その1	.....	16	図23 壓穴住居2	.....	30
図7 調査区内土層断面その2	.....	17	図24 壓穴住居2、テラス3出土遺物	.....	31
図8 溝1・2	.....	18	図25 テラス3および出土遺物その1	.....	32
図9 溝3、焼土1・2	.....	19	図26 テラス3出土遺物	.....	33
図10 土坑1・2	.....	19	図27 壓穴1	.....	34
図11 溝4	.....	20	図28 壓穴1出土遺物その1	.....	35
図12 土器1・2出土状況	.....	20	図29 壓穴1出土遺物その2	.....	36
図13 土器集中区および出土遺物	.....	22	図30 上器蓋土坑墓1、埋葬施設1	.....	37
図14 道路状構1、ピット列1、土坑3	.....	22	図31 上器蓋土坑墓1および出土遺物	.....	37
図15 土坑3	.....	22	図32 埋葬施設1および出土遺物	.....	38
図16 土坑3出土遺物	.....	23	図33 十坑4および出土遺物	.....	38

図34 ピット群1・2	39~41	図76 ピット4および出土遺物	73
図35 ピット群1・2復元案	42	図77 溝17・18	74
図36 ピット群2出土遺物	43	図78 土坑49~53および出土遺物	75
図37 波板状凹凸面1	43	図79 表土層出土遺物その1	77
図38 土坑15	43	図80 表土層出土遺物その2	78
図39 溝5	43	図81 表土層出土遺物その3	79
図40 溝6および出土遺物	44	図82 表土層出土遺物その4	80
図41 溝6出土遺物	45	図83 表土層出土遺物その5	81
図42 溝7	45	図84 表土層出土遺物その6	82
図43 土坑13・14および出土遺物	46	図85 黒色土層出土遺物その1	83
図44 土坑12および出土遺物	47	図86 黒色土層出土遺物その2	84
図45 溝12および出土遺物	48	図87 黒色土層出土遺物その3	85
図46 溝16および出土遺物	49	図88 黒色土層出土遺物その4	86
図47 溝16出土遺物その1	50	図89 黒色土層出土遺物その5	87
図48 溝16出土遺物その2	51	橋本徳道跡	
図49 土坑45~48および出土遺物	52	図90 全遺構配置図	88
図50 ピット列3および出土遺物	53	図91 草地内土層断面	92
図51 ピット列2、溝10、テラス1	54	図92 第1遺構面遺構配置図	90
図52 上坑44	55	図93 道路状遺構1・2および出土遺物	91
図53 土坑44出土遺物	56	図94 第2遺構面遺構配置図	92
図54 草地	54	図95 土器窯1および出土遺物	93
図55 積石1その1	58	図96 土器窯1出土遺物	94
図56 積石1その2	59	図97 ピットおよび出土遺物	94
図57 積石1その3	59	図98 土坑2および出土遺物	95
図58 積石1出土遺物	60	図99 溝5・6および出土遺物	96・97
図59 土坑16~20・22~24、ピット1	61	図100 溝12~14および出土遺物	98
図60 土坑30および出土遺物	62	図101 溝13出土遺物	99
図61 土坑35~38、ピット3および出土遺物	62	図102 土坑1、溝4	100
図62 土坑21・25~29、ピット2および出土遺物	63	図103 溝1	101
図63 土坑33・34・39・40	64	図104 溝2・3	101
図64 溝13・14	64	図105 溝8	102
図65 溝11	65	図106 溝7	102
図66 土坑30、溝15	65	図107 溝10	102
図67 遺構外山土五輪塔分布	66	図108 溝9・11、自然流路2および出土遺物	103
図68 挿立柱建物1	67	図109 第3遺構面遺構配置図	104
図69 挿立柱建物2	68	図110 土坑3~6	105
図70 テラス2	69	図111 自然流路3	106
図71 土坑32	69	図112 自然流路1・2・4~7および出土遺物	107
図72 土坑41・42	70	図113 表土層・褐色土層出土遺物	108
図73 土坑5~11	71	図114 黒色土層出土遺物その1	109
図74 溝8および出土遺物	72	図115 黑色土層出土遺物その2	110
図75 溝9	72		

図116 黒色土層出土遺物その3	111
図117 上坑44出土上器の法量	125
図118 広島県サコ田遺跡SK3、岡山県津寺遺跡土坑15	126
	126
図119 土坑19骨検出状況	130
図120 五輪塔法量比較	134
図121 橋本漆原山遺跡出土弥生土器の分布 (K—Ca散布図)	139
図122 橋本漆原山遺跡出土赤土器の分布 (Sr—Rb散布図)	139
図123 各遺跡出土土器との比較 (K—Ca散布図)	140
図124 各遺跡出土土器との比較 (Sr—Rb散布図)	140
図125 江戸時代の皿と粘土の比較 (K—Ca散布図)	141
図126 江戸時代の皿と粘土の比較 (Sr—Rb散布図)	141
図127 花粉化石群の層位分布	146
図128 脂肪酸・ステロール組成	147

## 図 版 目 次

### (カラー図版)

- 1—1 調査区遠景 (西から)  
 1—2 調査区全景 (北東から)  
 2—1 橋本漆原山遺跡竪穴1遺物出土状況 (北西から)  
 2—2 橋本漆原山遺跡竪穴1内腹形土器出土状況 (北西から)  
 2—3 橋本漆原山遺跡竪穴1出土土器  
 3—1 橋本漆原山遺跡土坑44遺物出土状況 (東から)  
 3—2 橋本漆原山遺跡土坑44出土紙付着古鏡  
 3—3 橋本漆原山遺跡土坑44出土土器  
 4—1 橋本漆原山遺跡ピット群2、溝6出土陶磁器  
 4—2 橋本漆原山遺跡塗構内出土陶磁器

### (図版)

- 1—1 中海を望む (東から)  
 1—2 日本海を望む (南から)

### (図版) 橋本漆原山遺跡

- 2—1 調査前 (東から)  
 2—2 調査前2 (東から)  
 2—3 調査区土層断面A—A' (南西から)  
 2—4 調査区土層断面C—C' (南西から)  
 3—1 調査区土層断面E—E' (南から)  
 3—2 調査区土層断面F—F' (北西から)  
 3—3 溝1・2検出状況 (南から)  
 3—4 溝1・2完掘状況 (南から)  
 3—5 溝2上層断面 (南から)  
 3—6 溝2石出土状況 (北東から)  
 4—1 溝3檢査状況 (南西から)  
 4—2 溝3完掘状況 (南西から)  
 4—3 燃土1検査状況 (西から)  
 4—4 燃土2検出状況 (南西から)

- 4—5 土坑1・2検出状況 (南西から)  
 4—6 土坑1・2完掘状況 (北西から)  
 5—1 土器 (1・2) 山土状況 (北から)  
 5—2 土器集中区検出状況 (北から)  
 5—3 道路状造構1検出状況 (東から)  
 5—4 道路状造構1完掘状況 (北西から)  
 5—5 ピット列1土層断面 (北から)  
 6—1 土坑3火輪 (S2・3) 出土状況 (南から)  
 6—2 土坑3水輪 (S1) 山土状況 (南から)  
 6—3 竪穴住居1検出状況 (南西から)  
 6—4 竪穴住居1土器 (21) 出土状況 (東から)  
 6—5 竪穴住居1内P2遺物出土状況 (北から)  
 7—1 竪穴住居1内溝1遺物出土状況 (西から)  
 7—2 竪穴住居1内溝1完掘状況 (南西から)  
 7—3 竪穴住居1完掘状況 (南西から)  
 8—1 竪穴住居2、テラス3検出状況 (北西から)  
 8—2 塚穴住居2、テラス3上層断面 (北東から)  
 8—3 竪穴住居2、テラス3遺物出土状況 (北西から)  
 8—4 テラス3内P8遺物出土状況 (北から)  
 8—5 テラス3遺物出土状況 (西から)  
 9—1 テラス3遺物出土状況2 (北から)  
 9—2 塚穴住居2壁溝1層断面 (東から)  
 9—3 竪穴住居2完掘状況 (北から)  
 9—4 竪穴住居2、テラス3完掘状況 (北東から)  
 10 竪穴1遺物出土状況 (北西から)  
 11—1 竪穴1検出状況 (北東から)  
 11—2 竪穴1内腹形土器出士状況 (北東から)  
 11—3 竪穴1内土器 (67) 出土状況 (南から)  
 11—4 竪穴1内土器 (73) 出土状況 (北東から)  
 11—5 竪穴1完掘状況 (北から)

- 12-1 壁穴住居 2、テラス 3、壁穴 1 遺物出土状況（北東から）
- 12-2 壁穴住居 2、テラス 3、壁穴 1 完掘状況（北東から）
- 13-1 土器蓋土坑墓 1 検出状況（北から）
- 13-2 土器蓋土坑検出状況（北東から）
- 13-3 土器蓋土坑墓 1 完掘状況（北東から）
- 13-4 墓葬施設 1 検出状況（西から）
- 14-1 墓葬施設 1 遺物出土状況（北西から）
- 14-2 土器蓋土坑墓 1、埋葬施設 1 完掘状況（西から）
- 14-3 土坑 4 遺物出土状況（西から）
- 14-4 ピット群 2、溝 6 検出状況（北東から）
- 15-1 ピット群 2 検出状況（南東から）
- 15-2 ピット群 1 検出状況（北西から）
- 15-3 ピット群 2 上層断面（北西から）
- 15-4 ピット群 1 土層断面（北西から）
- 16 ピット群 2、溝 6 完掘状況（南から）
- 17-1 ピット群 2、溝 6 完掘状況 2（西から）
- 17-2 ピット群 1 完掘状況（北西から）
- 17-3 波板状凹凸面 1 検出状況（北西から）
- 18-1 波板状凹凸面 1 完掘状況（北西から）
- 18-2 ピット群 2 内遺物（82）出土状況（北から）
- 18-3 土坑 15炭化物、焼土検出状況（北から）
- 18-4 溝 6 検出状況（南から）
- 18-5 溝 6 土層断面 1（南から）
- 18-6 溝 6 土層断面 2（南東から）
- 19-1 溝 6 土層断面 3（南東から）
- 19-2 溝 6 内ピット土層断面（西から）
- 19-3 溝 6 内ピット完掘状況（南西から）
- 19-4 土坑 13・14 検出状況（東から）
- 19-5 十坑 13・14 土層断面（南から）
- 19-6 土坑 13 内遺物（93）出土状況（南から）
- 19-7 土坑 13・14 完掘状況（西から）
- 20-1 土坑 12 検出状況（南東から）
- 20-2 土坑 12 完掘状況（南西から）
- 20-3 溝 12、テラス 1 検出状況（南東から）
- 20-4 溝 12 内 P 1 検出状況（北から）
- 20-5 溝 16 検出状況（南から）
- 20-6 溝 12・16 検出状況（南東から）
- 20-7 溝 16 上層断面（北東から）
- 21-1 上坑 45～48 検出状況（南西から）
- 21-2 土坑 15～48 土層断面（西から）
- 21-3 土坑 45～48 内工具痕（北東から）
- 21-4 上坑 47・48 内出土空腹輪（S 10）（北東から）
- 21-5 土坑 45～48 完掘状況（南西から）
- 22-1 ピット列 3 検出状況（東から）
- 22-2 ピット列 3 内遺物出土状況（北東から）
- 22-3 ピット列 3 内遺物出土状況 2（東から）
- 22-4 ピット列 3 完掘状況（東から）
- 22-5 テラス 1、ピット列 2 検出状況（東から）
- 22-6 ピット列 2 完掘状況（西から）
- 23-1 土坑 44 遺物出土状況（東から）
- 23-2 土坑 44 石除去後遺物出土状況（南東から）
- 24-1 土坑 44 遺物出土状況 2（北東から）
- 24-2 土坑 44 古銭出土状況（東から）
- 24-3 土坑 44 古銭出土状況 2（北東から）
- 24-4 土坑 44 古銭出土状況 3（北から）
- 24-5 土坑 44 完掘状況（北から）
- 25-1 墓地検出状況（東から）
- 25-2 横石 1 検出状況（北から）
- 25-3 横石 1 下骨集中域検出状況（北東から）
- 25-4 横石 1 满完掘状況（北東から）
- 26-1 墓地周辺五輪塔出土状況（東から）
- 26-2 土坑 19 脊出土状況（西から）
- 26-3 土坑 19 脊（C 群）出土状況（北東から）
- 26-4 土坑 19 脊（C-3 群）出土状況（南から）
- 26-5 土坑 19 脊（D 群）出土状況（北西から）
- 27-1 骨集中地点 E・F（北東から）
- 27-2 骨集中地点 G（北から）
- 27-3 土坑 31 遺物（F 7）出土状況（西から）
- 27-4 土坑 31 完掘状況（西から）
- 27-5 土坑 36 完掘状況（北東から）
- 27-6 土坑 38 脊出土状況（北東から）
- 27-7 土坑 35 完掘状況（西から）
- 27-8 土坑 25 脊出土状況（北東から）
- 28-1 溝 11 完掘状況（西から）
- 28-2 溝 11 上層断面（北から）
- 28-3 H18 区五輪塔出土状況（北東から）
- 28-4 墓堆完掘状況（東から）
- 29-1 挖立柱建物 1 検出状況（南から）
- 29-2 挖立柱建物 1 完掘状況（南から）
- 29-3 挖立柱建物 2 検出状況（南東から）
- 29-4 挖立柱建物 2 完掘状況（南東から）
- 29-5 テラス 2 完掘状況（北東から）

- 29—6 土坑41・42完掘状況（北から）  
 30—1 土坑5～7完掘状況（西から）  
 30—2 土坑11完掘状況（北東から）  
 30—3 溝8検出状況（西から）  
 30—4 溝8完掘状況（東から）  
 30—5 溝9土層断面（西から）  
 30—6 溝9完掘状況（西から）  
 31—1 ピット4遺物（154・156）出土状況（西から）  
 31—2 ピット4遺物（151・153・155）出土状況2（西から）  
 31—3 溝17検出状況（西から）  
 31—4 溝17・18完掘状況（西から）  
 31—5 土坑19炭化物出土状況（南東から）  
 31—6 土坑50炭化物出土状況（北西から）  
 32—1 完掘状況（東から）  
 32—2 完掘状況2（西から）  
 33—1 上器集中区出土土器  
 33—2 壊穴住居1出土土器  
 34—1 壊穴住居1出土土器（底部）  
 34—2 壊穴住居1出土遺物  
 35—1 壊穴住居1内溝1出土土器  
 35—2 壊穴住居2、チラス3出土土器  
 36—1 壊穴住居2、チラス3出土土器2  
 36—2 噴穴1出土土器  
 37—1 噴穴1出土壺形土器（70）  
 37—2 噴穴1出土壺形土器（78）  
 37—3 噴穴1出土土器（集合）  
 38—1 壊穴1出土土器2  
 38—2 土器蓋（79）  
 38—3 ピット群内出土土器（82）  
 38—4 溝6内出土遺物（92）  
 39—1 溝16出土陶器  
 39—2 土坑44内出土器（集合）  
 39—3 土坑44出土土器面  
 40—1 土坑44出土土器（137）  
 40—2 土坑44出土土器2（138）  
 40—3 土坑44出土土器3（145）  
 40—4 土坑44出土紙付着古鏡（M1）  
 40—5 土坑44出土古鏡（集合）  
 41—1 土坑31出土遺物（F7）  
 41—2 ピット4出土土器  
 41—3 遺構内出土土器  
 42—1 表上、褐色土出土土器  
 42—2 黒色土出土土器  
 43—1 黒色土出土土器2  
 43—2 黒色土出土土器3  
 43—3 黒色土出土土器4  
 44—1 須恵器蓋（217）  
 44—2 土器1・2  
 44—3 土器皿（集合）  
 44—4 遺跡内出土須恵器  
 45—1 遺構外出土陶器  
 45—2 遺構内出土石器  
 45—3 遺構外出土磨製・礫石器  
 46—1 土坑3出土五輪塔  
 46—2 積石1出土五輪塔  
 46—3 積石1出土五輪塔2  
 46—4 遺構内出土空風輪  
 47—1 空風輪（集合）  
 47—2 空風輪2（集合）  
 47—3 火輪（集合）  
 47—4 水輪（集合）  
 48—1 地輪（集合）  
 48—2 地輪加工痕（S33）  
 48—3 墓石（S36）  
 48—4 不明石製品（S38）  
 （図版）橋本徳道遺跡  
 49—1 調査前（西から）  
 49—2 調査区土層断面（A—A' 北から）  
 （B—B' 南西から）  
 （C—C' 北東から）  
 50—1 道路状遺構1検出状況（南東から）  
 50—2 道路状遺構1完掘状況（北西から）  
 50—3 道路状遺構2検出状況（西から）  
 50—4 道路状遺構2完掘状況（西から）  
 50—5 土器窯1検出状況（北から）  
 51—1 土器窯トピット土層断面（南西から）  
 51—2 土器窯下ピット完掘状況（南西から）  
 51—3 ピット1遺物出土状況（南西から）  
 51—4 土坑2遺物出土状況（北から）  
 52—1 溝5・6検出状況（東から）  
 52—2 溝5・6完掘状況（西から）  
 52—3 溝5土層断面（南東から）  
 52—4 溝5遺物（33）出土状況（南東から）

52-5	溝6十層断面（東から）	56-5	自然流路6・7完掘状況（南から）
53-1	溝12~14検出状況（南東から）	57-1	完掘状況（西から）
53-2	溝14完掘状況（南西から）	57-2	調査X・達景（北から）
53-3	溝12~14土層断面（北から）	58-1	土器窓1出土土器1
53-4	溝13完掘状況（南から）	58-2	土器窓1出土土器2
53-5	溝12完掘状況（南から）	58-3	土器窓1出土土器3 (24)
54-1	土坑1、溝4検出状況（北西から）	58-4	溝6出土遺物 (35)
54-2	土坑1、溝4完掘状況（北西から）	59-1	遺構内出土土器
54-3	溝7検出状況（西から）	59-2	遺跡内出土陶磁器
54-4	溝7完掘状況（西から）	60-1	溝13出土鉄滓
55-1	溝9・10検出状況（西から）	60-2	黒褐色土出土土器
55-2	溝9・10完掘状況（西から）	60-3	遺跡内出土須恵器
55-3	土坑4完掘状況（南から）	61-1	橋本塗原山・徳道遺跡出土打製石器
55-4	土坑5完掘状況（北東から）	61-2	橋本塗原山・徳道遺跡出土金属器
56-1	自然流路3完掘状況（北から）	62	鉄製品X線写真
56-2	自然流路4完掘状況（北から）	63	実体顕微鏡による胎上観察
56-3	自然流路群土層断面A-A'（北東から）	64	土器1・2内検出花粉化石
56-4	自然流路群土層断面B-B'（南西から）		

## 插 表 目 次

表1	橋本塗原山新旧遺構対照	
表2	橋本塗原山遺跡出土土器・土製品一覧	112
表3	橋本塗原山遺跡出土陶磁器一覧	116
表4	橋本塗原山遺跡出土石器一覧	119
表5	橋本塗原山遺跡出土金属器一覧	120
表6	橋本塗原山遺跡出土古銭一覧	120
表7	橋本塗原山遺跡出土五輪塔一覧	120
表8	橋本徳道遺跡出土土器・土製品一覧	122
表9	橋本徳道遺跡出土陶磁器一覧	123
表10	橋本徳道遺跡出土石器一覧	124
表11	橋本徳道遺跡出土金銀器一覧	124
表12	土坑44出土土器の法量 (2)	125
表13	該貨と皿を埋納した	
	中国地方の地縁遺構	127
表14	橋本塗原山遺跡出土骨一覧	132
表15	橋本塗原山遺跡出土土器の	
	胎上分析一覧	138
表16	花粉分析結果	145
表17	脂質分析結果	145

## 写 真 目 次

写真1	作業風景	3
写真2	作業員集合写真	3
写真3	溝4土層断面（北から）	20
写真4	堅穴柱过2、テラス3土層断面（北から）	29
写真5	土坑2完掘状況（東から）	95
写真6	小型の地輪と火輪（小型品）	135
写真7	織錦の比較1	143
写真8	織錦の比較2	143

表1 橋本遺跡群新旧造構対照

橋本漆原山遺跡 (HU)			
新造構名	旧造構名	新造構名	旧造構名
整穴住居1	S I 01	土坑27	P37
整穴住居1 内溝1	S S 03	土坑28	S K50
整穴住居2	S I 02	土坑29	S K66
整穴1	S I 03	土坑30	S K49
掘立柱建物1	S B 02	土坑31	S K61
掘立柱建物2	S B 03	土坑32	S K41
テラス1	S S 05	土坑33	S K72
テラス2	S S 04	土坑34	S K73
テラス3	S I 05	土坑35	S K48
土器蓋土坑墓1	S X 01	土坑36	S K62
埋葬施設1	S X 02	土坑37	S K56
土器集中区	上層集中区	土坑38	S K55
道路状造構1	道路状造構	土坑39	S K67
波板状凹凸面1	波板状造構	土坑40	S K37
積石1	S X 03	土坑41	S K39
焼土1	燒土1	土坑42	S K38
焼土2	S K 07	土坑43	S K42
骨集中地点A	骨集中地点A	土坑44	S K43
骨集中地点B	骨集中地点B	土坑45	S K35
骨集中地点C	骨集中地点C	土坑46	S K36
骨集中地点D	骨集中地点D	土坑47	S K34
骨集中地点E	骨集中地点E	土坑48	S K33
骨集中地点F	骨集中地点F	土坑49	S K02
骨集中地点G	骨集中地点G	土坑50	S K01
骨集中地点H	骨集中地点H	土坑51	S K71
骨集中地点I	骨集中地点I	土坑52	S K70
骨集中地点J	骨集中地点J	土坑53	S K69
骨集中地点K	骨集中地点K	ピット1	P31
骨集中地点L	骨集中地点L	ピット2	P36
土坑1	S K 03	ピット3	P34
土坑2	S K 04	ピット4	P47
土坑3	S K 47	ピット列1	ピット列
土坑4	S K 15	ピット列2	S K群
土坑5	S K 10	ピット列3	S K群2
土坑6	S K 11	ピット群1	—
土坑7	S K 09	ピット群2	S B01
土坑8	S K 16	溝1	S D04
土坑9	S K 17	溝2	S D05
土坑10	S K 13	溝3	S D06
土坑11	S K 52	溝4	S D17
土坑12	S I 04	溝5	S D19
土坑13	S K 06	溝6	S D03
土坑14	S K 08	溝7	S D15
土坑15	S K 53	溝8	S D08
土坑16	S K 59	溝9	S D07
土坑17	S K 60	溝10	S D09
土坑18	S X 04	溝11	S D12
土坑19	S K 32	溝12	S D11
土坑20	S K 27	溝13	S D10
土坑21	S K 65	溝14	S D18
土坑22	S K 64	溝15	S D16
土坑23	S K 54	溝16	S D13
土坑24	S K 57	溝17	S D01
土坑25	S K 58	溝18	S D02
土坑26	S K 63		

橋本徳道遺跡 (HM)	
新造構名	旧造構名
土器溜まり1	土器溜まり
道路状造構1	道路状造構1
道路状造構2	道路状造構2
土坑1	S K01
土坑2	S K02
土坑3	S K06
土坑4	S K04
土坑5	S K03
土坑6	S K05
ピット1	P 1
溝1	S D02
溝2	S D05
溝3	S D07
溝4	S D01
溝5	S D03
溝6	S D04
溝7	S D06
溝8	S D08
溝9	S D10
溝10	S D11
溝11	S D17
溝12	S D15
溝13	S D13
溝14	S D14
自然流路1	S D12
自然流路2	S D17
自然流路3	S D09
自然流路4	S D20
自然流路5	S D16
自然流路6	S D18
自然流路7	S D19

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県が進める一般県道米子岸本線緊急地方道路整備工事（改良）を原因とし、鳥取県米子市橋本地内に存在する埋蔵文化財の記録作成を目的としたものである。既にこの道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査として、米子市吉谷、橋本地内の吉谷龜尾ノ上遺跡・橋本徳道西遺跡の発掘調査が、平成12・13年度に財団法人米子市教育文化事業団によって実施されている<sup>(1)</sup>。

今回の調査区は米子市橋本地内の、先述した橋本徳道西遺跡の東隣約6000m<sup>2</sup>であり、平成13年度に米子市教育委員会による試掘調査が行われた。その結果、弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落を中心とした遺跡の存在が確認され、工事予定範囲全域に発掘調査が必要とされた。この結果を受けて、鳥取県土木部道路課および鳥取県米子土木事務所と鳥取県教育委員会事務局文化課が協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出した。その後、鳥取県教育委員会教育長より事前発掘調査の指示を受けた鳥取県土木部道路課は、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託し、平成14年度から、西部埋蔵文化財米子調査事務所が記録作成のための発掘調査を行うこととなった。  
(下江)

(註1) 高橋浩樹 2001「IV 2. 吉谷龜尾ノ上遺跡・橋本徳道西遺跡」『財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室年報2 平成4～12（1992～2000）年度』 財団法人 米子市教育文化事業団

## 第2節 調査の経過

調査は、調査前の立木の伐採、撤去、並びに調査区北側の土留柵の設置が大幅に遅れたため、平成14年5月8日になってからようやく重機による表土剥ぎを開始した。その間、業者委託による調査前の航空撮影を4月26日に行い、同じく業者委託による調査前の地形測量を5月1・2日に行っている。

調査区は字名によって2つの名称に分けられており、調査区東側約4600m<sup>2</sup>の部分を橋本漆原山遺跡、西側約1400m<sup>2</sup>の部分を橋本徳道遺跡と呼称した。東西約250mの長い調査区で、排土置場を一ヶ所に固定することは困難であり、さらには橋本徳道遺跡の西隣で既に工事が始まっていた関係で、まず、調査区東側の橋本漆原山遺跡から調査に着手した。排土置場は、試掘結果から擾乱が激しいと考えられ、大型ダンプが進入できる橋本漆原山遺跡の調査区内に設置した。よって表土剥ぎの排土もこの場所に置かねばならず、橋本漆原山遺跡の排土置場東側の後は、橋本徳道遺跡、橋本漆原山遺跡排土置場西側の順に表土剥ぎを行っていき、最終的に表土剥ぎは5月27日までかかった。

作業員による手掘りの掘り下げは、5月13日より橋本漆原山遺跡排土置場の東側から開始した。その際、トレレンチを設定しながら掘り下げていったが、試掘調査では確認できていなかった造構面を新たに2面確認し、造構面が合計3面あることがわかった。よって、当初の予定を遙かに超える作業量をこなすために、現場で作業計画を大幅に見直し、各作業のスピードアップを図った。排土置場東側ではピットや土坑、溝、土器蓋土坑墓などを検出した。その他、堅穴住居1も検出したが、排土置場の近くで、造構がさらに続く可能性もあったため、この排土置場を使用しなくなつてから改めて調査することとした。この堅穴住居1以外の排土置場東側の調査は7月8日に終了している。

橋本漆原山遺跡排土置場西側の作業員による手掘り作業は、表土剥ぎ終了翌日の5月28日より着手した。排土置場西側はかなり広く、弥生時代後期～古墳時代の堅穴住居、中近世の墓地、道路状遺構、時期不明のピット群、溝、土坑などの遺構や土器、陶磁器、石器、鉄器などの遺物を数多く検出した。この地区的調査において、8月7日から橋本徳道遺跡の調査との関係で、排土置場を橋本徳道遺跡の西側調査区内に変更した。最終的に、橋本漆原山遺跡全体の調査が、旧排土置場を含めて終了したのは、11月14日である。なお、橋本漆原山遺跡と橋本徳

道遺跡との間にある南北方向に伸びる山道の部分は、周辺住民が農作業に使用するため土手状にして残した。よってこの部分に関しては未発掘である。

橋本徳道遺跡の作業員による手掘り作業は8月30日より開始した。ここでも遺構面は3面確認できた。遺構は、弥生時代中期後葉のピットや土坑、中・近世の道路状遺構、時期不明の溝や自然流路などが確認され、遺物も土器、陶磁器、石器、鉄器などを検出した。現場作業が終了したのは12月5日である。なお、橋本徳道遺跡内では南北方向に走る水路が存在しており、これは農作業に利用されているため水路の左右1mほどを残し、さらに排水が水路に入らないように鉄板をかぶせ保護した。よってこの部分に関しては未発掘である。調査後の地形測量は、各地区が終了した後に業者に委託して記録をとっている。

発掘現場における指導、助言については、7月26日に鳥取大学井上貴央氏から橋本漆原山遺跡出土火葬骨の取り上げを指導していただき、11月20日には岡山理科大学白石純氏に土器の胎土と比較するための遺跡内の土壤サンプルの採取をしていただいた。

地元との交流としては、職場体験学習として米子市立尚徳中学校の中学生12名が、9月18~25日まで発掘調査に参加した。また、現地説明会を11月9日に吉谷屋奈々塔遺跡と合同で行い、22人の参加を得た。 (下江)

### 第3節 調査体制

#### ○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	有田 博充
常務理事	川田 一彦（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長	下田 弘人

#### 埋蔵文化財センター

所 長	田中 弘道（県埋蔵文化財センター所長）
次 長	竹内 茂
次 長	加藤 隆昭
調査研究課 課長（兼）	加藤 隆昭
企画調整班 班長	松田 潔（8月異動）
文化財主事	原田 雅弘
庶務課 課長（兼）	竹内 茂
主任事務職員	矢部 美恵
事務職員	田中 陽子

#### ○調査担当 第2調査班 西部埋蔵文化財米子調査事務所

所 長	国田 俊雄
班 長	八峰 興
主任調査員	濱 隆造
調 査 員	下江 健太
	伊藤 劇
調査補助員	遠藤万須美
	秦 美香
事務補助員	木下 裕子

#### ○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

#### ○調査協力 米子市教育委員会

下記の方々に発掘調査・整理作業に従事していただいた。

足塚正治、安部美登里、安部好江、生田悠平、石田重矢、板持 章、稲田三枝子、今吉佳代子、植田雅子、宇田川翔平、宇田川東功子、遠藤清子、大下醇子、大西暢昭、落田見司、加藤カキル、吉川公平、國貞尚規、倉敷精、小早川 圭、小原賢二、小原晴教、近藤由美子、雄賀佐那枝、西木 敏、佐伯宝益、塔畠友雄、厨子彰子、角田輝彰、高角文雄、田口翔唯、田子裕基、高田 茂、谷上 修、谷野綾子、田宮 繁、富永武子、中村広大、中村裕樹、西村美知枝、新田幾子、野口洋一、乗本大地、野津松夫、長谷川 聰、長谷川節子、原 満留、干村澄子、福本蓉子、藤江利夫、本田 修、前田文子、松浦万喜男、松本朔恵、森畑一哉、諸田美智栄、矢辺 寛、山縣定子、山縣富男、山本博子、賴田美佐子、渡辺静江、渡 貞夫（敬称略、五十音順）



写真1 作業風景



写真2 作業員集合



図1 調査区全景

## 第4節 調査の方法(図2)

調査区は字名で2つの遺跡に分けられ、東側約4600m<sup>2</sup>の部分を橋本漆原山遺跡、西側約1400m<sup>2</sup>の部分を橋本徳道遺跡と呼称している。発掘作業は作業工程上、橋本漆原山遺跡の東側から着手し、順次西へと調査を進めていった。重機による表土剥ぎは、表土から第1遺構面(黒色土、黒褐色土)の上面近くまで行い、その後は人力による手掘りで掘り下げを行った。掘り下げに際しては、地形に沿った形で、基本的には南北方向にトレーニチをいれて地形、土層堆積、遺構面の確認をしながら掘り下げた。結果、3面の遺構面を検出し、最終遺構面である地山上面までの掘り下げをもって完掘とした。なお、橋本漆原山遺跡と橋本徳道遺跡の間に南北方向に伸びる山道があり、農作業に使用することで土手状にして残したため、この部分は発掘を行っていない。また、橋本徳道遺跡内に南北方向に走る水路があり、これも農作業に使用するため、水路の左右1mほどを残し、さらに耕土が入らないよう鉄板をかぶせ保護した。よってこの部分に関しても未発掘である。

地形測量や遺構、遺物の実測に必要な基準として、橋本漆原山遺跡、橋本徳道遺跡の両遺跡全体に10m画の方眼を南北軸に沿うように設定し使用している。南北軸は南からアルファベット順、東西軸は東からアラビア数字順で示し、1区画(グリッド)の南東隅の交点をそのグリッドの名称としている。

検出した遺構、遺物の記録には平板、トータルステーションを用いた。また、遺構から遊離した包含層出土遺物など一部の遺物に関しては、出土位置をグリッド名と層位名で記録している。なお、グリッドを利用しての取り上げの際には、グリッドをさらに「北東」「北西」「南東」「南西」の4つに細分して記録している。また、現場の写真撮影に関しては、基本的に35mm、6×7判を使用し、堅穴1内遺物出土状況と堅穴住居2・3ならびに堅穴1内遺物出土状況については4×5判を使用した。

(下江)

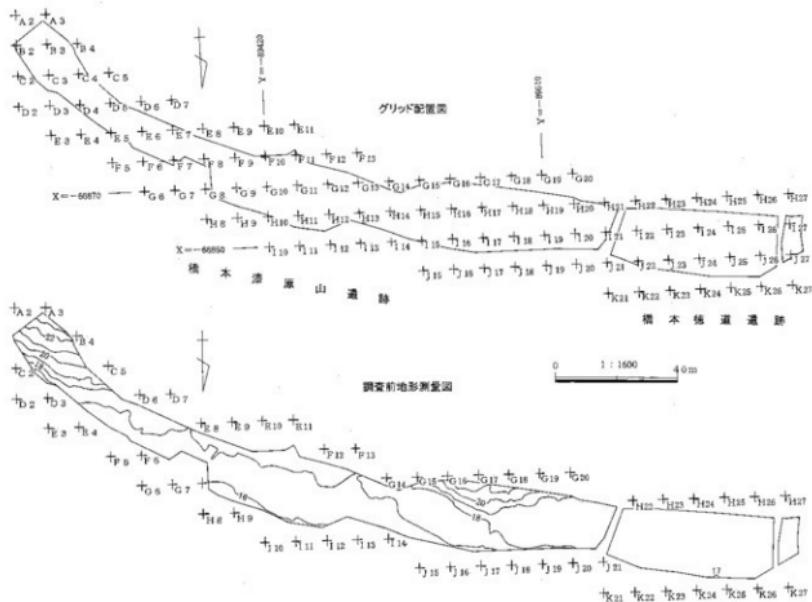


図2 橋本遺跡群グリッド配置図、調査前地形測量図

## 第2章 歴史的環境

橋本遺跡群（橋本遺跡・橋本塗原山遺跡）（1）は島根県境に近い米子市南西部に位置する。調査地は丘陵地にある。南方は母塚山から派生する丘陵地帯であり、西方から北東方にかけては加茂川流域の平野が広がっている。この小平野は米子平野や法勝寺平野へと連続しており、加茂川流域周辺や米子平野を形成した日野川周辺、法勝寺平野を形成した法勝寺川周辺には多くの遺跡が分布している。

周辺地域における旧石器時代の様相は現在のところよく知られていない。人の活動が確認できるのは縄文時代早期からである。縄文時代の遺跡分布の中心は橋本遺跡群を含む広域の日野川西岸ではなく、日野川東岸であるが、中海沿岸や加茂川流域の平野縁辺、日野川東岸流域などには幾つかの遺跡がある。多くは丘陵上に位置しているが、低地に立地する遺跡もある。陰田宮の谷遺跡（15）や奈良良遺跡（28）では有茎尖頭器が出土しており、日久美遺跡（18）では貯蔵穴群が検出された。古木遺跡（30）でも落とし穴群が検出され、古市遺跡群（6）でも縄文時代の遺構・遺物が出土している。

弥生時代になると海退が進み、中海沿岸に低湿地が広がった。低湿地には水田が開かれ、高地には集落が形成された。弥生時代前期の中海沿岸の遺跡には、水田跡が検出された日久美遺跡（18）をはじめ、池ノ内遺跡（19）や長砂第1・2遺跡（20・21）、錦町第1遺跡（17）などがある。

弥生時代中期以降になると遺跡数が増加し、丘陵上にも集落が営まれるようになった。集落遺跡には長期間堆積し、大規模で拠点的な遺跡と比較的小規模で短期間のみ存続した遺跡がある。日野川東岸の拠点的な遺跡に日久美遺跡（18）、青木遺跡（30）、越敷山遺跡群（36）などがある。また、橋本遺跡群近辺には、吉谷龜尾ノ山遺跡（2）など本来なら同一の遺跡として認識できるものがある。吉谷龜尾ノ山遺跡は弥生時代中期前半～中期後半と古墳時代前期に盛行した遺跡であり、弥生・古墳時代の橋本遺跡群（1）の消長と共通する部分がある。橋本遺跡群北側には丘陵上を中心に大規模な集落遺跡が存在した可能性がある。また、弥生時代前期末～後期前半の環濠が西伯町清水谷遺跡（35）で確認されている。環濠内側にはほとんど何もしない空間が広がっていたと考えられ、環濠の意義を探るうえで重要な資料となっている。

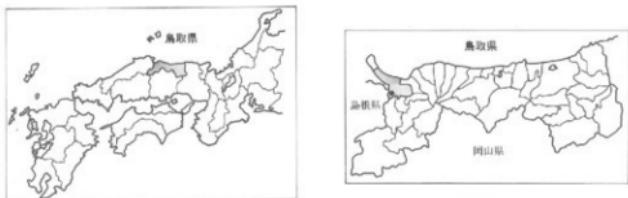
弥生時代後期には、中期に引き続き遺跡が増加すると共に、四隅突出型埴輪墓が発達するのが特徴である。米子平野東では、尾高浅山遺跡1号墓（38）（弥生後期前葉）や日下1号墓（39）（弥生後期後半）が知られている。

米子平野の主要な前期古墳では、法勝寺平野縁辺の丘陵に普段寺1・2号墳（32）、日野川西岸に石州府29号墳（40）、加茂川流域の平野縁辺丘陵上に、日原6号墳（26）が知られている。普段寺1号墳は前方後方墳、2号墳は方墳で、両方から三角縁神獣鏡が出土した。石州府29号墳は円墳、日原6号墳は方墳である。橋本周辺では、米子平野の前期古墳は、埴輪・埋葬施設・副葬品・埴輪・石の有無等から、畿内色はそれほど顕著ではない。また古墳時代前期の地域最高の首長墓は、前方後方墳であった可能性がある。

中期と思われる主要な古墳は三崎殿塚古墳（31）が知られている。法勝寺平野の南に位置する前方後円墳であり、円筒埴輪が出土したといわれている。また古市宮の谷山遺跡（7）や吉谷中馬場山遺跡（8）では、前期から中期にかけての小規模な古墳群が確認された。

古墳時代後期になると、米子平野ではいくつもの古墳群が形成され、横穴式石室を主体とする古墳と、横穴墓の両方が展開する。古墳群では日野川右岸の石州府古墳群（41）、加茂川流域小平野北側の東宗像古墳群（22）や宗像古墳群（25）などがよく知られている。墳丘には円墳、前方後円墳、方墳があるが、埋葬施設は横穴式石室、箱式石棺、木棺直葬、横穴など様々である。東宗像5号墳で横口式箱式石棺が、東宗像6号墳で堅穴式横口式石室が確認されており、九州地方との直接的な交流も想定されている。（註1）また日野川左岸、法勝寺川流域には横穴墓が集中していて、中海を臨む丘陵上に位置する陰田古墳群（16）などが著名である。

古墳時代の集落遺跡は日野川東岸の丘陵上に多く展開する。福市遺跡（29）、青木遺跡（30）など多くの遺跡が知られている。橋本周辺でも奥谷堀越谷遺跡（24）、奈良良遺跡（28）、吉谷上ノ原山遺跡（4）、吉谷トコ遺



遺跡位置図



- |                       |              |              |             |
|-----------------------|--------------|--------------|-------------|
| 1. 桧木遺跡群 (樺木津原山・櫛道遺跡) | 12. 新山遺跡群    | 23. 中山遺跡     | 34. 須河長崎古跡  |
| 2. 古谷魚沼ノ上遺跡・樺木津道折遺跡   | 13. 新山臨石山遺跡群 | 24. 黄石板側谷遺跡  | 35. 清水行道跡   |
| 3. 桧木宝石城跡 (七尾城跡)      | 14. 奥陽山遺跡群   | 25. 宗義古跡群    | 36. 越前山道跡群  |
| 4. 吉谷上ノ原山遺跡           | 15. 隆岡宮ノ下遺跡  | 26. 日置6号墳    | 37. 亂高原跡    |
| 5. 下谷二ノ道跡             | 16. 隆丘遺跡群    | 27. 石井堀古跡    | 38. 丸原浅山道跡  |
| 6. 宮市遺跡群              | 17. 鴨町新1遺跡   | 28. 京都良遺跡    | 39. 日下1号墳   |
| 7. 古市宮ノ谷山遺跡           | 18. 白久山遺跡    | 29. 桜市遺跡     | 40. 石南所29号墳 |
| 8. 吉谷中馬場山遺跡           | 19. 遠ノ内遺跡    | 30. 青木遺跡     | 41. 石南所吉賀群  |
| 9. 古谷山龜遺跡             | 20. 長砂第1遺跡   | 31. 三越塚古塚    | 42. 米子城跡    |
| 10. 舟山遺跡群             | 21. 長砂第2遺跡   | 32. 幸設寺1・2号墳 |             |
| 11. 新山山田遺跡            | 22. 実宗像古酒跡   | 33. 諏訪1号墳    |             |

図3 周辺遺跡分布図

跡（5）、新山砥石山遺跡（13）、新山山田遺跡（11）などがある。

奈良時代以降の陰田・新山遺跡群（10・16）では、官衙に関連する遺物の出土がよく知られている。陰田遺跡群口陰田遺跡（16）からは「館」「多知」「田知」と記された墨書き土器や木簡が出土し、陰田遺跡群、吉谷錢神遺跡、吉谷中馬場山遺跡でも墨書き土器や赤色塗彩土器などが多く出土した。陰田遺跡群陰田第6遺跡（16）では石敷道路が検出されている。

中世遺跡には城館跡、古墓、経塚がある。橋本周辺では城館跡に新山要害跡（12）、石井要害跡（27）、橋本宝石城跡（七尾城）（3）などがあり、これらは山名氏支配下の国人によって構築されたと思われる。新山要害跡は、橋本から石見因へ抜ける古代山陰道推定地のルート上にあり、橋本宝石城跡（七尾城）は橋本遺跡群より約500m北側、古代山陰道推定地の入り口に位置する。石井要害跡は橋本遺跡群より約1.5km北側にあり、加茂川流域の小平野を臨む。また、米子平野東側の丘陵上には中世の拠点であったと考えられている尾高城が存在した。

古墓には青木古墓（30）や、諫訪1号墳（33）、別所長峰古墓（34）がある。青木古墓DSX16は単独墓と思われ、白磁や鉄器を伴っていた。諫訪1号墳は米子平野辺縁の同一丘陵上に存在した。これまで検出された古墓は、副葬品を伴い、埋葬施設のしっかりした遺跡が多い。いずれも個人墓、もしくは数名の特定集団の墓地と思われる。経塚には長砂経塚と中山経塚がある。

近世になると、中村氏・加藤氏・池田氏・荒尾氏が米子を支配した。その過程で米子城周辺に城下町が発展する。近世遺跡では米子城跡遺跡（42）が著名である。  
（伊藤）

註1 中原 齊「第4章 古墳の調査」1985『東宗像遺跡』（財）鳥取県教育文化財団 建設省倉吉工事事務所

#### 参考文献

- 中森 祥ほか編1999『古市遺跡群』1（財）鳥取県教育文化財団  
瀬田竜彦ほか編2000『古市遺跡群』2（財）鳥取県教育文化財団  
中森 祥編2002『古市遺跡群』3（財）鳥取県教育文化財団  
青木遺跡発掘調査団・編集者団編1977『青木遺跡発掘調査報告書』II鳥取県教育委員会  
青木遺跡発掘調査団・編集者団編1978『青木遺跡発掘調査報告書』III鳥取県教育委員会  
米子市史編纂協議会編1999『新修 米子市史』第7巻米子市  
園・中原・山樹編1985『東宗像遺跡』（財）鳥取県教育文化財団 建設省倉吉工事事務所

## 第3章 橋本漆原山遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要 (図4・5)

調査区は、現在の法勝寺川と加茂川に挟まれた米子平野の南端に位置し、北へ伸びる小丘陵の先端部付近にあるが、大部分は平坦地である。特に橋本築道遺跡は周辺の畠と同様に後世の削平を受けており、畠として利用されていたと思われる。それでも橋本漆原山遺跡の調査区東側や15~19グリッドライン周辺では、南側が高い斜面地となっており、小丘陵の地形を残している。調査区より南はほぼ全休的に丘陵地帯が広がっているのに対して、北側は平野が一面に広がっている。これは調査区付近がちょうど平野部と丘陵部の境になっている事を示している。

発掘調査に際しては、先述したように地形に沿うような形でトレンチをいれ、土層堆積や遺構面を確認しながら掘り下げたが、結果として調査区全体にわたって遺構面が3面あることが確認できた。以下、各遺構面から検出した遺構、遺物について概要を述べる。

第1遺構面は黒色土上面であり、黒色土は弥生時代中期中葉~近世までの遺物を多く含んでいる。このことから、この遺構面から検出された遺構については近世以降の年代が与えられる。遺構としては土坑や溝をいくらか検出したが、調査区西側で道路状遺構とピット列を検出した。また、道路状遺構の一部で土坑3を検出し、埋土中から五輪塔が出土している。

第2遺構面は黒色土の下の暗赤褐色土上面で、この層には遺物はあまり含まれていない。遺構は弥生時代中期中葉~近世までの広い時期幅が考えられる。弥生時代では中期後葉の竪穴住居1棟、後期末~古墳時代初頭の竪穴住居1棟とテラス1基、一見竪穴住居に見えるが柱穴をもたない竪穴1基を検出し、いずれの遺構からも、土器を中心にして遺物が数多く出土した。その中でも、竪穴1で瓶形土器が立ったままの状況で出土したことは注目される。古墳時代ではおそらく前期と思われる土器蓋土坑墓と、すぐそばで鉄器を副葬した埋葬施設を検出した。中・近世の遺構としては、20基程度のピットが6・7列並ぶピット群や土師質の皿と古銭が数多く出土した土坑44やピット、溝などを検出した。ピット群は、深さ0.1~0.2m程度の深さで、明確な建造物の柱穴とは考えられない性格不明の遺構群である。また、土坑44から出土した古銭には紙が付着していた。

調査区西の15~19グリッドライン付近の小高い丘陵上や周辺で、火葬骨や五輪塔などが数多く出土している。また、五輪塔を利用してつくった積石遺構も検出した。さらにこの丘陵上ではピットや土坑を数多く検出した。これらの中から火葬骨や副葬品が出土しており、当該期においては墓地として利用されていたと思われる。

第3遺構面は地山直上である。この遺構面は弥生時代中期中葉、もしくはそれ以前の遺構があると考えられるが、地山上の暗赤褐色土の堆積が薄かったり、存在していない地点もあるので弥生時代や中・近世の遺構が含まれている可能性もある。基本的にピットや土坑、溝が中心であるが、調査区東の斜面地で東西方向に平行に伸びる2条の溝とピット群を検出した。これらはおそらく関連しあっているものと思われるが、この地点周辺では暗赤褐色土が認められていないため、時期は不明である。

(下江)

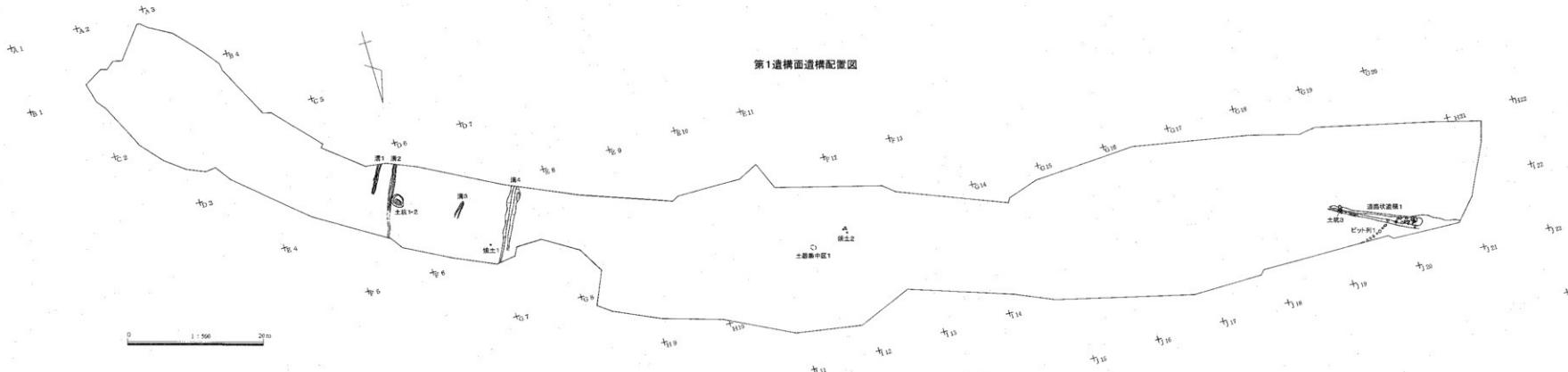
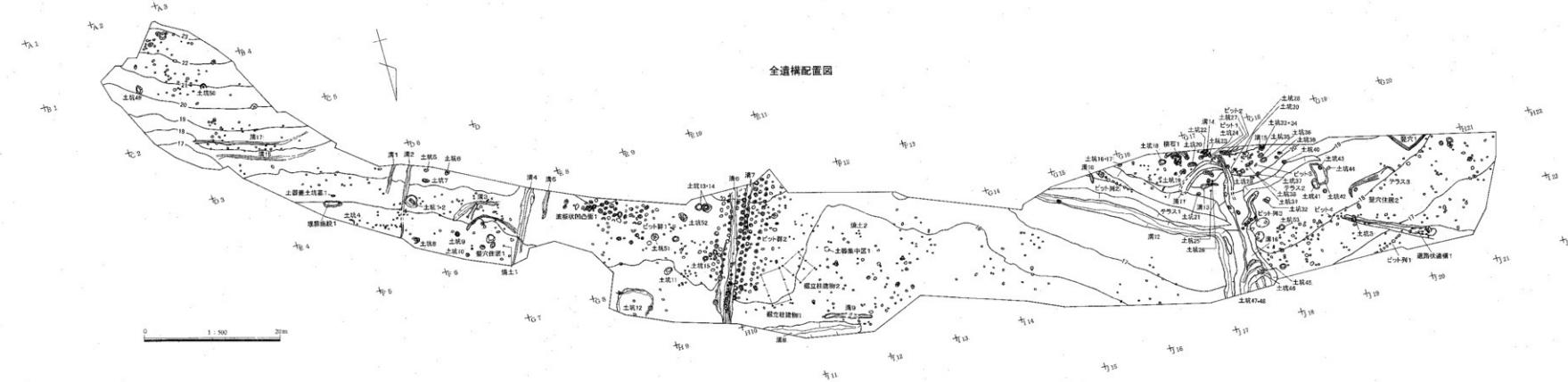


図4 横木凍原山造跡造構配置図その1

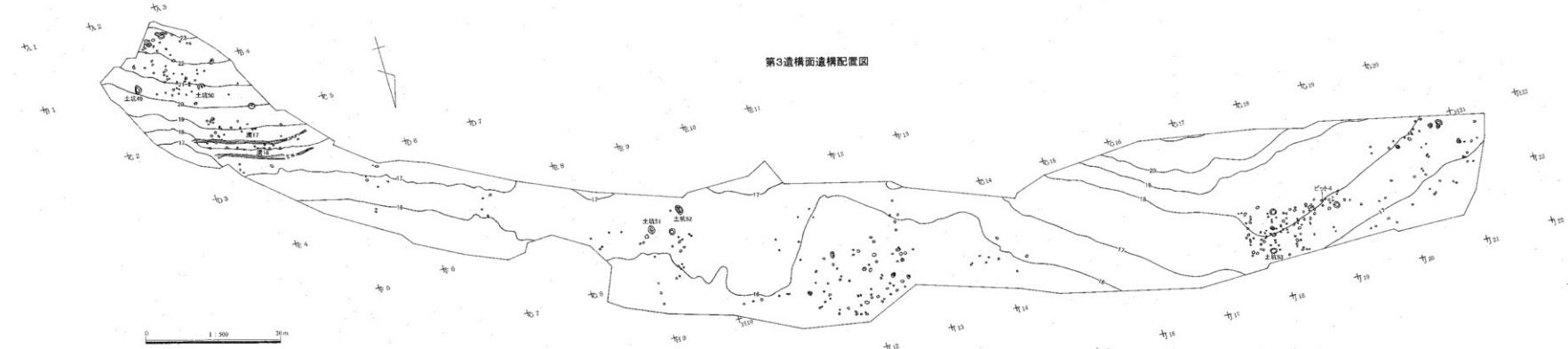
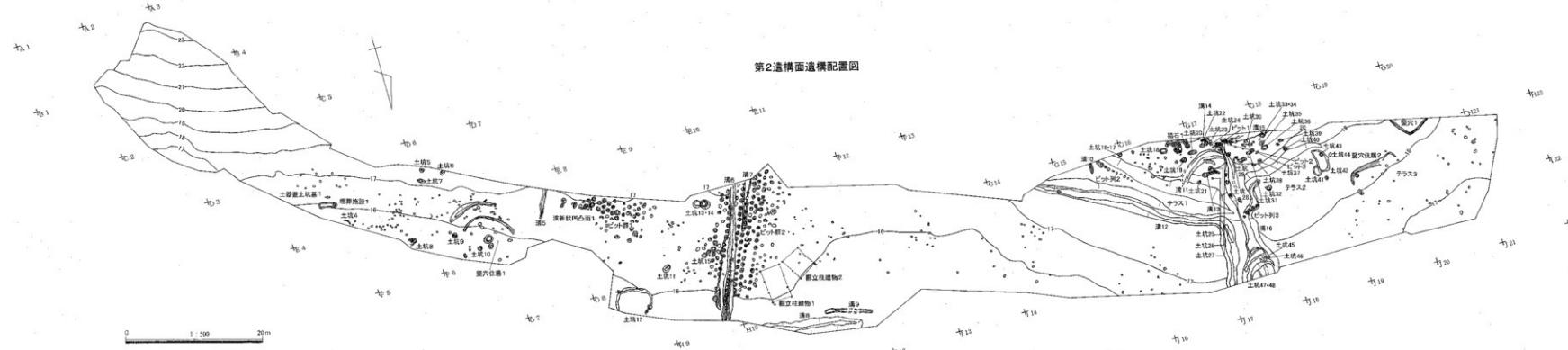


図5 橋本漆原山遺跡遺構配置図その

## 第2節 調査区の土層堆積(図6・7、図版2-3・4、3-1・2)

橋本塗原山遺跡の立地は北へ伸びる小丘陵の尾根先端部であるが、後世の掘削等によって大部分が平坦地である。しかし、その中でも調査区東端や14~19グリッドライン付近では小丘陵の地形が残っており、一部は斜面地である。調査区東側では既に道路や宅地の建設の際に丘陵の先端部を掘削しており、調査区最東端が最もレベルが高く、西へいくほど低くなる。最もレベルの高い(A-A')ライン付近とやや平坦になっている(C-C')ライン付近では、調査前の比高差は6m前後ある。(C-C')ライン以西では、ほぼ平坦な面が続くが、おそらく後世の掘削によるものであろう。14~19グリッドライン付近の小高い丘陵の高まりでは、後述するように中・近世の墓地が広がっており、ある程度自然地形を利用したものと考えられる。

調査区全体で遺構面を3面確認した。第1遺構面は、黒色土(③層)上面である。黒色土は、ほぼ調査区全域に広がっており、弥生時代中期中葉～中・近世の遺物を多く包含している。黒色土より上層の褐色土や表土からも遺物が出土しているが、現代遺物も含んでおり、第1遺構面の時期は、近世以降と考えられる。

第2遺構面は赤褐色土(④層)上面である。赤褐色土は一部上層の黒色土の色調が薄くなつたような部分もあり、地山との間の移行的な層と考えられる。赤褐色土内からは遺物はほとんど出土していない。しかし、この遺構面から弥生時代中期後葉の土器が多く出土した堅穴住居1や弥生時代後期末～古墳時代初頭の堅穴1を検出し、中・近世の陶磁器を含んだ溝6やピット群1・2もこの面から検出した。以上のことからこの遺構面は弥生時代中期後葉から近世までの広い時期幅をもつことがわかる。これは、先述したように平坦地になっている部分が後世に掘削を受けていることと関係していると思われる。特に、ピット群1・2や溝6を検出した8~11グリッドライン付近では、表土から地山までの深さが他の地点と比べて浅く、黒色土の堆積が薄かったり認められない部分がある。つまり、この地点では黒色土が堆積した後に掘削され平坦な地形となり、本来検出面が異なっていたはずであるが、赤褐色土上面で検出できたと思われる。また、この赤褐色土は調査区全域にわたって広がっておらず、(A-A')から(C-C')ラインの間の斜面地では、赤褐色土の堆積が薄かったり認められていない。よって、溝17・18などは地山面検出となっているが、この地点の地山面で検出された遺構はこの赤褐色土上面で検出された遺構と関連している可能性がある。

もう一つの斜面地である(E-E')(F-F')ライン付近では、黒色土と赤褐色土の堆積が斜面の途中で途切れおり、黒色土は北側へいくほど厚く堆積している。この状況は(E-E')ライン以東でも認められている。このことからも黒色土の堆積以前に掘削等があったことが考えられる。また、黒色土も斜面地の部分で一部掘削されたと思われる。

第3遺構面は地山面である。地山面は赤褐色土の下層であり、時期としては弥生時代中期中葉以前と考えられるが、先述したように赤褐色土が堆積していない地点もあるので、一概にその時期に限定することはできない。地山の土は全域にわたって同じというわけではなく、粘土質の強い地点もあれば色調が全く異なる地点もあった。しかし、本書の特論で白石純氏が地山サンプルを分析した結果ではその鉱物構成は大きく異なっていないので、基本的には地山は同じ土であり、部分的にその特徴が異なっているのであろう。

地山面はこれまで述べてきた土層の堆積と同じように、調査区東端や中・近世の墓地がある周辺では南から北へレベルを下げながら傾斜しており、(D-D')ライン付近の平坦地ではほぼ平坦になっている。これははある程度旧地形が生きていることを示すものである。しかし、明らかにピット群1・2周辺では黒色土の堆積がなく、赤褐色土の堆積も薄い状況であるので、この地点は掘削されているが、(D-D')ライン付近では、あまり掘削されておらず、2つの丘陵先端部にはさまれた谷地形となっていた可能性もある。

(下江)

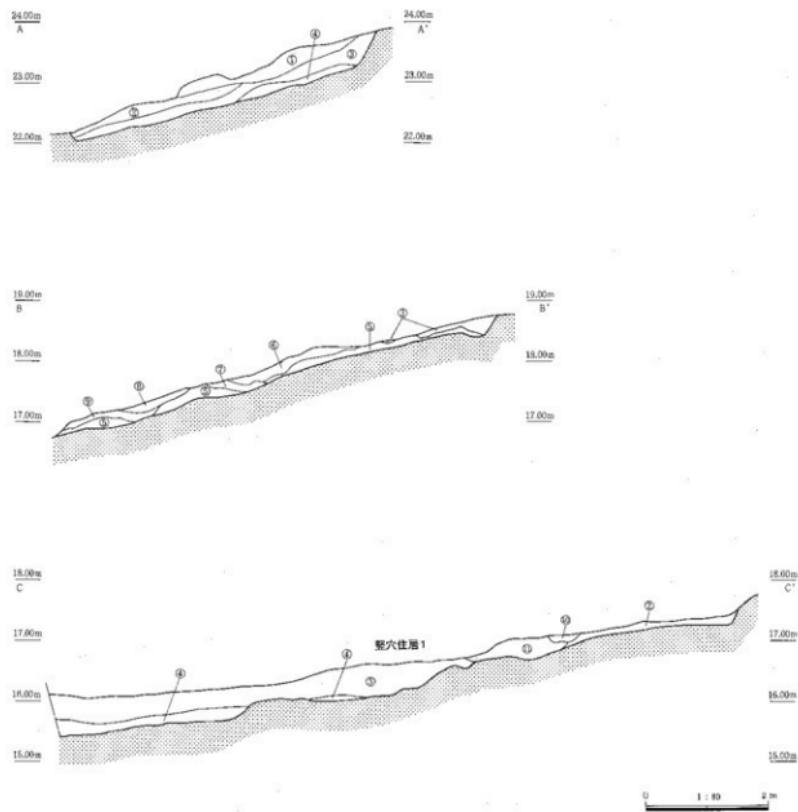


図6 調査区内土層断面その1

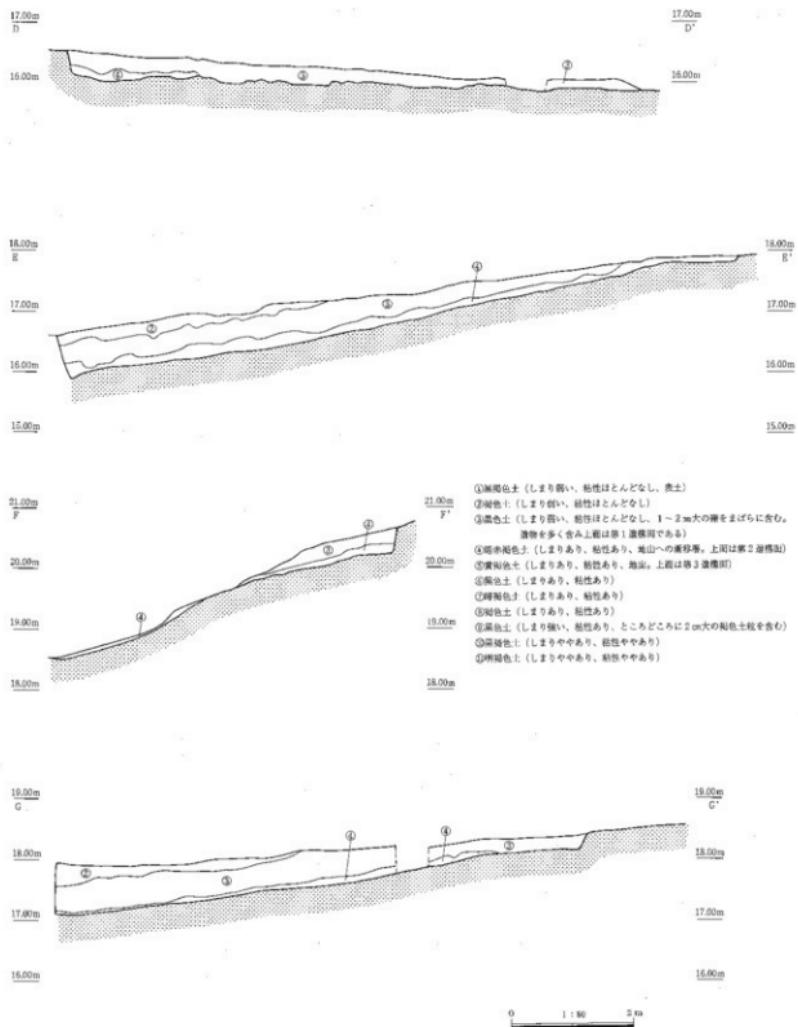


図7 調査区内土層断面その2

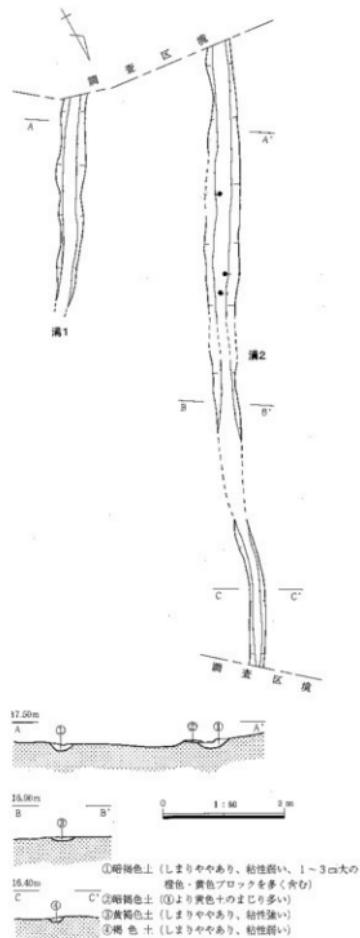


図8 溝1・2

### 第3節 第1遺構面の遺構・遺物

#### 1. 近世以降の遺構・遺物

##### 溝1・2（図8、図版3-3～6）

D5グリッドの西側に位置する南北方向に併走する直線状の溝であり、溝2は現代遺物が多く含まれている層の下の黒色土上面で検出した。溝1は長さ3.5m、幅0.4m、深さ0.12mを測るが、溝2と並走してさらに北へ続いている可能性がある。溝2は長さ10.4m、幅0.56m、深さ0.16mを測り、埋土中から拳大のレキが多く出土した。溝1・2は同一方向に併走し、調査区の南へさらに伸びている。両者は規模、埋土が類似することから、同時期のもので同じ機能をもっていたと考えられる。溝2から土器片が出土しているが、小片のため詳細は不明である。（伊藤）

##### 溝3（図9、図版4-1・2）

E6グリッド南西に位置する南北方向の溝で、長さ2.9m、幅0.56m、深さ8～30cmである。さらに北に続いている可能性がある。埋土中から遺物は出土していない。この溝の周辺からは弥生土器が多く出土しているが、それは後述する堅穴住跡1に関わるものであろう。（伊藤）

##### 焼土1（図9、図版4-3）

E7グリッド北東で16cm×20cmの範囲で明橙色の硬化面を検出した。硬化面は不整形な円形を呈し、その厚みは、10cmにも満たないほどである。焼土の中央部には炭化物が入り込んでおり、何か焼いた跡と考えられる。（伊藤）

##### 焼土2（図9、図版4-4）

G12グリッド南西で1m×1mの範囲に焼上塗が点在していた。いずれも不定形であり、炭化物も伴っていない。これらの状況から、この焼土は二次堆積の可能性がある。（伊藤）

##### 土坑1・2（図10、図版4-5・6）

いずれも、黒色土より上面の現代遺物を多く含む層の上から掘りこまれており、土坑1が土坑2を切っていた。土坑1は長径最大1.5m、短径1.4m、深さ0.4mを測り、土坑2は長径最大2m、短径1.9m、深さ0.36mを測る。埋土はいずれも①層が確認できたが、その他の地山から派生している明黄色系の土が混入する埋土は土坑2でしか確認できなかった。土坑2の底面には小土坑があるが、性格は不明である。（伊藤）

##### 溝4（図11、写真3）

E7グリッドに位置する南北方向に走行する直線的な溝である。長さ5.5m、幅0.64m、深さ0.32mを測る。堅穴住居1の西側を切っている。埋土中に現代遺物や根を多く含むので、最近掘りこまれた遺構と思われる。（伊藤）

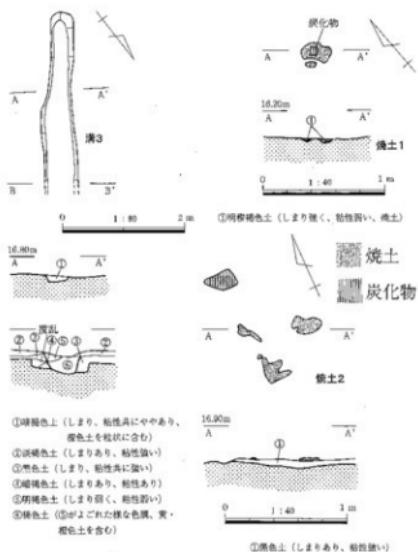


図9 溝3、焼土1・2

### 土器1・2 (図12、図版5-1、44-2)

D5グリッド北東の黒色土中で合口に組み合せた土質部の皿(1・2)が出土した。1が上で2が下であった。かわらけ内の土壤分析では脂肪酸やイネ科植物などの花粉は検出していない(第5章 特論6参照)。遺物を埋納したと思われる遺構の掘りこみ等は確認できなかったので、合口に組み合せたまま流れ込んだと思われる。器高は低く形状は幅半で、丁寧な仕上げである。底部は回転式切りである。1・2とも近世の遺物と思われる。(伊藤) 土器集中区 (図13、図版5-2、33-1)

G11グリッド南東の黒色土中から弥生時代中期後葉の土器が集中して出土した。周辺で土坑やピット等の掘り込みは確認できなかった。土器片が拡散して出土しているという状況から、二次堆積土である黒色土と共に流れ込んだと思われる。上器集中区周辺には第2遺構上面・地山上面のいずれにも明らかな弥生時代中期後葉の遺構は検出されておらず、これらの土器がどこから流れ込んだのかは不明である。3・4は弥生中期後葉の甕、5は器台である。

(伊藤)

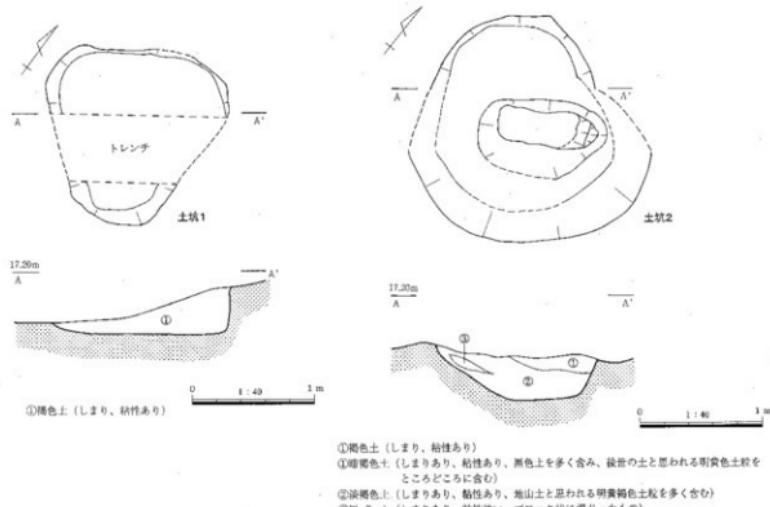


図10 土坑1・2

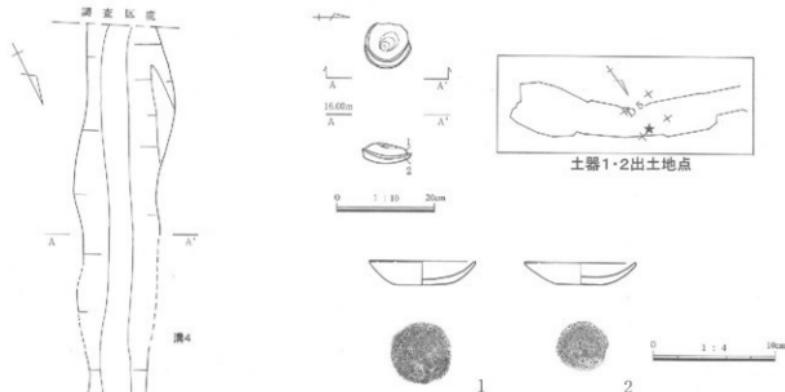


図12 土器1・2出土状況



写真3 溝4土層断面（北から）

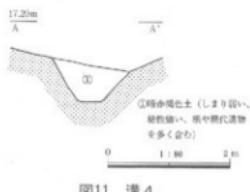


図11 溝4

道路状遺構1、ピット列1、土坑3（図14・15、図版5—3～5、6—1・2、46—1）

I 19×20グリッドで長さ20m、幅0.6~2mの範囲で帯状に東西方向に伸びる硬化面を検出し、これらを道路状遺構と考えた。遺構東側は溝や土坑3が掘られ、西側では不整形の窪みを伴う硬化面が広がっていた。また道路状遺構埋土と土坑3埋土は類似するので、2つの構造は関連すると考えられる。溝、硬化面はいずれも軟弱な黒色土を整地する手段と考えられる。硬化面にみられる窪みは土を突き固めた痕跡と思われ、硬化面の厚さは約8cmである。東側の溝底面にもところどころ窪みがみられ、埋土は褐色土であった。

土坑3は長さ1.2m、幅0.4m、深さ0.4mで、土坑内には五輪塔の火輪（S2・3）と水輪（S1）が埋められていた。また、道路状遺構北側ではピット列を検出した。埋土が道路状遺構内の溝埋土と似ることから両者が関連していた可能性があると考えられる。

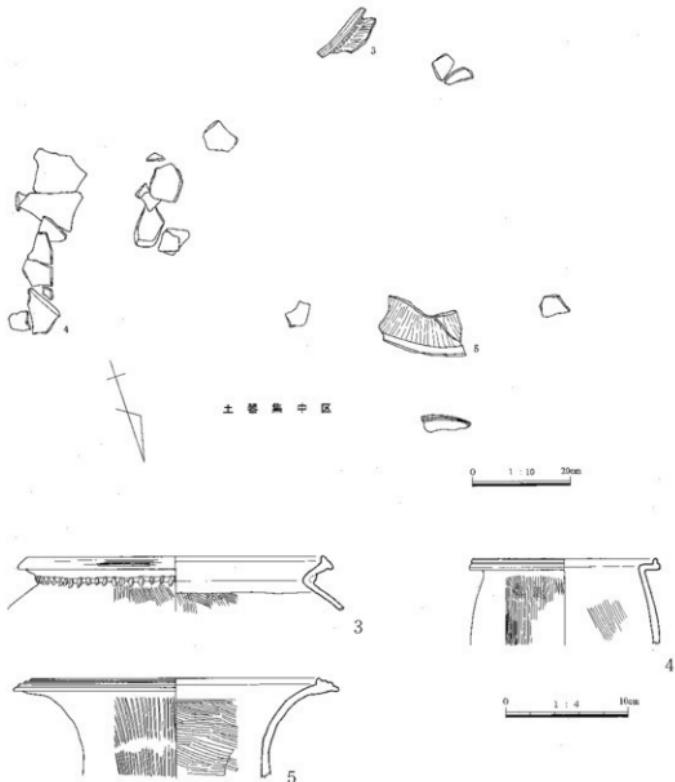


図13 土器集中区および出土遺物

道路状遺構1の他に、道路状遺構の可能性がある遺構がこの他にも2つある（ピット列2・3）。詳しくは後述するが、いずれも第2遺構面上で検出された遺構であり、道路状遺構1とは検出面・埋土が共に異なる。だが、ピット列2・3周辺には黒色土がほとんど存在せず、検出面の違いが必ずしも時期差を示しているわけではないようである。また、ピット列3ではピット内から五輪塔の一部が出土しており、さらに道路状遺構1の延長上にピット列2・3が存在するという平面的な関係も指摘できる。これらのことから道路状遺構1、ピット列2・3は一連のものであった可能性がある。これらが一連の道路関係の遺構であるとすると、道路状遺構1の様相から同じ遺構でも様々な整地の手法が用いられていることが分かる。

包含層と遺構出土遺物から、近世以降の遺構と思われる。

（伊藤）

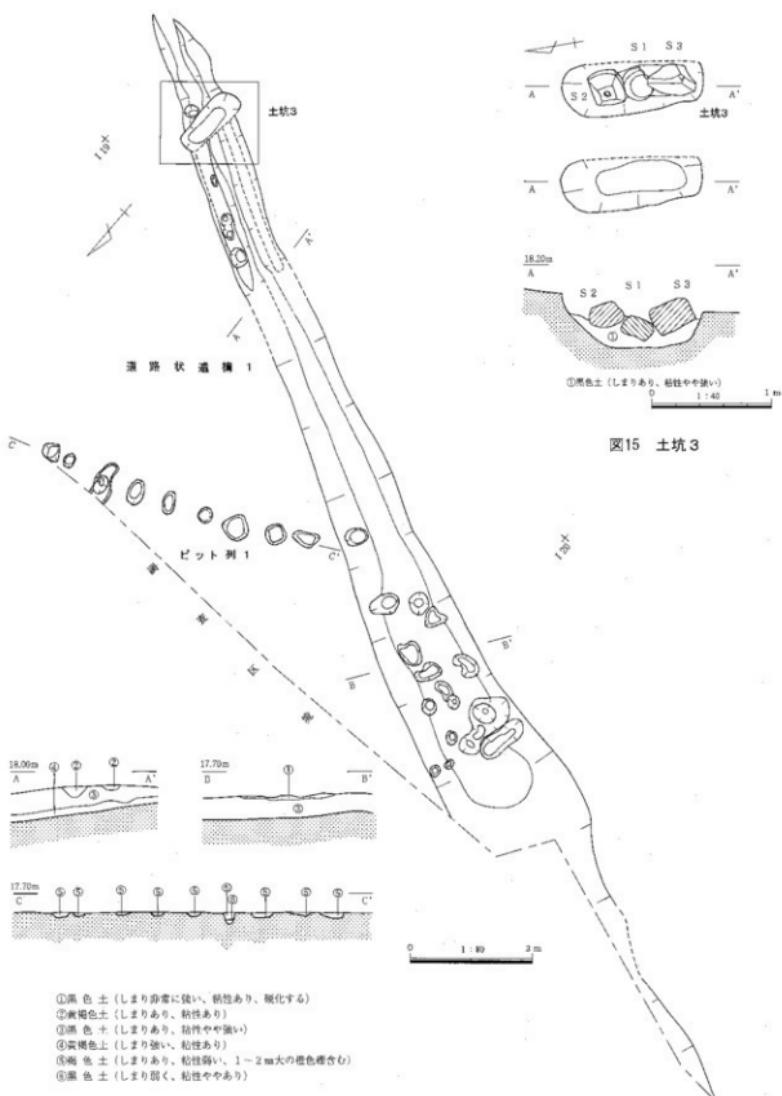


図14 道路状遺構 1、ピット列 1、土坑 3

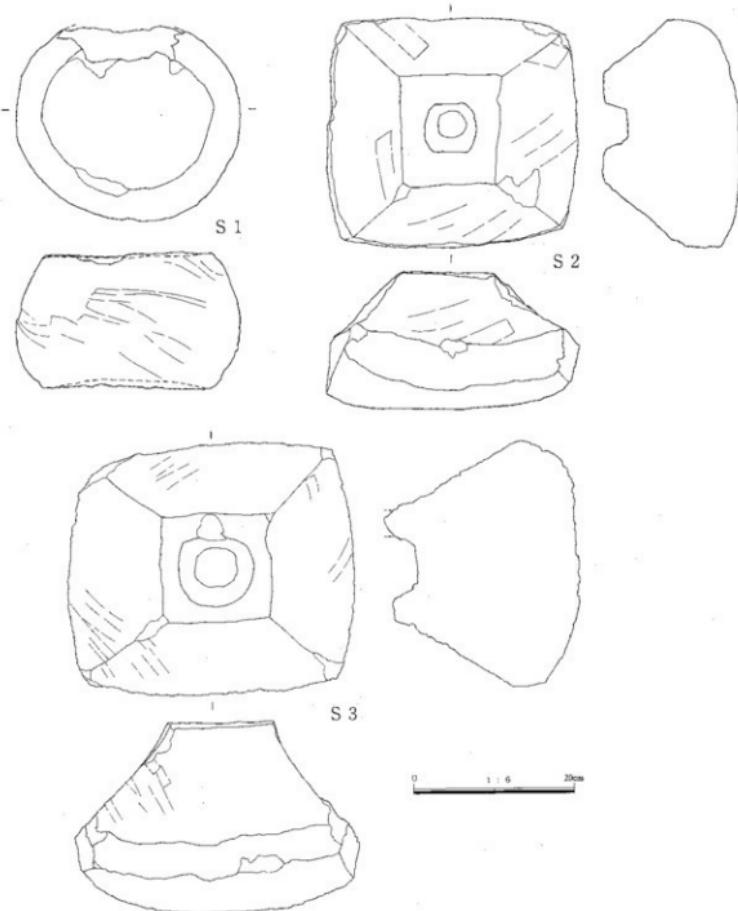


圖16 土坑3出土遺物

## 第4節 第2遺構面の遺構・遺物

### 1. 弥生・古墳時代の遺構・遺物

#### 竪穴住居1 (図17~21、図版6-3~5、7、33-2、34、35-1)

ほぼE6グリッド全域に位置する。周壁溝の西側は溝4によって破壊されているが、溝1を加えた規模は南北9m、東西10mを測る。P1はいわゆる中央ピットであり、長径1.4m、短径1.2m、深さ1mを測る。基本的にこの竪穴住居1は、中央ピットであるP1とP26、P31、P34、P37のそれぞれ四方の柱穴から構成されていると思われる。中央ピット東側の床面は焼けていたが、中央ピットそのものには火の痕跡は確認できなかった。

出土遺物は住居の床面近くから数多く出土している。図18・19で示したものは基本的に床面、もしくは床面近くから出土したものである。土器は全て弥生時代中期後葉の時期に比定されると思われる。6~9は甕、9~12は壺、13~17は高杯、18はあまり見られない土器であるが、器台の底部と思われる。27~29は台付きの底部、30はかなり小型の土器の底部と思われる。31は分脚形土器品であるが、風化が著しく文様の全容は明らかではない。F1は鉢器である。木質が残存しており、形態からヤリガシナの一器であると思われる。S4は打製石斧、S5は剥片である。石材はS4が安山岩、S5が緑色片岩である。

P2はP1の北西に接して検出された(図20)。長径0.9m、短径0.6m、深さ0.4mを測る。位置がP1に近く、後述する溝1と同じように、建て替えに伴う中央ピットとも考えられるが、埋土中から中期後葉の甕(32)が出土しており、住居内出土遺物の時期とほぼ同じであることから、ここでは一応ピットとして扱った。位置的にも溝1と対応するものかどうかは不明である。これらからP2が住居と関連する遺構であるかどうかも不明である。

溝1は同じく竪穴住居1の周壁溝と思われるが、一段低い周壁溝より幅が大きく、また遺物が多く出土している(図21)。溝1は(A-A')ライン以西では検出できておらず、先後関係は判然としないが、建て替えがあったことを示している。出土遺物は、弥生時代中期後葉のものがほとんどであり、住居内のものと大きな時期差はない(36~46)。その中でも46は台形土器と呼ばれるものである。上面は平坦で、端部近くで窪みがある。平坦面も含め外面にはハケ日が見られる。

(下江)

#### 竪穴住居2、テラス3 (図22、図版8・9、35-2、36-1、写真4)

H19グリッドの緩斜面で1軒の竪穴住居と1基のテラスを検出した。それぞれ東側を竪穴住居2、西側をテラス3と呼称する。両遺構は切り合っているが、土層断面の観察結果、テラス3→竪穴住居2の順に建てられている。両遺構の検出面からの深さは浅い。これは後に掘削されたためと思われる。テラス内埋土から多くの土器が出土している。いずれも弥生時代後期末~古墳時代初頭のものであり、2基の時期差はそれほど大きくなない。以下それぞれの遺構について詳細を述べる。

(下江)

#### 竪穴住居2 (図23・24、図版8・9、35-2、36-1)

竪穴住居2は、テラス3が埋没した後に建てられた住居である。(B-B')ラインでは、テラス3の埋土である④層を切って周壁溝Bが掘られている(⑤層)。しかし、この周壁溝もさらに南側の新しい周壁溝Aによって掘り込まれている(⑥層)。周壁溝Bで住居が建っていたときには、既に貼床(③層)もあった可能性がある。柱穴については、P1は周壁溝Bとの距離があまりにも近く、P2は周壁溝Bのコースより外側に位置しているため、明確にこの周壁溝Bにともなうピットは検出できなかった。

周壁溝Aの時には、埋土やピットの深さなどからおそらくP1~4が柱穴であったと考えられる。P1は貼床より掘り込まれており、この段階においては貼床が施されていたことは確実である。ピットの深さは深く、いずれも0.6~0.8mを測る。これらのピットから推測される住居の規模は、東西6.5m、南北4.4mを測る。

遺物は、竪穴住居2とテラス3のどちらか判断できないものを図24に示した。後述するが、テラス3から出土した上器と大きく差はない。47は後期の古い段階のものの可能性があるが、48・49はいずれも弥生時代後期末の壺である。

(下江)

#### テラス3 (図25・26、図版8・9、35-2、36-1)

テラス3は竪穴住居2の西側にある遺構であり、竪穴住居2を建てる以前につくられている。向きも竪穴住居



図17 竪穴住居 1

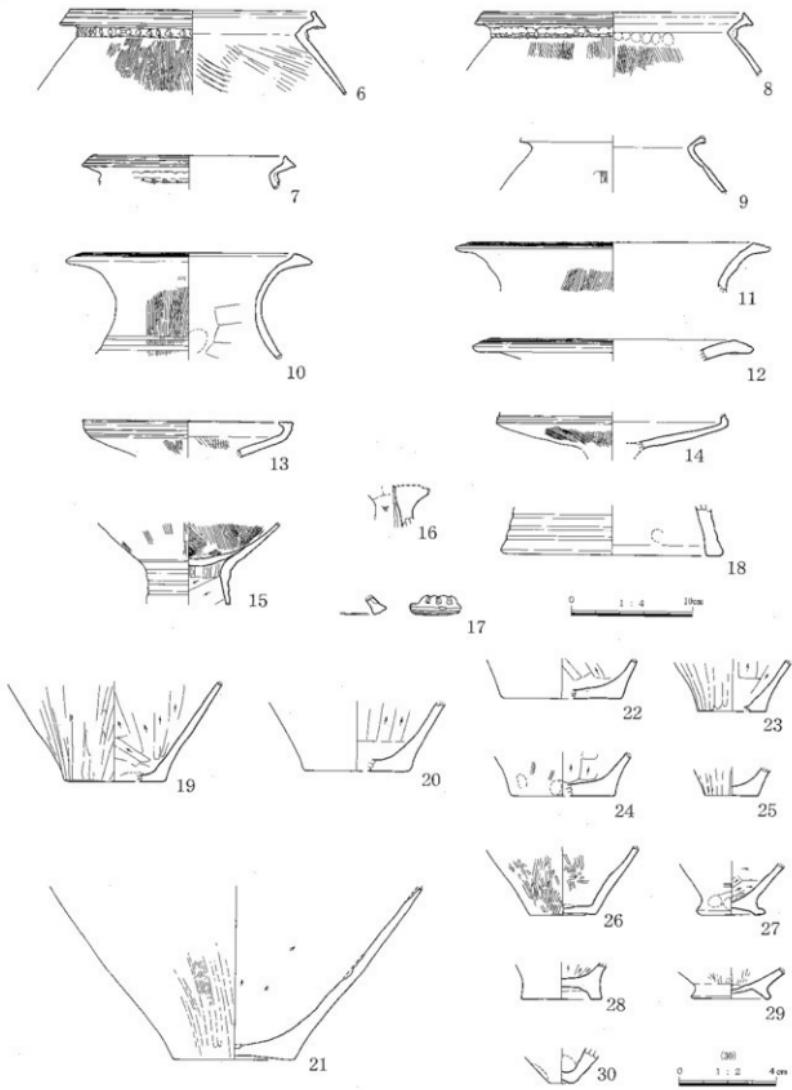


図18 窪穴住居1出土遺物その1

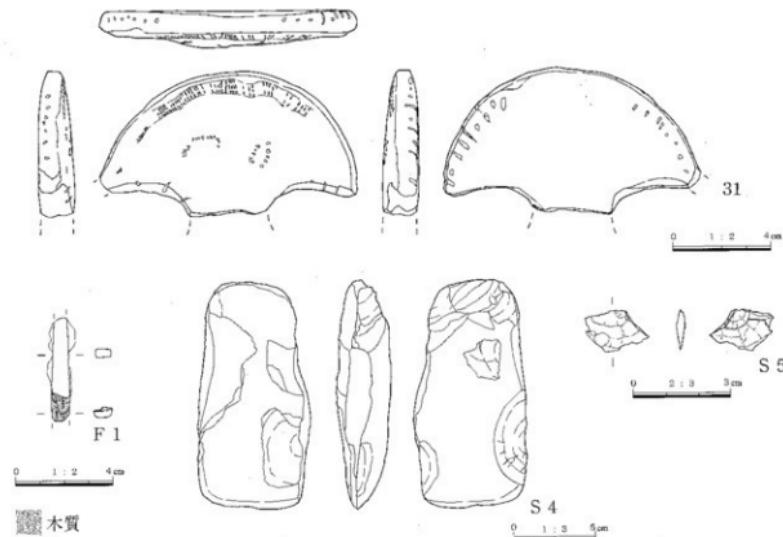


図19 積穴住居1出土遺物その2

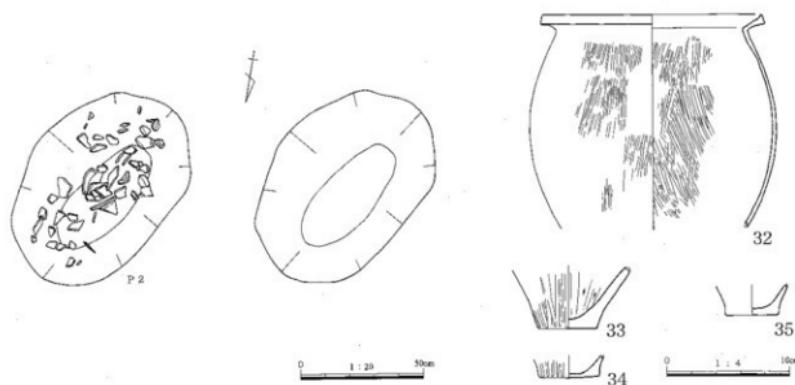


図20 積穴住居1内P 2および出土遺物

2とずれているので、別々の造構であると思われる。この造構内からはピットは検出されているが、柱穴になるようなピットではない。P 8は長さ0.4m、幅0.3m、深さ約5cmで平面方形を呈する。ピットの縁から壺片(50～52)が出土している。テラス全体の規模は推定で東西6.4m、南北2.4mを測る。テラス3は先述した積穴住居2によって壊されているので、ピット等も壊されている可能性もあるが、多量の土器が残存していることからもそれは考えにくい。周壁溝も存在しないので住居ではないと思われる。

遺物は、床面付近から数多く出土している。特に西側コーナー付近に集中している。いずれも弥生時代後期末

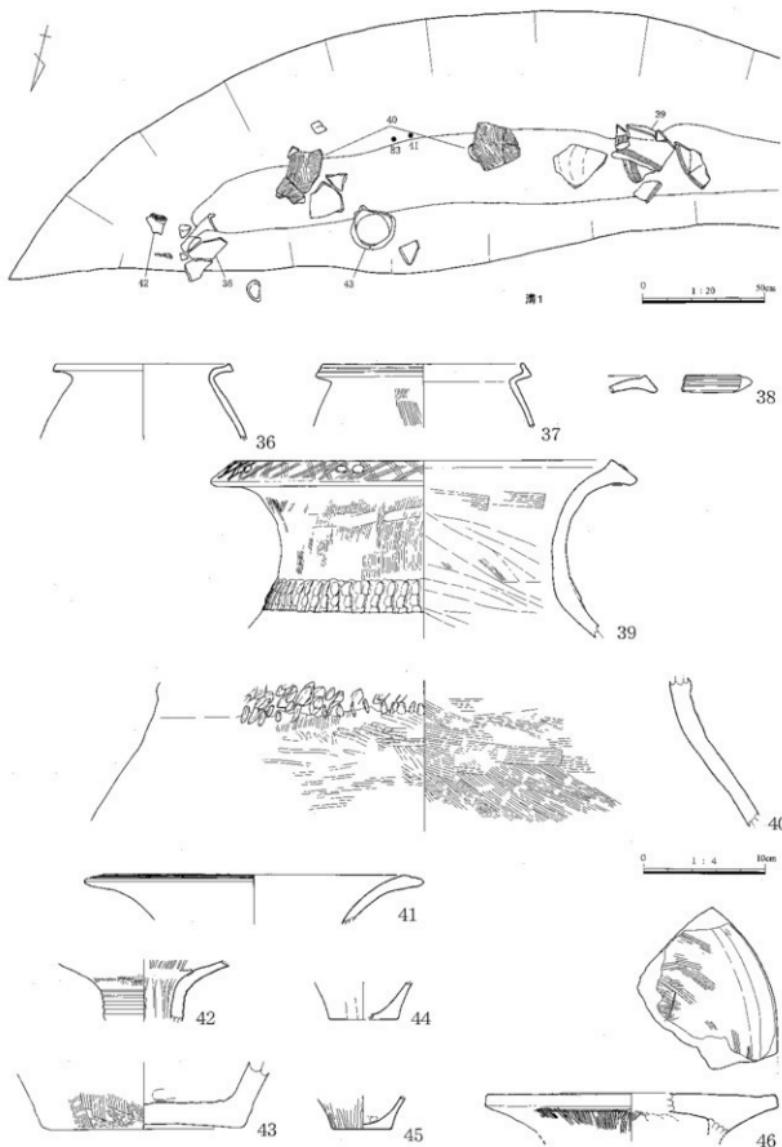


図21 積穴住居1内溝1および出土遺物

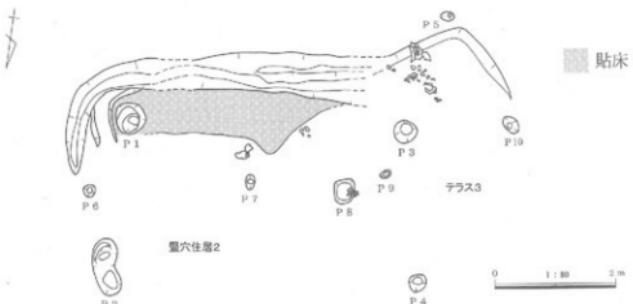


図22 壺穴住居2、テラス3

～古墳時代初頭の上器であり、図25・26で示した壺、壺、高杯などは確実にこのテラスに伴う土器である。後述する壺穴1で出土した土器群とはほぼ同じ時期であり、関連があると考えられる。また、F2は鉄滓である。出土状況からこの遺構に伴うものと考えられる。(下江)

壺穴1(図27～29、カラー図版2、図版10～11、36～2、37、38～1)

壺穴住居2、テラス3の南西、G21グリッド杭のすぐ西側に位置する。調査区塊に切られて全掘はできていないが、全体の半分ほどを検出していると思われる。南北3.6m、東西3.4m、深さ0.4mの規模を測り、平面形態はおそらく正方形に近い方形を呈すと思われる。壺穴の床面は地山で、深さ0.15mほどの溝が巡っている。ピットは検出できなかった。



写真4 壺穴式住居2、テラス3土層断面(北から)

壺穴内からは多くの土器が出土している。特に瓶形土器(78)が溝の近くに広口部を下にして、床面に立ったままの状況で出土したのは注目される。瓶形土器は非常に薄手で、模等の二次焼成の跡は確認できなかった。また上部は破損しており、その破片も検出できていない。これはまた後述するが、壺穴の深さとほぼ同じ高さだけ残存していることから、瓶形土器の上部は後世の掘削によって削られたと思われる。この他にも完形に近い状況で土器が多く出土している。瓶形土器の近くでは、70・73・74のような土器が出土している。これらの遺物はほとんどが床面に接する、または近い位置で出土している。出土遺物は瓶形土器も含めて一括りが高く、弥生時代後期～古墳時代初期のものである。

こうしたピットを伴わない壺穴住居に似た遺構は、数軒の壺穴住居に対して1軒存在しており、住を省いた簡潔で広いスペースを有する特徴から、「作業場ないし物置」とか「共同の炊事小屋」などと解釈されるが多い<sup>(31)</sup>。また、こうした遺構からは土器などの道具類が数多く出土しており、この壺穴1と同様の状況である。これらの遺構の特徴の1つとして、床面に非常に良く焼けた焼土面があることが挙げられるが、本遺構では確認できなかった。埋土中からも土器や炭化物は確認できていない。こうした構造物の屋根等を支える簡単な柱穴がおそらく周辺にあったものと考えられるが、壺穴1周辺ではピットは検出できていない。これは、壺穴1が表土直下で検出されており、後世に大幅な掘削があったからと考えられる。

岡山県津市では弥生時代中期後葉を中心各集落でこうした遺構が検出されている<sup>(32)</sup>。橋本津原山遺跡では近接して、ほぼ同時期の壺穴住居2、テラス3が存在しており、これらの遺構と関連する可能性がある。また、こうした遺構内から瓶形土器が出土しているということは、この土器が祭的であれ、実用的であれ、ある程度の集団で共同使用されていたことを示しており、この土器の性質の一端を明らかにしていると思われる。(下江)

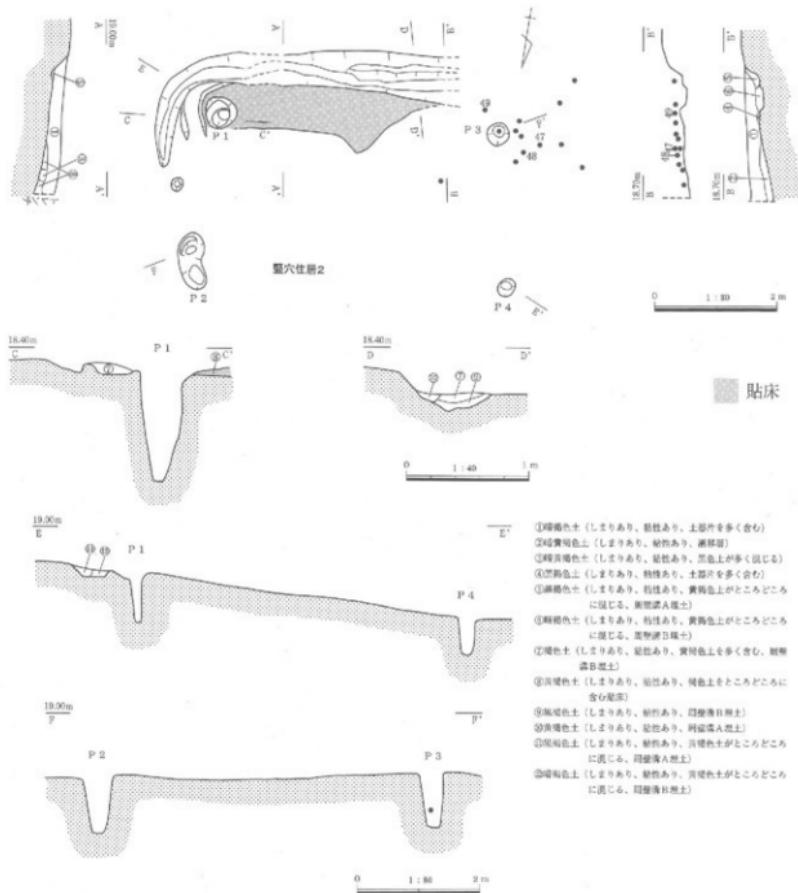


図23 縫穴住居2

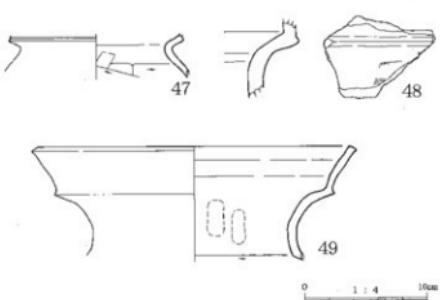


図24 積穴式住居2、テラス3出土遺物  
口縁を東側に向けて置き、もう1つの口縁部周辺の破片をさらに西側にその上から重ねるようにして、今度は口縁を南側に向けて置いており、土坑の長軸方向と直交するようになっている。土器棺を意識した土器の破片の組み合わせと考えられる。

土器を取り上げた後にそれに被さって隠されていた土坑を検出した。長さ0.66m、幅0.25m、深さ0.1mを測り、平面形態は隅丸長方形である。土坑中からは遺物は出土していない。土器(79)は、二重口縁の壺であり、全体的に薄手のつくりである。口縁下端の突出が発達しており、口縁端部も強くナデることによって面が形成されている。肩部にはハケ目工具による波状文が見られる。時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

吉田学氏や角南聰一郎氏の研究によれば、土器蓋土坑墓は現在、鳥取県では横木塗原山遺跡例と併せて5例確認されている<sup>(23)</sup>。いずれも旧国の伯耆国にあり、因幡では確認されていない。時期は弥生時代中期後葉～古墳時代中期まで幅がある。土器蓋土坑墓は広島県や山口県、特に旧国の安芸国や周防国で多く発見されており、それらの多くが弥生時代後期のものである。西部瀬戸内からの影響を考えられそうだが、米子市東宗像遺跡第1号土器棺墓出土上器は弥生時代中期後葉のものであり、中四国最古段階のものである。これより時期が遡る資料は北部九州の資料しかないので、その系譜や展開については今後とも議論していくなければならない。(下江)

#### 埋葬施設1 (図30・32、図版13-4、14-1・2)

D 4グリッドの緩斜面に位置し、土器蓋土坑墓1の北側に隣接する。埋葬施設1はほぼ東西方向を長軸とし、長さ2.6m、幅0.7m、深さ0.4mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。土坑西側では2段掘り込みが見られるが、東側では見られない。土層からも木棺の痕跡は見られない。

遺物は鉄器が出土している(F3・4)。床面から浮いて出土しているが、副葬品と考えられる。いずれも同一固体で、ヤリガンナの一部と考えられる。

土器蓋土坑墓1と同一遺構面での検出であり、近接し、土坑の長軸方向もほぼ同じであることから関連があるものと思われるが、埴丘や周溝があった痕跡はない。いくらか造構面が掘削されているであろうが、これらの遺構は古墳に伴う埋葬施設ではないと考えられる。(下江)

#### 土坑4 (図33、図版14-3)

D 4グリッド北西隅に位置する。北側が調査区境によって切られており全掘はできなかったが、現存で長さ0.95m、幅0.3m、深さ0.3mを測る隅丸方形の土坑である。埋土中から土器が出土している(80・81)。いずれも弥生時代中期後葉の上器である。(下江)

## 2. 中近世の遺構・遺物

### ピット群1・2 (図34~36、カラー図版4-1、図版14-3、15~17-1・2、18-2、38-3)

遺跡のほぼ中央部で、規則的に並ぶピット群を検出した。E8・9グリッドに広がるピット群1とF10・11、G10・

#### 土器蓋土坑墓1 (図30・31、図版13-1~3、38-2)

D 4グリッドの緩斜面に位置する。後述する埋葬施設1に隣接し、土坑の長軸方向がほぼ東西方向に向いておりそろっている。当初、黒色土内から土器(79)を検出した時には土器棺の可能性を考えたが、トレチをいれても土器の周囲に掘り方の輪郭が検出できず、また、土器の出土状況が、土器1個体を分割して平面的に広げているような状況であったため土器蓋土坑墓と考えた。まず、肩部の破片を土坑の最東部に置き、その西側に上から重ねるようにして口

縁部周辺の大きな破片を土坑の長軸に沿って、口縁を東側に向けて置き、もう1つの口縁部周辺の破片をさらに西側にその上から重ねるようにして、今度は口縁を南側に向けて置いており、土坑の長軸方向と直交するようになっている。土器棺を意識した土器の組み合わせと考えられる。

土器を取り上げた後にそれに被さって隠されていた土坑を検出した。長さ0.66m、幅0.25m、深さ0.1mを測り、平面形態は隅丸長方形である。土坑中からは遺物は出土していない。土器(79)は、二重口縁の壺であり、全体的に薄手のつくりである。口縁下端の突出が発達しており、口縁端部も強くナデすることによって面が形成されている。肩部にはハケ目工具による波状文が見られる。時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

吉田学氏や角南聰一郎氏の研究によれば、土器蓋土坑墓は現在、鳥取県では横木塗原山遺跡例と併せて5例確認されている<sup>(23)</sup>。いずれも旧国の伯耆国にあり、因幡では確認されていない。時期は弥生時代中期後葉～古墳時代中期まで幅がある。土器蓋土坑墓は広島県や山口県、特に旧国の安芸国や周防国で多く発見されており、それらの多くが弥生時代後期のものである。西部瀬戸内からの影響を考えられそうだが、米子市東宗像遺跡第1号土器棺墓出土上器は弥生時代中期後葉のものであり、中四国最古段階のものである。これより時期が遡る資料は北部九州の資料しかないので、その系譜や展開については今後とも議論していくなければならない。(下江)

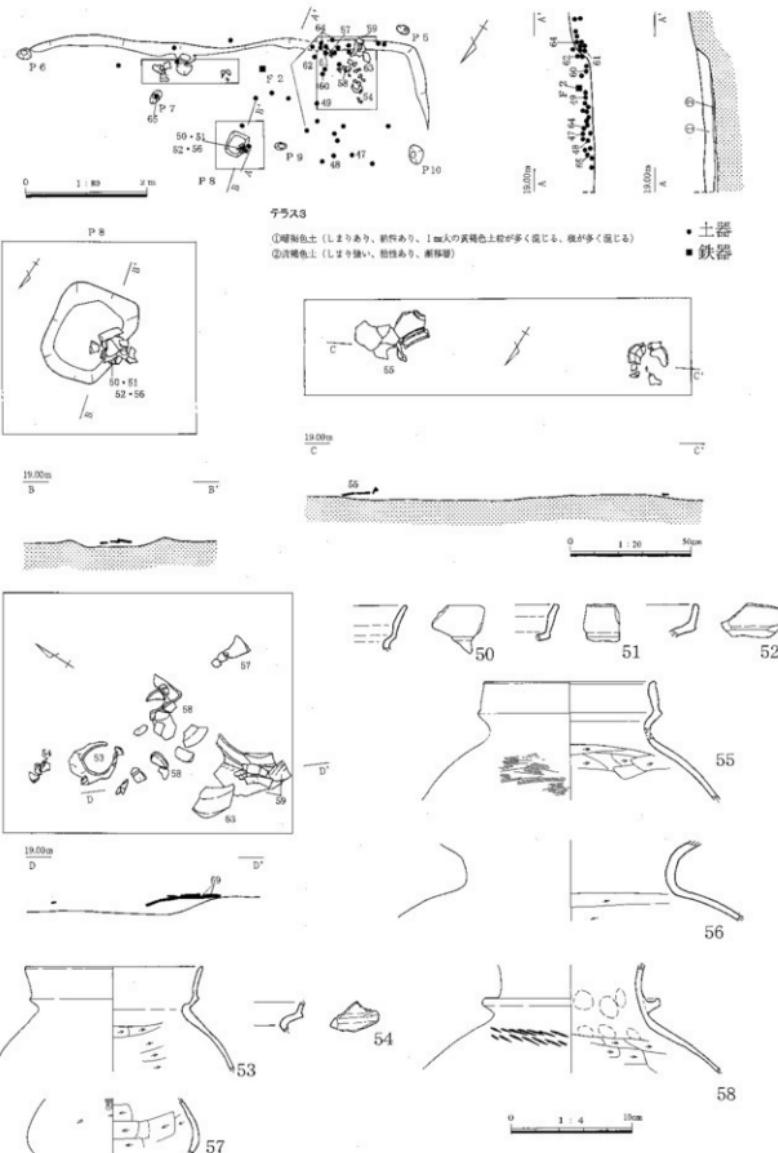


図25 テラス3および出土遺物

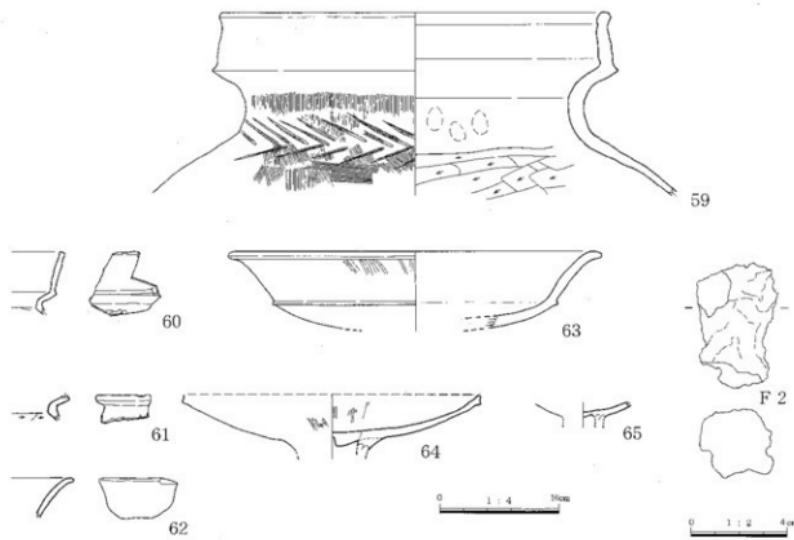


図26 テラス3出土遺物

11グリッドに存在するピット群2がある。ピット群1は東西約12.5m、南北約3mの範囲にあり、ピット群2は東西約8.7m、南北約19.3mの範囲に存在したが、遺構は調査区南側に続く。ピット群1は、南北方向に並ぶ2～4基のピットを1列とすると、12列のピット列からなるが、周辺は擾乱が激しく、北方にもっと多くのピットが存在していた可能性がある。(註4) この遺構は後述する波板状凹凸面1によって切られていて、遺物は出土していない。ピット群2は、南北方向に並ぶ10～20基のピットを1列とすると、12列のピット列からなる。この遺構は土層から、溝7→ピット群2→溝6の順であることが確認できた。ピット内から肥前系陶磁器片(83～85)が出土しており、17世紀以降の遺構と思われる。

ピット群1・2には次のような共通の特徴がある。

1. 方形ピットと円形ピットを含む。
2. 形状に関わりなくピットの大きさはほぼ同じである。(方形ピットは0.4m四方、円形ピットは0.4m径のものが多い)
3. ピットの間隔が非常に狭い。(ピットの中心間距離は0.8～1m)
4. 南北方向に軸がそろうが、東西方向にはそろわない。ただし東西方向では1列おきにそろう。
5. ピットの深さは浅い。(深さ約0.1～0.12mのものが多い)
6. すべて褐色系埋土である。
7. どのピット列も切り合いがみられない。

ピット群1・2には多くの共通した特徴があることから、ピット群1もピット群2もほぼ同時期(17～18世紀)の遺構であると考えられる。

ピット群が何の施設であったかについては栽培施設跡、建物跡、区画施設跡などが考えられる。栽培施設跡と考え得る根拠はピットの間隔が非常に狭く、ピットが浅いことである。(ピット群周辺の削平が少ないことを前提とする。)しかし、ピット埋土はしまりが強く、樹木や作物による搅乱とは考えにくい。また、ピットの多くが方形など規則的な形状をとる理由が説明しにくく、適切な栽培作物も想定できなかったことから可能性は低いと思われる。

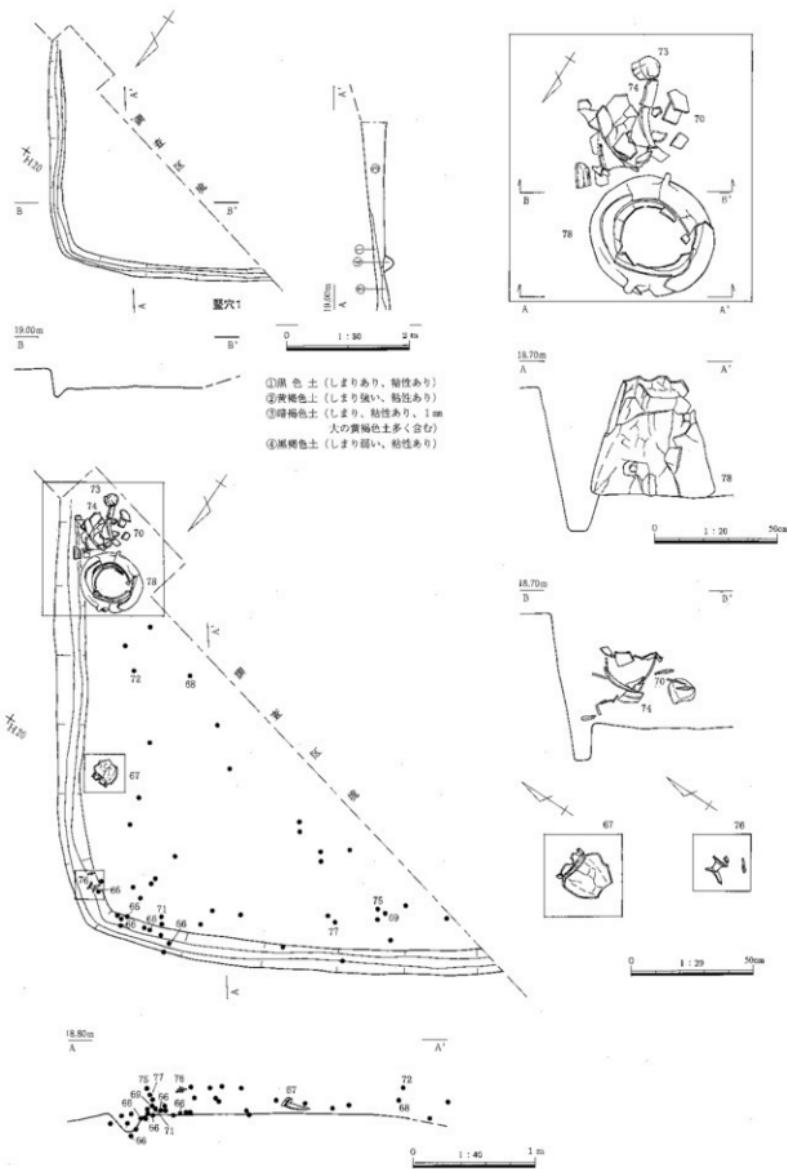


図27 堅穴1

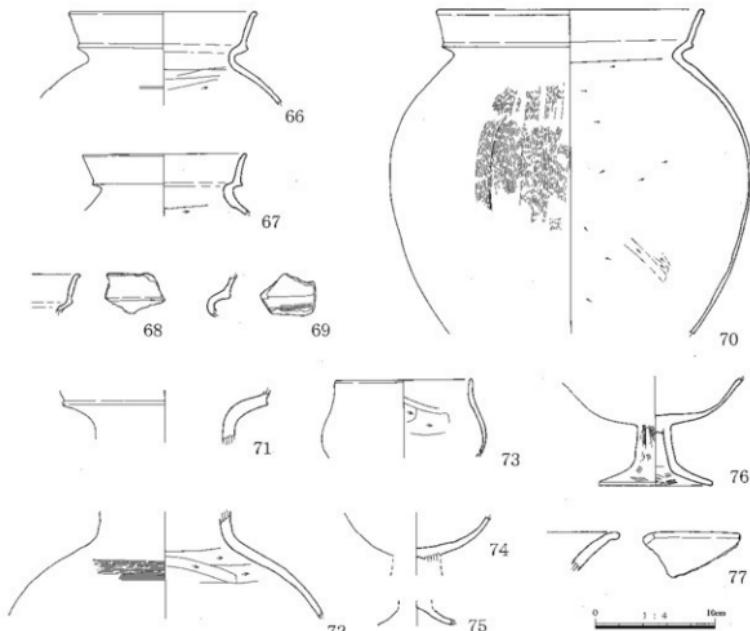


図28 竪穴1出土遺物その1

建物跡と考え得る根拠は、ピットが規則的に並ぶことやピットがもっと深かった可能性があることである。ピット群周辺では、遺跡内のほぼ全域に広がっていた赤褐色土層と黒色土層が確認できず、厚さ0.5mの表土が地山に堆積していた。これを大きな削平の結果と考えるならピットはもっと深かった可能性がある。さらにピット群の中で、軸が東西南北にそろうものを抽出すると、復元図案1・2のようになり、東西方向のピットの中心間隔は1.5m前後になる。建物跡とするなら、家畜小屋や舞台施設など平屋建造物を想定できる。建物跡を考えるのに否定的な要素は、南北方向のピット間隔が狭いこと、ピットの深さが検出時より深かったとする根拠が乏しいこと、また復元図案からすると建物は建て替えられたと考えられるが、遺構周辺は平坦であり、同じ場所に2度建て替えるべき理由を考えにくいくことである。

区画施設であったとすると、柵列跡が想定できる。複数の柵が同時併存したのか、作り替えられたのかは不明だが、南北方向の溝(溝6)によって遺構が切られていることは注目できる。柵による区画→溝による区画への変遷が想定できるのである。だが、ピット群に区画されていたとおもわれる空間は認識できず、区画のための柵列跡だとすると区画の対象が不明である。

82は弥生土器の底部である。ピット群の範囲内に存在するものの、規則的に並ばないピットから出土した。ピット群周辺が削平を受けた可能性を示唆すると思われる。83は砂目跡のある17世紀の肥前系陶器皿と思われる。84は17・18世紀後半の刷毛目文様の火入であると思われる。85・86も肥前系陶器である。(伊藤)

#### 波板状凹凸面1 (図37、図版17-3、18-1)

東西方向に並列する土坑列をE8グリッドで検出した。軸、形状、並びがピット群1とは異なるため別遺構と判断した。土坑の形状は楕円形や長方形に近い不整形であった。確認できた土坑は5つあり、長軸が0.16~0.4m、深さが8~12cmの規模である。土坑内外に硬化面は確認できなかったが、遺構周辺は擾乱が激しく、土坑列の

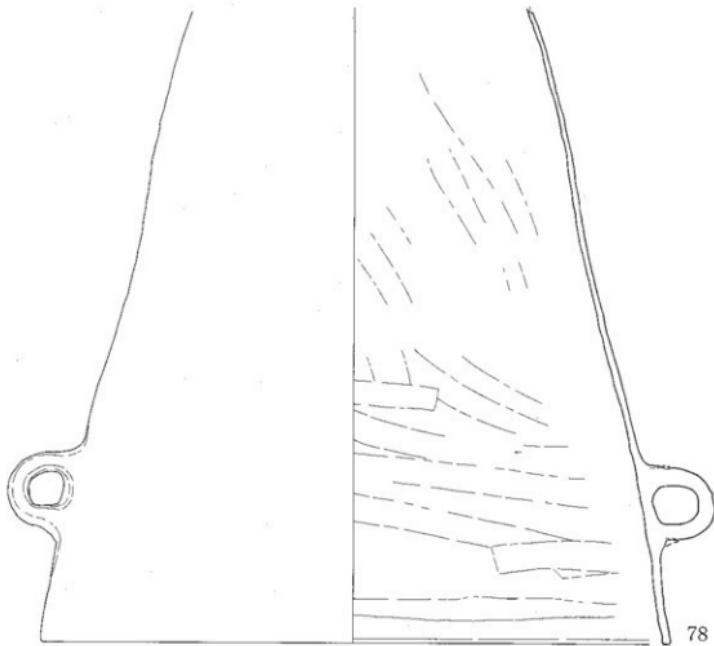


図29 堅穴1出土遺物その2

上部に硬化面が存在していたかどうかは不明である。また遺構埋土には、地山土と思われる黄褐色土が混入していた。土坑は掘削されたものか、何らかの作業の痕跡であると思われるが、人為的に埋められた可能性がある。さらに波板状凹凸面1は、E8グリッド～E・F・G10グリッドにかけて広がるピット群1の1つと切り合っており、ピット群1より新しいことが確認できた。遺構内から遺物は出土していないが、ピット群1との切り合いから17世紀以降の遺構と考えられる。

(伊藤)

#### 溝5(図39)

E7グリッド南西で検出した南北方向に走る溝である。長さ4.2m、幅0.2～0.52mを確認した。遺物は出土していないが、近接している波板状凹凸面1と関連する可能性がある。

(伊藤)

#### 土坑15(図38、図版18-3)

F9グリッド南西でピット群2と共に検出した。長径0.62m、短径0.52m、深さ約5cmの正円形であり、土坑内で焼土と炭化物を確認した。ピット群2の範囲で検出したものの、埋土、位置から規則的に並ぶピット群2には含まれない可能性もある。遺物は出土していない。

(伊藤)

#### 溝6(図40・41、カラー図版4-1、図版18-4～6、19-1～3、38-4)

ピット群2を切る南北方向に走る溝である。大きな溝6Aと小さな溝6Bがあった。溝6Bは、溝6A以前に存在していた溝の残存部と思われる。溝6Aは長さ約20m、幅0.6m～2.5m、深さ0.2～0.4mを測る。溝6Aには、東側に平坦面、底面の一部に不整形のピット列が存在するといった特徴が認められることから、水路ではなかった可能性がある。ピット列埋土は、後述するピット列2・3埋土に似るしまりの強い灰褐色土であった。溝内からは17世紀の肥前系陶器片や14世紀と思われる青磁片が出土したが、16世紀のものと思われる遺物は出土してい

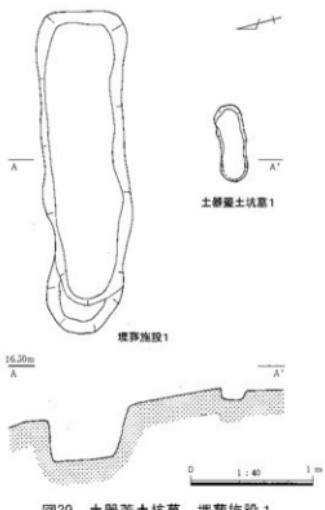


図30 土器蓋土坑墓、埋葬施設1

ない。溝6はピット群2を意識して形成された可能性が高いが、明確な用途は推定できなかった。87は鉢型の陶器である。胎土から中世の輸入品の可能性があるが、形態・製作技法などから肥前系陶器とも考えられる。88・91は龍泉窯系青磁と思われる。88は中世前半の、内面に劃花文が描かれた碗、91は14世紀の碗と考えられる。89は溝縁皿で17世紀前半の肥前系陶器と思われる。90は17・18世紀の、外面刷毛目の碗であると思われる。92は上鉢、S6は流れ込んだ敲き石であると思われる。ピット群2の埋没後、間もなく形成された17世紀以降の遺構と思われる。青磁は伝世品か。

(伊藤)

#### 溝7 (図42)

ピット群2に切られていた南北方向に走る溝である。長さ約7.4m、幅0.6m、深さ0.24mを測る。ピット群2は溝7と重複するように掘り込まれていたので、溝7はピット群2が形成される少し前に掘削されたと考えられる。遺構内埋土から、混入と思われる近現代の撲鉢が1点出土した。ピット群2との切り合いから、17世紀以前の遺構と考えられる。(伊藤) 土坑13・14 (図43、図版19-4~7)

溝6 東側で検出した円形土坑である。地山を削りだした、

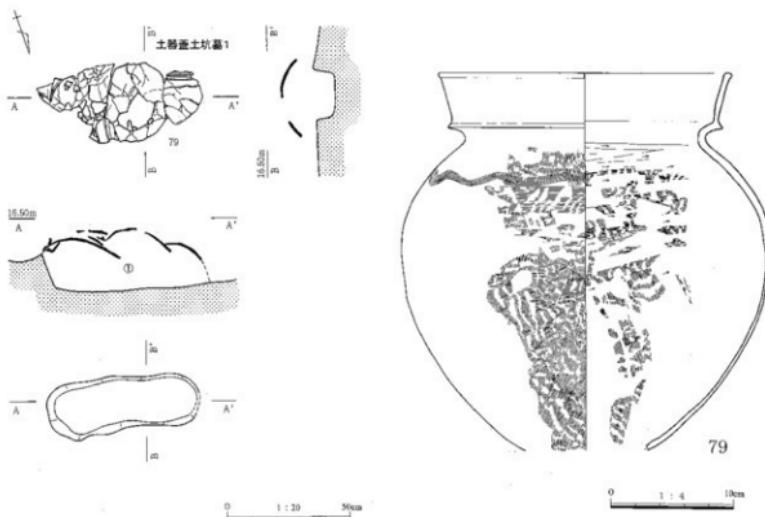


図31 土器蓋土坑墓1および出土遺物

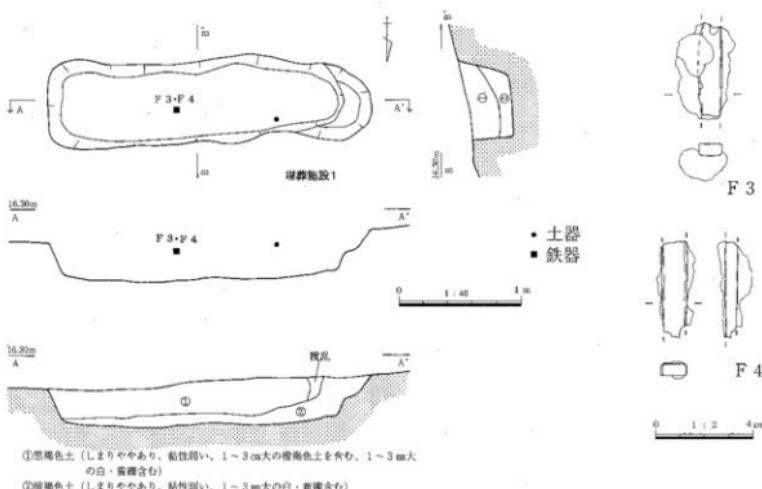


図32 埋葬施設1および出土遺物

図示していないが長方形を呈する基壇状の高まりから堀り込まれていた。土坑14が土坑13を切っており両方とも褐色系埋土であった。土坑13は径0.94m、深さ0.16mで、土坑14は径1.3m、深さ0.44mであった。土坑14には底面に溝が巡っており、桶などを設置した痕跡と思われる。基壇状の高まり周辺には上屋施設跡のような遺構は確認できなかった。遺構の形状から、トイレ跡を想定できる<sup>(93)</sup>。土坑13埋土から銅鏡軸施釉の17世紀以降の肥前系陶器片(93)、土坑14から13世紀の青磁片(94)が出土した。土坑13・14出土遺物の組み合わせは溝6の遺物組成と類似することから、土坑13・14は切り合いで認められるものの、ほぼ同時期であり、溝6と関連する17世紀の遺構であると考えられる。

(伊藤)

#### 土坑12(図44、図版20-1・2)

G8グリッドで検出した、南北3.8m、東西5.2m、深さ0.44mの大きな土坑である。規模・形状から竪穴住居の可能性を考えられるが、周壁溝や柱穴が確認できなかったので土坑と判断した。土坑の底には周辺の地山とは異なる明黄褐色粘質土がみられた。この粘質土は溝12周辺や土坑47・48の底などにも存在しており、地山に含まれると考えられる。掘削痕などは確認できなかったものの、土坑14は粘土採掘痕の可能性がある。遺物から、近世以降の遺構と考えられる。95は弥生土器の底部、96・97・100~103は肥前系陶器、98・101は擂鉢、99は須磨器と思われる。

(伊藤)

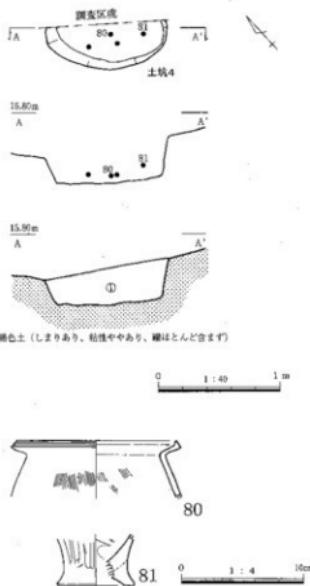
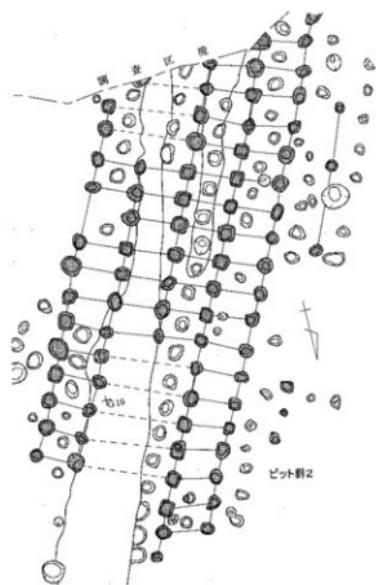


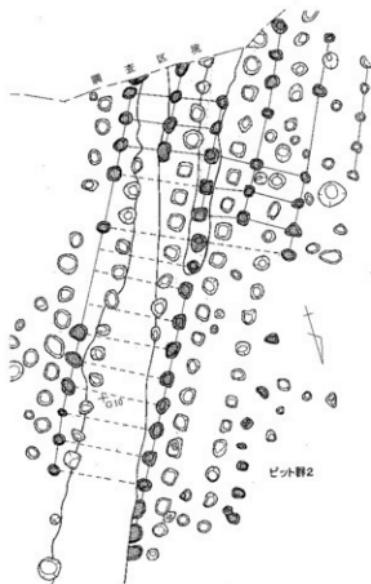
図33 土坑4および出土遺物



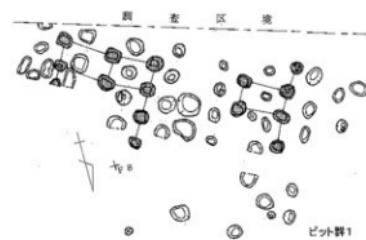
図34 ピット群1・2



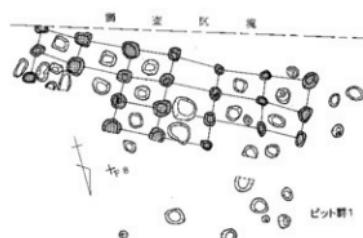
ピット群2 復元案1



ピット群2 復元案2



ピット群1 復元案1



ピット群1 復元案2

0 1:160 4m

図35 ピット群1・2復元案

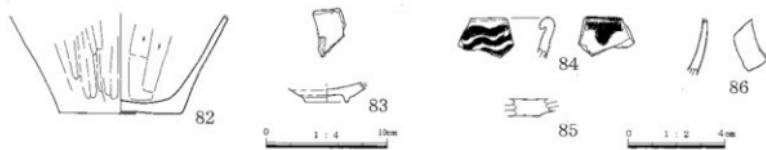


図36 ピット群2出土遺物

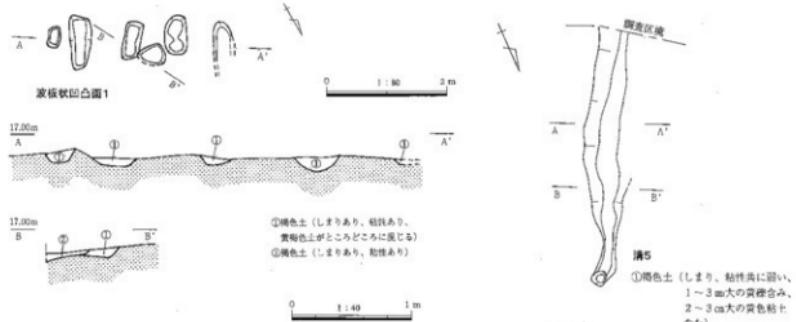


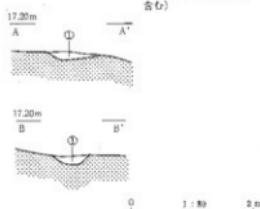
図37 波板状凹凸面1



①暗褐色土（しまりやかあり、粘性弱い、1～5mm大の白・黄・褐色塊を含み、黄鉄を多く含む）  
②明褐色土（いわゆる燒土、しづり弱く、粘性低い、炭を含む）

図38 土坑15

図39 溝5



#### 溝12(図45、図版20-3・4・6)

調査区南西の丘陵裾と溝16に沿う溝である。長さ35.9m、幅0.96m～2.2m、深さ0.48～0.72mを確認した。丘陵裾・先端にはテラス1や墓跡が存在していたので、丘陵を区画する溝であった可能性がある。溝12はG15・H16グリッド付近では丘陵裾に沿って東西方向に続いているが、H17グリッド東で北方に屈曲し、H17・18グリッドで溝16に沿って南北方向に続いている。丘陵裾には周辺の地山上とは異なる明黄褐色粘質土が存在した。溝のほぼ東端で底面ピットを1基検出した。ピット埋土から近現代のものと思われる完形の皿(104)が出土した。皿には上絵で昔話の一場面が主に印刷で描かれている。遺物から、近現代の造構と考えられる。(伊藤)

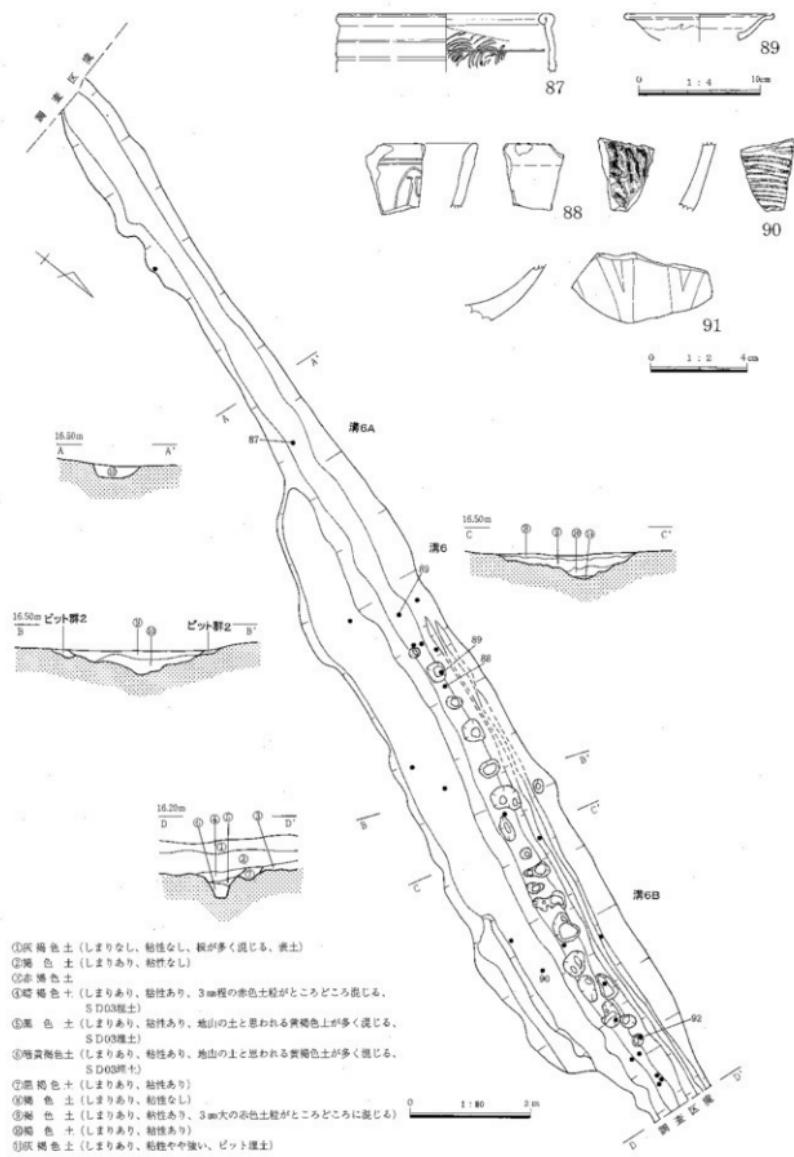


図40 溝6および出土遺物

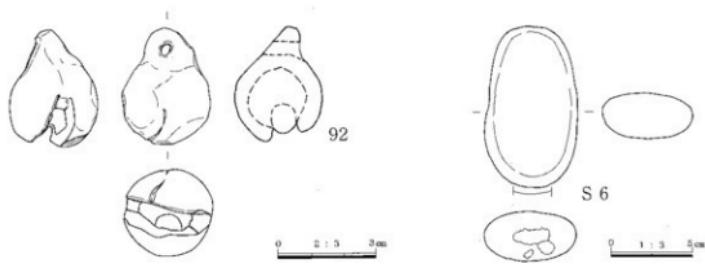


図41 溝6出土遺物

溝16(図46~48、図版20-1~7、39-1)

墓地跡から北方に続く直線状の溝である。土坑45~48を切って調査区外に続く。溝西側にピット列3が存在したが、溝16との新旧関係は不明である。長さ約16m、幅0.4~2.4m、深さ0.24mを検出した。墓地跡との切り合いを示す箇所はなかったので、溝16と墓地跡との新旧関係を直接的に知ることはできない。しかし溝内からは、墓地跡から転落したと思われる五輪塔や陶磁器が出土したので、溝16は墓地跡と同時期か、それより新しい時期の遺構と考えられる。

出土遺物は図示したもの以外にも多くあり、近現代のものが多い。また、大部分は溝16北端に集中していた。105・106は底部に回転糸切り痕の残るかわらけである。107はかわらけの底部で、中心が穿孔されていた。108は砂目の残る肥前系陶器皿と思われる。109はB群の中国青花皿で16世紀前半の遺物であると思われる。110~113・116~118は見込み五弁花纹の肥前系の皿である。114・129・130は産地

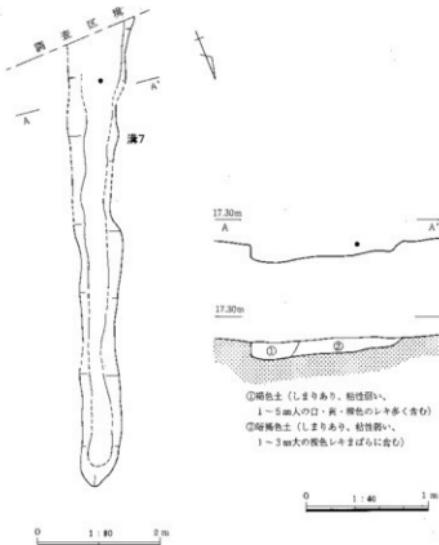


図42 溝7

不明の近世磁器碗・皿、115~119~125・128は広東碗である。126・127は小丸碗、131・132は陶胎染付である。F5は鉄滓、S8は硯で、裏面に「高嶋虎班石」の銘が刻まれる。S7・9は空風輪である。(伊藤)

#### 土坑45~48(図49、図版21)

溝16北端で検出した、複雑に切り合った土坑群である。上部は溝16に切られていた。溝16北端では2基の小さな土坑(土坑45・46)と2基の大きな土坑(土坑47・48)の他、3つの平坦面を確認した。また土坑47の底には小溝が掘られていた。平坦面は土坑の底であった可能性があるので、溝16北端では、最多で8回にわたって掘り込みが行なわれた可能性がある。埋土はすべて黄褐色で、多くの褐色系ブロックが混入しており、壁面の一部には掘削痕が残っていた。土坑の底には周辺の地山土とは異なる明黄褐色粘質土が存在した。土坑内からは近現代遺物は出土せず、何度も掘り込んだ形跡もある。土坑群46~48および平坦面、溝は近世の粘土採掘坑であった可

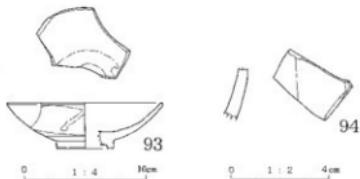
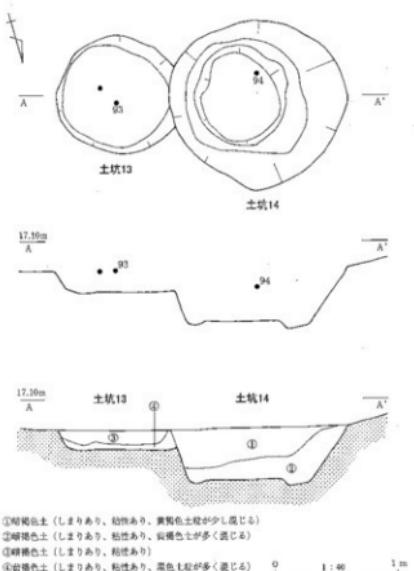


図43 土坑13・14および出土遺物

可能性がある。テラス1はピット列2構築のために造成されたと考えられるので、ピット列3との関連から、テラス1・ピット列2・溝10の時期は近世以降と思われる。

#### 土坑44 (図52・53、カラー図版3、図版23、24、39-2・3、40)

墓地跡の存在した丘陵の西麓で検出した中世の地鎮造構と思われる。土坑44周辺は平坦面（テラス2）であった。造構上部は削平が認められなかったので、上坑44はテラス2に埋め込まれていた可能性が高い。形状は不整円形で、長径0.41m、短径0.48m、深さ0.2mであった。

土坑内からは、かわらけ10枚と古銭11枚、円形の石（径0.19m、厚さ約7cm）が出土した。かわらけは、法量が口徑12cm、底径5.8cm、高さ3.3cmのもの9枚（136、137～145）と、法量が口徑8.3cm、底径4.3cm、高さ1.9cmのもの1枚（137）が出土した。古銭は洪武通寶4枚、（M1・5・10・11）元豐通寶1枚（M3）、元豐通寶？1枚（M8）、開元通寶2枚（M4・6）、治平通寶1枚（M2）、政和通寶1枚（M9）、不明1枚（M7）であった。

能性がある。土坑47床直上で墓地跡から転落したと考えられる空風輪（S10）が出土した。土坑46～48は溝16より古いが、墓地跡よりは新しい、もしくは同時期の造構と考えられる。133は須恵器片、134は網目文の肥前系碗と思われる。F6は鉄釘である。  
(伊藤)

#### ピット列3 (図50、図版22-1～4)

H17グリッド西で東西方向に並列した5基のピットを検出した。ピット列3は調査区南西の丘陵裾に沿って湾曲した浅い溝の底面に存在していた。ピット列は溝の東側でのみみられた。埋土は溝6底面ピットやピット列2以外はあまりみられない、しまりのある灰褐色土である。ピット列3は黒色土上面検出造構の道路状造構1やピット列1（図14）、第2造構上面検出造構のピット列2（図51）と一連の道路跡の可能性がある。ピット列3のピット内から空風輪（S11）が出土しており、道路状造構1・内土坑3と同様の状況である。135は肥前系の染付碗と思われる。ピット列3は近世以降の造構と考えられる。

(伊藤)

#### テラス1・ピット列2・溝10 (図51、図版22-5・6)

テラス1は調査区南西の丘陵裾東側に造り出された。東西方向に長い平坦面である。東西約24m、南北0.4～2.4mを確認した。溝10とピット列2はテラス1に掘り込まれていた。溝10は南北方向の溝で、長さ約1.5m、幅0.2～0.4m、深さ約6cmを確認したが、用途は推定できなかった。ピット列3は9基の不整円形ピットからなり、埋土はピット列3や溝6底面ピットに似ていた。ピット列2は道路状造構1やピット列3と一連の、道路跡の

(伊藤)

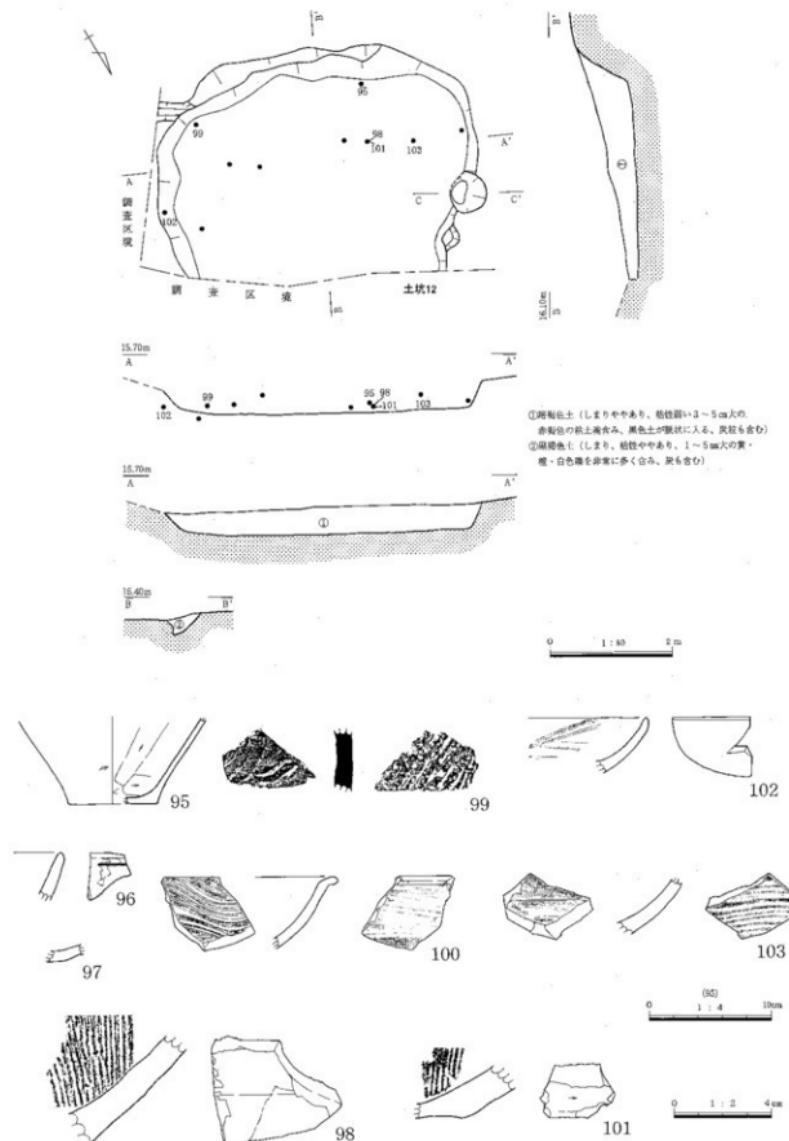


図44 土坑12および出土遺物

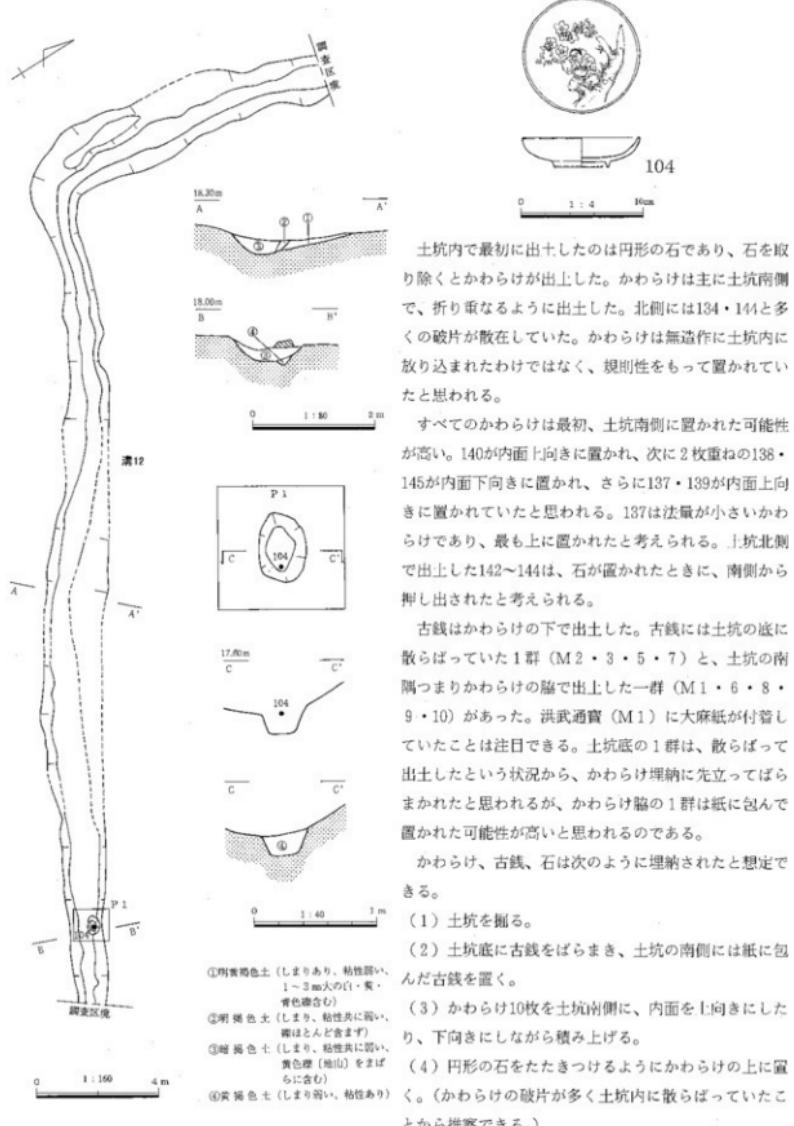


図45 溝12および出土遺物

土坑内で最初に出土したのは円形の石であり、石を取り除くとかわらけが出土した。かわらけは主に土坑南側で、折り重なるように出土した。北側には134・144と多くの破片が散在していた。かわらけは無造作に土坑内に放り込まれたわけではなく、規則性をもって置かれていたと思われる。

すべてのかわらけは最初、土坑南側に置かれた可能性が高い。140が内面上向きに置かれ、次に2枚重ねの138・145が内面下向きに置かれ、さらに137・139が内面上向きに置かれていたと思われる。137は法量が小さいかわらけであり、最も上に置かれたと考えられる。土坑北側で出土した142~144は、石が置かれたときに、南側から押し出されたと考えられる。

古銭はかわらけの下で出土した。古銭には土坑の底に散らばっていた1群(M2・3・5・7)と、土坑の南隅つまりかわらけの脇で出土した一群(M1・6・8・9・10)があった。洪武通寶(M1)に大麻紙が付着していたことは注目できる。土坑底の1群は、散らばって出土したという状況から、かわらけ埋納に先立ってばらまかれたと思われるが、かわらけ脇の1群は紙に包んで置かれた可能性が高いと思われる。

かわらけ、古銭、石は次のように埋納されたと想定できる。

- (1) 土坑を掘る。
- (2) 土坑底に古銭をばらまき、土坑の南側には紙に包んだ古銭を置く。
- (3) かわらけ10枚を土坑南側に、内面を上向きにしたり、下向きにしながら積み上げる。
- (4) 円形の石をたたきつけるようにかわらけの上に置く。(かわらけの破片が多く土坑内に散らばっていたことから推察できる。)

法量の小さいかわらけが内面上向きに、最上位に置かれていたことと、土坑北側にスペースが存在したことは、

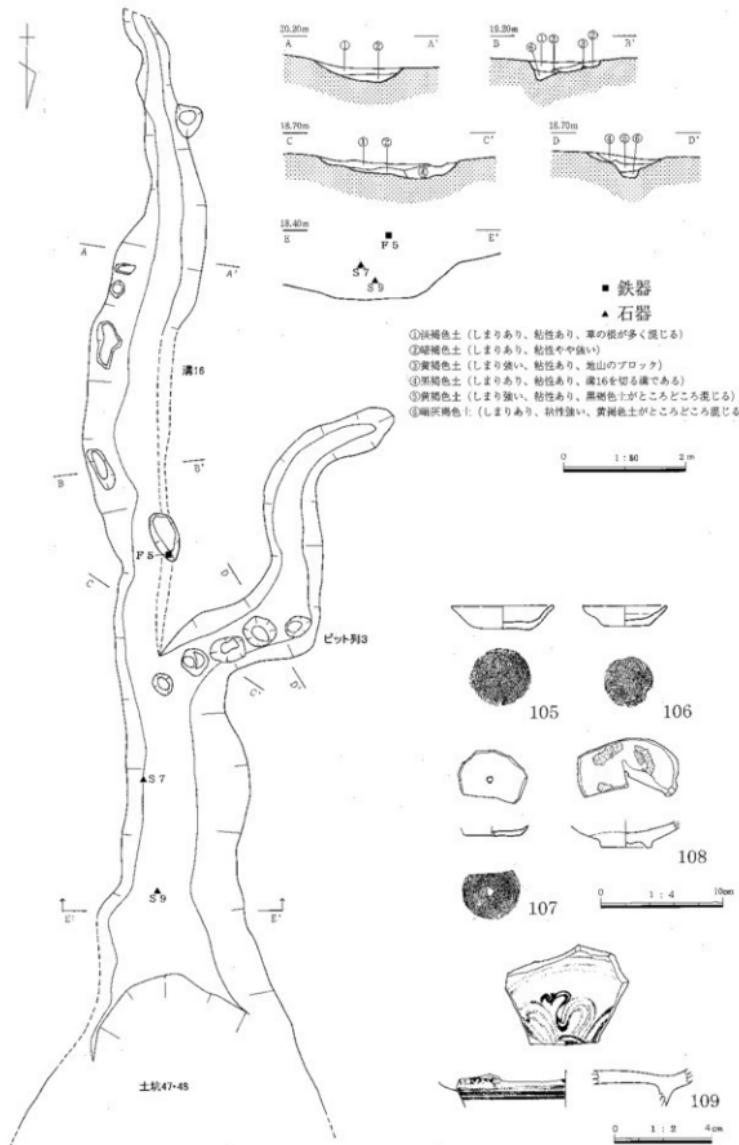


図46 溝16および出土遺物

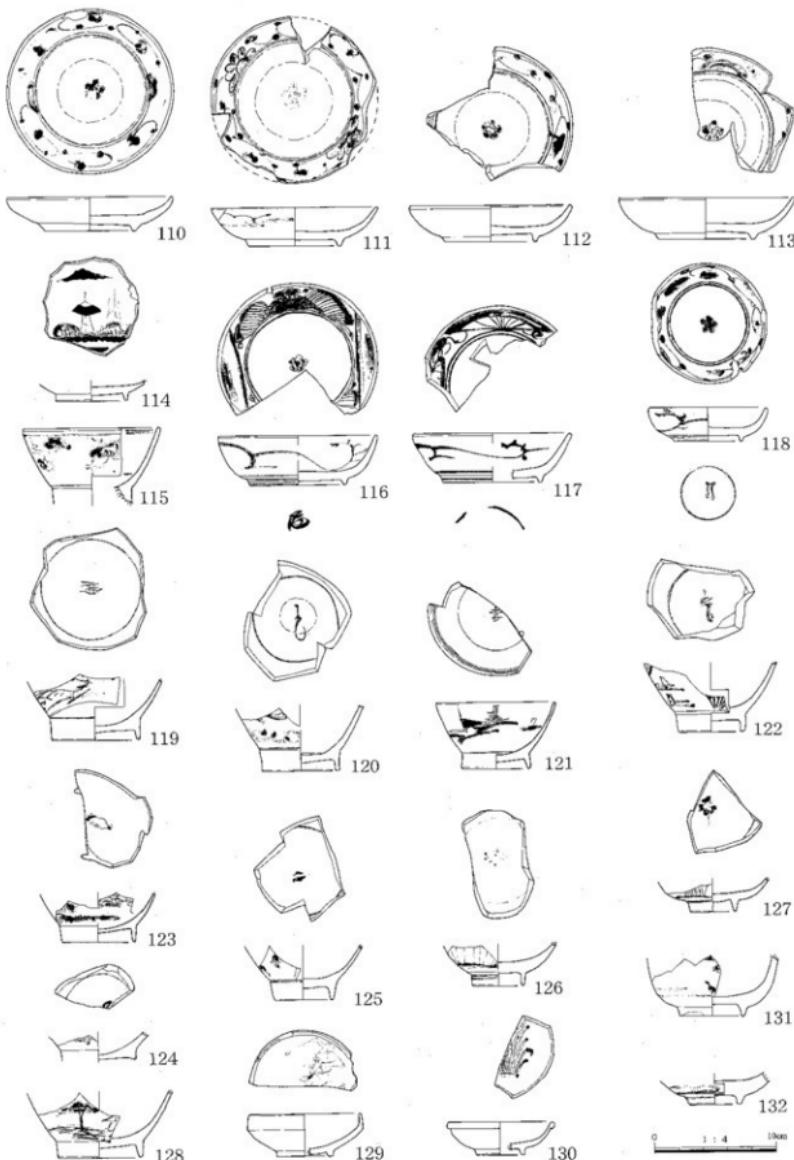


図47 满16出土遺物その1

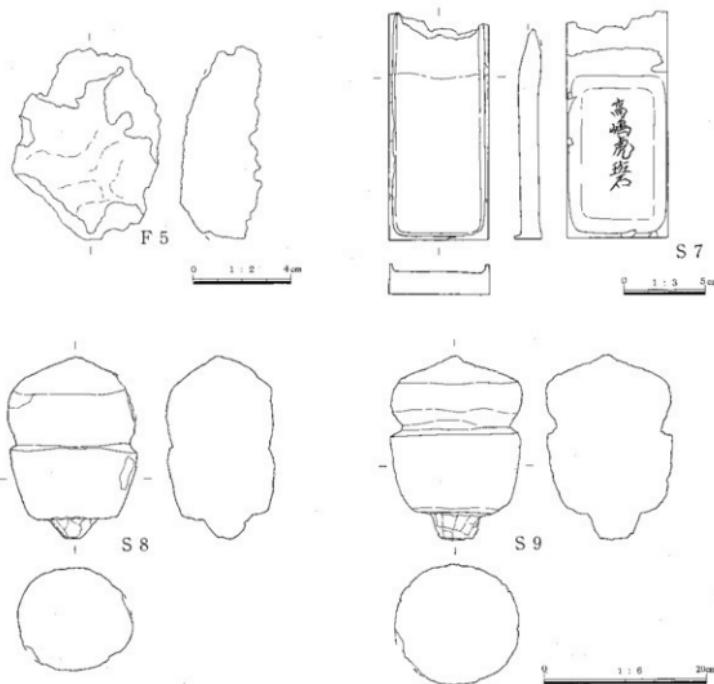


図48 溝16出土遺物その2

残存しにくいものが、小さいかわらけの内面や土坑北側に埋納されていた可能性を示唆するかも知れない。しかし土壤分析で五穀などの埋納がなされた形跡は確認できなかった。また断面遺物出土状況で、土坑床面と古銭の間および古錢とかわらけの間にもスペースが存在したが、土層の変化はみられず、何かが埋納された形跡は確認できなかった。

地鎮の対象としては他遺跡では墓地跡や建物跡、道路跡などが知られるが、土坑44周辺には建物跡は確認できず、道路状遺構1とはやや距離がある。南側調査区外は丘陵傾斜面になっており建物跡などが存在したとは考えにくい。土坑44の対象は墓地跡である可能性があるが、土坑44が墓地跡のスペース内に存在しないのは不自然である。土坑44が掘り込まれたテラス2に対する地鎮の可能性も指摘しておく。

遺構の時期は古銭とかわらけから推測できる。洪武通寶の初鋤は1368年、元豐通寶は1078年、開元通寶は845年、治平通寶は1068年、政和通寶は1111年であり、古銭からみた遺構上限は14世紀後半であるが、かわらけは15世紀のものと思われる。土坑44は15世紀の遺構であると思われる。  
(伊藤)

#### 墓地（図54、図版25～28）

調査区南西の丘陵先端部に平坦面が存在し、積石やピット、土坑、溝を検出した。遺構内外からは多くの人骨片や五輪塔（S12～15・37・53・55・57・58・62）が出土したので、平坦面は主に中世の墓地跡であったと推定できる。ただし、墓地跡とした丘陵上検出遺構には、中近世墓と関連しないと思われる遺構も含まれていると思われる。また、丘陵下からも上から転落したと思われる五輪塔（S17～20・22・24・26・28・29・30・51・54）

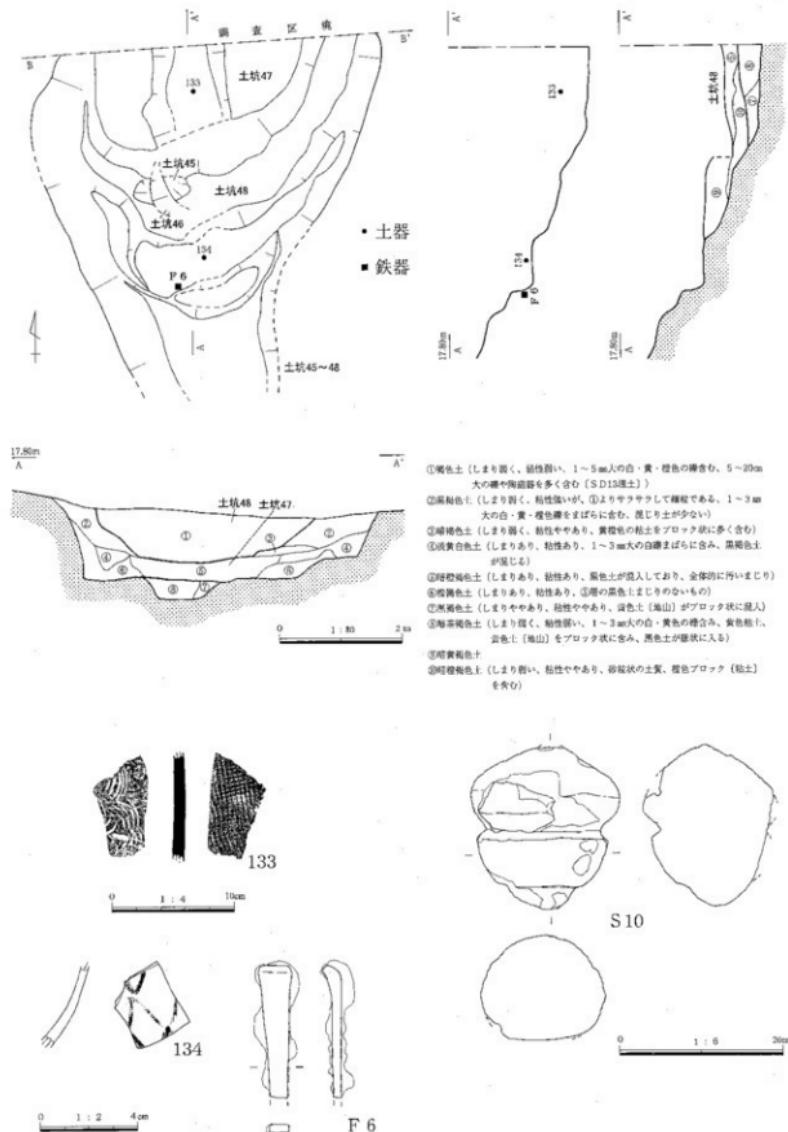


図49 土坑45~48および出土遺物

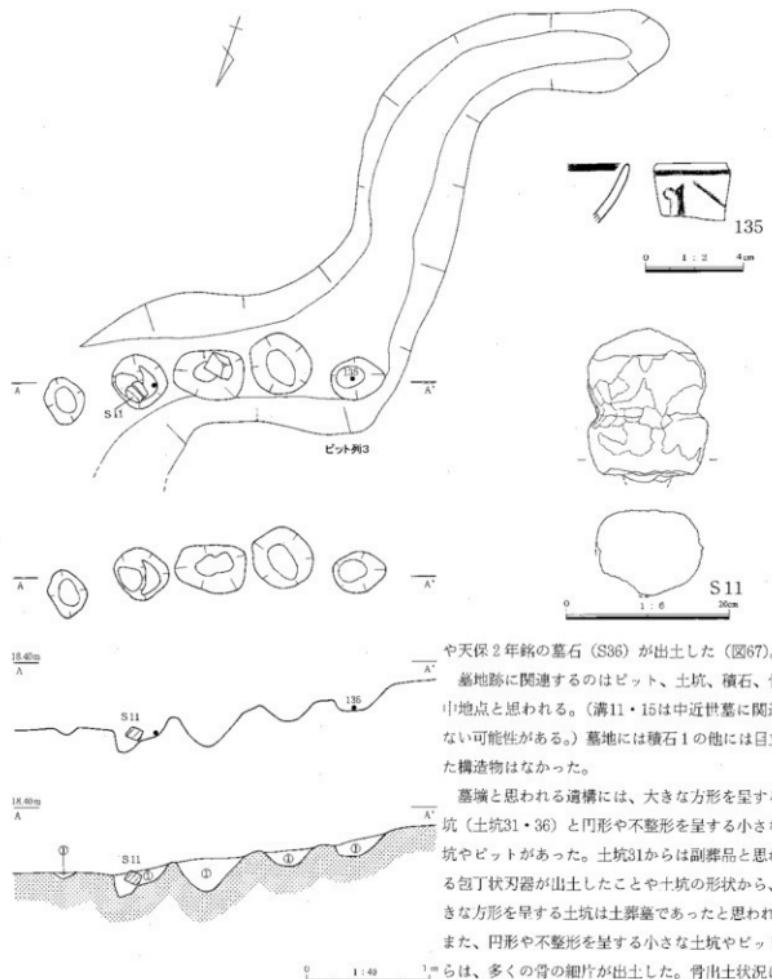


図50 ピット列3および出土遺物

あった。体を構成する一揃えの骨が確認できた土坑ではなく、多くの場合部位の特定すら困難であった。またどの土坑からも、炭化物や施土は確認できなかった。円形や不整形を呈する小さな土坑やピットは、「捨て墓」的な火葬墓であったと思われる。

骨集中地點は、遺構外で火葬骨の細片がまとまって出土した箇所であり、A～Lの12箇所を確認した。小さな土坑内の骨が流れ出たものと考えられる。

中近世の墓地跡では、小さな土坑に火葬骨を投げ捨てたかのような埋葬方法と、大きな土坑に、ある場合は副

や天保2年銘の墓石（S36）が出土した（図67）。墓地跡に関連するのはピット、土坑、積石、骨集中地點と思われる。（溝11・15は中近世墓に関連しない可能性がある。）墓地には積石1の他には目立った構造物はなかった。

墓壙と思われる構造には、大きな方形を呈する土坑（土坑31・36）と円形や不整形を呈する小さな土坑やピットがあった。土坑31からは副葬品と思われる包丁状刃器が出土したことや十坑の形状から、大きな方形を呈する土坑は土葬墓であったと思われる。また、円形や不整形を呈する小さな土坑やピットからは、多くの骨の細片が出土した。骨出土状況は、骨を丁寧に墓壙内に埋葬したというよりは、火葬骨の細片が土坑埋土中に散らばっていたという状況で

0 1:40

らは、多くの骨の細片が出土した。骨出土状況は、

骨を丁寧に墓壙内に埋葬したというよりは、火葬骨

の細片が土坑埋土中に散らばっていたという状況で

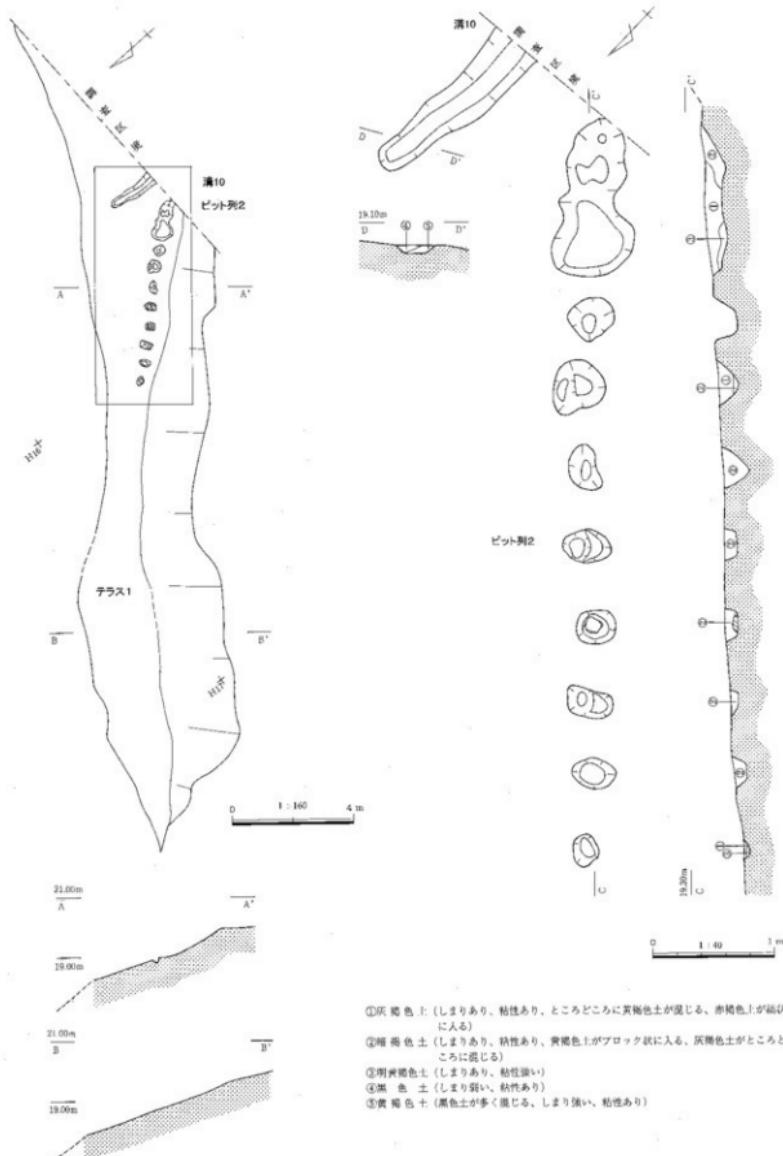
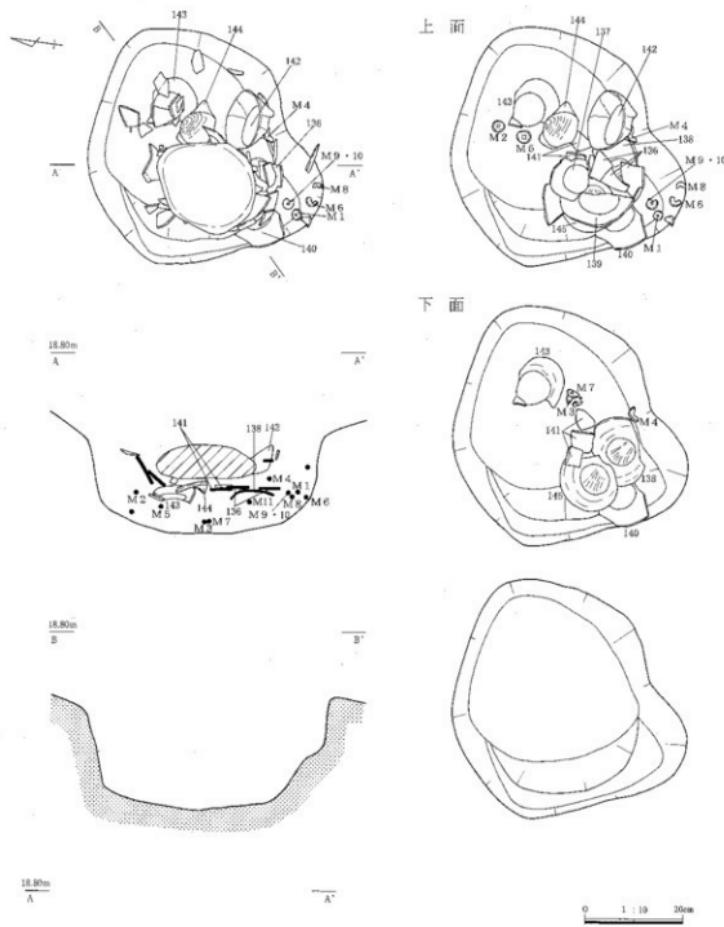


図51 ピット列2、溝10、テラス1



①褐色土（しまりややあり、粘性弱い、1~2mm大の白礫まばらに含む）

図52 土坑44

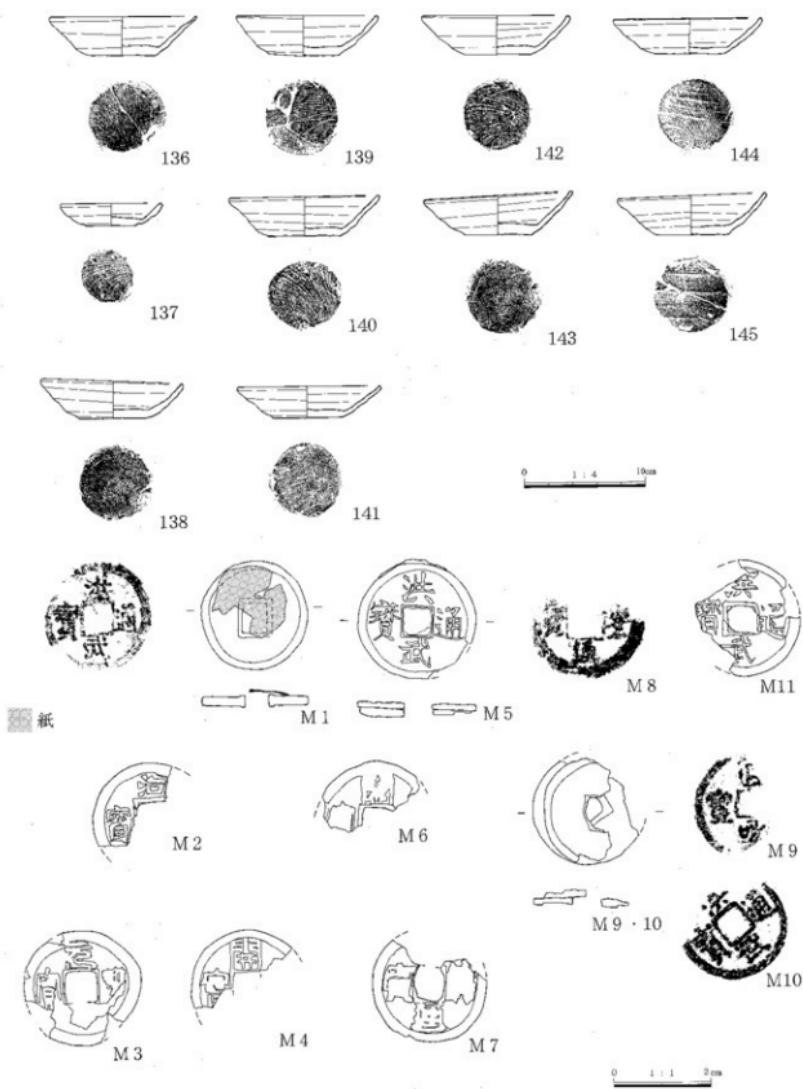


图53 土坑44出土遗物

葬品や五輪塔などを伴い丁寧に埋葬する方法の2パターンが想定でき、時期差による可能性が指摘できる。遺構埋土は黒色系埋土と褐色系埋土がある。墓地の大部分は黒色土に覆われていたが、平坦面の縁辺部では黒色土はみられなかった。褐色系埋土の遺構は平坦面の縁辺部で多く存在していたので、埋土の違いは時期差によるものではなく堆積した包含層の違いと思われる。墓地がどれほど期間機能していたのかは、遺物がほとんど出土しなかったので推定できない。墓地跡から転落したと思われる墓石から、少なくとも天保2年には墓地として機能していたことが伺えるのみである。集積1で検出した五輪塔をはじめ、遺構外出土五輪塔や、丘陵麓で出土した、墓地から転落したと思われる五輪塔から時期をさらに推定するのが今後の課題である。墓地は丘陵西麓に存在した土坑44の地鎮の対象であった可能性がある。

(伊藤)

#### 積石1 (図55~58、図版25、46—2・3)

墓地の南中央やや東よりに存在した、2段の積石であり、東・南・西側にはコの字形の溝（幅0.12~0.62m、長さ0.44m、深さ約4cm）が巡っていた。1段目には不整形の石が置かれ、2段目には火輪と地輪が置かれていた。積石1段目は置き方から2つの単位が識別できる。南側の4つの石からなる1列の石列と、北側の、中心にスペースを残した方形の囲いである。中心のスペースには空風輪が落ち込んでいた。2段目に置かれた火輪と地輪から1段目を基壇として、南側を正面に五輪塔が組まれていた可能性がある。また、1段目の石の下および石の隙間からは火葬骨の細片がまとまって出土した。積石を巡る溝では掘り替えを確認したが、古い時期の溝埋土に南側の石列が載っていた。積石の下から土坑は検出できなかった。

積石の形状と溝の掘り替えから、積石1に3段階の工程を想定できる。

(1) 散乱していた火葬骨を集めた後、もしくは火葬骨が存在した場所に、中心にスペースを残した方形の石開いを作り、南・東・西側を巡るコの字形の溝を掘る。

(2) 溝を埋め、方形囲い南辺に石列を付け加える。その後南・東・西側を巡るコの字形の溝を堀り直す。

(3) 方形の開いを基壇として五輪塔を組む。

積石1は埋葬施設というよりも、骨集中地点のように骨がまとまって出土していた箇所に二次的に石を積み上げ、火葬墓地を供養したものと思われる。S12は空風輪、S14は火輪、S13・15は地輪であり、S15には正方形の抉りがある。

(伊藤)

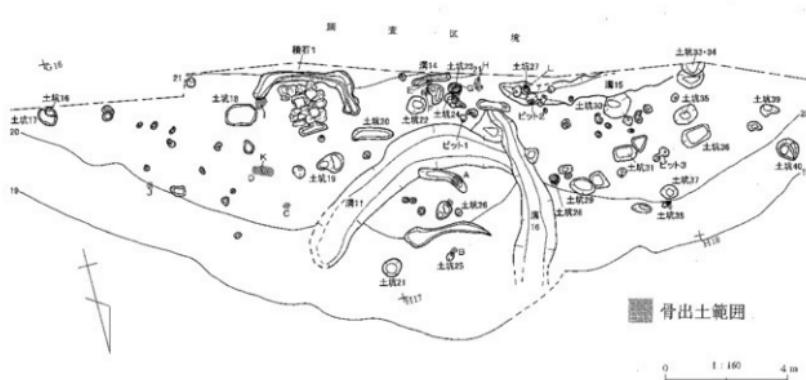


図54 墓地

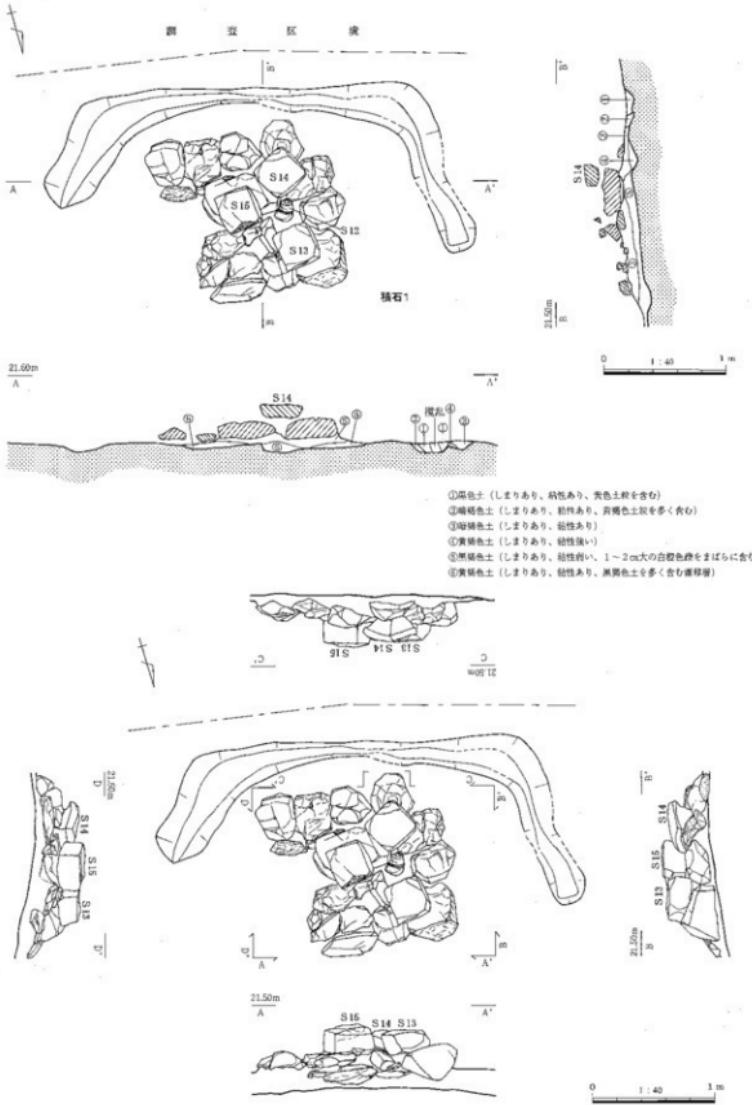


図55 積石 1 その 1

### 土坑16・17(図59)

墓地東端で検出した2基の土坑である。黒色系埋土の土坑16が褐色系埋土の土坑17を切っていた。土坑16は長径0.43m、短径0.3m、深さ0.14mであった。土坑17は長径1.4m、短径0.5m(推定)深さ0.24mであった。(伊藤)

### 土坑18(図50)

積石1の北東で検出した。楕円形で、火葬骨片が少量出土したことから、火葬墓跡と思われる。長径約1m、短径0.68m、深さ0.18mであった。(伊藤)

### 土坑19(図59、図版26-2~5)

積石1の北で検出した。テラスのある不整形の土坑で、長径0.89m、短径0.34m、深さ0.1~0.29mであった。土坑底から火葬骨がまとまって、重層的に出土した。火葬墓跡と思われる。墓地内土坑中で最も多くの骨が出土した遺構である。炭化物や焼土は存在しなかった。

(伊藤)

### 土坑22(図59)

墓地のほぼ中央で検出した。径0.6~0.66m、深さ0.2mであった。(伊藤)

(伊藤)

### 土坑20(図59)

積石1の北西で検出した。不整形で、長径1.3m、短径0.40m、深さ0.18mであった。(伊藤)

### ピット1(図59)

墓地のほぼ中央で検出した。径0.21~0.26mの円形で、深さ0.29mであった。(伊藤)

### 土坑23・24(図59)

墓地のほぼ中央で検出した。土坑23は円形で長径0.4m、短径0.54m、深さ0.16mであり、土坑24は不整形で長径0.78m、短径0.12m、深さ0.24mであった。2基の土坑埋土で火葬骨の細片が多く出土したので、土坑23・24は火葬墓跡と思われる。骨集中地点Gは土坑23・24検出面より上で検出したが、遺構の範囲と集中地点の範囲はほぼ重なる。骨集中地点Gは土坑23・24から流れた可能性が高い。(伊藤)

### 土坑31(図60、図版27-3・4、4-1)

墓地西側で検出した方形墓壙と思われる。長辺0.81m、短辺0.53m、深さ0.45mを確認

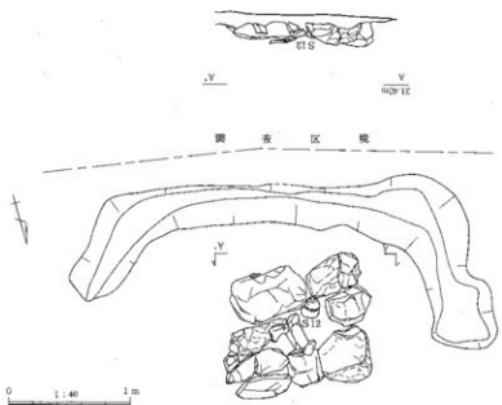


図56 積石1その2

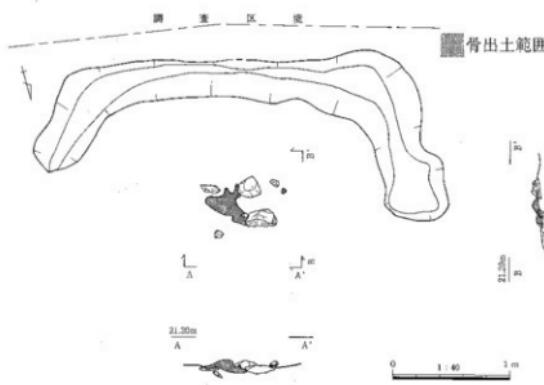


図57 積石1その3

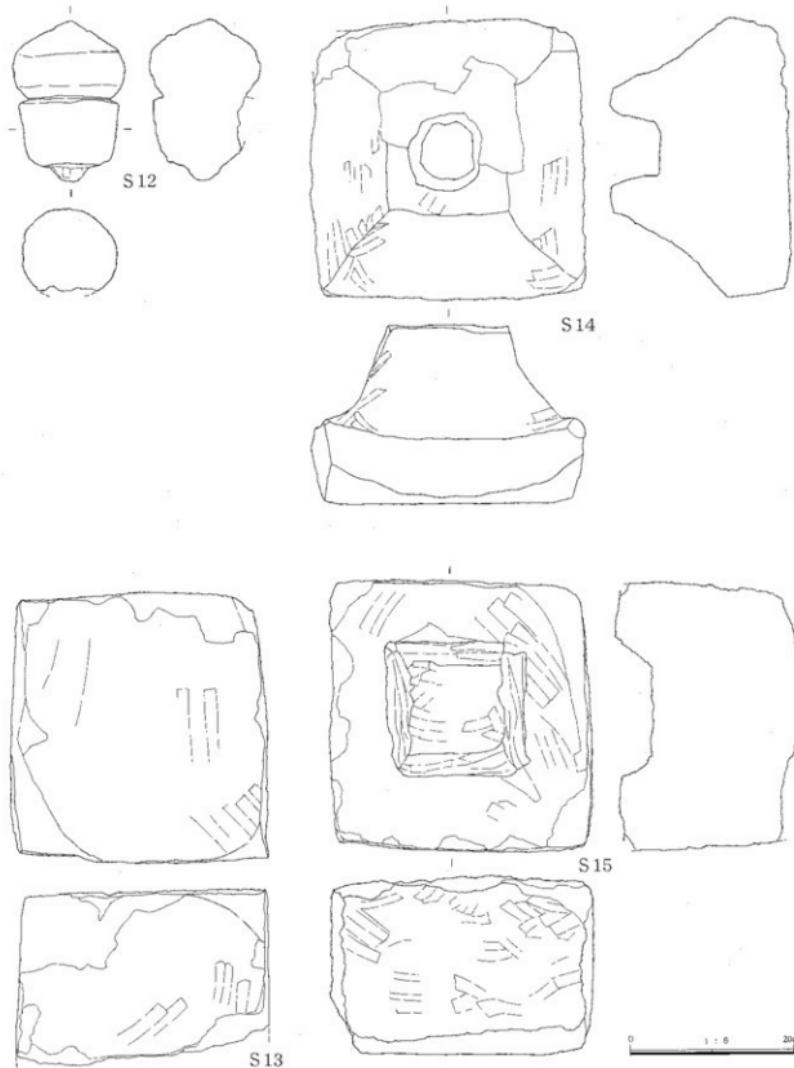


図58 積石1出土遺物

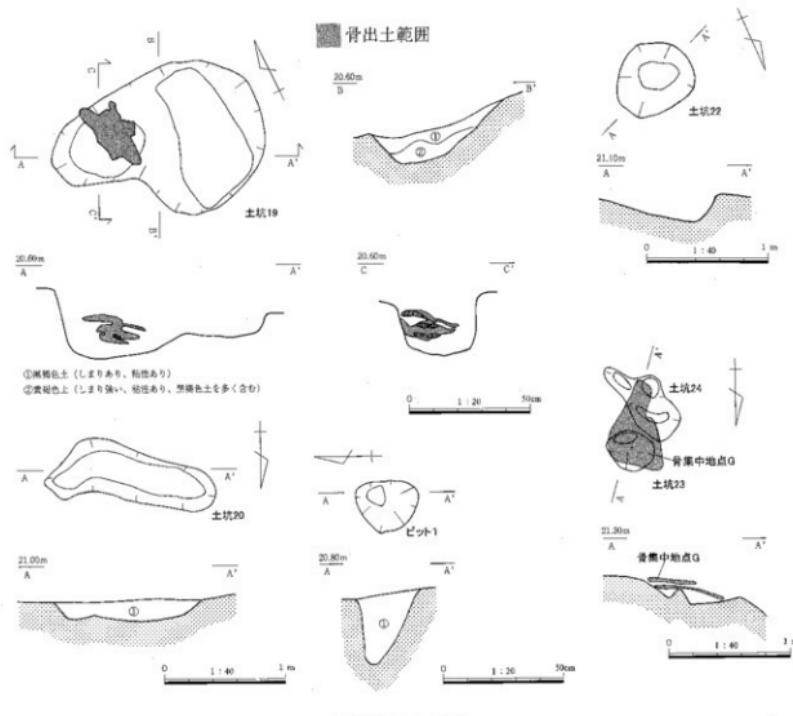
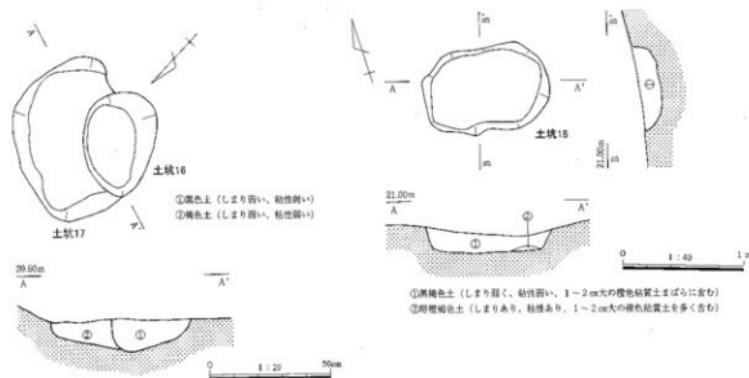


図59 土坑16~20・22~24、ピット1

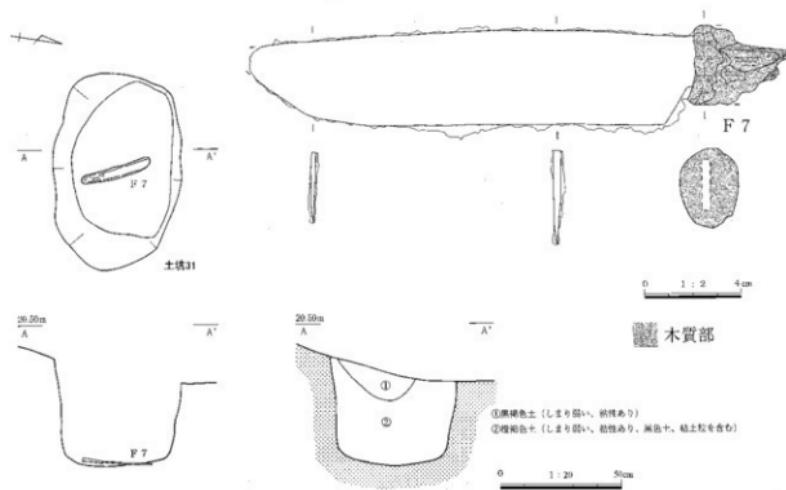


図60 土坑31および出土遺物

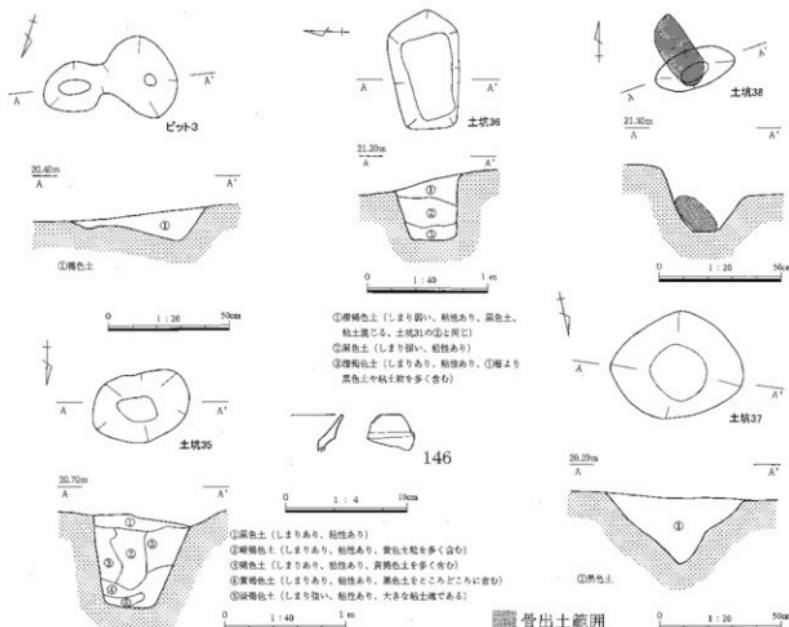


図61 土坑35～38、ピット3および出土遺物

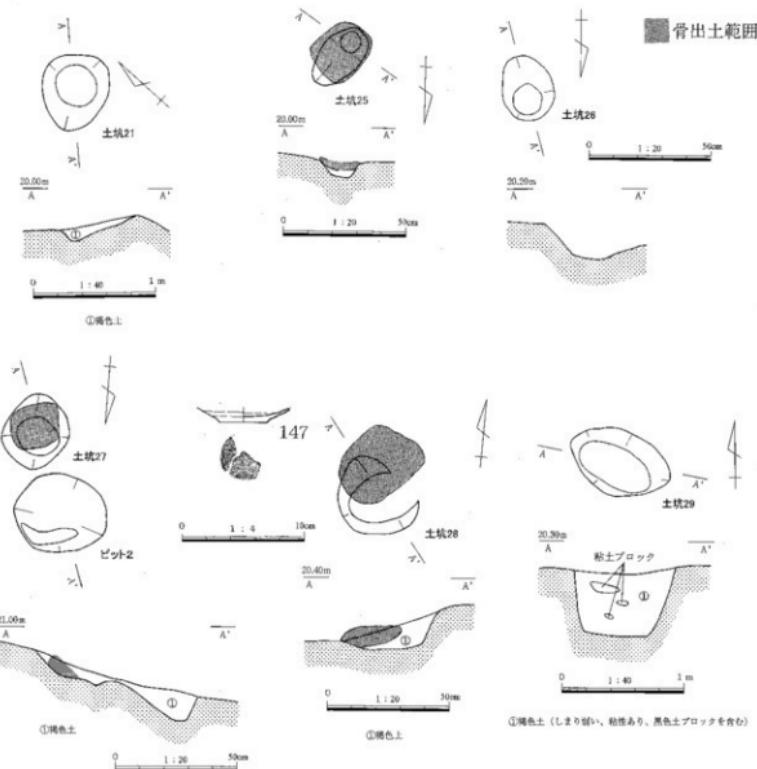


図62 土坑21・25~29、ピット2および出土遺物

した。墓壇ほぼ中央床直上で副葬品と思われる包丁状刀器（F7）が出土した。骨が出土していないことから、土葬墓の可能性を指摘できる。上坑の形状から屈葬の可能性が高いと思われる。褐色系埋土であり、形状、大きさ、軸方向、埋土は土坑36に似る。

(伊藤)

#### ピット3（図61）

墓地北西で検出した、不整形のピットである。長径0.55m、短径0.21m、深さ0.14mであった。

(伊藤)

#### 土坑35（図61、図版27—7）

墓地西側、上坑36北側で検出した円形土坑である。長径0.76m、短径0.56m、深さ0.76mであった。土師器片が出土した。土坑35南側には土師器片数点が出土した溝16が存在していたが、溝16から流れ込んだ可能性がある。

(伊藤)

#### 土坑36（図61、図版27—5）

土坑31の東側で検出した、方形土坑である。土坑31と形状、大きさ、埋土、長軸方向が似ることから、土坑36と同様、土葬墓跡と考えられる。長辺約1m、短辺0.4m、深さ0.54mであった。

(伊藤)

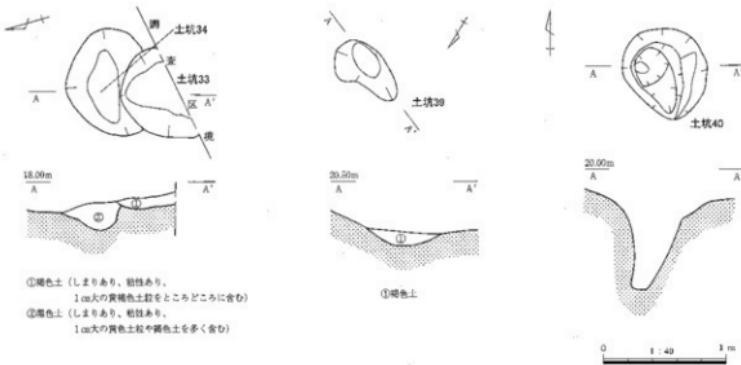


図63 土坑33・34・39・40

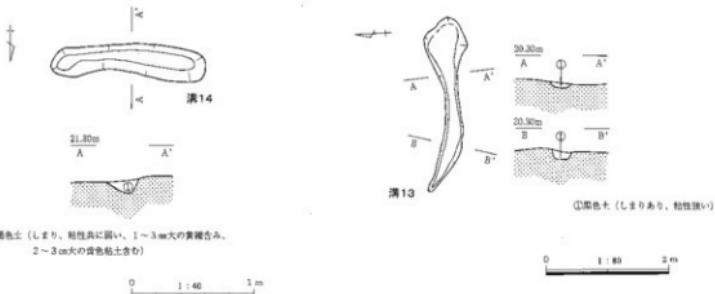


図64 溝13・14

#### 土坑37(図61)

墓地北西で、検査した円形土坑である。径0.44~0.55m、深さ0.27mであった。

(伊藤)

#### 土坑38(図61、図版27-6)

墓地北西で、検出した稍円形土坑である。長径0.35m、短径0.16m、深さ0.27mであった。土坑底から土坑外にかけて火葬骨の細片が出土したので、火葬墓跡と思われる。

(伊藤)

#### 土坑21(図62)

墓地北側で検出した円形土坑である。径0.64~0.54m、深さ0.2mであった。

(伊藤)

#### 土坑27・ピット2(図62)

墓地北側中央で検出した。土層では確認できなかったが、遺物から、溝15埋土から掘り込まれていたと思われる。土坑27は径0.27~0.31m、深さ0.13mの円形土坑であり、ピット2は径0.32~0.38m、深さ0.16mの円形ピットである。土坑27から火葬骨の細片が、ピット2からは回転系切り痕の残るかわらけ底部が出土した。火葬墓跡と思われる。土坑27、ピット2はほぼ同じ大きさだったが、骨が出土した遺構は土坑と呼称した。

(伊藤)

#### 土坑25(図62、図版27-8)

墓地北側のほぼ中央で検出した方形土坑である。長辺0.23m、短辺0.14m、深さ約7cmを検出した。火葬骨の細片が出土したので、火葬墓跡と思われる。

(伊藤)

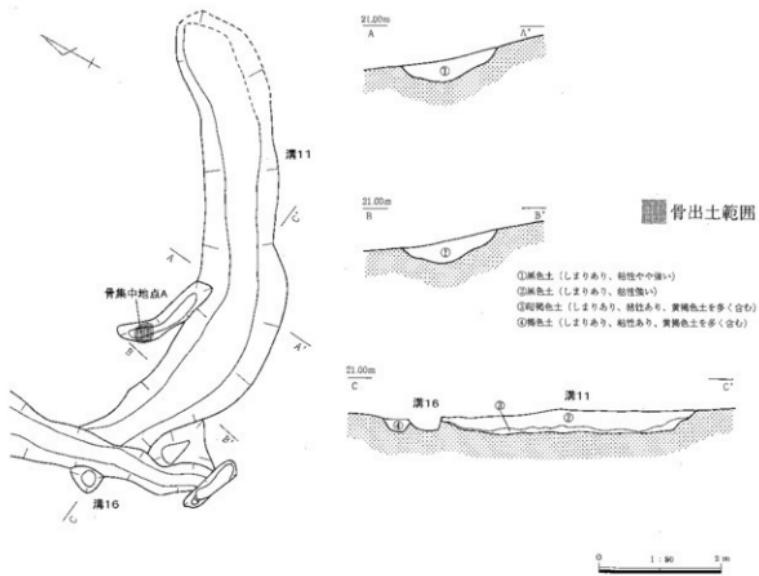


図65 溝11  
土坑26(図62)

墓地中央のやや北で検出した楕円形土坑である。長径0.27m、短径0.22m、深さ0.14mを確認した。(伊藤)

#### 土坑28(図62)

墓地中央のやや西で検出した円形土坑で、土坑北西の上場が不明瞭であった。径約0.3~0.34m、深さ0.14mを確認した。土坑内外に火葬骨の細片が散らばっていたので、火葬墓跡と思われる。

(伊藤)

#### 土坑29(図62)

墓地中央のやや西で検出した楕円形土坑である。長径0.88m、短径0.54m、深さ0.5mを確認した。(伊藤)

#### 土坑33・34(図63)

墓地西側で検出した。土坑33が土坑34を切っており、土坑33は調査区外へ続いている。土坑33は径0.82m(推定)、深さ約8cmの円形土坑と思われ、土坑34は長径0.88m、短径0.68m(推定)の楕円形土坑と考えられる。

(伊藤)

#### 土坑39(図63)

墓地西端で検出した不整形土坑である。長径0.62m、短径0.2m、深さ0.14mを確認した。

(伊藤)

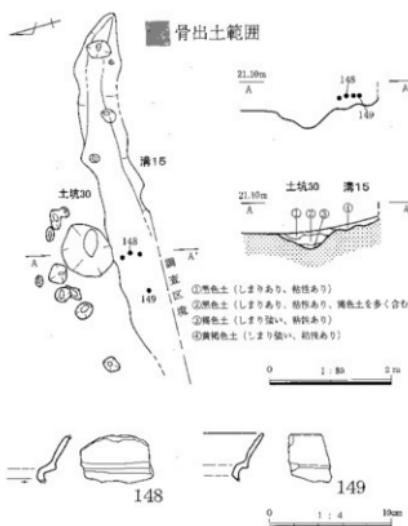


図66 土坑30、溝15

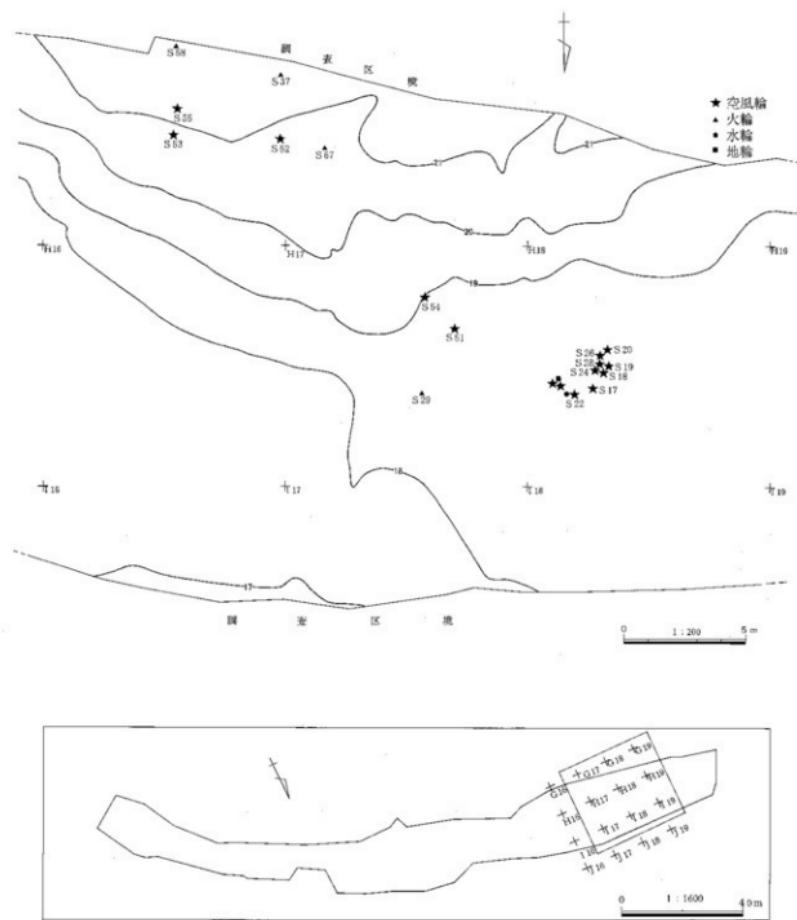


図67 遺構外出土五輪塔分布

**土坑40（図63）**

墓地西端で検出した円形土坑である。径0.7~0.76m、深さ0.78mを検出した。火葬骨の細片がまとまって出土したので、火葬墓跡と思われる。  
（伊藤）

**溝14（図64）**

墓地南側のはば中央で検出した。長さ1.3m、幅0.2~0.28m、深さ0.1mを確認した。  
（伊藤）

**溝13（図64）**

墓地北側で検出した。長さ2.8m、幅0.2~0.72m、深さ0.12mであった。溝16と併走することから、中近世の墓地に関連しない可能性がある。  
（伊藤）

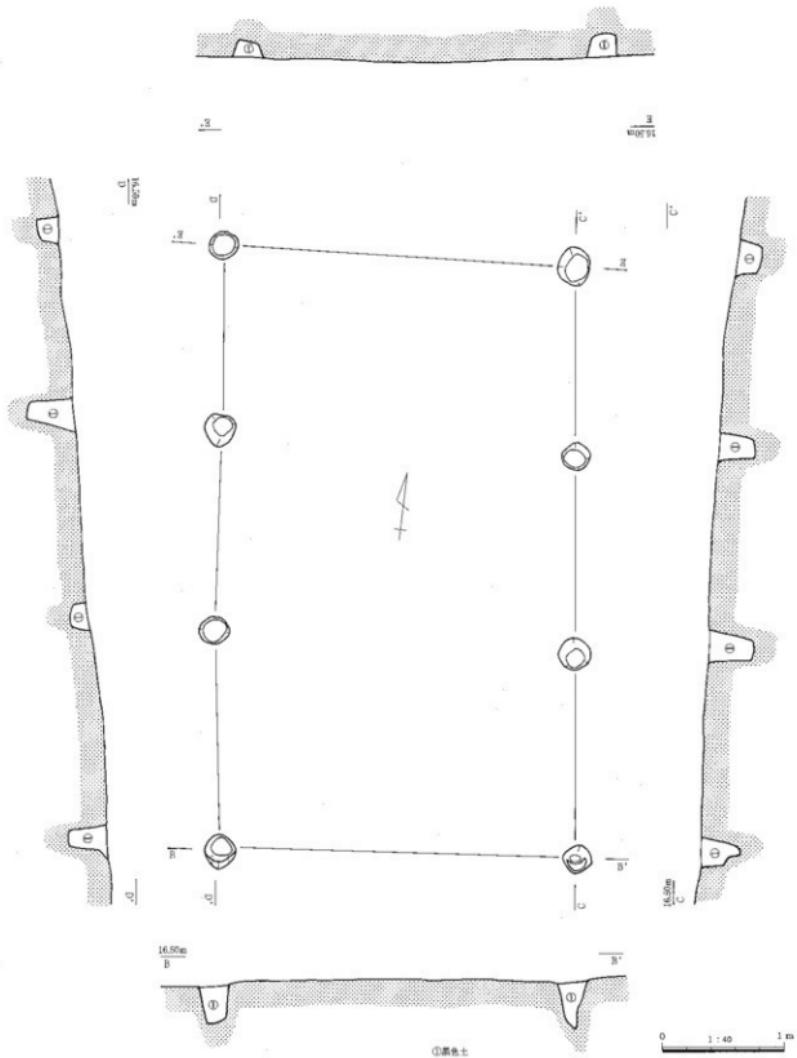


図68 堀立柱建物1

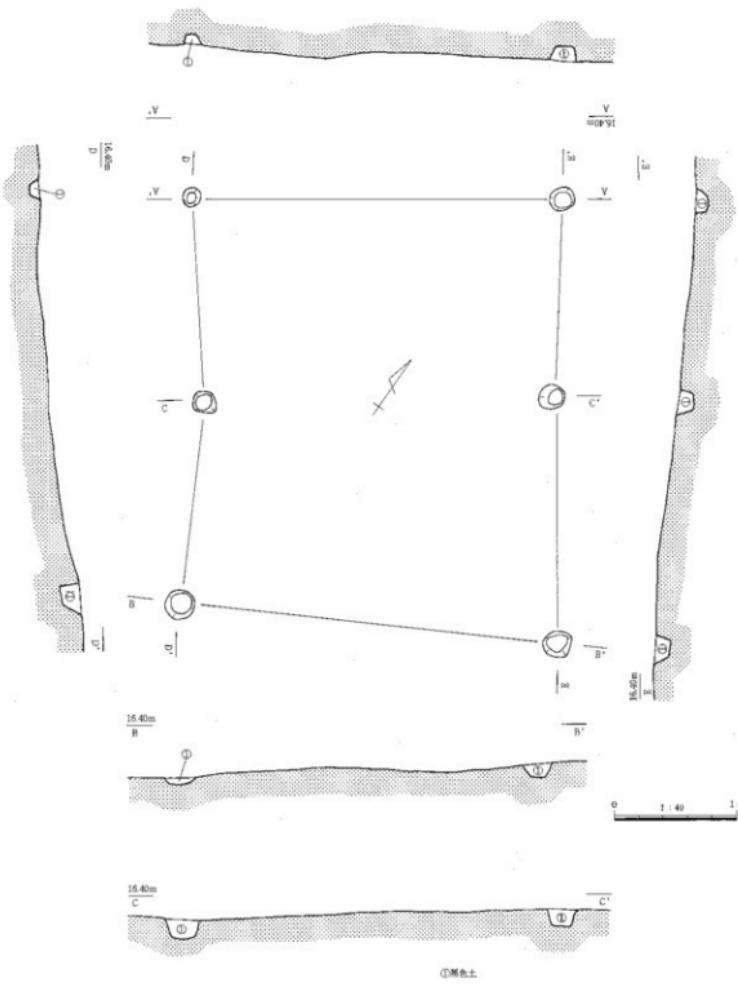


図69 堀立柱建物2

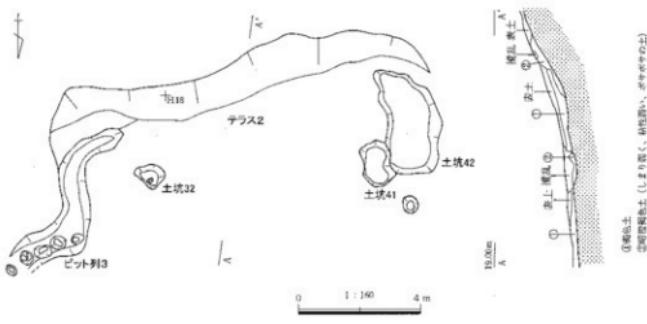


図70 テラス2

#### 溝11(図65、図版28-1・2)

墓地中央で検出した東西方向に長い弧状の溝であった。溝16に切られており、周辺には不整形の土坑や小さな溝が数基存在していたが、溝11との関連は不明である。溝11は長さ約8m、幅0.8~1.5m、深さ0.36mであった。形状と大きさから中近世の墓地には関連しない可能性が高い。溝11の北から骨が集中して出土したが、溝11との関連は不明である。  
(伊藤)

#### 土坑30・溝15(図66)

溝15は墓地南西で検出した東西方向の溝であり、調査区外へ続いていた。長さ10m、幅0.4~0.76m、深さ0.12mを確認した。土坑30は溝15北側で検出した円形上坑で、溝15を切っていた。径0.8~0.92m、深さ0.32mを検出した。溝15からは上層器皿が数点出土しており、溝周辺の包含層からは完形の須恵器杯身が出土したことから、溝15は中近世ではなく、古墳時代の遺構である可能性が高い。148・149は上層器の口縁部である。  
(伊藤)

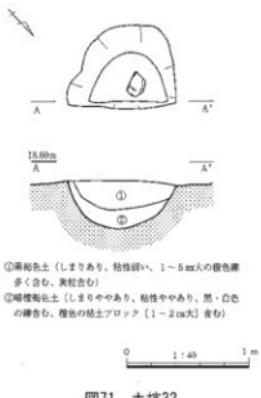


図71 土坑32

#### 3. 時期不明の遺構・遺物

##### 掘立柱建物1(図68、図版29-1・2)

G10グリッドに位置する。ピット群2のちょうど北西端にある。ピットが直線上に並び、埋土が共通することから掘立柱建物と考えた。1間×3間の構造で、長軸がほぼ南北方向に沿っている。ピット同士の距離は南北方向で約1.7m、東西方向で約2.9mである。ピットの深さは0.15~0.4mほどで幅がある。  
(下江)

##### 掘立柱建物2(図69、図版29-3・4)

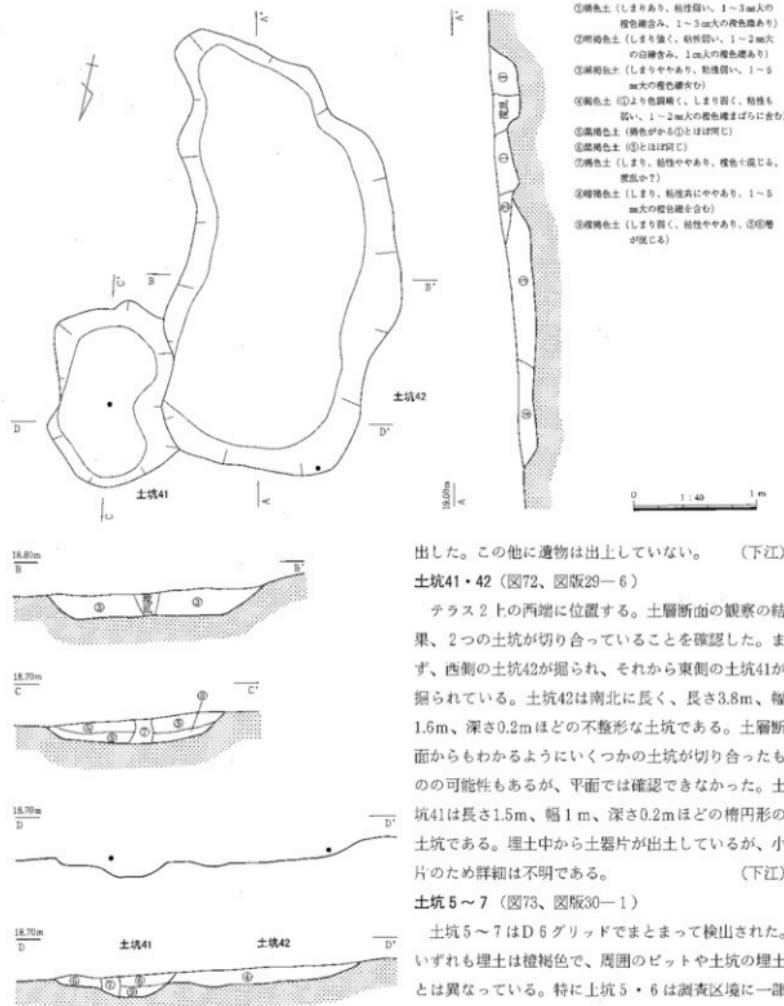
G10・11グリッドに位置する。掘立柱建物1のすぐ西側で検出した。ピットが直線上に並び、埋土が黒色土で共通することから掘立柱建物と考えた。1間×2間の構造で、長軸は北西→南東に沿っている。ピット同士の距離は長軸方向で1.7~2m、短軸方向で2.9~3.2mを測る。西側真ん中のピットはやや東側へ寄っている。ピットの深さは0.15mほどでは同じである。  
(下江)

##### テラス2(図70、図版29-5)

H17・18グリッドに位置する。丘陵上の草地の斜面を削りだして平坦面としている。東西13m、南北6.4mを測る。平坦面上では土坑やピット列が見られる。遺物は出土していない。  
(下江)

##### 土坑32(図71)

テラス2上の東側に位置する。径約1m、深さ0.4mほどの楕円形の土坑である。②層上面で20cm大の石を検



出した。この他に遺物は出土していない。（下江）

#### 土坑41・42（図72、図版29-6）

テラス2上の西端に位置する。土層断面の観察の結果、2つの土坑が切り合っていることを確認した。まず、西側の土坑42が掘られ、それから東側の土坑41が掘られている。土坑42は南北に長く、長さ3.8m、幅1.6m、深さ0.2mほどの不整形な土坑である。土層断面からもわかるようにいくつかの土坑が切り合ったものの可能性もあるが、平面では確認できなかった。土坑41は長さ1.5m、幅1m、深さ0.2mほどの楕円形の土坑である。埋土中から土器片が出土しているが、小片のため詳細は不明である。（下江）

#### 土坑5~7（図73、図版30-1）

土坑5~7はD6グリッドでまとめて検出された。いずれも埋土は橙褐色で、周囲のピットや土坑の埋土とは異なっている。特に上坑5・6は調査区境に一部を切られているが、深さは0.8mほどあり深い。土坑7は長さ1.2m、幅0.5m、深さ0.6mを測る開丸長方形

（下江）

の土坑である。いずれからも遺物は出土していない。

#### 土坑8~10（図73）

土坑8~10はE5・6グリッドで検出された。埋土は黒褐色上もしくは褐色土で周囲のピットと類似している。いずれも0.8~1m大の不整形な土坑で深さもそれほど深くはない。（下江）

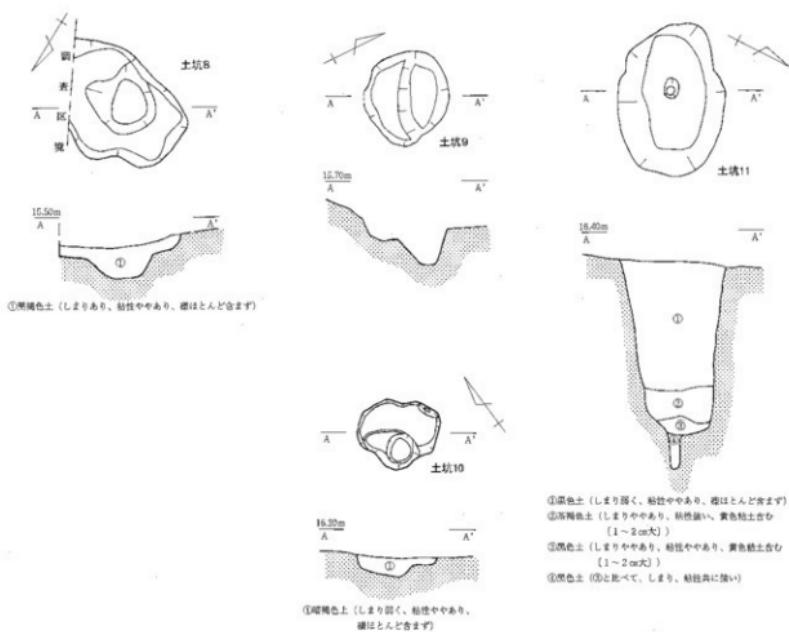
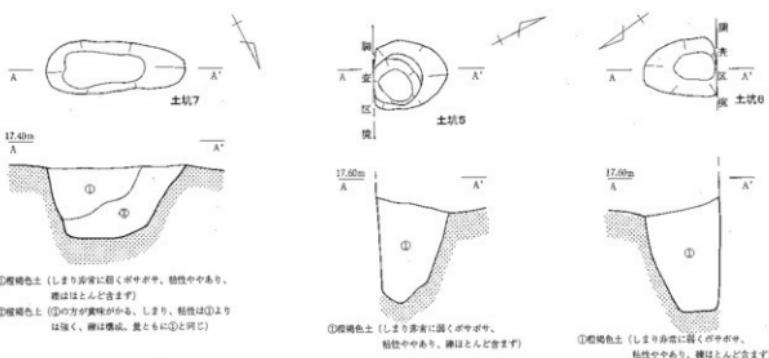


図73 土坑5~11

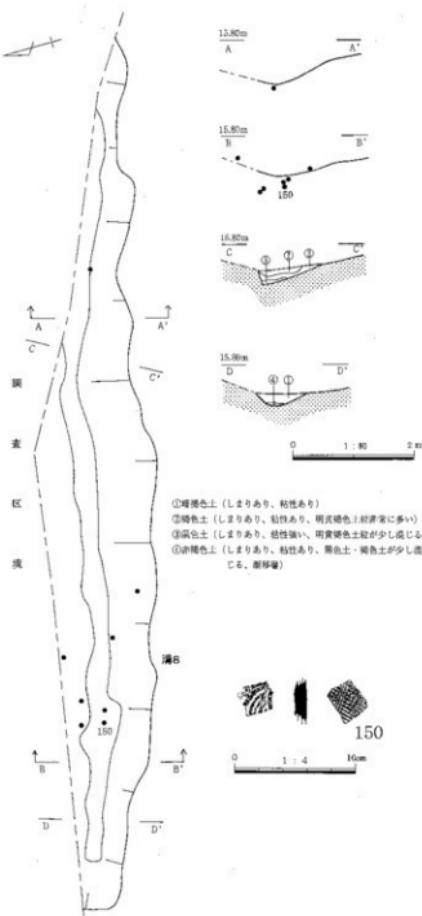


図74 溝8および出土遺物

幅2m、深さ0.2mほどを測る。埋土中から土器片が多く出土しているが、大半は小片なので詳細はわからない。その中でも須恵器片(150)が出土している。しかし、正確な時期は不明である。

溝9 (図75、図版30-5・6)

H11グリッドに位置し、溝8の南側で東西に伸びる溝を検出した。長さ14.4m、幅0.4m、深さ0.3mを測る。埋土中からは何も出土していない。

(下江)

(注1) 近藤義郎1959「共同体と単位集団」『考古学研究』第6卷第1号 考古学研究会

中山俊紀・行田裕美1983「押入西跡跡」『津市埋蔵文化財発掘調査報告』第14集 津山市教育委員会

(注2) 大橋雅也1992「9 器台形土器」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社

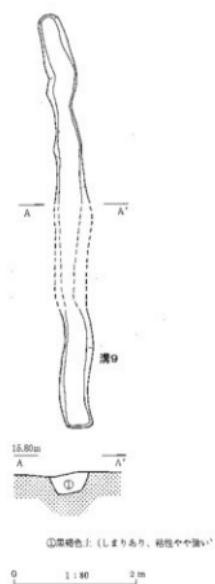


図75 溝9

土坑11 (図73、図版30-2)

G 9グリッド杭の南西に位置する。いわゆる落とし穴状遺構である。長さ1.3m、幅0.9m、深さ1.4mを測り、さらに土坑底面中央部では径0.1m、深さ0.3mほどの逆茂木跡の小ピットを検出した。周囲に同じような遺構は存在しない。

(下江)

溝8 (図74、図版30-3・4)

H10・11グリッドに位置し、東西方向に長い溝である。溝の大半は調査区境に切られており全容は明らかでない。現存で長さ14.4m、

(下江)

(註3) 吉田学2000「山陰東部における古墳時代の土器棺、土器棺墓の様相」『妻木晩田遺跡発掘調査報告』IV

大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団 大山町教育委員会

角南聰一郎2002「みせかけの上器棺—土器蓋土坑墓の研究—」『元興寺文化財研究所研究報告2001』(財)元興寺文化財研究所 元興寺文化財研究所民俗文化財保存会

(註4) 類例に鳥取県溝口町代遺跡不明掘立柱群がある。長田康平編1993『代遺跡』溝口町教育委員会

(註5) 類例に広島県吉川元春館跡SK161・162、滋賀県彦根城・表御殿SL06・07、SL16・17、SL18・19、東京都龍野藩蘿坂家上屋敷がある。大田区立郷上博物館編1997『トイレの考古学』 東京美術

## 第5節 第3遺構面の遺構・遺物

### 1. 弥生時代の遺構・遺物

ピット4 (図76、図版31-1・2、41-2)

H18グリッド北西隅に位置する。径0.3~0.4m、深さ0.55mの円形のピットである。ピット内からは土器(151)や鉄器(F8)が出土している。深さなどから柱穴のように思われるが、これに対応するようなピットを付近で検出できなかった。

土器はいずれも弥生時代後期末段階のものである。F8は板状の鉄器で、明確な刃部は確認できていないが、刀子やヤリガンナの一部と思われる。  
(下江)

### 2. 時期不明の遺構・遺物

溝17・18 (図77、図版31-3・4)

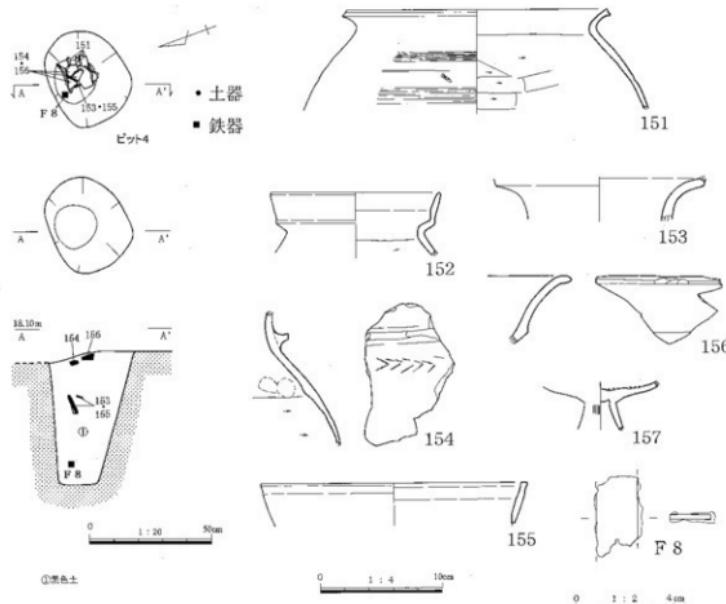


図76 ピット4および出土遺物

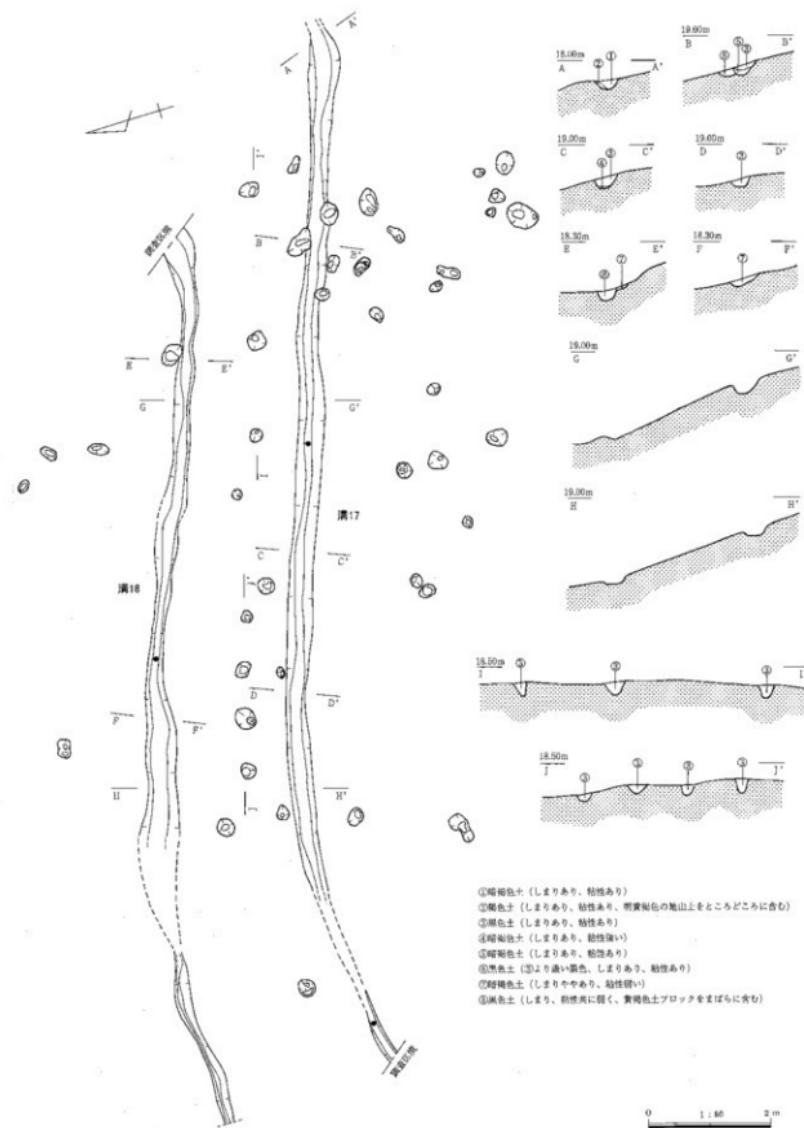
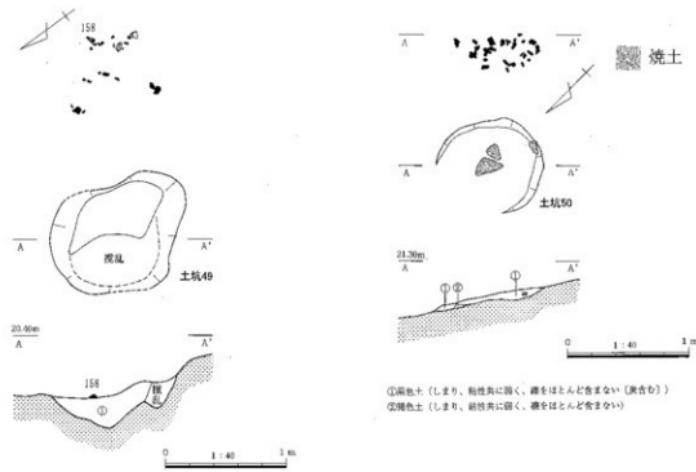


図77 溝17・18



①赤褐色土 (しまりあり、粘性共に非常に弱く、礫はほとんど含まない。  
2~3cm以上の量を多く含む)

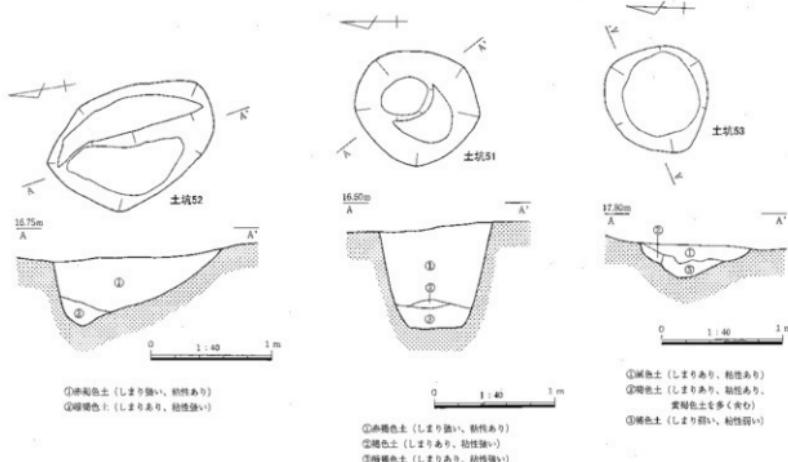
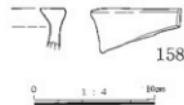


図78 土坑49~53および出土物

C3・4グリッドで検出した。東西に長く伸びる2条の溝ではほぼ平行に走る。南側を溝17、北側を溝18と呼ぶ。溝17は長さ16.4m、幅0.4m、深さ0.25mを測る。溝17の西端はやや南側へ湾曲しながら調査区外へとさらに伸びている。溝18は、長さ14.6m、幅0.4m、深さ0.2mを測り、溝17とはほぼ同じ形態である。この溝も西端はやや南側へ湾曲している。埋土中から遺物はほとんど出土していない。

また、溝の周辺では多くのビットが検出されている。特に溝17・18の間のビットは直線上に並び、櫛列があったのではないかと考えられる。これらの溝と櫛列が関連するとすると何らかの開いや防護施設があった可能性がある。

(下江)

#### 土坑49(図78、図版31—5)

調査区の最も東側のB2グリッドの斜面に位置する。長径1.2m、短径1m、深さ0.3mの不整形な土坑である。埋土内から炭が多く出土している。焼土は確認されておらず、土坑底面や周辺でも焼けた痕跡はない。遺物としては中・近世の土器(158)が出土地している。しかし、埋土内は搅乱が激しく、この土坑に伴うものかどうかは不明である。

(下江)

#### 土坑50(図78、図版31—6)

土坑49と同じく調査区東のB3グリッドの斜面地で検出した。径約0.8m、深さ0.1mほどの円形の土坑である。この土坑の底面付近から炭が検出された。また、炭を除去した後に橙褐色の硬化した焼土面を土坑底面で検出した。何かこの土坑で焼いた跡と考えられる。

(下江)

#### 土坑51・52(図78)

いずれもF9グリッドに位置している。土坑51は径1m、深さ0.9mを測る正円形の土坑である。土坑52は長さ1.4m、幅1.3m、深さ0.5mほどの不整形な土坑である。いずれからも遺物は出土していない。

(下江)

#### 土坑53(図78)

H18グリッドに位置し、径0.9m、深さ0.25mの正円形の土坑である。遺物など何も出土していない。

(下江)

### 第6節 包含層出土遺物

#### 表土層出土遺物(図79~83、図版42~1)

159~161は弥生土器、162は須恵器甕、163~169はかわらけである。170~172は肥前系陶器である。173は備前焼の15世紀の壘鉢か。174は青磁で、玉縁状の口縁である。175は七郎質で手づくねの灯明皿と思われる。176は中國窯の天日茶碗と思われる。S17~35は五輪塔である。いずれも墓地周辺で出土しており、特に丘陵裾に集中しており、丘陵上から転がり落ちたものと考えられる(図67)。S17~21は断面扁平の空風輪、S22~28は断面円形の空風輪である。いずれも大きさは大型のものから、小型のものまでバリエーションがある。S29は火輪、S30~32は水輪、S33~35は地輪である。S35は上・下面の縁辺周辺が平滑に磨かれたようになっており、やや反ったたような形になっている。中央部には円形のやや盛んだ箇所もあり、最初に火輪として製作しようとしたものを途中でやめて地輪としたものではないかと考えられる。S36は墓石である。正面に「妙年信女」、側面に「卯八月十七日」「天保二年(西暦1831年)」の銘がある。

#### 褐色土出土遺物(図84、図版42~1)

遺物は少数である。177~179は弥生土器。180は須恵器壺片である。181はほうろく、182は呉器手形の碗と思われる。185は171と同一個体か。184は七輪の蓋の可能性があるが詳細は不明な遺物である。F10は鉄ではなく、鉛のような金属製品である。S38は石塔などの台座のようなものと考えられる。

#### 黒色土出土遺物(図85~89、図版42~2、43、44~1)

187~215は弥生土器である。弥生時代中期後葉~後期末までの土器が数多く出土している。216~223は須恵器である。217は須恵器甕で、ほぼ完形で出土した。出土位置は墓地のある丘陵頂部である。さらに南側の丘陵には占墳がある可能性もある。224~227はかわらけ、228はほうろくである。229・230もほうろくの可能性がある。231・232は擂鉢、233~238は肥前系の磁器、241・244は中世の龍泉窯系青磁碗と思われる。242は肥前系陶器で

ある。243は中国産の白磁碗と思われる。F 12は煙管である。墓地の副葬品であろうか。S 39~41は黒瑪瑙の石鏃、石核、S 42は玉鶴製の二次調整のある剥片である。S 42は地山直上で出土している。S 43の石材はチャートで、斜め方向の擦痕が見られる。S 46も小型の石器で擦痕が見られ、周囲を面取りしている。安山岩製の石器である。S 47は石の4面を敲き面として使用している敲石である。S 49~58は五輪塔である。S 49・50は断面扁平の空風輪、S 51~56は断面円形の空風輪である。全体的に小型のものが多い。S 57・58は火輪である。S 57は底面に磨いたような平滑面がある。これが火輪製作に見られる特徴であるならば、先述したS 35が火輪製作途中から地輪に変化したことを示す資料となりうる。

(下江・伊藤)

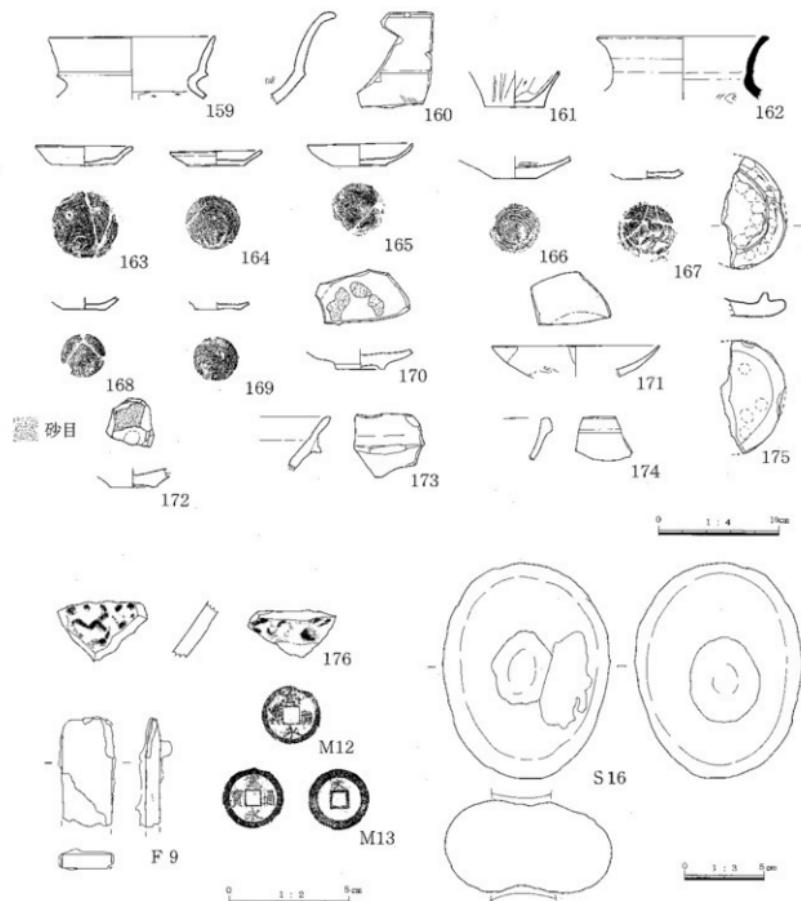


図79 表土層出土遺物その1

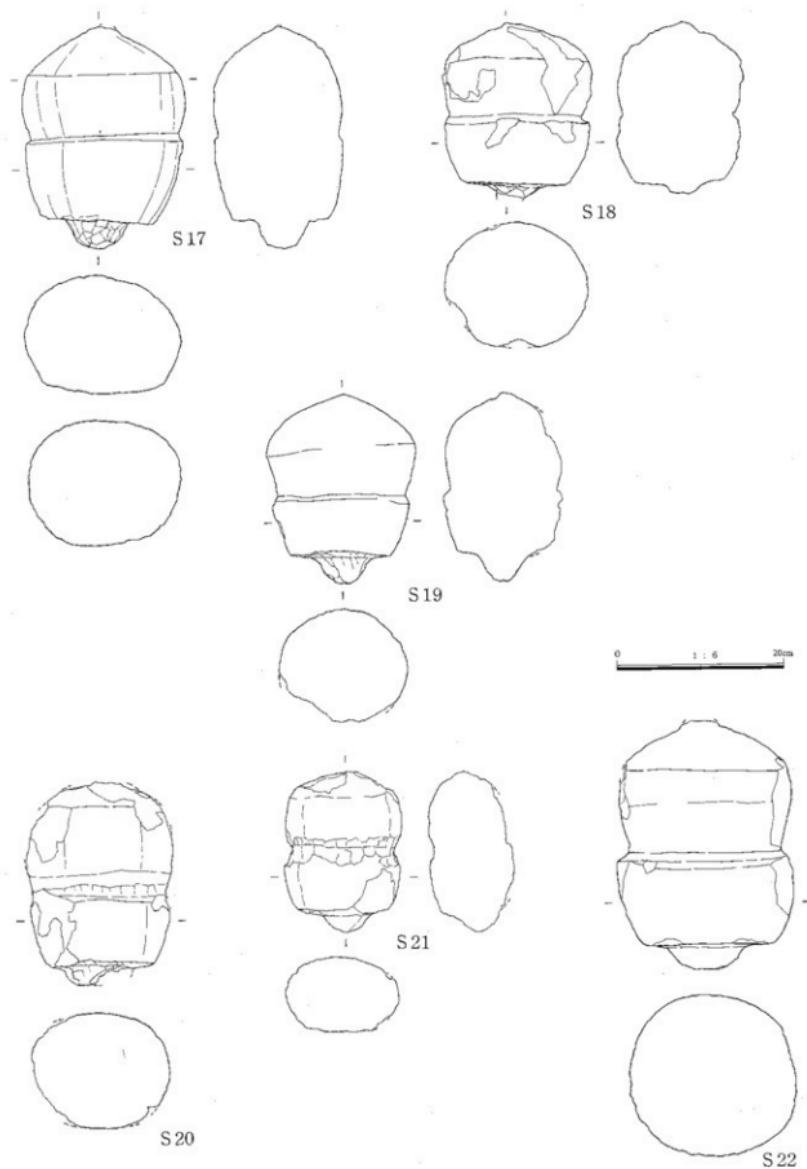


図80 表土層出土造物その2

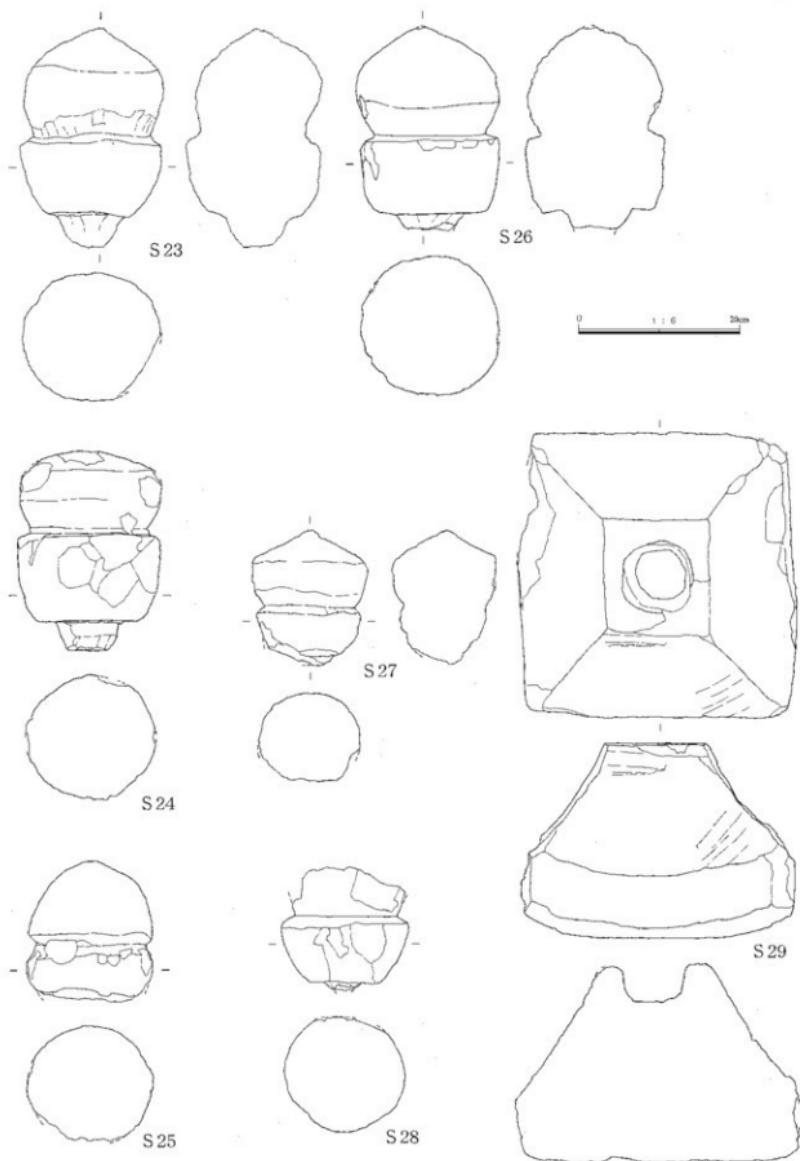


図81 表土層出土遺物その3

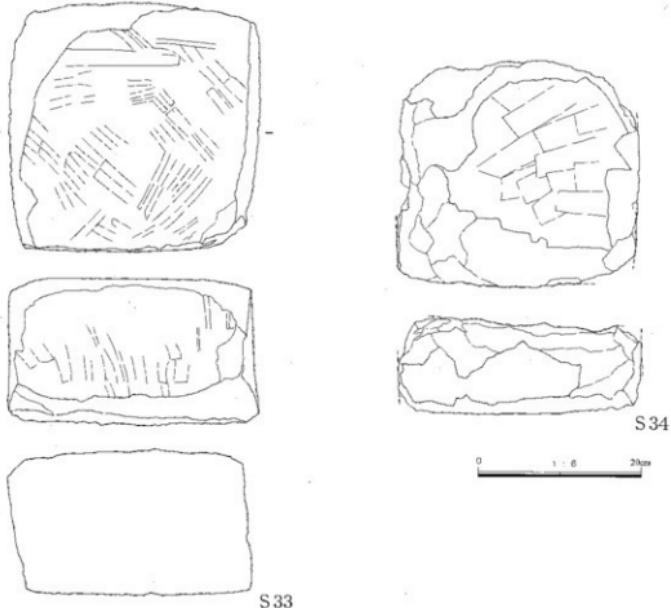
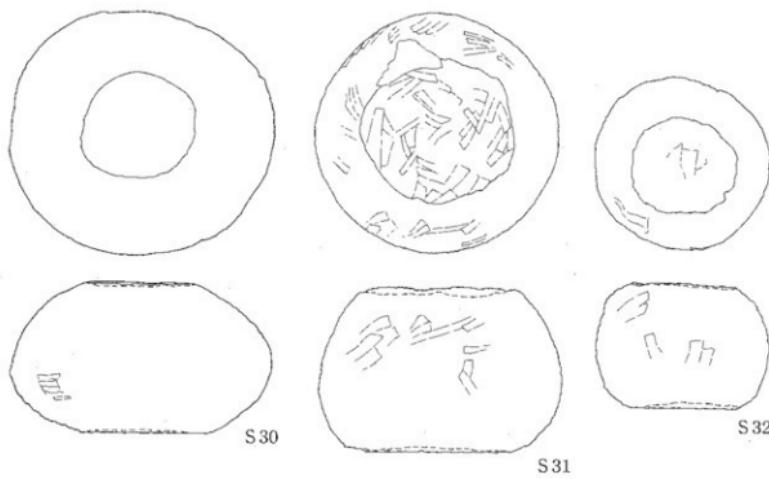
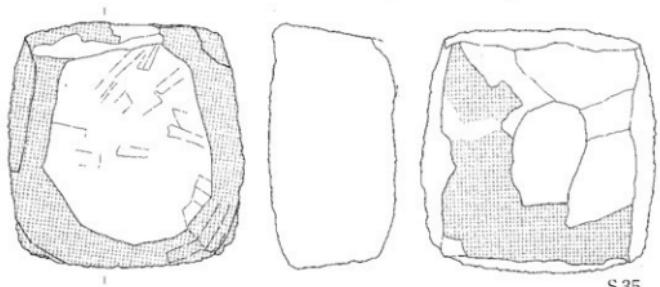
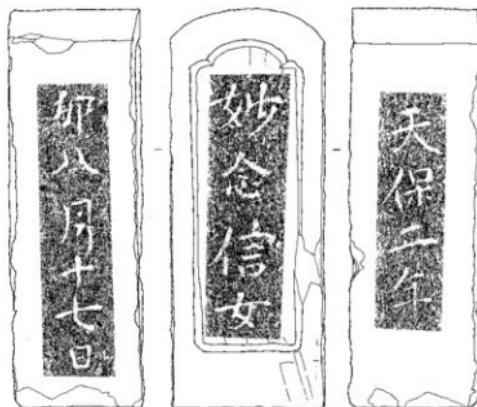


図82 表土層出土遺物その4

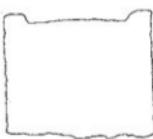


S35

■ 平滑面



S36



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10cm

図83 表土層出土遺物その5

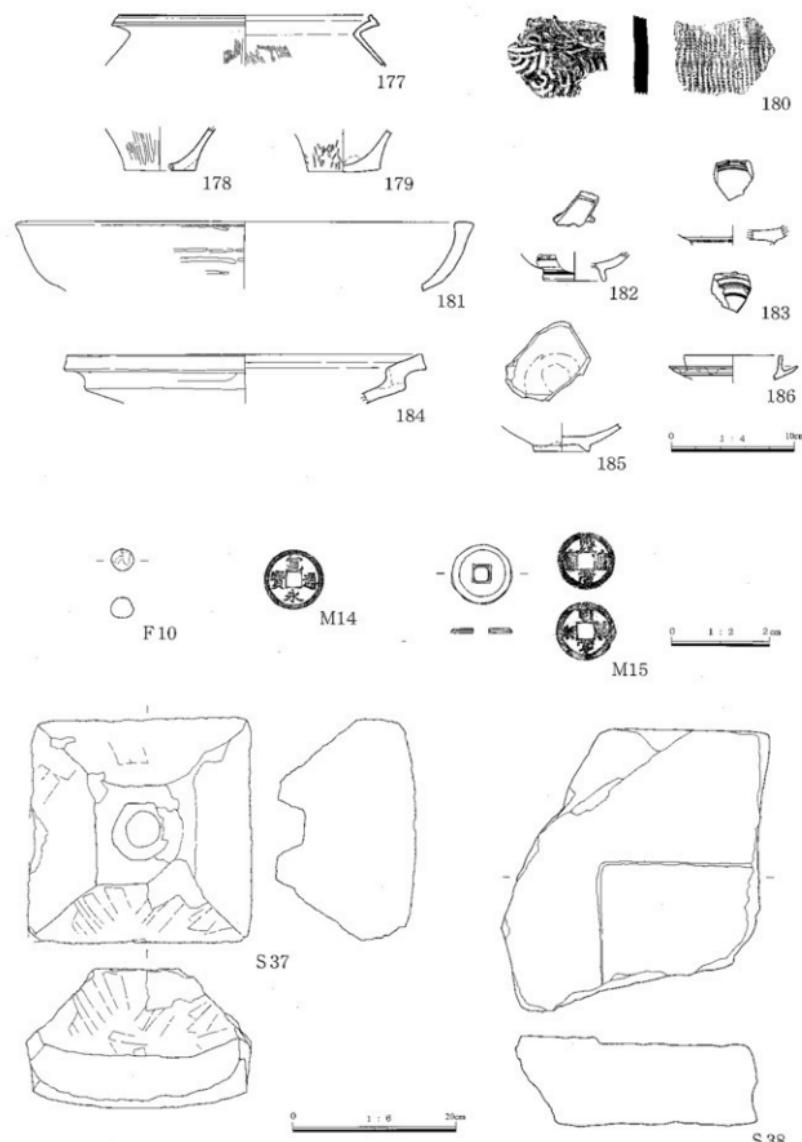


图84 褐色土层出土遗物

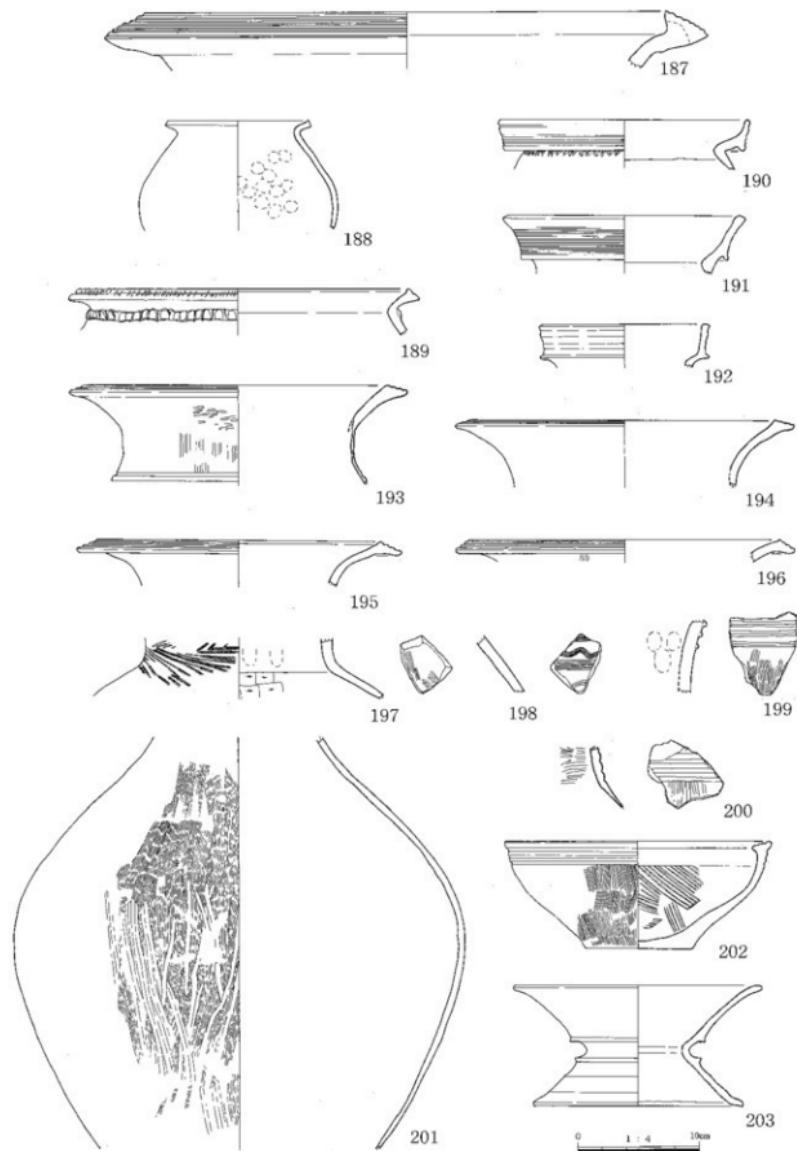


図85 黒色土層出土遺物その1

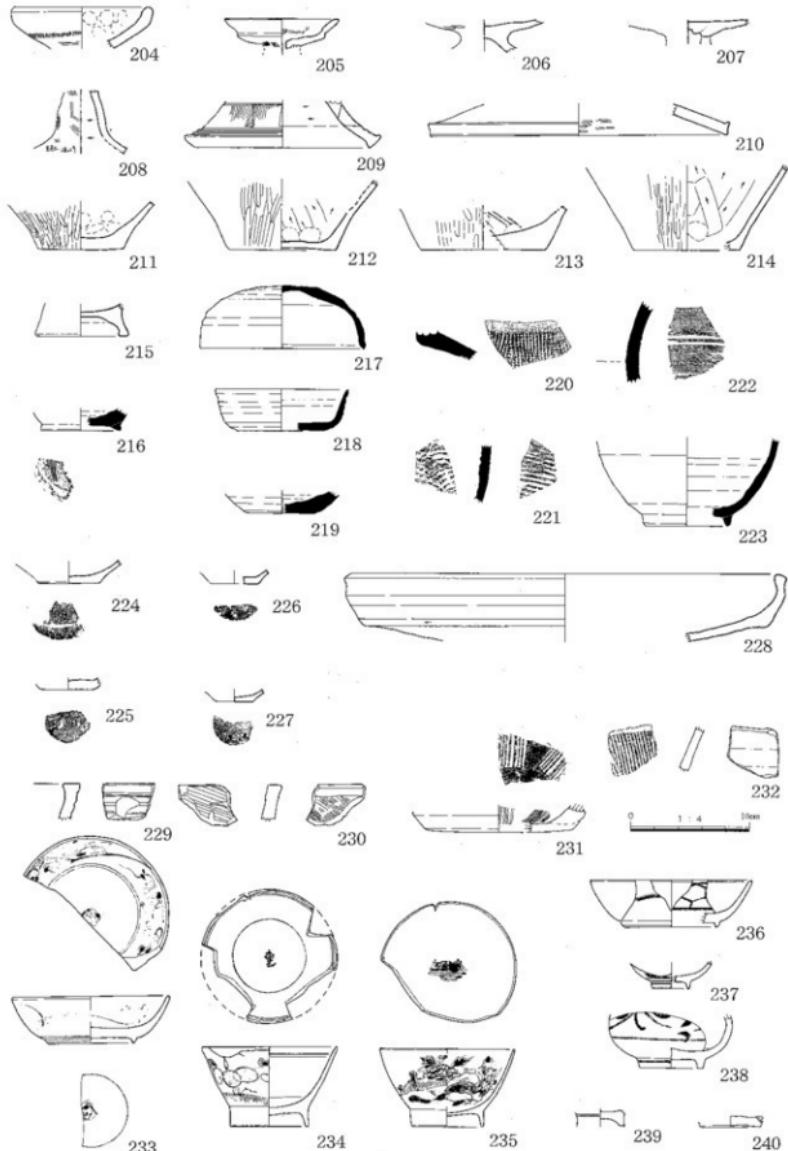


図86 黒色土層出土遺物その2

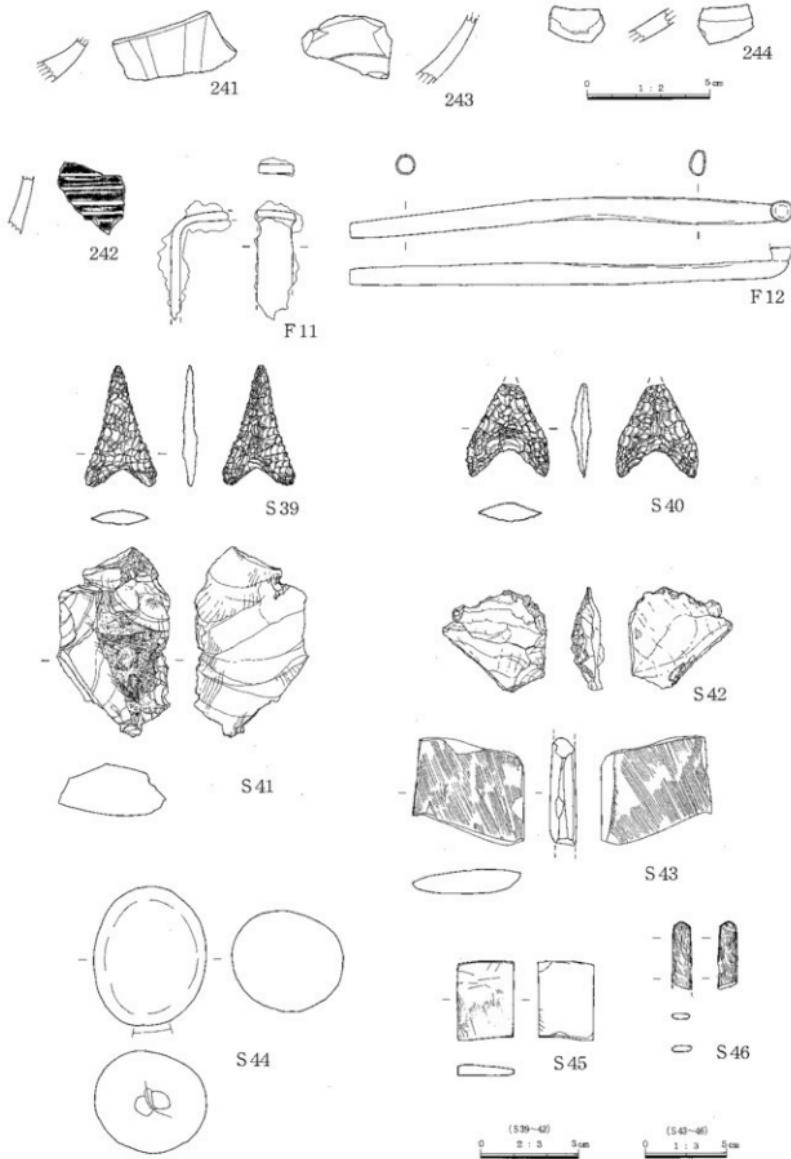


図87 黒色土層出土遺物その3

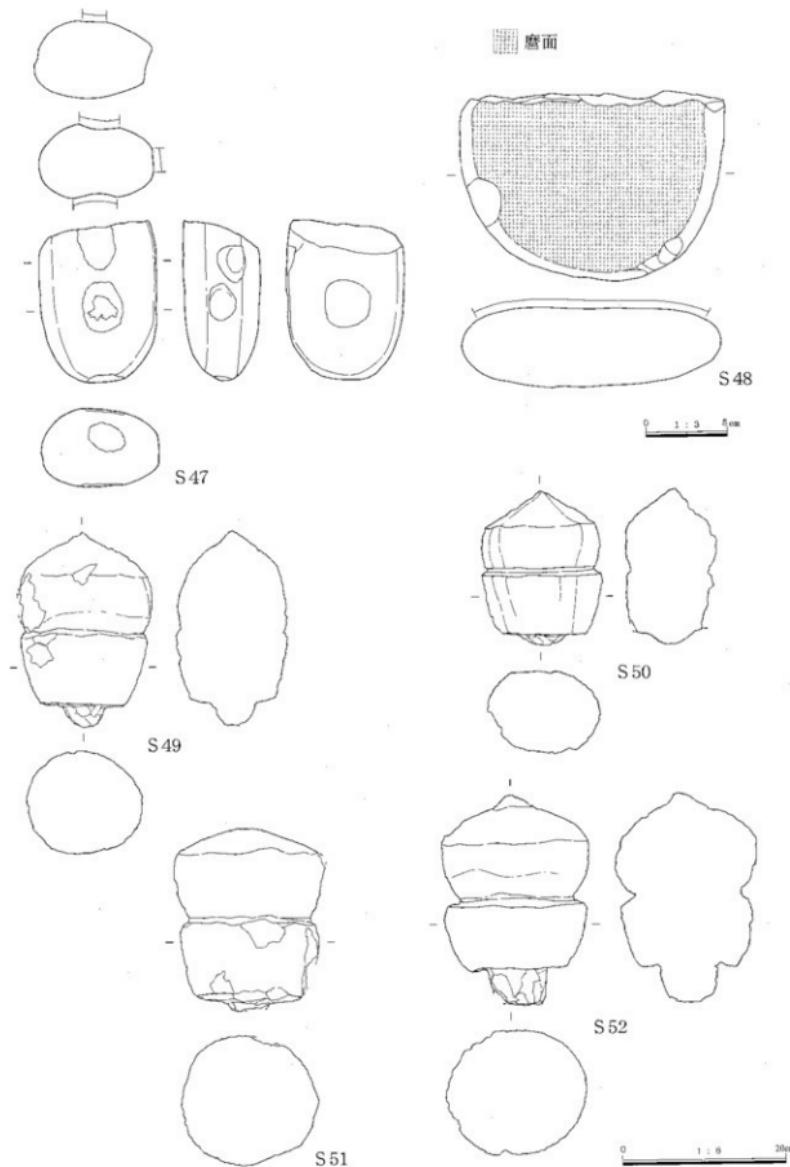


図88 黒色土層出土遺物その4

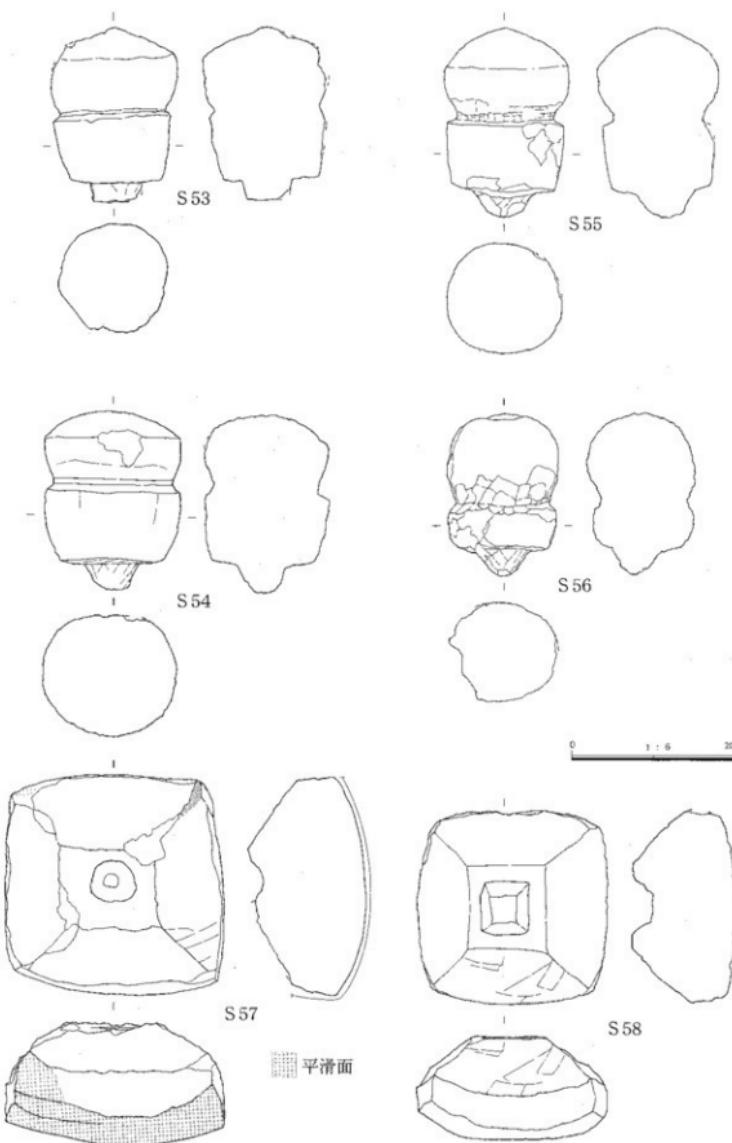


図89 黒色土層出土遺物その5

## 第4章 橋本徳道遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要（図90）

橋本徳道遺跡は、橋本漆原山遺跡の西隣に位置する。橋本漆原山遺跡では、南側に小丘陵が存在しているが、橋本徳道遺跡は平坦地で、周囲は宅地や水田、畑に囲まれている。この遺跡自体も畠として利用されていたようである。橋本徳道遺跡は橋本漆原山遺跡とは異なり、調査区全域が平坦地で、丘陵状の地形は全く見当たらない。畠として利用されていたことも含め、周辺地形の大規模な改変があったと考えられる。

遺構面は、橋本漆原山遺跡同様に3面遺構面をもつ。第1遺構面は黒褐色土上面である。黒褐色土内からは弥生時代中期中葉～中・近世の遺物が出土している。遺構としては道路状遺構がある。橋本漆原山遺跡でも第1遺構面で道路状遺構が確認されており、それと関連する可能性がある。

第2遺構面では、弥生時代の土器窓やピット、土坑を確認した。いずれの遺構からも土器が多く出土した。中・近世では東西方向に直線的に伸びる溝5・6を検出した。この2つの溝はほぼ平行に走行し、2つの溝で何らかの機能を有していたと思われる。この他に、土坑やピット、鉄滓が出土した溝12～14などを検出した。

第3遺構面では、南北方向に流れる自然流路群を検出した。いずれも蛇行して南から北へと流れおり、遺物もほとんど出土していない。第2遺構面からも検出されており、この地点で連続と自然流路が形成されていたことがわかる。

（下江）

### 第2節 調査区の土層堆積（図91、図版49—2）

土層堆積は、基本的に上から表土（①層）、褐色土（②層）、黒褐色土（③層）、暗赤褐色土（④層）、黄褐色土（⑤層 地山）の順に堆積している。（A-A'）ラインで示しているように褐色土上面に何重にも土層が堆積しているが、これは調査区東端の橋本漆原山遺跡との境部分にある南へ続く山道で、未発掘部分である。表土、褐色土からは現代遺物も出土しており、東西方向には広がらない。近・現代の遺構である。

基本的な遺構面は橋本漆原山遺跡と同様に3面確認した。第1遺構面は黒褐色土上面で、土層内から弥生時代中期中葉～近世の遺物が出土している。包含している遺物の内容から見れば橋本漆原山遺跡の黒色土と同様に思われるが、黒褐色土の方が小レキなどの混入物が人蔴多く、全く同じ層とは言えない。しかし、この遺構面で道路状遺構を検出しておらず、橋本漆原山遺跡との関連で考えれば、やはり同時期の連続した遺構面として考えた方

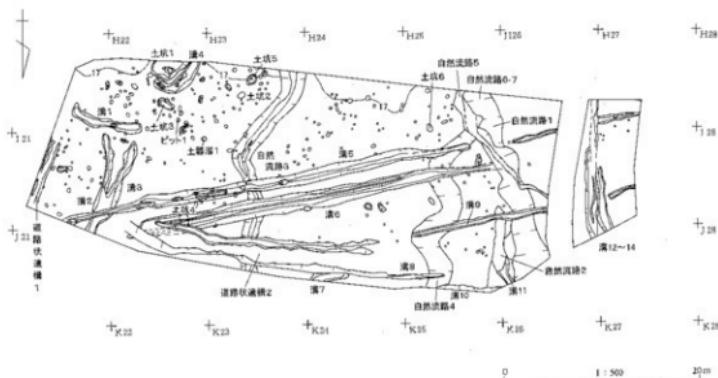


図90 全遺構配置図

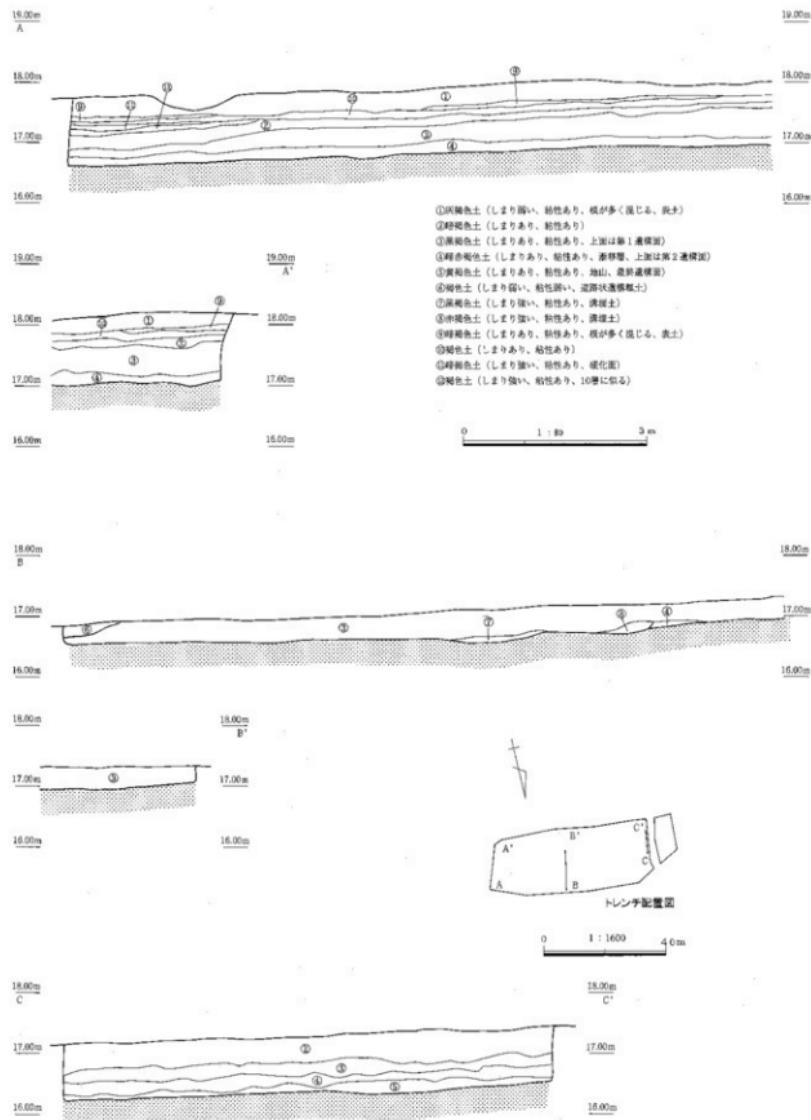


図91 調査区内土層断面

がよいであろう。黒色土と黒褐色土の違いは、後世に橋本徳道遺跡が周辺地と同様に大幅に改変されていたことに関係するものと考えられる。

第2遺構面は暗赤褐色土上面である。この暗赤褐色土からは遺物がほとんど出土しておらず、この点でも橋本塗原山遺跡と同様である。この層も橋本塗原山遺跡と連続するものであり、この遺構面からは弥生時代中期中葉から中・近世までの幅広い時期の遺構、遺物が検出されている。

第3遺構面は黄褐色土（地山面）上面である。この土層も橋本塗原山遺跡と連続する。遺構はそれほど多くはないが、調査区西側で南北方向に流れる自然流路を多く検出した。  
(下江)

### 第3節 第1遺構面の遺構・遺物（図92）

#### 1. 近世以降の遺構・遺物

##### 道路状遺構1（図93、図版50-1・2）

調査区北東で検出した硬化面で、南北方向に伸びる2つの帶状の硬化面からなる。硬化面直上には褐色埋土が4cmの厚さで堆積しており、埋土を除去すると硬化面が帶状に広がっていた。西側硬化面は幅0.65m、長さ7.2mを測る。東側硬化面は断続しており、幅0.2m、長さ5.7mを測る。埋土中から近・現代と思われる遺物（1）が1点出土した。  
(伊藤)

##### 道路状遺構2（図93、図版50-3・4）

J22～24グリッドで検出した硬化面である。東西方向に伸びる2つの帶状の硬化面からなる。道路状遺構1と同様褐色埋土が堆積していた。埋土は0.8～12cmの厚さであった。北側硬化面は幅1～2.6m、長さ28.6mを測り、南側硬化面は幅0.4～1.4m、長さ22.8mを測る。北側硬化面は調査区外に続く。黒褐色土は橋本塗原山遺跡に堆積していた黒色土と連続することから、道路状遺構2は橋本塗原山遺跡の道路状遺構1と連続する可能性がある。

出土遺物については、2は須恵器片、3・5は肥前焼の皿、4は陶胎染付である。6は中国産の白磁の皿と思われる。近世以降の遺構であると考えられる。  
(伊藤)

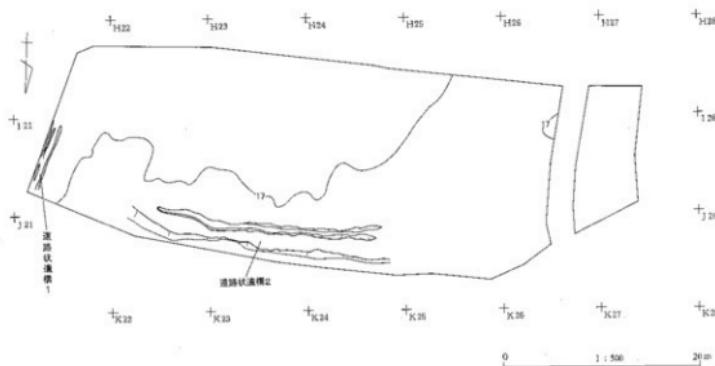


図92 第1遺構面遺構配置図

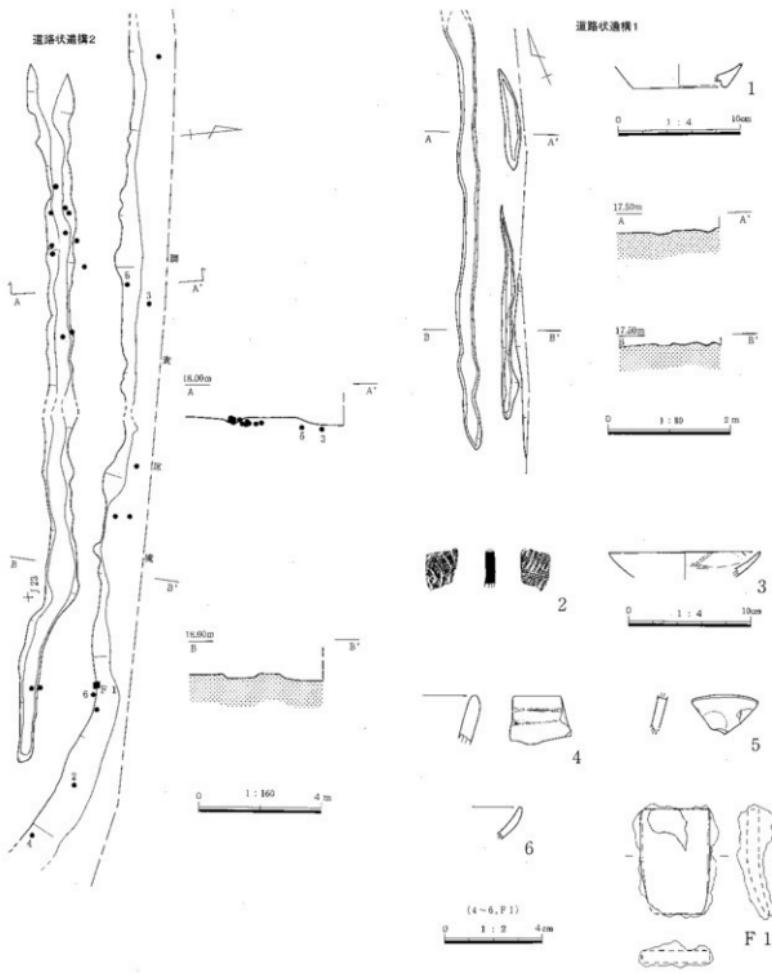


図93 道路状遺構1・2および出土遺物

## 第4節 第2遺構面の遺構・遺物（図94）

### 1. 弥生時代の遺構・遺物

土器窪1（図95・96、図版50-5、51-1・2、58-1～3）

I 23グリッド杭のすぐ北東側に位置する。赤褐色土上面で、南東一北西方向を長軸にして、長さ1.2m、幅0.5mほどの範囲で上器が集中して出土した。上層である黒褐色土内でもこの付近で多くの土器が出土しており、一部は接合している。さらに土器の集中域を精査すると、南東側で径0.5mほどの円形のピットを検出した。このピットは深さ0.1mほどで浅いが、このピット内埋土からも土器は出土している。これらの状況からこの上器窪1は、元々は、このピット内に多量の土器が入っていたのが、掘削等によって掻き出された結果、このような検出状況になったのではないかと考えられる。よってピットの規模は今現在よりも大きなものであり、土器の分布範囲から、南東一北西を長軸にした土坑であった可能性がある。

出土した土器の時期は弥生時代中期中葉～後葉を中心としたものであるが、出土状況から一括性は高いと考えられる。器種としては甕、壺、高环が認められる。この土器窪で出土した土器片の多くには焼成時に生じたと思われる剥離が認められる。焼成時に失敗した土器を廃棄したものであろうか。（下江）

ピット1（図97、図版51-3）

I 23グリッド杭より南東へ約2.5mほど離れた位置で検出した。径0.5m、深さ0.2mほどの円形のピットで、埋土中から上器片が多く出土した。出土上器はいずれも小片ながら弥生時代中期中葉のものであり、先述した土器窪1と同時期である。また位置も上器窪1に近く、何らかの関連があると考えられる。（下江）

土坑2（図98、図版51-4、写真5）

I 23グリッド杭より南西へ約4mほど離れた位置で検出した。長径0.9m、短径0.6m、深さ0.3mほどの梢円形の土坑であり、埋土中から多くの土器片が出土した。しかし、いずれも小片であり、図示できたのは29、30の2個体である。土坑は底面の断面形から2つのピット、もしくは土坑とも思われたが、土層観察の結果、埋土に切り合い関係は認められず、1つの土坑と判断した。

出土した土器はおそらく弥生時代中期の土器であり、先述した土器窪1、ピット1と同時期のものと考えられる。また、検出した位置もI 23グリッド杭を中心にまとまっており、これらの遺構には何らかの関連があると思われる。（下江）

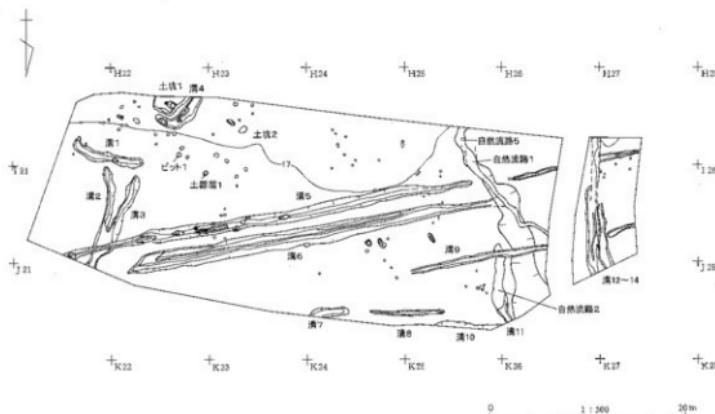


図94 第2遺構面遺構配置図

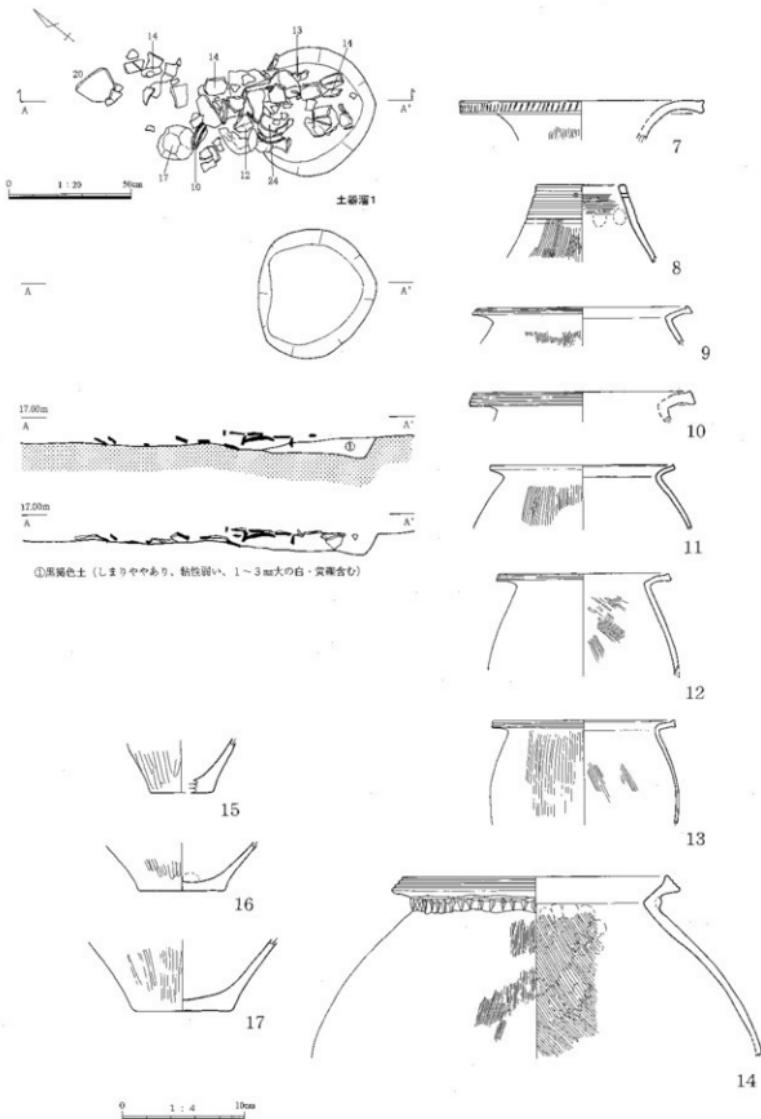


図95 土器灌1および出土遺物

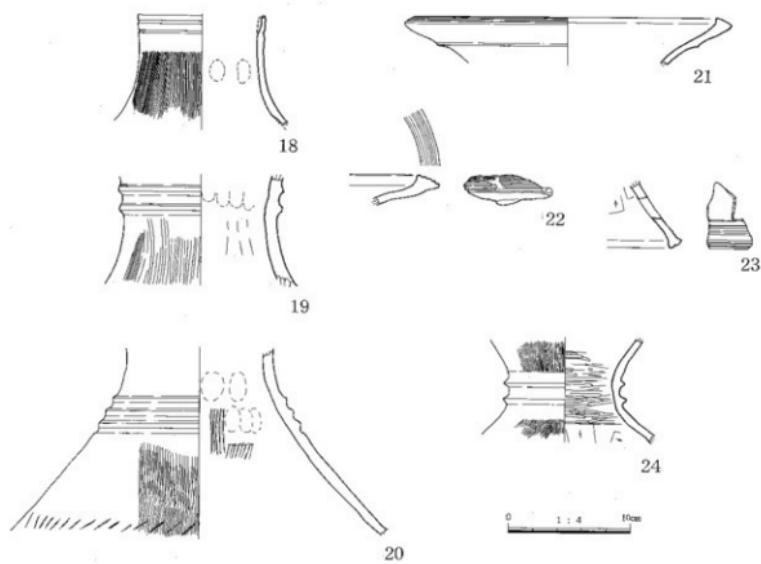


図96 土器窪1出土遺物

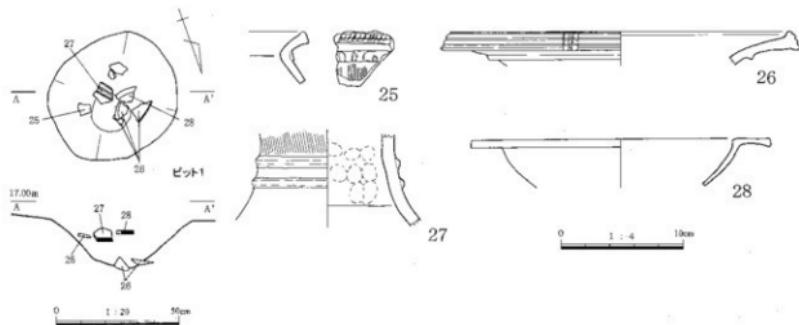


図97 ピット1および出土遺物

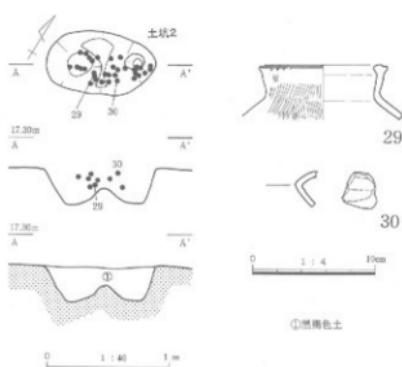


図98 土坑2および出土遺物

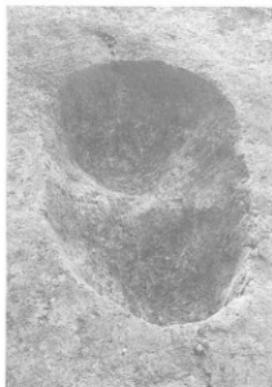


写真5 土坑2完掘状況（東から）

## 2. 中近世の遺構・遺物

### 溝5・6（図99、図版52、図版58-4）

調査区を横断して併走する2条の溝である。溝5は途中で一部途切れているが、幅約0.3~1.3m、長さ約59m、深さ約0.15~0.3mを測り、溝6は幅約0.5~2m、長さ約38.4m、深さ0.14mを測る。溝5は溝2・3に切られており、底面には土坑やピットが点在していた。溝6は土層断面に切り合いがみられ、北側に溝が新しく掘り込まれたことが分かる。溝5・6は、併走しており、共に褐色系埋土を含むことから一連の施設であった可能性が高い。溝5・6の間に幅0.7~1.3mのスペースがある。硬化面は確認できなかったが、道路跡の可能性があると思われる。溝5・6が道路跡であるなら、溝5に新しい溝が掘り込まれたことは北へ約50cm、道幅を拡大したこと示すと考えられる。

溝内から遺物が出土している。32、34は溝5から、その他は溝6から出土している。31は土師質の把手、32は須恵器壺か。外面に竹管状の刺突文が施されている。33は須恵器の底部と思われる。焼成時に、窯床面との接着を防ぐために用いた土器片が接着したと考えられる。34・35は土製品である。（伊藤）

### 溝12~14（図100・101、図版53、図版60）

調査区西側で検出した南北方向の溝である。切り合いから、溝12→溝13→溝14の順に新しい。西方に溝が作り替えられていったと考えられる。溝12は幅0.6~0.88m、長さ8.1m、深さ約0.12mを測る。溝13は幅0.56~0.8m、長さ13.4m、深さ0.16mを測る。溝14は幅0.32~1.2m、長さ5.8m、深さ0.12mを測る。

溝13から、外面は格子叩き目、内面は調整痕が残る亀山・勝間田系と思われる須恵質土器（36）が出土した。さらに、溝12・13からは鉄滓が出土している。鉄滓について詳しく述べると、F2~F5はいずれも碗形鍛冶滓である。F4以外はいずれも含鉄錆化しているが、F4は鉄の残りがよい。F3には炉底土と思われる焼土が、F5には燃料に使用したと思われる木炭が付着している。鉄滓の多くは残りが良く、元は同一のもの可能性が高い。これらの事から、溝12~14の南方に中世の製鉄遺構が存在した可能性がある。しかし溝12~14が、そうした製鉄関係の遺構であるかどうかは不明である。<sup>21)</sup>（伊藤・下江）

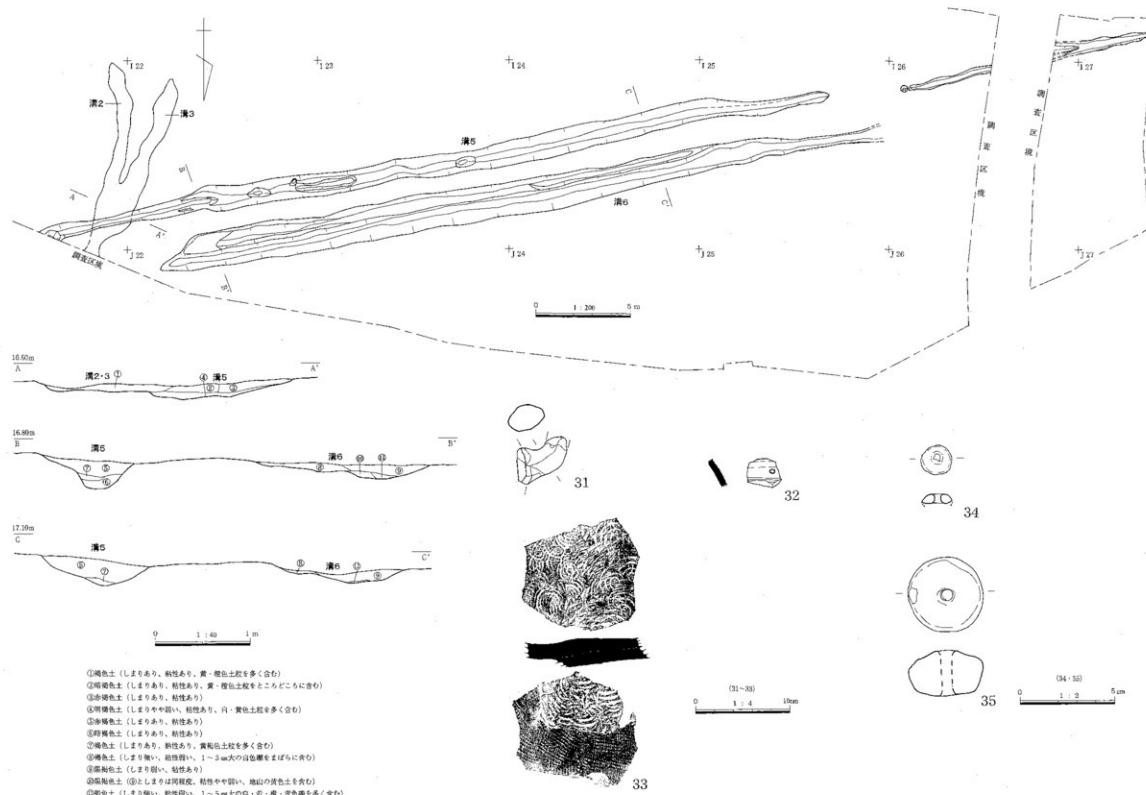
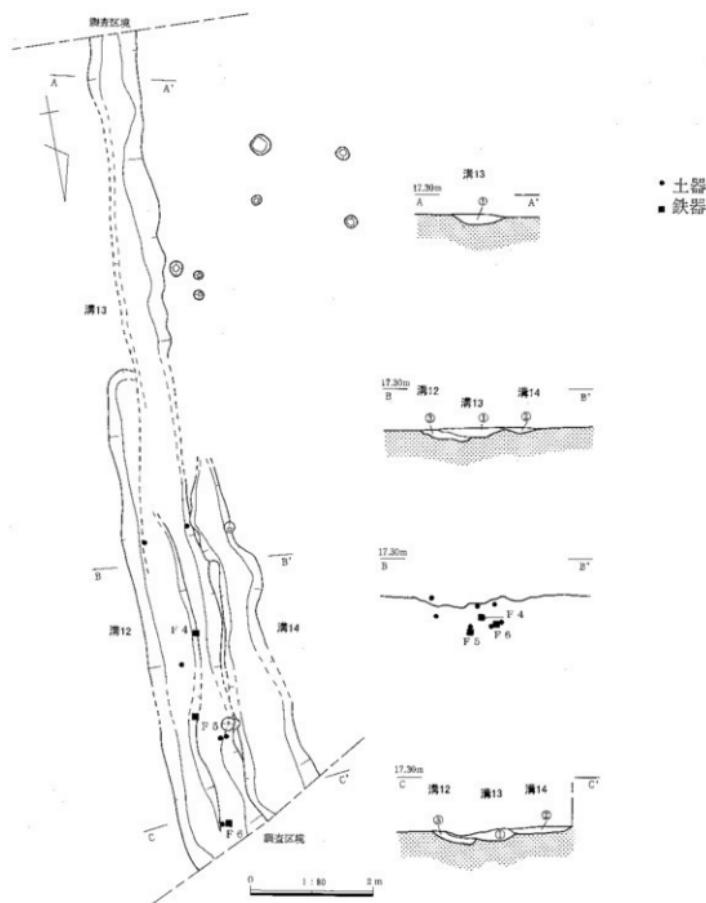


図99 溝5・6および出土遺物



- ①灰褐色土（しまりあり、粘性弱い、1~5mmの大粒・黄・青・褐色斑多く含む）  
 ②暗灰褐色土（しまりややあり、粘性あり、1~3mmの大粒・黄・赤色斑をまばらに含む）  
 ③黄褐色土（しまり強く、粘性弱い、1~2mmの大粒黄色斑混じる）



36

0 1 : 4 10cm

図100 溝12~14および出土遺物

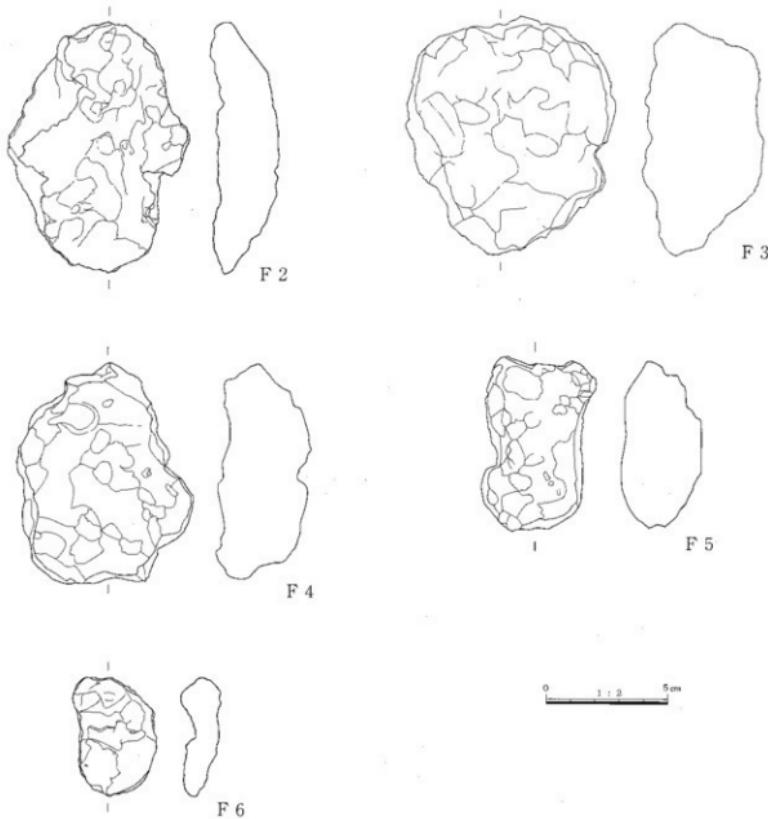


図101 溝13出土遺物

### 3. 時期不明の遺構・遺物

#### 土坑1 溝4（図102、図版54—1・2）

H22グリッドの調査区南端部で上坑1と溝4を並んで検出した。上坑1は東西3.4m、南北は調査区境まで1.5mで、深さは0.4mある。土坑内で一部高まりとなっている部分もある。調査区境を超えて南側へと続いているが、性格は不明である。

溝4は南西—北東方向に伸びており、北東側では湾曲して収束する。南西側は調査区境に区切られ全貌は明らかとなっていないが、おそらく土坑1を囲むような平面U字形の溝と思われる。溝の規模は残存長で4.8m、幅0.8~1.5m、深さ0.4mである。遺物は出土していない。  
（下江）

#### 溝1（図103）

I 22グリッド杭のすぐ北側で検出した。東西方向に長い溝で長さ7.2m、幅0.8~1.1m、深さ0.1mを測る。非常に浅い溝であり、遺物は出土していない。  
（下江）

溝2・3 (図104)

J22グリッド杭の東側で検出した。南北方向に伸びる二股に分かれた溝で、東側を溝2、西側を溝3とする。先述した溝5・6と切り合い関係にあり、溝5・6が埋まつた後に掘り込んでいる。溝の北側は調査区境に区切られているが、長さ9.2m、幅0.7~2m、二股になった溝2、溝3の部分の幅は約0.1m、深さは5cm程度の大変浅い溝である。よって溝2と溝3の切り合いを土層から判別することはできなかった。平面でも土層の違いを認めることはできなかった。遺物は出土していない。

(下江)

溝7 (図106、図版54-3・4)

J4グリッドラインの調査区北端付近で検出した。東西に伸びる溝で、調査区境が北側が区切られているが、やや屈曲して続いているようである。現存する長さは4m、幅0.8~1.2m、深さ5cm程度を測る。後述する溝8とつながっていた可能性もある。遺物は出土していない。

(下江)

溝8 (図105)

溝7の西側にやや間隔を空けて、北側の調査区境近くで検出した。東西に直線的に伸びる溝で長さは13.2m、幅0.3~0.6m、深さ0.1~0.2mを測る。遺物は出土していない。

(下江)

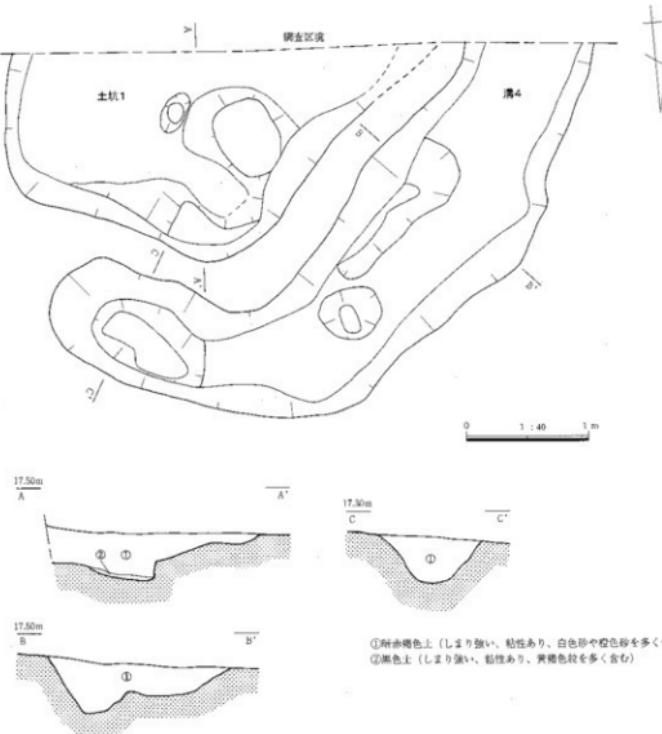


図102 土坑1、溝4

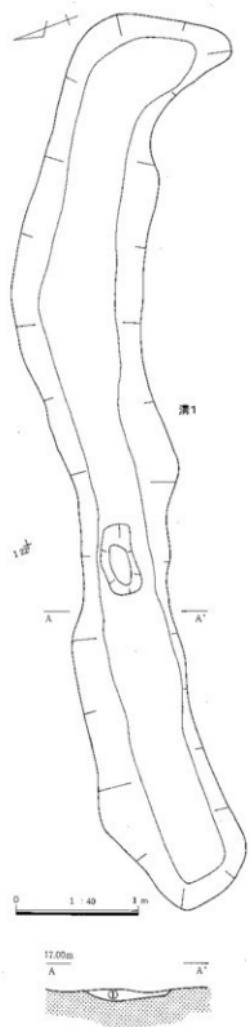


図103 溝1

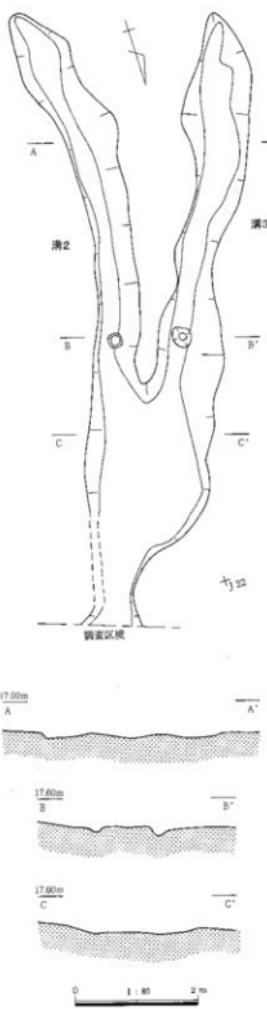


図104 溝2・3

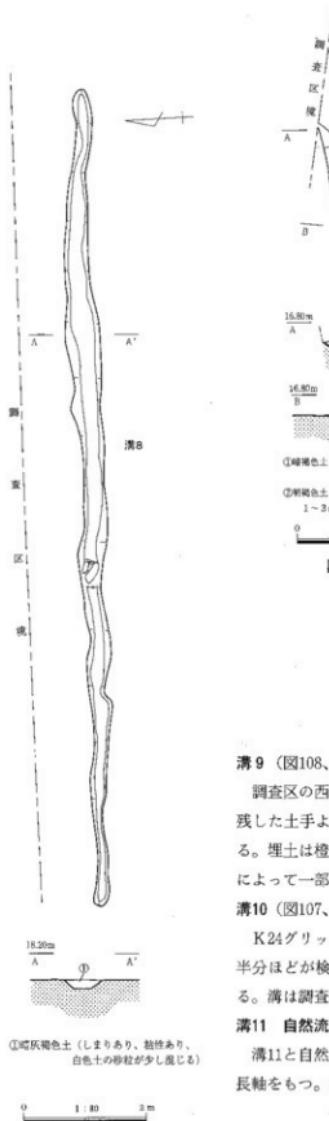


図105 溝8

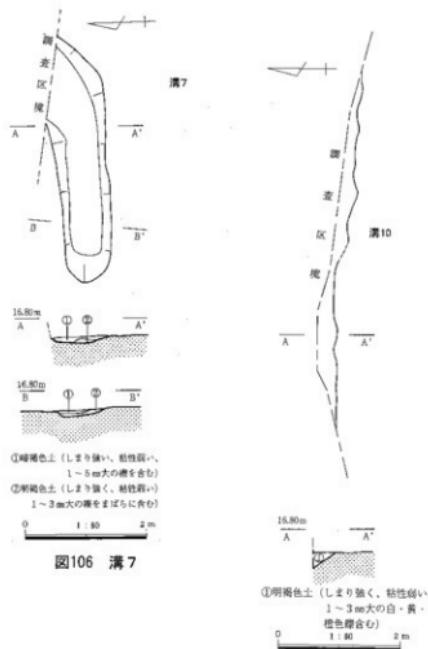


図106 溝7

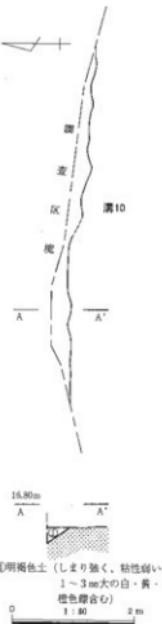


図107 溝10

溝9 (図108、図版55-1・2)

調査区の西端から東へ直線的に伸びる溝である。長さは、水路のために残した土手よりも西側を加えて現存長で23.2m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は橙褐色土で明らかに他の溝の埋土とは異なる。また、溝12~14によって一部壊されている。遺物は出土していない。

(下江)

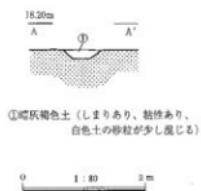
溝10 (図107、図版55-1・2)

K24グリッドの調査区北端に位置する。溝は調査区に調査区を幅の半分ほどが検出できた。現存で長さは5.8m、幅5cm、深さ5cm以上を測る。溝は調査区外へと続いているものと考えられる。

(下江)

溝11 自然流路2 (図108)

溝11と自然流路2はいずれもJ26グリッドの東端に位置し、南北方向に長軸をもつ。溝11は自然流路2の堆積後に掘られており、正確な長さは不



明であるが、調査区境より長さ1.6m、幅0.6~0.8m、深さ5cmほどの浅い溝である。自然流路2は深さ約1mを測り、そこから南へレベルを上げながら収束する。流路内の土層は湧水のため粘性が強く、また様々な夾杂物が入っており他の溝で見られるような土壤ではない。また、南端ではトンネル状にさらに南へ掘れる状況であり、自然流路と考えた。

遺物は溝11から弥生土器の高环(37)が出土しているが、浅い溝であるので流れ込みの可能性もあり、この土器の時期に比定していない。(下江)

(註1) 溝12・13出土鉄滓の記述に関しては、たたら研究会委員穴澤義功氏に御教示いただいた内容を下江が書き記したものである。しかし、この他の鉄滓、鉄製品に関する記述内容は調査員によるものであり、穴澤氏によるものではないことを明記しておく。

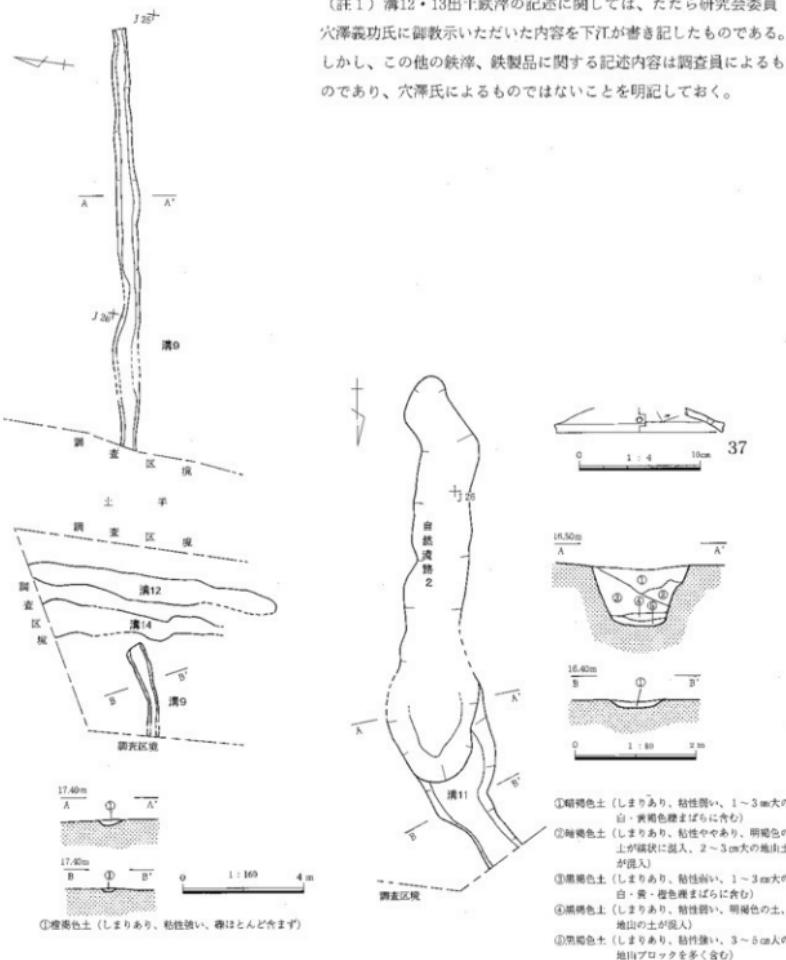


図108 溝9・11、自然流路2および出土遺物

## 第5節 第3遺構面の遺構・遺物（図109）

### 1. 時期不明の遺構・遺物

#### 土坑3（図110）

H22グリッドのほぼ中央に位置する。長さ0.9m、幅0.4m、深さ0.2mを測る隅丸長方形の土坑である。土坑底面に窪みが見られる。遺物は出土していない。

（下江）

#### 土坑4（図110、図版55—3）

J23グリッド杭のすぐ南側に位置する。長さ1.2m、幅0.9m、深さ0.5mを測る隅丸方形の土坑である。土層の堆積は単純に1層ではなく何らかの施設と考えられるが、遺物も出土しておらず性格は不明である。

（下江）

#### 土坑5（図110、図版55—4）

H23グリッドのほぼ中央に位置する。長径1.1m、短径0.85m、深さ0.7mを測る楕円形の土坑である。埋土は2層ある。遺物など何も出土しておらず詳細は不明である。

（下江）

#### 土坑6（図110）

I25グリッド杭から西へ3mの位置で検出した。長さ0.45m、幅0.2m、深さ0.1mを測る隅丸方形の土坑である。上記の3つの土坑と比較して小型である。埋土からは何も出土していない。

（下江）

#### 自然流路3（図111、図版56—1）

グリッドライン23~24の間で、調査区を蛇行しながら南北に横切る自然流路3を検出した。南北端は両者とも調査区外へと伸びている。レベルから見ると南から北へと流れている。幅は2.4~1.4mと差があり、南側の方が幅は広い。検出面からの深さも1~0.7mと差があり、こちらは南側の方が深い。土層は湧水していることもあって粘性が強く、夾雜物が多く混じっている。また、(B-B')ラインは、蛇行して流路が曲がる位置の上層断面であるが、水流が片方の壁に当たって抉れている様子がわかる。これらから、この遺構を人工的な溝ではなく自然流路と考えた。

遺物はほとんど出土していないが、土師質の土器片が若干出土している。

（下江）

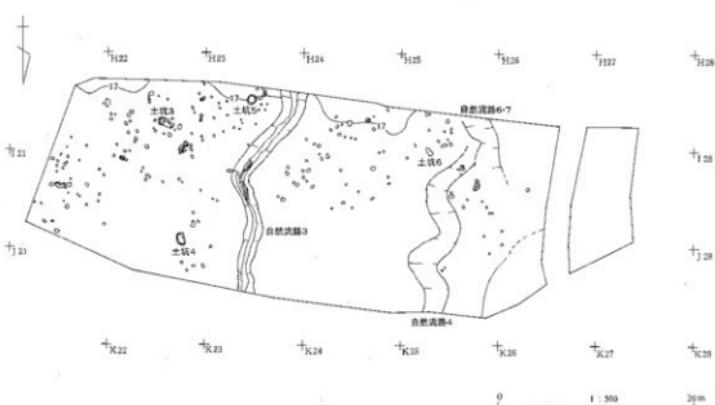


図109 第3遺構面遺構配置図

## 自然流路1・2・4～7（図112、図版56-2～5）

グリッドライン25・26の間で南北方向に走る自然流路をいくつか検出した。平面の精査や局的にトレントを設定して土層を確認することなどによって合計6条の自然流路を検出した。中には複雑に切り合い、さらに蛇行しているのでその検出は困難を極めたが、最終的には土層の堆積状況から先後関係を決定した。なお、これらの自然流路の中には、調査日程の都合上完掘せず、トレントを数箇所掘って断面等の情報を得ただけのものもある。しかし、これらの自然流路から遺物はほとんど出土しておらず、最低限の情報は得ていると思われる。以下、各遺構の詳細を述べる。

### 自然流路1

自然流路1は最も小規模な自然流路であり、幅は0.2～1.1m、深さは0.1mほどである。また、その検出面は赤褐色土上面であり、第2遺構面検出遺構である。ここでは、他の自然流路との切り合いなどの関係を明確にするためこの節で紹介している。この自然流路群の中で最も新しい遺構である。埋土には砂が混じり、他の自然流路の埋土とは異なる。遺物は出土していない。（下江）

### 自然流路2

先述したように、第2遺構面検出の遺構で自然流路1と同様、この自然流路群の中で新しい時期のものである。南北に蛇行しながら流れている他の自然流路とは様相が異なっている。（下江）

### 自然流路4（図版56-2）

自然流路群の中で最も東側に位置する。流路の両端は調査区境を越えてさらに伸びており、北へ蛇行しながら流れている。幅は1.6～3.2mと差があり、これは南側の方が広い。深さは0.5～0.7mと南側の方が浅い。この自然流路は後述する自然流路5につながっているが、これは自然流路6・7が埋まつた後に新たに形成された流路であると思われる。遺物はほとんど出土していない。（下江）

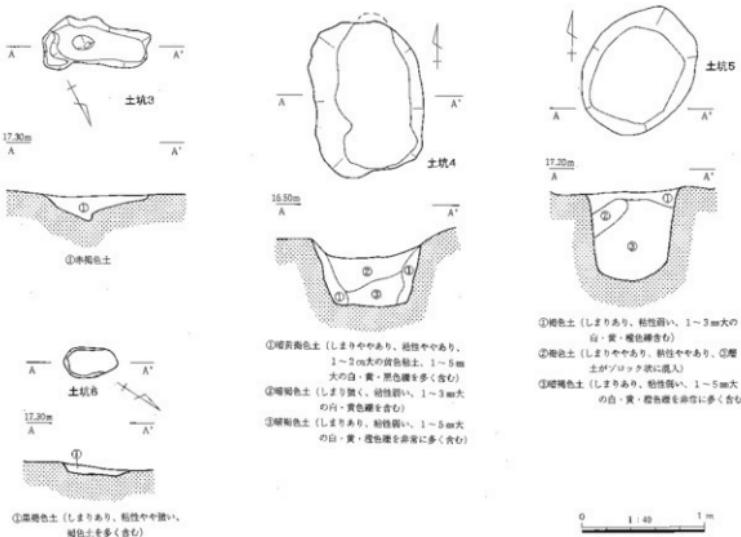


図110 土坑3～6

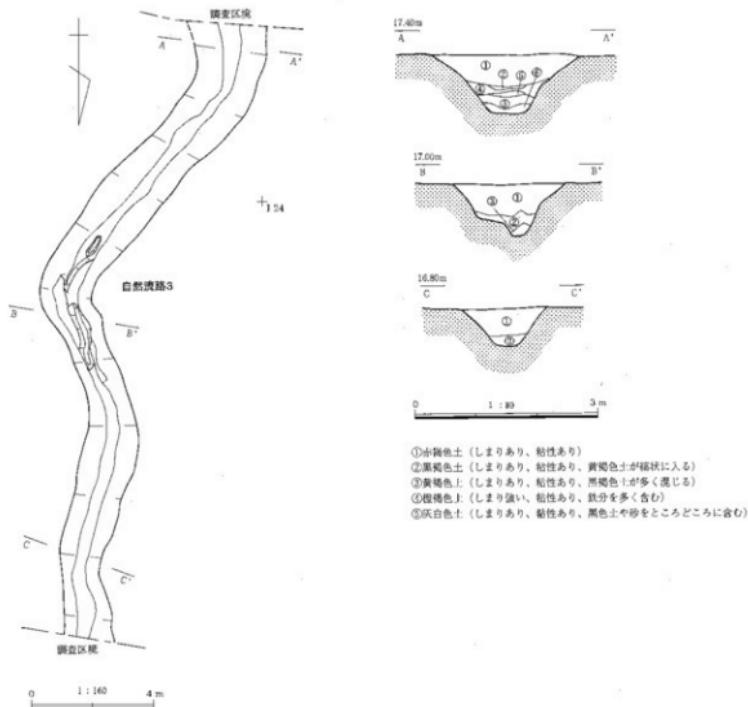


図111 自然流路3

### 自然流路5

自然流路5は(A-A')ラインの断面でわかるように第2造構面検出遭場である。また(B-B')ラインでは①・②層の東側が切られて段差となっているが、これは自然流路1を完掘した跡である。よって土層断面から、後述する自然流路6・7が埋まつた後にこの流路が形成されており、この流路が埋まつた後は自然流路4、最後に自然流路1が形成されたことが分かる。調査区の南端から北端まで統いており、幅は0.6~1.4m、深さは0.7mを測る。土層は黒色土、または黒褐色土が堆積しているという点で特徴的である。途中から屈曲して自然流路6・7と合流するが、この黒色系の土層は認識しやすく、他の土層と明瞭に区別することができ、(C-C')ライン以北はこの自然流路の埋土だけになっている。この埋土の中から遺物はほとんど出ていないが、33のような須恵器环身片が出土している。

(下江)

### 自然流路6 (図版56-5)

自然流路6は土層断面の⑥~⑨層で示されている範囲で、自然流路7 (⑩・⑪層) を切って形成されている。調査区を蛇行しながら南から北へ流れしており、両端共に調査区外へと伸びている。幅は推定で0.6~2mと差が大きく (B-B') ライン付近では最も幅が狭い。深さは0.8mほどである。遺物は出土していない。

(下江)

### 自然流路7 (図版56-5)

自然流路7は土層断面の⑩・⑪層で示されている範囲で、最初に形成された自然流路である。自然流路6とは

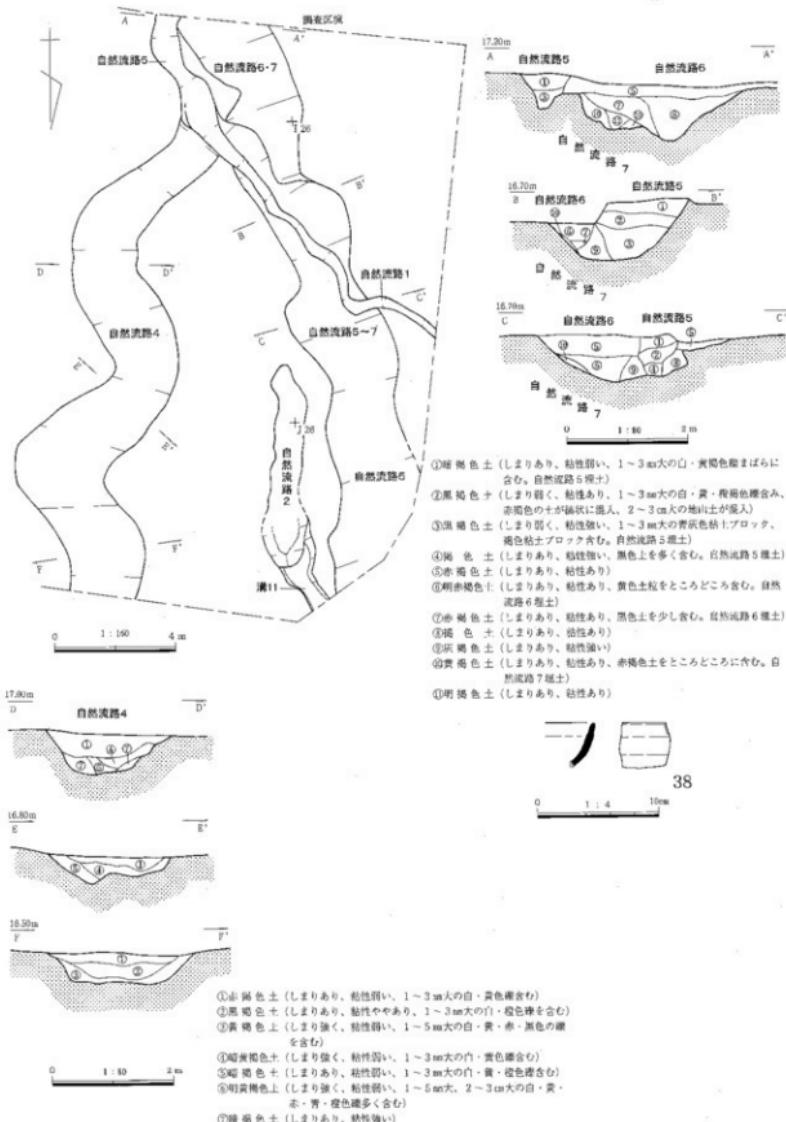


図112 自然流路1・2・4~7および出土遺物

は同じように蛇行して南から北へ流れる。(B-B') ラインや(C-C') ラインでは溝の立ち上がり部分にわずかに③層が残っているにすぎない。のことから自然流路6とほぼ同じような流路ではなかったかと考えられる。埋土から遺物は出土していない。

(下江)

以上、自然流路1・2・4～7の詳細を述べたが、基本的に自然流路は同じような位置に何度も続けて形成されている。まず、第3造構面である地山上面で自然流路7が形成され、埋没した後に同じようなコースに自然流路6が形成される。この溝に自然流路4がつながり、第2造構面の暗赤褐色土が堆積する。第2造構面上面からは、自然流路5が形成される。この流路も自然流路6・7と同じような走行方向であり、最後に自然流路1が形成されるという流れである。

現在でも使用されている水路がこの自然流路群のすぐ西側を通り、この周辺は湧水も激しいことから、宅地や畑などで掘削される以前は、このあたりは小丘陵の先端部ではなく先端部と先端部の間の谷地形であったと思われる。

(下江)

## 第6節 包含層出土遺物について

橋本徳道遺跡では橋木塗原山遺跡と同様に、包含層内から多くの遺物が出土している。包含層出土遺物に関しては、近世以降の遺物を含む表土・褐色土出土遺物、弥生時代中期中葉～近世までの遺物を含む黒褐色土出土遺物の2つに大きく分けられる。以下、包含層ごとに出土遺物の様相について述べる。

### 表土・褐色土出土遺物(図113)

表土並びに褐色土からは、現代遺物が多く出土しているが、近世を中心とした遺物も多く出土している。図113は、表土と褐色土から出土した遺物である。39は土師質の皿、41は土師質の高台付碗もしくは环である。42は陶器の壺、43は土師質の壺であろうか。いずれも形態や胎土から中・近世以降の遺物と考えられる。45は肥前系の皿で見込みに五弁花文がある。46は陶胎染付、47は肥前系の皿で体部下半露胎、蛇の目釉割ぎを施す。F 7は板状の鉄器であるが、その機能は不明である。表面の溝状の凹みが放射状に広がっており、X線写真によると裏面に何か芯のようなものが貼り付いている。

(下江・伊藤)

### 黒褐色土出土遺物(図114～116、図版60～62)

黒褐色土からは弥生時代中期中葉から近世までの遺物が数多く出土した。43～53は弥生時代中期中葉から後期にかけての遺物である。59は中世の鍋である。60～63は須恵器壺片である。この内、60、61は須恵器壺の底部付近の破片と思われるが、溝6から出土した33と同様に、焼成時に、窯床面との接着を防ぐために置いた須恵器片

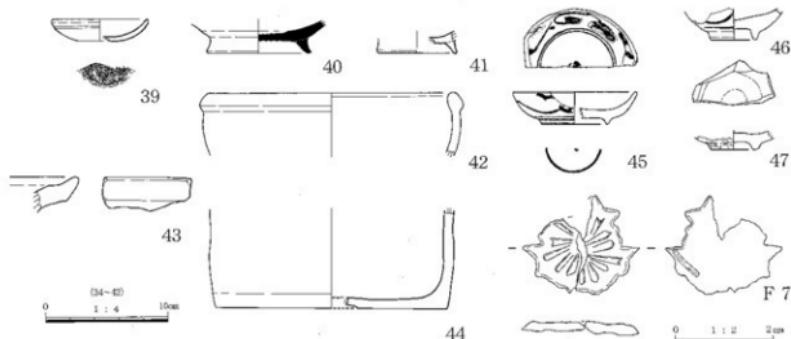


図113 表土層～褐色土層出土遺物

と接着している。こうした接着した須恵器が製品として流通していたかは不明であるが、もし製品としてではなく破棄したものであるならば、窯跡が近くにあったものと思われる。64・67・68は中国製の白磁と思われる。64は玉縁状口縁の碗か。65・66は龍泉窯系の青磁碗と思われる。69は中国産の白磁四耳壺と思われる。伯耆初の出土である。70は小片のため詳細は不明であるが、土人形など土製品の一部ではないかと思われる。F 8～F 11は鉄滓である。F 9は断面や形態から碗形鋳治滓であると思われる。F 10・11は元は同一個体であったが、分割したものである。復元すると長さ9.6cm、幅6.4cm、厚さ4.2cm、重さ213g以上の鉄滓であったと思われる。これらの鉄滓はJ 24・25グリッドから出土しており、先述した溝12～14から出土した鉄滓とあわせて、中世の製鉄遺構が近くにあった事を示すものではないかと思われる。石器はS 1～S 5まで出土した。いずれも石材は黒曜石である。S 1～S 3は石鎌、S 4・5は石核である。

(下江・伊藤)

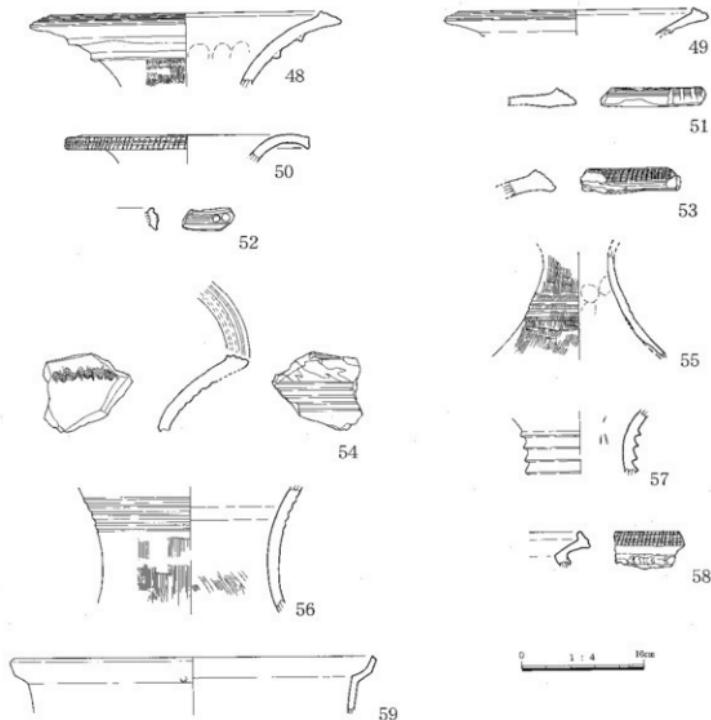


図114 黒色土層出土遺物その1

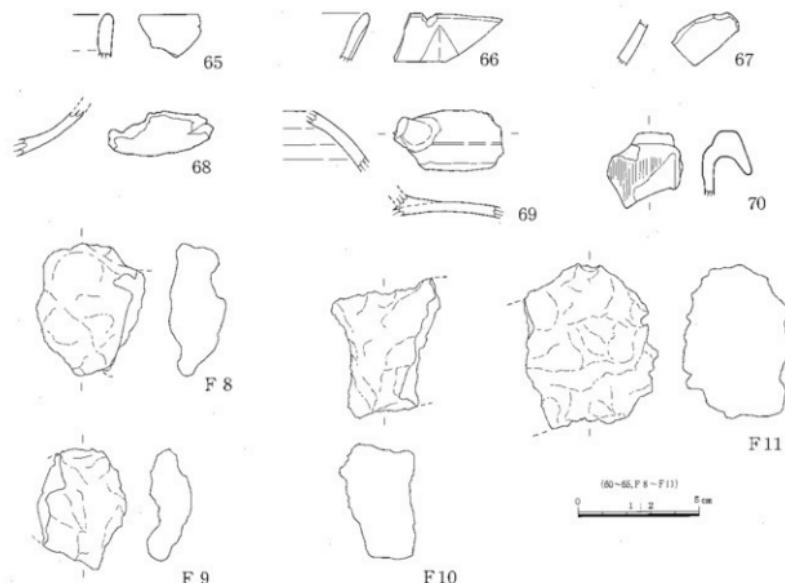
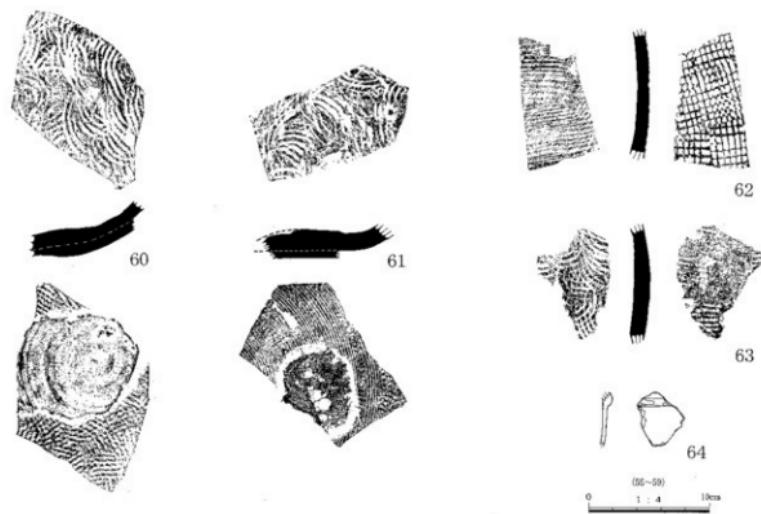


図115 黒色土層出土遺物その2

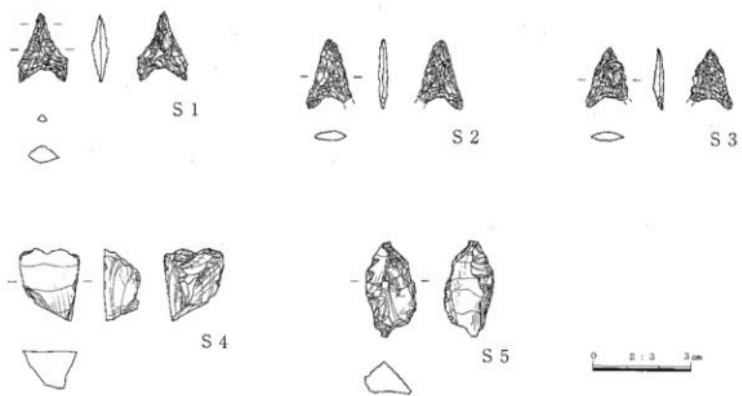


図116 黒色土層出土遺物その3

表2 橋本塗原山遺跡出土土器・土製品一覧

遺物名	発掘場所	遺物名	種類	器形	口径 器高 (cm)	特徴	胎 土成 分	色 調	備考
1 12	E5南東 隅辺上	土師質土器	皿	盛	8.8 盛4.2 △1.9	底部斜削系切り。内外面回転ナメ。	唐 真好	褐色	2と合口の状況で出土
2 12	E5南東 隅辺上	土師質土器	皿	盛	8.5 盛4.6 △1.95	底部斜削系切り。内外面回転ナメ。	唐 真好	褐色	1と合口の状況で出土
3 13	土器集中区	弥生土器	甕	—	*24.0 △4.4	口縁端部芯線？錐痕貼付突唇。内・外面ハケ目。	密 やや良	浅黄褐色	
4 13	土器集中区	弥生土器	甕	—	*15.0 △7.0	口縁端部1条凹槽。内面ハケ目。	密 真好	浅黄色	外側黒斑あり
5 13	土器集中区	弥生土器	甕	—	*23.4 △8.0	口縁端部3条凹槽。外側ハケ目。内面ハケ目(外側より細密)。	密 真好	浅黄色	
6 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*30.1 △6.7	口縁端部2条凹槽。錐痕貼付突唇。錐痕外側に刻状文の文様。内外面ハケ目。	密 やや良	内) に赤褐色 外) に赤褐色 外) に赤褐色 外) に灰褐色	外側黒斑あり
7 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*15.6 △5.6	口縁端部3条凹槽。錐痕貼付突唇。内外面ハケ目。	密 真好	浅黄褐色	
8 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*21.4 △5.25	口縁端部3条沈鉢。錐痕貼付突唇。内外面ハケ目。	密 真好	浅黄色	
9 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*17.3 △5.5	風化のため不明瞭。一部ハケ目あり。	密 真好	浅黄色	
10 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*23.2 △4.1	口縁端部3条凹槽。錐痕貼付突唇。錐痕外側ハケ目。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	
11 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*20.2 △7.1	口縁端部3条凹槽。内外面ナメ。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	
12 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*18.1 △3.0	口縁端部2条沈鉢。口縁部外側に3条凹槽。内外面にハケ目。	密 真好	浅黄色	
13 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*18.0 △3.0	口縁端部2条凹槽。錐痕貼付突唇。内外面ハケ目。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	
14 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*17.6 △3.0	脚部に凹線。内面外ハケ目。脚部内部に枝状縫、ケズリあり。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	
15 18	堅穴住居1	弥生土器	甕	—	*16.6 △2.2	環状環部の中心に鋸切跡。脚部内部枝状縫あり。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	円窓充填による接合
16 18	堅穴住居1	弥生土器	丸井脚	—	*16.2 △2.2	環状環部の中心に鋸切跡。脚部内部枝状縫あり。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	
17 18	堅穴住居1	弥生土器	丸井脚	—	*15.6 △1.6	3つの透かしあり。脚部凹窓。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	外側黒斑あり
18 18	堅穴住居1	弥生土器	丸井脚	—	*18.4 △3.9	外面部凹窓。内外面ナメ。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	
19 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*8.4 △3.3	外側ハケ目。内面ケズリ。	密 やや良	褐色	
20 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*8.5 △5.75	外側凹窓不明瞭。内面ケズリ。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	
21 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*10.9 △4.4	外側ハケ、ミガキ。内面ナメ。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	
22 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*7.8 △3.3	外側溝無不明瞭。内面ケズリ。	密 真好	内) 淡黄色 外) 淡黄色～灰褐色	腹面黒斑あり
23 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*5.6 △4.4	外側ミガキ。内面ケズリ。	密 真好	灰褐色	
24 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*8.5 △3.6	外側ハケ後ナメ。内面ケズリ。	密 真好	褐色	
25 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*4.4 △2.4	外側ミガキ。内面ナメ。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	
26 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*5.8 △2.6	外側溝無かな部分ミガキ。底面や上部に落葉付。	密 真好	灰褐色	外側黒斑あり
27 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*5.7 △4.5	外側ナメ。内面ケズリ。底面落葉。外側ハケ張。	密 真好	成黃褐色～灰色	蓋の可能性もあり
28 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*5.7 △3.0	外側ナメ。内面ケズリ。高さ1cmほどの台付。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	蓋の可能性もあり
29 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*6.6 △2.6	内外面ナメ。高さ1cmほどの台が付く。	密 真好	浅黄色	
30 18	堅穴住居1	弥生土器	底部	盛	*1.2 △1.9	指押捺によるつくり。ミニチュア土器？	密 真好	灰白色	
31 18	堅穴住居1	分割形土器	—	—	長さ0.05、幅10.55、厚さ1.5(cm)。表面に彫刻工具による刺突文、裏面に刻目あり。側面刺突文あり。	密 真好	淡黄色	半分のみ	
32 20	堅穴住居1 内P2	弥生土器	甕	—	17.6 △7.6	内外面ハケ目。	やや密 やや良	内) 成黃褐色 外) 成黃褐色～灰褐色	外側保付書
33 20	堅穴住居1 内P2	弥生土器	底部	盛	*4.8 △5.1	外側ミガキ。内面ケズリ。	密 真好	灰白色	外側黒斑あり
34 20	堅穴住居1 内P2	弥生土器	底部	盛	*4.9 △5.1	外側ミガキ。内面ナメ。	密 真好	浅黄色～灰褐色	外側黒斑あり
35 20	堅穴住居1 内P2	弥生土器	底部	盛	*4.3 △3.0	内外面ナメ。	密 真好	内) に赤褐色 外) に赤褐色	

遺物番号	種類	遺構名	出土位置	種別	器種	口径器高(cm)	特徴	焼成	色調	備考
36 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	圓	*14.1 △6.1	内外面風化のため剥離不明顯。	やや留好	明黄褐色		
37 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	圓	*16.0 △5.15	口縁部2箇所錐。外面ハケ目。内面ナダ?	留好	に近い黃褐色		
38 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	圓	△13.5	口縁部は3箇所錐。	留好	に近い黃褐色		
39 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	東	30.8 △14.65	口縁部に斜め文、円形浮文。底部に斜付支窓のちに商目?外側ハケ目。内面ナダ?。	留好	に近い橙色		
40 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	圓	-	難窓付突堤等に工具による削開。外面ハケ目。	留好	に近い橙色		
41 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	圓	*24.4 △3.7	口縁部3箇所錐。内面ナダ?	留好	浅黃褐色		
42 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	高环	-	外周ハケ目。外面ハケ目。内面絞り痕あり。	留好	灰白色	円盤充填法による接合	
43 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	底部	底16.3 △4.6	外周ハケ目。内面ナダ?底面にもハケ目。厚手のつくり。底面はややしげ放気孔。	留好	に近い橙色		
44 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	底部	底*5.6 △3.0	外周ハケ目がちナデ。内面ナダ。	留好	内)灰白色 外)灰黃褐色~ 黒色		
45 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	底部	底4.9 △3.7	外周ハケ目。内面ナダ。	留好	内)に近い黃褐色 外)灰白色~ 黒色		
46 21	甕	堅穴住居1 内構1	弥生土器	台形石層	*23.6 △3.3	上部平底面、内外蓋ハケ目。	留好	に近い黃褐色		
47 24	甕	堅穴住居2 テラス3	弥生土器	圓	△3.1	口縁部沈錐。外面ナダ。内面ケズリ。	留好	内)浅黃褐色 外)灰色		
48 24	甕	堅穴住居2 テラス3	弥生土器	東	△6.35	外周ハケ目。内面ナダ。	留好	に近い黃褐色		
49 24	甕	堅穴住居2 テラス3	弥生土器	東	*25.4 △9.3	内面ナダ。	留好	灰黄色		
50 25	テラス3	弥生土器	甕	-	△3.7	内外面ナダ。内面一部ケズリ。	留好	に近い黃褐色		
51 25	テラス3	弥生土器	甕	-	△3.0	内外面ナダ。	留好	浅黃褐色~暗 オリーブ褐色		
52 25	テラス3	弥生土器	甕	-	△2.7	風化のため剥離不明顯。	留 やや良	浅黃褐色		
53 25	テラス3	弥生土器	甕	-	*14.65 △8.7	外周風化のため剥離不明顯。内面ケズリ。	留好	浅黃色		
54 25	テラス3	弥生土器	甕	-	△2.1	内外面ナダ。内面一部ケズリ。	留好	浅黃褐色		
55 25	テラス3	弥生土器	甕	-	*14.0 △9.7	胴部外周ハケ目。内面ケズリ。	留好	灰黃色~浅黃色		
56 25	テラス3	弥生土器	甕	-	△6.65	内外面ナダ。内面一部ケズリ。	留 やや良	浅黃色		
57 25	テラス3	弥生土器	底脚部	-	△4.7	外周ハケ目。内面ケズリ。	留好	浅黃色		
58 25	テラス3	弥生土器	甕	-	△8.9	難窓付突堤等。板状工具による羽状文。外周ナダ。内面ケズリ。	留好	浅黃色		
59 26	テラス3	弥生土器	甕	-	*32.2 △15.5	難窓板状工具による刻目。外面ハケ目。内面ケズリ。	留 や 良	内)暗灰黄色~ 黒褐色 外)灰褐色~ 灰色		
60 26	テラス3	弥生土器	甕	-	△4.9	内外面ナダ。内面一部ケズリ。	留好	浅黃褐色		
61 26	テラス3	弥生土器	甕	-	△1.8	外周ナダ。内面ケズリ。	留好	浅黃褐色		
62 26	テラス3	弥生土器	露台	-	△3.3	内外面風化のため剥離不明顯。	留好	浅黃褐色		
63 26	テラス3	弥生土器	高环	-	*31.2 △6.5	外周ハケ目がちナダ。内面剥離不明顯。	留好	浅黃色		
64 26	テラス3	弥生土器	高环	-	△4.7	内外面ハケ目。	留 や 良	浅黃褐色		
65 26	テラス3	弥生土器	高环	-	△1.4	内外面風化のため剥離不明顯。	留好	浅黃褐色	外面赤彩あり	
66 28	堅穴1	弥生土器	甕	-	16.4 △7.5	筒状に模様状の突起。外面ナダ。内面ケズリ。	留好	浅黃色		
67 28	堅穴1	弥生土器	甕	-	13.6 △5.2	外面ナダ。内面ケズリ。	留好	浅黃褐色		
68 28	堅穴1	弥生土器	甕	-	△3.2	内外面ナダ。	留好	明黃褐色~黃灰色		
69 28	堅穴1	弥生土器	甕	-	△3.5	内外面ナダ。外周一部ハケ目	留好	に近い橙色		
70 28	堅穴1	弥生土器	甕	-	23.6 △27.4	外周ハケ目。内面ケズリ。	留好	に近い黃褐色		
71 28	堅穴1	弥生土器	甕	-	△4.4	内外面ナダ。	留好	淡黃色		
72 28	堅穴1	弥生土器	甕	-	△9.0	外周ハケ目。内面ケズリ。	留好	浅黃褐色	外周煤付着	
73 28	堅穴1	弥生土器	甕	-	*11.8 △6.6	外周調整小困難。内面ケズリ。	留好	浅黃褐色		

遺物名	層段	遺物名 出土位置	種別	器種	口径 高さ (cm)	特徴	土成	色調	備考
74 28	壁穴1	弥生土器	高环	— △4.75	内外面黒化のため調整不明瞭。	密 良好	内) 淡黄褐色 外) にい黄 褐色		
75 28	壁穴1	弥生土器	蓋?	— △1.2	内外面黒化のため調整不明瞭。	密 良好	淡黄褐色		
76 28	壁穴1	弥生土器	高环	△9.4 △9.1	底部内外面黒化のため調整不明瞭。底部 内外面ハケ目。	密 良好	淡黄褐色へにい 黄色		
77 28	壁穴1	弥生土器	蓋台	— △3.4	内外面ナヂ。	密 良好	灰白色		
78 29	壁穴1	弥生土器	瓶形土器	底51.2 △47.6	内外面黒化のため不明瞭。内面ケズリ。	密 良好	内) 淡黄褐色 外) にい黄 褐色	外西底付近に墨跡	
79 31	土器蓋土坑 第1	土器蓋	瓶	24.2 △21.3	外面部に波状紋。外面ハケ目。内面ハ ケ目、ケリ。	密 良好	にい黄褐色	外側一部炭化物付	
80 33	土坑4	弥生土器	瓶	*13.0 △4.7	口縁端部に3条横模。外外側ハケ目。	密 良好	浅黄褐色		
81 38	土坑4	弥生土器	瓶形	底△6.4 △1.2	外面ミガキ。内面ナヂ。台付きの底部	密 良好	内) 灰白色 外) 赤褐色～暗 褐色	蓋の可能性もあり	
82 36	ピット群2	弥生土器	底形	底△10.2 △5.2	外面ミガキ。内面ケズリ。	密 良好	にい黄褐色～ 黑色	外面生垣あり	
92 41	溝6	土鉢	—	—	長さ36.6、幅2.75、厚さ2.05 (cm)。上部に 穿孔があり。内部空洞。透かし0.8mmほどの土玉 が内部にあり。内面に絞り腹あり。	密 良好	灰白色		
96 45	土坑12	弥生土器	底形	底△6.9 △7.3	外面調整不明瞭。内面ケズリ。	密 良好	内) にい黄 褐色 外) 淡黄褐色～ 灰色		
106 46	溝16	土師質土器	底形	*8.0 △4.8 2.0	底部回転糸切り。内外面回転ナヂ。	密 良好	淡黄褐色	外側付着	
106 46	溝16	土師質土器	底形	7.0 底△7.7 1.75	底部回転糸切り。内外面回転ナヂ。	密 良好	浅黄褐色		
107 46	溝16	土師質土器	底形	底△4.7 △0.8	底部回転糸切り。内面回転ナヂ。底部中 心部に穿孔。	密 良好	にい黄褐色～ 黑色		
133 49	土坑47	須恵器	瓶	△8.8	外面切き目。内面ミタケ模。	密 良好	灰色		
136 53	土坑44	土師質土器	皿	12.0 底△6.6 3.4	底部静止糸切り。内外面回転ナヂ。	密 やや良	浅黄褐色		
137 53	土坑44	土師質土器	皿	8.25 底△3.3 1.9	底部静止糸切り。内外面回転ナヂ。小窓 の皿。	密 やや良	浅黄褐色		
138 58	土坑44	土師質土器	皿	11.6 底△5.5 3.45	底部静止糸切り。内外面回転ナヂ。	密 やや良	浅黄褐色		
139 53	土坑44	土師質土器	皿	11.6 底△9.9 3.4	底部静止糸切り。内外面回転ナヂ。	密 やや良	浅黄褐色		
149 58	土坑44	土師質土器	皿	12.2 底△6.0 3.4	底部静止糸切り。内外面回転ナヂ。	密 やや良	浅黄褐色		
141 58	土坑44	土師質土器	皿	11.8 底△9.9 2.6	底部静止糸切り。内外面回転ナヂ。	密 やや良	浅黄褐色		
142 58	土坑44	土師質土器	皿	12.1 底△6.6 3.3	底部静止糸切り。内外面回転ナヂ。	密 やや良	浅黄褐色		
143 58	土坑44	土師質土器	皿	12.2 底△7.7 3.7	底部静止糸切り。内外面回転ナヂ。	密 やや良	浅黄褐色		
144 55	土坑44	土師質土器	皿	12.1 底△8.8 3.1	底部静止糸切り。板目底あり。内外面回 転ナヂ。	密 やや良	浅黄褐色		
145 53	土坑44	土師質土器	皿	12.2 底△9.0 3.5	底部静止糸切り。板目底あり。内外面回 転ナヂ。	密 良	浅黄褐色		
146 61	土坑35	弥生土器	甕	— △3.0	調整不明瞭。	密 良好	浅黄褐色		
147 62	ピット2	土師質土器	甕	底△4.0 △1.2	底部静止糸切り。内外面回転ナヂ。	密 良好	浅黄褐色		
148 66	溝15	弥生土器	甕	△3.9	内外面ナヂ。内面ケズリ。	密 良好	灰白色		
149 66	溝15	弥生土器	甕	— △3.9	外面調整内面ナヂ。	密 良好	灰白色		
150 74	溝8	須恵器	瓶	— △5.5	外面押き目。内面ミタケ模。	密 良好	内) 灰色 外) 淡黄褐色		
151 76	ピット4	弥生土器	瓶	*10.5 △8.2	外面削突?外面ハケ目。内面ケズリ。	密 良好	灰白色		
152 76	ピット4	弥生土器	瓶	*12.6 △8.8	外面調整不明瞭。内面ケズリ。	密 良好	浅黄褐色		
153 76	ピット4	弥生土器	甕	— △3.7	内外面調整不明瞭。	密 良好	褐色		

遺物記	種別	遺構名 出土位置	種 別	器種	口径 器高 (cm)	特 徴	胎 土成	色 調	備 考
154 76 ピット4	弥生土器	壺	一	△11.1	外面部状、點付突起。内面ケズリ。	良 良好	内)灰白色 外)淡黃褐色		
155 76 ピット4	弥生土器	壺?	△2.0 △2.5	*21.0 △2.5	内外面ナダ。	良 良好	内)浅黄色 外)黄褐色		
156 76 ピット4	弥生土器	器台	△5.6	△5.6	内外面剥離不明瞭。	良 良好	浅黃褐色		
157 76 ピット4	弥生土器	高环	△4.9	△4.9	内面部風化のため調整不明瞭。外面部ハケ目。	良 良好	浅黃褐色		
158 78 土坑49	土師質土器	鉢?	△3.7	△3.7	内面部ナダ。	良 良好	棕色		
159 79 日19西 土壙	弥生土器	壺	*14.0 △5.0	*14.0 △5.0	内外面ナダ。内面ケズリ。	良 良好	淡黄色	外面部蝶付	
160 79 H16トレン ナ内	弥生土器	高环	—	△7.6	内外面ナダ、ミガキ。	良 良好	淡黄色		
161 79 D 5南東	弥生土器	底部	△4.9 △3.1	△4.9 △3.1	外面部ミガキ。内面ケズリ。	良 良好	浅黃褐色	黒斑あり	
162 79 去探	土師質土器	壺	*13.4 △4.6	*13.4 △4.6	内面部回転ナダ。内面部当て具痕あり。	良 良好	内)灰黄色 外)灰色		
163 79 E 20西 表上	土師質土器	壺	8.1 △5.2 △1.7	8.1 △5.2 △1.7	底部回転糸切り。内外面回転ナダ。	良 やや良	に赤い黄褐色	外面部蝶付	
164 79 E 20西 表上	土師質土器	壺	*7.6 △4.5 △1.2	*7.6 △4.5 △1.2	底部回転糸切り。内外面回転ナダ。	良 良好	浅黃褐色		
165 79 E 3南東ト レンシナ内	土師質土器	壺	*8.6 △4.2 △1.6	*8.6 △4.2 △1.6	底部回転糸切り。内外面回転ナダ。	良 良好	棕色		
166 79 E 16西 表上	土師質土器	壺	△3.7 △1.9	△3.7 △1.9	底部回転糸切り。内面部ハケ目。内面部風化により不整健。	良 良好	灰褐色		
167 79 E 16西 表上	土師質土器	壺	△4.3 △0.6	△4.3 △0.6	底部回転糸切り。内面回転ナダ。	良 やや良	に赤い黄褐色		
168 79 E 16西 表上	土師質土器	壺	△3.6 △1.0	△3.6 △1.0	底部回転糸切り。内外面回転ナダ。	良 良好	に赤い褐色		
169 79 E 16西 表上	土師質土器	壺	△3.8 △0.6	△3.8 △0.6	底部回転糸切り。内面回転ナダ。	良 良好	棕色		
170 79 E 16西 表上	土師質土器	灯明根?	—	—	内面部に指印压痕。内面に工具痕あり。手くわの灯明根か。	良 良好	に赤い黄褐色		
171 84 F 9北東 褐色土	弥生土器	壺	*20.4 △4.1	*20.4 △4.1	内縁部に2条凹線。外面部ハケ目。	良 良好	灰白色～青褐色		
172 84 E 6北西 褐色土	弥生土器	底部	△5.8 △3.4	△5.8 △3.4	外面部ミガキ。内面ナダ。	良 良好	内)に赤い黄褐色 外)棕色～に赤い 青褐色		
173 84 E 7南東 褐色土	弥生土器	底部	△5.7 △3.5	△5.7 △3.5	外面部ミガキ。内面ケズリのちナダ。	良 良好	灰褐色		
174 84 E 17南西 褐色土	底部	壺	△6.4	△6.4	外面部ミガキ。内面当て具痕。	良 良好	内)灰褐色 外)青褐色		
175 84 H11南東 褐色土	上部下部	ほうろく	*34.2 △5.7	*34.2 △5.7	外面部ミガキ。外面部下半部細かいナダ。	良 良好	内)に赤い黄褐色 外)灰褐色～黑色	外面部蝶付	
176 84 F 9南西 褐色土	上部下部	鉢?	*28.6 △3.9	*28.6 △3.9	内面部ナダ。外面部下半部細かいナダ。ケズリ?	良 良好	棕色	七輪の蓋の可能性あり	
177 85 E 6北西 黒色土	兆牛土器	壺	*49.0 △4.7	*49.0 △4.7	口縁部周辺7条凹線。内外面ナダ。	良 良好	浅黃褐色	大型の蓋	
178 85 H19北西 褐色土	兆牛土器	壺	*11.4 △9.0	*11.4 △9.0	口縁部周辺7条凹線。内面ナダ。	良 良好	浅黃褐色		
179 85 F 11北東 黒色土	弥生土器	壺	*27.1 △3.8	*27.1 △3.8	口縁部周辺7条凹線。内面ナダ。	良 良好	浅黃褐色		
180 85 G 11北東 黒色土	弥生土器	壺	*20.3 △4.1	*20.3 △4.1	口縁部周辺7条凹線。内面ナダ。	良 良好	に赤い黄褐色		
181 85 H 19北西 黒色土	弥生土器	壺	*18.8 △4.8	*18.8 △4.8	口縁部周辺7条凹線。内面ナダ。	良 良好	内)灰褐色 外)青褐色		
182 85 F 11北東 黒色土	弥生土器	壺	*15.0 △3.6	*15.0 △3.6	口縁部周辺7条凹線。内面ナダ。	良 良好	灰白色		
183 85 F 9北東 黒色土	弥生土器	壺	*24.4 △8.2	*24.4 △8.2	口縁部周辺7条凹線。内面ナダ。	良 良好	灰白色～黑色		
184 85 F 9北東 黒色土	弥生土器	壺	*26.0 △5.5	*26.0 △5.5	口縁部周辺7条凹線。内面ナダ。	良 良好	灰白色		
185 85 G 11北東 黒色土	弥生土器	壺	*23.3 △3.8	*23.3 △3.8	口縁部周辺7条凹線。内面ナダ。	良 良好	浅黃褐色		
186 85 E 6北東 黒色土	弥生土器	壺	*26.4 △1.6	*26.4 △1.6	口縁部周辺7条凹線。内面ナダ。	良 良好	灰褐色		
187 85 D 5黒色土	弥生土器	壺	△5.1	△5.1	内面頬部脇部底に羽状文。外面部ナダ。内面ケズリ。	良 良好	棕色		
188 85 G 13南東 黒色土	弥生土器	壺	△4.6	△4.6	外面部皮状、縮結き底痕文。内面ハケ目。	良 良好	に赤い黄褐色		
189 85 H 20南東 黒色土	弥生土器	壺	—	△6.4	内面3条付突起。外面部ハケ目。内面ナダ、竹葉状の丁度痕?あり。	良 良好	内)に赤い褐色 外)に赤い黄褐色		
190 85 F 9北東 黒色土	弥生土器	壺	—	△5.0	外面部3条付突起。内面ナダ。	良 良好	灰褐色		
191 85 G 11北東 黒色土	弥生土器	壺	—	△4.8	口縁部周辺7条付突起。内面ナダ。	良 良好	内)に赤い黄褐色		
192 85 H 19北東 黒色土	弥生土器	壺	—	△3.6	口縁部周辺7条付突起。内面ナダ。	良 良好	灰白色		
193 85 F 9北東 黒色土	弥生土器	壺	*24.4 △8.2	*24.4 △8.2	口縁部周辺7条付突起。内面ナダ。	良 良好	灰白色～黑色		
194 85 F 9北東 黒色土	弥生土器	壺	*26.0 △5.5	*26.0 △5.5	口縁部周辺7条付突起。内面ナダ。	良 良好	灰白色		
195 85 G 11北東 黒色土	弥生土器	壺	*23.3 △3.8	*23.3 △3.8	口縁部周辺7条付突起。内面ナダ。	良 良好	浅黃褐色		
196 85 E 6北東 黒色土	弥生土器	壺	*26.4 △1.6	*26.4 △1.6	口縁部周辺7条付突起。内面ナダ。	良 良好	灰褐色		
197 85 D 5黒色土	弥生土器	壺	△5.1	△5.1	内面頬部脇部底に羽状文。外面部ナダ。内面ケズリ。	良 良好	棕色		
198 85 G 13南東 黒色土	弥生土器	壺	△4.6	△4.6	外面部皮状、縮結き底痕文。内面ハケ目。	良 良好	に赤い黄褐色		
199 85 H 20南東 黒色土	弥生土器	壺	—	△6.4	内面3条付突起。外面部ハケ目。内面ナダ、竹葉状の丁度痕?あり。	良 良好	内)に赤い褐色 外)に赤い黄褐色		
200 85 F 9北東 黒色土	弥生土器	壺	—	△5.0	外面部3条付突起。内面ナダ。	良 良好	灰白色～灰黃褐色		
201 85 D 5黒色土	弥生土器	壺	—	△34.3	内面ハケのちガタ。内面調整不明瞭。	良 良好	に赤い黄褐色	内面調整あり	

通 番 号	種 類	遺 構 名 出 土 位 置	種 別	器 種	口 徑 (cm)	特 徴	施 工 成	色 調	備 考	
									内) 黄灰色 外) に赤い褐色 ～橙色	
202	85	D5北東 黒色土	弥生土器	鉢	*21.4 底8.6 8.9	口縁端部に朱赤漆。腹部に3集團線。内外面ハケ日。外側ハケ日は粗緻。	密 やや良			
203	85	H10北東 黒色土	弥生土器	器蓋	*20.0 底17.0 10.0	内外面ナデ。	密 やや良	淡黄色		
204	86	H12北東 黒色土	弥生土器	鉢	*10.8 △3.5	外側剥皮欠? 内外面ナデ。	密 良好	淡黄色		
205	86	H19北東 黒色土	弥生土器	高杯	9.0 △2.5	芦茎模あり。外側丁寧なナデ。内面ミガ有。脚部の内側にはハケ目。环状底面に寄孔。	密 良好	淡黄色		
206	86	H14北西 黒色土	弥生土器	低脚環?	— △2.8	内外面風化のため剥離不明瞭。	密 やや良	内) 黄灰色 外) 淡黄褐色		
207	86	H20北西 黒色土	弥生土器	高杯	— △1.3	内外面風化のため剥離不明瞭。	密 良好	に赤い黄褐色		
208	86	H11南西 黒色土	弥生土器	高脚罐	— △5.4	外側ケ日。内側ケズリ。	密 良好	灰白色		
209	86	E5北東 黒色土	弥生土器	高脚罐	底△14.6 △3.9	外側回轉。透かしさり。外側ナデ。内面 ミガゼリ。	密 良好	黄灰色		
210	86	H21北東 黒色土	弥生土器	高脚罐	底△24.8 △6.8 半?	外側回轉。透かしさり。外側ナデ。内面 ミガゼリ。	密 良好	に赤い黄褐色		
211	86	E5北東 黒色土	弥生土器	底部	底△7.1 △4.0	外側ミガキ。内面指紋印痕。	密 良好	内) 淡黄色 外) 黄灰色		
212	86	F5北東 黒色土	弥生土器	底部	底△9.0 △6.0	外側ミガキ。内面ケズリ。	密 良好	淡黄色～ 灰白色		
213	86	L19北東 黒色土	弥生土器	底部	底△10.5 △3.8	外側ミガキ。内面ナデ? 工具痕あり。手 のつくり。	密 良好	褐色		
214	86	F9北東 黒色土	弥生土器	底部	底△8.5 △7.1	外側ミガキ。内面ケズリ。	密 良好	淡黄褐色		
215	86	F5南西 黒色土	弥生土器	底部	底△7.9 △2.9	高台付。内外面ナデ。	密 良好	に赤い黄褐色		
216	86	H11南西 黒色土	須恵器	底部	底△7.4 △1.3	底部に赤い漆。高台付。内外面回転ナ カ。	密 やや良	灰褐色		
217	86	G16北西 黒色土	須恵器	手裏	底△13.7 5.4	内外面回転ナデ。天井部14ほど反時計回 りの凹凸ナカゲリ。	密 良好	灰白色		
218	86	G11南西 黒色土	須恵器	身舟	*11.3 底△5.6 3.5	底部付近ヘカケナ? 内外面回転ナデ。	密 やや良	褐色		
219	86	G11南西 黒色土	須恵器	底部	底△5.6 △1.6	外側ケズリ。内面回転ナデ。	密 良好	灰褐色		
220	86	G12北西 黒色土	須恵器	腰	— △2.8	外側叩き目。内面ナデ。	密 良好	灰褐色		
221	86	G11北東 黒色土	須恵器	腰	— △5.0	外側叩き目。内面当て具痕。	密 良好	黄灰色		
222	86	F11北西 黒色土	須恵器	腰	— △6.4	外側皮伏状。	密 良好	灰褐色		
223	86	H19北西 黒色土	須恵器	蓋底部	底△7.0 △6.7	高台付。内外面回転ナデ。	密 良好	灰褐色		
224	86	H20北東 黒色土	土師質土器	直	底△5.0 △1.9	底部削除系切り。内外面回転ナデ。	密 良好	灰白色		
225	86	H20北東 黒色土	土師質土器	直	底△4.4 △1.0	底部削除系切り? 内外面回転ナデ。	密 良好	に赤い橙色		
226	86	H20北東 黒色土	土師質土器	直	底△4.0 △1.1	底部削除系切り? 内外面回転ナデ。	密 良好	灰白色		
227	86	C17北東 黒色土	土師質土器	直	底△3.2 △1.0	底部削除系切り。内外面回転ナデ。	密 良好	灰白色		
228	86	H20北東 黒色土	土師質土器	直	*35.8 △5.8	内外面ナデ。一部ケズリ? 気泡の器表面 は焼けている。	密 良好	に赤い橙色	保付着	
229	86	G11北東 黒色土	土師質土器	鉢	— △3.0	外面2条化深。内外ナデ。	密 良好	内) 淡黄色 外) 灰色～淡黄色	背中上器の可能性あり。	

表3 横本漆原山遺跡出土陶磁器一覧

(註) 復元したものはや、残存部は△を数値の前に付している。

(註) 青色・白銀については、『國立歴史民俗博物館資料収集報告書4 日本出土の貿易陶磁』1993を分類の基準とし、青花については、小野正敏1982「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」、『貿易陶磁研究』No.2を分類の基準とした。

通 番 号	種 類	遺 構 名 出 土 位 置	種別	器種	数量 (cm)		施 工 成	色 調	製作地	製作年代	備 考
					口径	底径					
83	96	ピット群2	陶器 蓋	—	身△3.5	△1.6	明治褐色	内外面風化、沙目跡あり。	昭和系	17世紀	
84	96	ピット群2	陶器 火人	—	—	△1.6	灰褐色	外側剥毛日、内面1縁部下塗地。	昭和系	17・18世紀	
85	96	ピット群2	陶器 蓋	—	—	△0.7	灰オーブー色	内面無釉、外側無釉、物は灰オーブー色。	昭和系	近世	

通 物 編	種 別	遺 跡 名 出土地点	種 別 器種	数量 (cm)			胎土色調	文様・形態・技法上の特徴	製作地	製作年代	備 考
				口径	底径	器高					
86 36	ピット群2	陶器 窯?	瓶	—	—	△3.1	白色	内面暗赤、口部周辺を折り返して丸く收める。口部を渡し外面にオーリーブ褐色の輪を施す。	肥前系	近世	
87 40	満6	陶器 窯?	壺	幸16.2	—	△4.9	灰オリーブ色	内面暗赤、口部周辺を折り返して丸く收める。口部を渡し外面にオーリーブ褐色の輪を施す。			
88 40	満6	青磁 窯	瓶	—	—	△2.7	灰白色	内面刷毛文。	魏墓窯	中世前期	1類
89 40	満6	陶器 窯	壺	幸12.2	—	△2.3	にぼい黄褐色	体部下部露胎、溝縁足、口は灰オリーブ色。	肥前系	17世紀前半	
90 40	満6	陶器 窯	壺	—	—	八3.8	赤褐色土	内面刷毛目。	肥前系	17・18世紀	
91 40	満6	青磁 窯	瓶	—	—	△2.3	灰色	輪邊介文。	魏墓窯	14世紀	B2類
93 43	土坑12	陶器 窯	壺	幸12.6	幸4.7	3.8	浅黄褐色	体部下部露胎、乾の目輪割ぎ、内面鋼鉄輪胎に外側透明白地を掛けける。	肥前系	17世紀後半以降	
94 43	土坑14	青磁 窯	瓶	—	—	△3.1	灰白色	輪邊弁文。	魏墓窯	13世紀	B0類
96 44	土坑12	陶器 窯	壺	—	—	△1.9	褐色	内外面に灰オリーブ色の輪を施す、一部胎がわかっていないところがある。	肥前系	近世	
97 44	土坑12	陶器 窯	壺	—	—	八0.7	にぼい黄褐色	内外面に灰オリーブ灰色の輪を施す。	肥前系	近世	
98 44	七坑12	陶器 窯	壺	—	—	△4.4	にぼい赤褐色土	铁胎を施す。		近現代	
100 44	土坑12	陶器 窯	壺	—	—	△3.0	灰黄褐色	内外面刷毛目、端反り。	肥前系	17世紀後半	
101 44	土坑12	陶器 窯	壺	—	—	△2.1	明赤褐色	胎上に砂を多く含む、指目の摩耗が著しい。			
102 44	土坑12	磁器 窯	壺	—	—	△11.6	灰白色	染付。口縁部は内側にやや弯曲して立ち上がる。	肥前系	18世紀	
103 44	土坑12	陶器 窯	壺	—	—	△2.3	暗褐色	内外面施釉、外側刷毛目。	肥前系	17・18世紀	
104 45	満12	磁器 窯	壺	9.4	4.3	2.4	白色	色斑。花弁形が上絵で描かれる。赤・黄・緑・白の他の真が使用される。	肥前系	現代	
106 46	満16	陶器 窯	壺	—	幸4.2	△2.16	にぼい植色	体部下部露胎、跡目跡あり。	肥前系	17世紀	
109 46	満10	磁器 窯	壺	—	幸8.4	△1.45	灰白色	中腹青花、捺花文。	中国青花	16世紀前半	B2類
110 47	満16	磁器 窯	壺	13.6	7.4	2.85	にぼい植色	染付。内側面に唐草文様を描き、見込みに手描きによる五瓣花文。蛇の目割ぎの後に砂を撒く。光付に砂付。	肥前系	18世紀	
111 47	満16	磁器 窯	壺	13.2	7.6	3.25	白色	染付。外側面に線描きの唐草文、内側面に花・唐草文様を描き、見込みにコニャック印刷による五瓣花文。蛇の目割ぎの後に砂を撒く。	肥前系	18世紀	
112 47	満16	磁器 窯	壺	幸13.2	7.6	3.1	灰白色	染付。内側面に花・唐草文様を描き、見込みに手描きによる五瓣花文。蛇の目割ぎを施す。蓋付に砂付。	肥前系	18世紀	
113 47	満16	磁器 窯	壺	幸14.4	幸 9.7	3.45	白色	染付。内側面に花・唐草文様を描き、見込みに手描きによる五瓣花文。蛇の目割ぎを施す。蓋付に砂付。	肥前系	18世紀	
114 47	満16	磁器 窯	壺	—	8.8	△1.7	白色	染付。内側面施釉、見込みに海・山・建物を描く。			
115 47	満16	磁器 窯	壺	11.2	—	△6.2	灰白色	染付。内側面に輪郭、外側に牡丹文様。高台に「壇」字。	肥前系	19世紀前半	広東窯
116 47	満16	磁器 窯	壺	12.9	8	4.2	灰白色	染付。外側に輪郭書きの唐草文、内側面に朱・青の輪郭書きと捺す。見込みに手描きの五瓣花文。高台に「壇」字。	肥前系	18世紀	
117 47	満16	磁器 窯	壺	幸13.0	8	4.1	灰白色	染付。内側面に輪郭、外側に唐草文。	肥前系	18世紀	

遺物 No	種別 分類	遺構名 出土地点	種別 器種	数量(cm)			釉色調	文様・形態・技術上の特徴	製作地	製作年代	備考
				口径	底径	高さ					
118 47	溝16	硬器 皿	—	9.4	3.5	2.8	灰白色	付。内側面、外側に草文様、見込みにシニック印押による五弁花文。両台内に貼あり、内側に黒山眞の墨書き。(マ?)あり。	肥前系	18世紀	
119 47	溝16	硬器 皿	—	—	7	△5.0	白色	付。内側に圓線、外側に文様、地焼きを施す。見込みに文様あり。	肥前系	19世紀前半	広東製
120 47	溝16	硬器 皿	—	—	6.1	5.5	灰白色	付。内側に圓線、外側に文様、見込みに文様あり。	肥前系	19世紀前半	広東製
121 47	溝16	硬器 皿	幸9.7	5.5	5.6	灰白色	付。内側に圓線、外側に文様、見込みに「寿」貼。	肥前系	19世紀前半	広東製	
122 47	溝16	硬器 皿	—	—	△5.2	△5.8	白色	付。内側に圓線、外側に文様、見込みに文様あり。	肥前系	19世紀前半	広東製
123 47	溝16	硬器 皿	—	—	△6.0	△4.1	白色	付。外側・見込みに文様あり。燒きを施す。	肥前系	19世紀前半	広東製
124 47	溝16	硬器 皿	—	—	—	△2.3	灰色	付。内側に圓線、外側・見込みに文様。	肥前系	19世紀前半	広東製
125 47	溝16	硬器 皿	—	—	4.8	△4.6	灰白色	付。内側に圓線、外側・見込みに文様あり。裏付に砂付書き。地焼きを施す。高台に虹紋があるか。	肥前系	19世紀前半	広東製
126 47	溝16	硬器 皿	—	—	4.2	△3.5	灰色	付。内側に圓線、外側・見込みに文様あり。	肥前系	18世紀以降	小丸窯
127 47	溝16	硬器 皿	—	—	△3.8	△3.8	灰白色	付。内側に圓線、外側・見込みに文様あり。焼締めを施す。	肥前系	18世紀以降	小丸窯
128 47	溝16	硬器 皿	—	—	△6.8	△5.5	灰白色	付。内側に圓線、外側に文様あり、燒締めを施す。	肥前系	19世紀前半	広東製
129 47	溝16	硬器 皿	幸8.8	幸4.0	3.5	—	淡褐色	付。高台に圓線、内側に文様あり。口縁は凹向で立ち上がる。	京焼風 器		
130 47	溝16	硬器 皿	幸8.6	幸3.7	—	△2.7	灰白色	付。玉縁状11瓣、全面施釉、焼成やや歪い。			
131 47	溝16	陶器 皿	—	—	△5.0	△5.1	灰色	外側に文様。	肥前系	18・19世紀	角付染付
132 47	溝16	陶器 皿	—	—	幸4.0	△3.6	灰色	外側に文様、付に砂付。	肥前系	18・19世紀	陶器染付
134 49	土坑 46・47	硬器 皿	—	—	—	△3.7	灰白色	付、一重の綱目文。	肥前系	17世紀後半	
135 50	ピット列3	硬器 皿	—	—	—	△2.4	灰白色	付。口縁部内側に圓線が返る。	肥前系	近世	
170 79	表土層	陶器 皿	—	幸4.0	△1.6	—	にぼい黄褐色	体部下部剥落、砂付跡あり。	肥前系	17世紀	
171 79	H19南西 表土層	陶器 皿	幸13.9	—	—	△2.7	にぼい褐色	白色の物を施釉、蛇の目剥落を施す。体部下部は落胎。	肥前系	17世紀以降	185と同 一個体
172 79	表土層	陶器 皿	—	幸4.0	△1.6	—	褐灰色	砂目跡が残る。高台が非常に低く、体部下部は落胎。にぼい黄褐色の釉色。高台内に落進痕がある。			
173 79	表土層	陶器 皿	—	—	—	△4.5	暗赤褐色	備前産推定の江戸口部、突堤を貼り付けている。	備前	15世紀	
174 79	表土層	陶器 皿	—	—	—	△3.6	灰色	玉縁状の口縁。難は暗オリーブ灰色。			
175 79	E6南東 表土層	陶器 皿	—	—	—	△2.7	にぼい黄褐色	にぼい赤褐色の難に黒色がまばらに付する。	中国	中世	天日茶碗
182 84	Y9南西 褐色土層	陶器 皿	—	幸4.9	△2.3	—	にぼい黄褐色	付。内側に圓線、外側に施漆と文様あり。内側に施漆具脚と思われる鉢形な剥落状況あり。			
183 84	Y9南西 褐色土層	陶器 皿	—	幸6.0	△1.6	—	灰白色	付。高台内に圓線あり。世付に沙付。	肥前系	近世	
185 84	D5北西 褐色土層	陶器 皿	—	—	—	△2.5	にぼい褐色	白の物を施釉、蛇の目剥落を施す。体部下部は落胎。	肥前系	17世紀以降	171と同 一個体
186 84	褐色土層 灯明皿	陶器 皿	幸7.6	—	—	△2.0	にぼい褐色	全面施釉、外側無釉。		近現代	
230 86	H15北西 褐色土層	陶器 皿	—	—	—	△3.5	灰色	内側に高いハケ目。外側に細かいハケ目。内側被色。		中近世	
231 86	I20南西 黑色土層	陶器 皿	—	幸12.4	△2.0	—	明赤褐色	胎土に砂を多く含む、擦目の摩耗が著しい。		101と類似	
232 86	H10南西 黑色土層	陶器 皿	—	—	—	△4.4	にぼい褐色	擦目の摩耗が著しい。		中近世	

遺物 番号	種類	遺構名 出土土地点	種別 器種	数量 (cm)			釉土色調	文様・形態・技術上の特徴	製作地	製作年代	備考
				口径	底径	器高					
233 86	H10北東 黒色土器	破器 皿	盤15	Φ7.2	4.0	灰白色	朱付。内側面に文様、見込みに手描きのコショウタ形印、外側面に線描きの唐草文、器台内に「祇」款。貴付に彩付器。	肥前系	18世紀		
234 86	H20北東 黒色土器	破器 皿	11.4	6.6	6.8	白色	染付。内外面・見込みに文様。	肥前系	19世纪前半	広東製	
235 86	I120北東 黒色土器	破器 皿	幸11.4	5.8	6.6	白色	染付。外側、見込みに文様。陶刻を施す。	肥前系	19世纪前半	広東製	
236 86	H20北東 黒色土器	破器 皿	幸13.7	Φ7.6	3.9	灰白色	染付。内側面に文様。	肥前系	近世		
237 86	H10北東 黒色土器	破器 皿	—	Φ3.2	△3.3	灰白色	朱付。外面に文様、内面無文、豊間に珍付有。	肥前系	18世纪以降	小丸窯	
238 86	H20北東 黒色土器	破器 皿?	—	Φ5.3	△4.5	灰白色	染付。内面無文。	肥前系	近世		
239 86	H17南西 黒色土器	破器 皿	—	△1.4	—	白色	底部露胎。	中国?			
240 86	H17南西 黒色土器	破器 皿	—	Φ5.0	△0.9	灰オリーブ色	底部露胎。	美濃	中世		
241 87	H21北東 黒色土器	青斑 碗	—	—	△1.4	灰白色	高台露胎。	越後窯	中世		
242 87	G 9北東 黒色土器	破器 皿	—	—	△2.4	褐灰色	外部露胎、内面無文。	肥前系	17~18世紀		
243 87	I20南西 黒色土器	白模 碗	—	—	△2.8	灰白色	内面に圓錐あり。	中国	中世		
244 87	I20北東 黒色土器	青模 碗	—	—	△2.7	灰白色	輪廻舟文。	能登窯	14世纪	B2類	

表4 橋本漆原山跡出土石器一覧

遺物 番号	縁図	遺構名	出土位置	器 種	法量 (最大長×最大幅×最大厚) (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
S 4 19	堅穴居1	打製石片			14.0×6.9×3.4	496	安山岩	刀部は刃刃
S 5 19	堅穴居1	剥片			1.5×1.85×0.245	0.7	綠色片岩	
S 6 41	酒6	敲石			10.0×5.65×2.85	285	安山岩	断面削平。
S 7 48	酒16	敲石			13.95×6.2×1.85	274	粘板岩	表面に「尚尚此造石」の文字が刻まれている。光端部欠損。
S 16 79	H14北西 売塙	磨石			13.5×10.4×5.7	1000	安山岩	真と表面に作業面。
S 38 84	E 6北東 黒色土	不明石器			17.3×15.7×5.5	1790	角閃岩	刃端のようなものか?周辺欠損。
S 39 87	D 5北東 黒色土	石鏟			3.75×2.23×0.42	1.98	黑曜石	
S 40 87	I 10北西 黒色土	石鏟			2.85×2.55×0.6	2.815	黑曜石	先端部欠損。
S 41 87	G 10南内 地山直上	石核			5.9×5.5×1.5	29.75	黑曜石	
S 42 87	F 10南西 地山直上	加工度のある剥片			3.2×3.15×1.0	8	玉髓	
S 43 87	G 11北東 黒色土	不明石器			6.5×6.7×1.6	97.6	チャート	表面、裏面それぞれに擦痕あり。切縫部を面取り。両端部欠損。
S 44 87	E 6 黒色土	敲石			8.05×6.8×6.2	438	安山岩	球形
S 45 87	I 10南東 黒色土	敲石			4.8×3.45×0.65	21.5	粘板岩	
S 46 87	I20南西 黒色土	不明石器			4.3×1.2×0.365	3	安山岩	表面、裏面それぞれに擦痕(柱子細)あり。切縫部を面取り。
S 47 88	G 17北西 黒色土	敲石			9.9×7.2×4.8	490	安山岩	表面、側面それぞれに擦痕あり。
S 48 88	G 12南東 黒色土	敲石			11.5×16.2×4.7	1045	安山岩	裏面は1面。

表5 橋本漆原山遺跡出土金属器一覧

遺物No.	探査	遺構名 出土位置	器種	法量(最大長×最大幅×最大厚)(cm)	重量(g)	材質	備考
F 1	19	壁穴伴1	ヤリガシナ?	4.3×1.05×0.45	4	鉄	木質残存。両端欠損。
F 2	26	テラス3	鉄錐	5.5×3.5×2.75	58	鉄	断面丸方形
F 3	32	堆塚地2	ヤリガシナ	3.9×1.0×0.5	18	鉄	F 4と同一個体。両端欠損。
F 4	32	堆塚地2	ヤリガシナ	3.7×1.0×0.5	7	鉄	F 3と同一個体。両端欠損。
F 5	48	溝16	鉄錐	7.9×5.9×3.5	172	鉄	断面U字形
F 6	49	土坑48	針	5.6×1.7×1.3	14	鉄	下端部欠損。
F 7	60	土坑31	包丁	22.35×4.6×0.55	73	鉄	木質残存。
F 8	76	ピット4	板状鐵器	3.3×1.9×0.45	4	鉄	両端欠損。
F 9	79	D 5 北西 表土	模	4.6×3.4×1.2	20	鉄	下端部欠損。
F 10	84	H18南東 褐色土	不明全周製品	直径0.9cmの球形	11	鉄?	
F 11	87	F 19南西 褐色土	板状器蓋	復元長5.4×1.95×0.75	23	鉄	切削している。両端欠損。
F 12	87	H20北西 黒色土	筒管	18.15×1.05×0.85	23	銅	部欠損。

表6 橋本漆原山遺跡出土古銭一覧

(註) 復元したものは△、残存値は△を数値の前に付している。

遺物No.	探査	遺構名 出土位置	錢名	初鑄年	時代	徑(cm)	重さ(g)	備考
M 1	55	土坑44	洪武通寶	1368年	明	2.4	2.3	裏面に大麻紙が付着。一文銭、複書。
M 2	55	土坑44	治平通寶	1068年	北宋	△2.3	0.3	複書
M 3	55	土坑44	元豐通寶	1078年	北宋	2.4	0.5	複書
M 4	55	土坑44	開元通寶	845年	唐	△2.4	0.8	複書
M 5	55	土坑44	洪武通寶	1368年	明	2.5	3.5	2枚重ねである。複書
M 6	55	土坑44	開元通寶	845年	唐	△2.1	0.7	
M 7	55	土坑44	不明	—	—	2.4	0.8	
M 8	55	土坑44	元豐通寶?	1078年?	北宋	2.3	1.0	
M 9	55	土坑44	政和通寶	1111年	北宋	△2.1	2.6	M10と重なる。複書
M 10	55	土坑44	洪武通寶	1368年	明	2.3	—	M11と重なる。複書
M 11	55	土坑44	洪武通寶	1368年	明	2.4	0.7	複書
M 12	79	表土	寛永通宝	1657年	江戸	2.4	2.4	
M 13	79	D 5 表土	寛永通寶	1657年	江戸	2.5	3.5	
M 14	84	H16北西 褐色土	寛永通寶	1657年	江戸	2.4	3.3	
M 15	84	E 8 北東 褐色土	寛寧元寶 大祐通鑄	1068年	宋	2.4	5.4	2枚重ねである。
				1089年		2.4		

表7 橋本漆原山遺跡出土五輪塔一覧

(註) 残存値は△を数値の前に付している。

遺物No.	探査	遺構名 出土地点	種別	法 量		石材	備 考
				幅 (cm)	高さ (cm)		
S 1	16	土坑3	木輪	28.4	16.9	15.0	角閃石 安山岩
S 2	16	土坑3	火輪	31.2	17.1	20.0	角閃石 安山岩
S 3	16	土坑3	火輪	35.3	23.5	25.0	角閃石 安山岩
S 8	48	溝16	空瓶輪	15.7	22.6	4.8	角閃石 安山岩
S 9	48	溝16	空瓶輪	16.3	23.1	6.0	角閃石 安山岩
S 10	49	土坑47+48	空瓶輪	17.5	19.4	3.9	角閃石 安山岩
S 11	50	ピット列3	空瓶輪	14.8	△19.4	3.8	角閃石 安山岩
S 12	58	積石1	空瓶輪	△14.0	20.1	23.0	角閃石 安山岩
S 13	58	積石1	堆輪	33.5	21.1	29.5	角閃石 安山岩

遺物名	種類	遺構名 出土地点	種別	測量			石材	備考
				幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (kg)		
S14	58	積石1	火輪	34.5	21.9	29.5	角閃石 安山岩	加工痕あり。
S15	58	積石1	埴輪	33.0	22.0	36.5	角閃石 安山岩	加工痕あり、上面中央に17cm四方の方形の抉りあり。
S16	89	H18北東 表土層	空風輪	19.7	26.9	9.1	角閃石 安山岩	突起あり、新面扁平、はざは長い。
S18	80	H18南東 表土層	空風輪	17.6	21.0	6.0	角閃石 安山岩	突起なし、新面扁平、はざは短い。
S19	80	H18南東 表土層	空風輪	18.1	23.5	6.0	角閃石 安山岩	突起あり、新面扁平、はざは短い。
S20	89	H18南東 表土層	空風輪	17.8	24.4	7.0	角閃石 安山岩	上面欠損、新面扁平、はざは短い。
S21	89	表土層	空風輪	14.0	19.7	2.5	角閃石 安山岩	突起あり、新面扁平、はざは短い。
S22	80	H18北東 表土層	空風輪	21.5	30.0	16	角閃石 安山岩	突起あり、新面円形、はざは短い。
S23	81	表土層	空風輪	17.5	27.3	7.5	角閃石 安山岩	突起あり、断面円形、はざは短い。
S24	81	H18南東 表土層	空風輪	17.8	15.8	7.0	角閃石 安山岩	突起なし、断面円形、はざは長い。
S25	81	表土層	空風輪	15.9	△17.4	3.9	角閃石 安山岩	突起なし、断面円形、下部半分は欠損。
S26	81	H18南東 表土層	空風輪	17.3	25.3	8.6	角閃石 安山岩	突起あり、断面円形、はざの大部分は欠損。
S27	81	表土層	空風輪	14.4	17.2	2.3	角閃石 安山岩	突起あり、断面円形、はざは短い。
S28	81	H18南東 表土層	空風輪	16.1	△15.4	3.0	角閃石 安山岩	上部半分欠損、新面円形、はざは短い。
S29	81	H17北東 表土層	火輪	35.3	24.5	33.2	角閃石 安山岩	加工痕あり。
S30	82	表土層	水輪	32.0	18.6	23.0	角閃石 安山岩	加工痕がわざかに残る。
S31	82	表土層	水輪	30.0	19.4	22.2	角閃石 安山岩	加工痕が残る。
S32	82	表土層	水輪	21.5	14.7	8.0	角閃石 安山岩	加工痕がわざかに残る。
S33	82	表土層	埴輪	30.8	18.0	28.1	角閃石 安山岩	加工痕あり。
S34	82	表土層	埴輪	29.5	11.7	11.0	角閃石 安山岩	欠損が大きい、加工痕が残る。
S35	83	表土層	埴輪	30.0	15.7	21.0	角閃石 安山岩	加工痕あり。縁辺に平滑面あり。
S36	83	表土層	墓石	18.7	49.3	30.7	角閃石 安山岩	裏打き15.8cm、正面に「妙見慈女」右正面に「卯八月・七日」左側面に「天保二年」挽あり。
S37	84	H17南東 表土層	火輪	27.5	16.7	15.2	角閃石 安山岩	加工痕あり。
S49	88	G17南東 黒色土	空風輪	15.7	24.5	5.8	角閃石 安山岩	突起あり、新面扁平、はざは短い。
S50	88	H17南西 黒色土	空風輪	14.9	19.3	2.7	角閃石 安山岩	突起あり、新面扁平、はざは短い。
S51	88	H17南西 黒色土	空風輪	18.9	22.8	7.5	角閃石 安山岩	突起なし、新面円形、はざは欠損。
S52	88	G16北西 黑色土	空風輪	18.3	26.3	6.5	角閃石 安山岩	突起あり、新面円形、はざは長い。
S53	89	G16北東 黑色土	空風輪	14.8	21.8	4.5	角閃石 安山岩	突起あり、新面円形、はざは長い。
S54	89	H17南西 黑色土	空風輪	17.1	22.3	15.6	角閃石 安山岩	突起なし、新面円形、はざは短い。
S55	89	G16北東 黑色土	空風輪	15.4	24.8	5.8	角閃石 安山岩	突起あり、新面円形、はざは短い。
S56	89	G17南東 黑色土	空風輪	15.7	20.4	4.5	角閃石 安山岩	突起なし、新面円形、はざは短い。
S57	89	G16北西 黑色土	火輪	26.8	14.0	14.0	角閃石 安山岩	下面是平滑である。
S58	89	G16南東 黑色土	火輪	23.7	13.0	8.9	角閃石 安山岩	加工痕あり。

表8 橋本徳道遺跡出土土器・土製品一覧

遺物 名	種類	遺物 名	種類	特 徴	施 工 度	色 調	備 考
2 93	道路状遺構2	須恵器	壺	△2.9 △3.2	内面當て良底。外面叩き痕。	密 良好	灰色
7 95	上基層1	弥生土器	壺	*17.0 △6.4	口縁端部削り目あり。	密 良好	灰黄色
8 95	土基層1	弥生土器	壺	*6.4 △6.4	側面凹。縦断に「S」字の凹線文。穿孔あり。	密 良好	内) 灰褐色 外) 灰褐色
9 95	土基層1	弥生土器	壺	*16.9 △3.1	口縁端部に2条凹隙。全体的に肩手のつくり。	密 良好	内) に赤褐色 外) 浅黄褐色
10 95	土基層1	弥生土器	壺	*47.5 △2.5	口縫端部に3条の吹拂。	密 良好	に赤い黄色
11 95	土基層1	弥生土器	壺	*14.8 △5.2	外腹ハケ目。内面ナデ。全体的に薄手のつくり。	密 良好	に赤い黃褐色
12 95	土基層1	弥生土器	壺	*13.8 △7.2	口縫端部外側にナゲによる凹み。内面ハケナダ。	密 やや粗	内) 赤褐色~ 外) に赤い黄色
13 95	土基層1	弥生土器	壺	*14.8 △6.6	口縫端部にナゲによる凹み。外腹ハケ目。内面ハケ目。	密 良好	浅黄褐色
14 95	土基層1	弥生土器	壺	*23.1 △14.8	側面に刻出突起。口縫部外側に3条の沈窓。内面ハケ目。頂部圧痕。	密 良好	に赤い黃褐色~ 灰褐色
15 95	土基層1	弥生土器	底部	*5.0 △4.0	外腹ハケ目。	密 良好	内) に赤い褐色 外) 赤褐色~褐色
16 95	土基層1	弥生土器	底部	*7.0 △3.9	外腹ハケ目。内面指捺痕。	密 良好	浅黄褐色
17 95	上基層1	弥生土器	底部	*7.7 △5.9	外腹ハケ目。	密 やや粗	に赤い褐色
18 95	上基層1	弥生土器	壺	△8.6	覗跡2条吹拂。外腹ハケ目。	密 良好	灰黄色
19 95	土基層1	弥生土器	壺	△8.8	頸部2条突帯。外腹ハケ目。	密 良好	内) 灰褐色~褐色 外) 灰褐色
20 95	土基層1	弥生土器	壺	△16.8	外腹3条の突起穴。底部外側削り目あり。外腹ハケ目。	粗 良好	に赤い黃褐色~ 桜色
21 95	土基層1	弥生土器	壺	*34.2 △3.9	口縫端部3条吹拂? 内外削風化の為開窓不規則。	密 良好	明黄色
22 95	土基層1	弥生土器	壺	△2.6	口縫外側4条の沈窓。	密 良好	内) 浅黃褐色 外) 浅黃褐色~褪灰色
23 95	上基層1	弥生土器	高环	—	側面凹かしあり。外腹4条の凹線文。	密 良好	に赤い黃褐色~ 灰褐色
24 95	上基層1	弥生土器	壺	△5.5	側面に2条の突起。外腹ハケ目。内面ハケ目。	密 良好	に赤い黃褐色~ 灰褐色
25 97	ピット1	弥生土器	壺	△4.0	口縫端部2条削目。肩部に貼り付け突起。外腹ハケ目。	密 良好	褐色
26 97	ピット1	弥生土器	壺	*27.2 △2.8	口縫端部に3条の沈窓。一部に粘土を貼り付け付ける。	密 良好	浅黄褐色
27 97	ピット1	弥生土器	壺	△7.3	側面に2条の突起。外腹ハケ目。内腹指捺痕。	密 良好	に赤い黃褐色
28 97	ピット1	弥生土器	高环	*24.4 △4.0	口縫部は直角で直線的に開く。全体的に薄手のつくり。	密 良好	浅黄褐色
29 98	土坑2	弥生土器	壺	*9.3 △4.2	口縫端部1条削目。口縫下端部外側に削目。外腹ハケ目。	密 良好	に赤い褐色
30 98	土坑2	弥生土器	壺	△2.5	口縫端部1条削目。薄手のつくり。	密 良好	浅黄褐色
31 99	溝5	土製品?	把手	要長5.2	側面、断面扁平。土器本体部分一部あり。	密 良好	浅黄褐色
32 99	溝5	須恵器	壺?	△3.1	外腹竹管状工具による鉢底。凹窪状の底みあり。	密 良好	灰白色
33 99	溝5	須恵器	壺	△3.8	外腹叩き目。内腹当て貫底。2枚の鋸片が接着。外腹同士が接着している。	密 良好	内) 灰白色 外) 黄褐色
34 99	溝5	土製品?	—	—	径1.2cm、厚さ5mmの円形の土製品? 中心部に侵食6mmの穴があいている。	密 良好	灰褐色
35 99	溝6	上下?	—	—	径3.7cm、厚さ2.4cmほどの円形の土製品。中心部に侵食6mmほどの穴があいている。	密 良好	浅黄褐色
36 100	溝12	須恵器	壺	△4.1	外腹略干吹き目。内腹ハケ状の平行条線。	密 良好	灰色
37 108	溝11	弥生土器	高环	*15.7 △2.1	径3mm程度の穴が2つ。外腹風化のため不規則。内腹ハケ目。	やや密 良好	淡黄色
38 112	自然流路5	須恵器	耳舟	△3.7	内外腹凹凸ナデ。	密 やや粗	灰色
39 113	T21南西 桜色土	土師質土器	壺	*7.6 1.8	内外腹凹凸ナデ。外腹1条沈窓。底部回転切り。	密 良好	棕色
40 113	J26南西 桜色土	須恵器	高台付壺	△6.2 △2.6	内外腹凹凸ナデ。	密 良好	灰色
41 113	I25南西 桜色土	土師質土器	高台付壺	△6.3 △1.8	内外腹ナデ。	密 良好	棕色

遺物 No.	博団	遺構名 出土位置	種別	器種	口 径 高 度	特 徴	施 工 成 形	色 調	備 考
44	113	I 21南西 黒褐色土	土師質土器	鉢?	底 径 △9.0 △8.1	内外面ナメ。	粗	内)灰白色 外)黒色	
48	114	I 22南東 黒褐色土	勞生土器	壺	*22.2 △6.0	口縁端部に4条の凹線。腹部外側2条の貼付穴附。外面一部ハケ目。	密 良好	黄灰色	
59	114	I 22南東 黒褐色土	勞生土器	壺	*19.2 △2.1	口縁端部3条凹線。腹部外側付穴等1点。	密 良好	内)淡黃褐色～ 灰灰色 外)淡黃褐色～ 淡青褐色	
50	114	I 22南東 黒褐色土	勞生土器	壺	*16.0 △2.2	口縁端部3条沈線のちに刻目。	密 良好	内)にい青褐色 外)灰黃褐色	
51	114	I 22北西 黒褐色土	勞生土器	壺	△1.5	口縁端部3条沈線のちに粘土貼り付け。	密 良好	暗灰褐色	
52	114	J 30南西 黒褐色土	勞生土器	壺	△1.8	口縁端部4条沈線のちに円形浮文。	密 良好	暗赤褐色～黒褐色	
53	114	I 22南東 黒褐色土	勞生土器	壺	△2.2	口縁端部3条沈線のちに刻目。刻目の間隔狭い。	密 良好	淡黃褐色～褐灰色	
54	114	I 21南西 黒褐色土	勞生土器	壺	△6.2	口縁端部3条沈線。腹部外側5条沈線。内面波状文。	密 良好	内)にい青褐色 外)黒色	
55	114	I 22南東 黒褐色土	勞生土器	壺	△8.7	刻目4条の凹線。外面ハケ目。内面無模或压痕。ケズリ。	密 良好	内)灰黄色 外)にい青褐色	
56	114	H 21北西 黒褐色土	勞生土器	壺	△10.4	刻目3条の凹線。外面ハケ目。内面ハケ後ケズリ。	密 やや良	赤褐色～赤灰色	
57	114	I 22南東 黒褐色土	勞生土器	壺	△5.2	刻目4条の貼付突起。内外面ナメ。	密 良好	黄褐色	
58	114	I 22南東 黒褐色土	勞生土器	壺	△2.7	口縁端部3条沈線のちに刻目。刻目の間隔は狭い。底部貼付突起。	密 良好	棕色	
59	114	I 23北東 黑褐色土	土師質土器	罐	*29.8 △4.7	外側ハケ目。	密 良好	棕色	
60	115	T 21北西 黑褐色土	須恵器	壺	△3.9	外側叩き目。内面尚て具痕。2枚の剥片が接着。外側土司が接着している。	密 良好	内)黄褐色 外)暗灰褐色	
61	115	T 21北西 黑褐色土	須恵器	壺?	△1.8	外側叩き目から引き出。内面尚て具痕。2枚の剥片が接着。外側土司が接着している。	密 良好	灰白色	内面に自然釉
62	115	J 23南東 黑褐色土	須恵器	壺	△10.5	外側落子状叩き目。内面ハケ状の平行溝線。	密 良好	灰色	
63	115	T 24南東 黑褐色土	須恵器	壺	△9.7	外側叩き目。内面尚て具痕。	密 良好	灰色	内面に自然釉
70	115		土製品	人形?		外側ハケ目。	密 良好		

表9 橋本德道遺跡出土陶磁器一覧

(註)復元したものは卒、残存値は△を数値の前に付している。

(註)青磁については、「國立歴史民俗博物館資料叢書報告書4 日本出土の貿易陶磁」1993を分類の基準とし、青花については、小野正敏1982「14~16世紀の染付陶、磁の分類と年代」、「貿易陶磁研究」No.2を分類の基準とした。白磁については森田勉1982「14~16世紀の白磁の分類と概年」、「貿易陶磁研究」No.2を分類の基準とした。

遺物 No.	博団	遺構名 出土地點	種別	法量(cm)			胎土色調	文様・形態・技法上の特徴	製作地	製作年代	備 考
				口 径	底 径	器 高					
1	93	道路状遺構1	陶器 漆器	—	幸7.7	△1.9	灰灰色	全面を褐色の釉で塗刷、高台は低い。		近現代	
3	93	道路状遺構2	漆器 鏡	幸12.3	—	△2.1	灰白色	塗付。内側面に文様あり。	肥前系	近世	
4	93	道路状遺構2	陶器 鏡	—	—	△2.0	灰色	口縁部外側に團扇が2本ある。	肥前系	18・19世纪	陶削染付
5	93	道路状遺構2	漆器 鏡	—	—	△1.6	灰白色	塗付。外側に文様あり。	肥前系	近世	
6	93	道路状遺構2	白漆 鏡	—	—	△1.3	白色	口縁部はやや内側して立ち上がり、漆墨は斜張りで施す。团扇は薄い。	中国	15・16世纪	D群
43	113	I 21南西 表土～褐色土	陶器 鏡	幸19.6	—	△5.1	浅黄色	口縁を玉縫状にする。		近現代	
45	113	I 22北西 表土～褐色土	漆器 鏡	幸10.0	幸5.4	2.7	灰白色	塗付。内側面に文様、外側面に模様の再現。見込みに升井花文、高台内に路あり。塗付に砂利混入。	肥前系	18世纪	
46	113	I 22北西 表土～褐色土	陶器 鏡	—	3.7	△2.6	灰色	外側に文様あり。	肥前系	18・19世纪	陶削染付
47	113	I 22北西 表土～褐色土	漆器 鏡	—	幸3.8	△1.5	灰白色	脚断下部露刷、蛇の口目判剥ぎを施す。	肥前系	近世	
64	115	H 21北西 黒褐色土	白磁 鏡	—		△4.5	灰白色	玉縫状(团扇部)。团扇は薄く、直綫状に外側して立ち上がる。	中国	中世	前期

遺物 名	種類	遺構名 出土位置	種類	法量(cm)			胎土色調	文様・形態・技法上の特徴	製作地	製作年代	備考
				口径	底径	高さ					
65	115	J25 黒褐色土.	青磁 香炉	—	—	△1.7	灰白色	I1層内部内側に輪を拭き取った跡？ が残る。器底は厚く灰又黄味に立ち上がる。	龍泉窯	中世	
66	115	H21北西 黒褐色土.	—	—	—	△2.0	灰色	簡造弁文。	龍泉窯	13世紀	B 8
67	115	H22南西 黒褐色土	白磁 碗	—	—	△1.9	灰白色	器盤は青い。	中国	中世	
68	115	H21北西 黒褐色土.	青磁 碗	—	—	△1.9	灰白色	碗の底部近くと思われる。内側面 オリーブ灰色である。	肥前系	近世	
69	115	H21北西 黒褐色土.	白磁 円片碗	—	—	△2.6	灰白色	両部片と墨われる。外側に凹凸が 2本みられる。	中国	中世前期	鉢最初の出土か?

表10 橋本德道遺跡出土石器一覧

遺物 名	種類	遺構名 出土位置	器 種	法量(最大長×最大幅×最大厚)(cm)	重量 (g)	石 材	備 考
S 1	116	H23北西 黒褐色土	石盤	2.15×1.65×0.53	0.96	黒曜石	立角形盤
S 2	116	J25南東 黒褐色土	石盤	2.15×1.65×0.3	0.71	黒曜石	
S 3	116	トレント出土 黒褐色土	石盤	1.85×1.3×0.34	0.55	黒曜石	
S 4	116	I24北山 黒褐色土.	石板	2.2×1.85×1.15	4.41	黒曜石	
S 5	116	I24北東 黒褐色土.	石板？	2.95×1.55×1.0	3.33	黒曜石	裏と表面に作桌面。

表11 橋本漆原山遺跡出土金属器一覧

遺物 名	種類	遺構名 出土位置	器 種	法量(最大長×最大幅×最大厚)(cm)	重量 (g)	材 質	備 考
F 1	95	通路状遺構 2	横	4.55×3.4×1.0	20	鉄	
F 2	101	溝13	鉄津	10.35×7.4×2.5	205	鉄	合鍛造化 縱形鋸治溝
F 3	101	溝13	鉄津	9.5×8.4×4.8	514	鉄	合鍛造化 縱形鋸治溝 舟形土付着
F 4	101	溝18	鉄津	9.1×7.2×3.7	336	鉄	鍛形鋸治溝
F 5	101	溝13	鉄津	7.2×4.5×3.4	105	鉄	合鍛造化 縱形鋸治溝 木楔付石
F 6	101	溝13	鉄津	4.9×3.2×1.05	22.3	鉄	合鍛造化 縱形鋸治溝
F 7	113	J25南西 黒褐色土	不明鉄器	4.1×4.8×0.5	3	鉄	中心から放射状に溝が走行。裏面に針状の金属器が 付着。
F 8	115	J25南西 黒褐色土	鉄津	5.5×4.4×2.3	82	鉄	断面U字形
F 9	115	J25南東 黒褐色土	鉄津	5.0×3.7×1.7	9	鉄	断面U字形
F 10	115	J24北西 黒褐色土	鉄津	5.15×4.5×3.05	37	鉄	F 13と同一個体。断面長方形。
F 11	115	J24北西 黒褐色土	鉄津	6.5×6.4×4.4	176	鉄	断面長方形。

## 第5章 特論1. 中世の地鎮における銭貨の取り扱いについて —中国地方を中心に—

地鎮は土木・建築に先だって行う十公への祭祀である。中世の地鎮遺構は多く知られているが、地鉢に用いられた遺物の組み合わせや埋納の仕方、地鎮の対象は様々である。橋本漆原山遺跡では古銭と土師質土器が埋納された、地鎮遺構と思われる土坑44を検出した。本稿ではこれまでに知られている中国地方の地鎮遺構のうち、特に土師質土器と古銭を埋納する遺構を概観し、古銭の取り扱いから、銭貨の意識の差異による二通りの宗教作法が存在したことを探る。

中国地方ではこれまで、土師質土器と古銭を組み合わせたものを含め、鳥取県を除き36遺跡92遺構の中世地鎮遺構が確認されているが<sup>(注1)</sup>、いくつかの特徴を伺える。

地鎮具の組み合わせについては、鶴谷和彦氏や青島齊氏が分類し、次のように提示している<sup>(注2)</sup>。

- ①銭貨のみが単独で出土するもの
- ②銭貨と皿がセットで出土するもの
- ③縄もしくは帯+皿に銭貨が伴うもの
- ④その他（①～③に当てはまらない遺物と銭貨が出土しているもの）
- ⑤銭貨を伴わないもの

また、同じ組み合わせでも埋納の仕方は一様ではない。遺物の取り扱いに差異が認められるのである。例えば先述した分類の②銭貨と皿がセットで出土するものでも、銭貨を丁寧に皿内に置く例（広島県尾道遺跡など）もあれば、銭貨を単に土坑内に投げ込んだと思われる例（島根県渡瀬沖遺跡SB01P359など）もある。

地鎮の対象については、中国地方では掘立柱建物に伴う遺構が知られると思われるが、京都では古代の都城跡で橋桁造営や条坊交差点での地鎮遺構が検出され、近世墓地造営に伴う可能性のある地鎮遺構も確認されている。

<sup>(注3)</sup>また、橋本漆原山遺跡土坑44は、周辺に建物跡は存在せず、南東の墓地跡に伴う地鎮遺構である可能性が指摘できる。中国地方でも建物跡以外を対象にした地鎮遺構がさらに多く存在した可能性がある。

橋本漆原山遺跡土坑44では、土師質土器10枚と古銭11枚、円形の石が出上了。埋納の手順は次のとおりであったと考えられる。長径0.41m、短径0.48m、深さ0.2mの土坑に数枚の古銭をばらまき、いくらかを紙に包んで上坑の隅に置く。次に法量のほぼ等しい10枚の土師質土器（136・138～145）をおそらく口に積み、最上部に小さな上師質土器（137）を置く。最後に石をたたきつけるように土坑内に投げ込んだと思われる。図117、表12は土坑44出土土師質土器の法量比較であるが、137を除くすべての土師質土器がほぼ口径12cm、底径6cm、器高3.4cmであることが分かる。137以外はセット関係を意識して製作された可能性を指摘できる。そして137は、一つだけ他と法量が異なることに加えて最上部で出土したという状況からも、他の土師質土器と異なる取り扱いをされた可能性がある。

土坑44の遺物の組み合わせを、先に提示した分類の②銭貨と皿がセットで出土するものとみなすと、中国地方の地鎮遺構で表13の9遺構を類例に上げられる。島根県渡瀬沖遺跡例を除きほとんどが中世後半である。

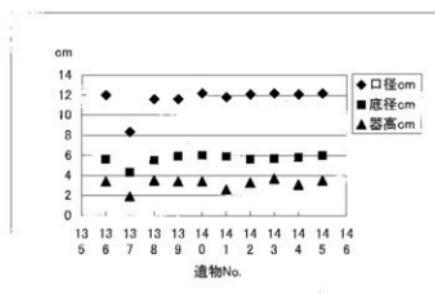


図117 土坑44出土土器の法量

No.	口径cm	底径cm	器高cm
137	8.3	4.3	1.9
136	12	5.6	3.4
138	11.6	5.5	3.5
139	11.6	5.9	3.4
140	12.2	6	3.4
141	11.8	5.9	2.6
142	12.1	5.6	3.3
143	12.2	5.7	3.7
144	12.1	5.8	3.1
145	12.2	6	3.5

表12 土坑44出土土器の法量

主要な遺構を紹介すると、次のようにある

#### 岡山県津寺遺跡土坑No.15（図118）

65×60cmの円形土坑に焼土、石、土師質土器皿2、土師質土器碗1、元豊通寶1が出土した。焼土と石は土坑上半に充填されていた。

#### 島根県渡橋沖遺跡SB01P213・359

短辺4.6m、長辺11.5m、の1間×5間の掘立柱建物の柱穴である。P213は径56cmの規模で、石と石の間から土師質土器片と共に元豊通寶1が出土した。建物の裏鬼門に当たる。P359は52×32cmの規模で、土師質土器片や炭と共に宋通元寶1が出土した。銭貨は土器片より下位で出土したといわれる。建物の鬼門に当たる。

#### 広島県尾道遺跡

掘立柱建物北東に位置する土坑から上師質土器皿30枚以上と銭貨23枚以上が出土した。銭貨は皿の上に重なっていたものもある。銭貨は開元通寶3、祥符元寶1、天祐通寶2、大型元寶1、天聖通寶1、皇宋通寶2、熙寧元寶5、元豐通寶4、紹聖元寶1、洪武通寶1、不明1である。

#### 広島県尾道遺跡

深い掘り込みの底で、上向きに重なり合った上師質土器皿数十枚と銭貨37枚が出土した。銭貨は皿の中に1枚ずつ入っていたものもあり、多くは皿の体部に立てかけたように置いてあったといわれている。銭貨は開元通寶3、淳化元寶1、至道元寶1、咸平元寶2、天祐通寶1、天聖元寶2、景祐元寶2、皇宋通寶1、嘉祐元寶2、治平元寶1、熙寧元寶1、元豐通寶5、元祐通寶1、大觀通寶1、政和通寶1、淳熙元寶1、洪武通寶3、永樂通寶8である。掘削工事中に発見された。

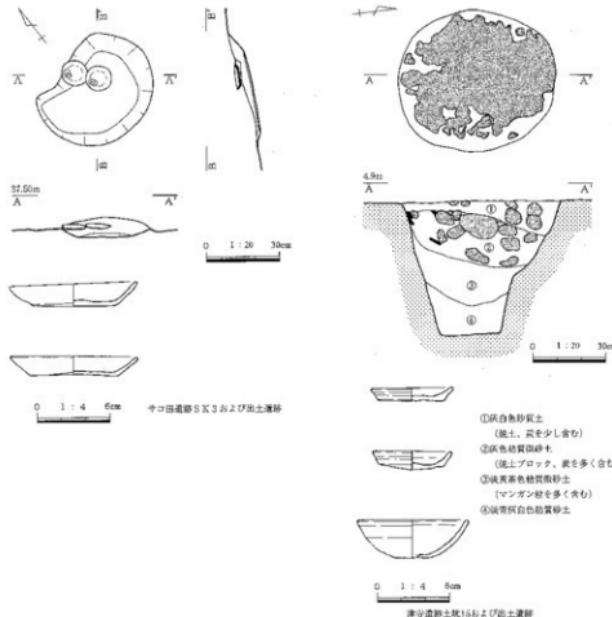


図118 広島県サコ田遺跡 S K 3、岡山県津寺遺跡土坑15（報告書挿図を一部改変）

県名	遺跡	遺構	備考
岡山県	和田B遺跡	土坑No.50	中世後半
	津寺遺跡 (土筆山)	土坑15	中世
島根県	渡橋沖遺跡	SB01P213・359	鎌倉時代後半
	高田遺跡	SX-8	不明
広島県	行武城跡	SX01	16世紀
	尾道遺跡	不明	室町時代後半、掘削工事中に発見
	備後国府跡	910aTP1	15~16世紀、トレーニング調査
山口県	サコ田遺跡	SK3	15世紀末~16世紀初頭
	釜山遺跡	SB08SP4	16世紀前半

表13 銭貨と皿を埋納した中国地方の地鎮遺構

#### 山口県釜山遺跡SB 8 SP 4

掘立柱建物の柱の抜き跡から土師質土器皿、洪武通寶3が出土した。皿の上に銭貨が乗せられ、さらにその上にムギ・アズキが乗せられていた。

わずか9例だが、特に2つの特徴に注目したい。(1) 土器内に銭貨を丁寧に置いた例(a群とする)と、銭貨を土器外に、たいていはばらまくようにして埋めた例(b群とする)がある。(2) a群のうち銭貨と共伴したのはすべて土師質土器皿であり、土師質土器碗や陶磁器の腹盤は出土しなかった。

特徴(1)のうち、a群は広島県行武城跡SX01、尾道遺跡、備後国府跡910aTP1、サコ田遺跡SK3、山口県釜山遺跡SB 8 SP 4であり、今のところほとんどが広島県の地鎮遺構に含まれる。地鎮遺構内で出土した銭貨の多少にかかわりなく、土師質土器皿内に置かれる銭貨は1・2枚であった。a群は銭貨を土公へ供献し、象徴的な意味で土地を購入した祭祀跡である可能性を指摘できる。またb群は岡山県和田B遺跡土坑No.50、津寺遺跡土筆山No.15、渡橋沖遺跡SB01P213・359であり、土器片などと共に出土した例が多い。祭祀の後に埋納したのか、遺構が祭祀跡そのもののかは不明であるが、b群はいわゆる「散錢」が行われた跡を含む可能性を指摘できる。横木塗原山遺跡土坑44は銭貨をばらまいた状況と、紙に包み丁寧に置いた状況が伺えるが、土器内に銭貨を入れて供献した形跡は認められなかった。土坑44はb群だが銭貨を丁寧に取り扱ったことを伺える。

また冒頭に上げた鷲谷分類①銭貨のみが単独で出土するものにも、同様の銭貨の取り扱いを認めることができる<sup>(34)</sup>。a群に相当する縞銭のように銭貨を丁寧に取り扱った例<sup>(35)</sup>とb群に相当する銭貨をばらまいて分類できるのである。

以上から中世の、銭貨を主体にしたと思われる地鎮遺構では、銭貨の取り扱いの違いから二通りの作法を認めることができる。銭貨を供獻する作法と銭貨をばらまいて埋納する作法である。

古代においては寺の基壇を築成していく過程で、銭貨をばらまいて築土に入れ込んだと思われる地鎮遺構が知られており、<sup>(36)</sup>中世地鎮遺構で銭貨をばらまいた例は古代からの伝統に則った作法であると考えられる。それに対して縞銭や皿+銭貨を組み合わせて行う地鎮などの銭貨を丁寧に扱う方法は、中世から初められた作法と思われる。<sup>(37)</sup>この銭貨の取り扱いの変化は銭貨に対する認識の変化を示唆している可能性がある。古代において多くの場合“淨め”などの道具として使われ、経済的な価値をあまり認められていなかった銭貨が、中世になると、物を得るために経済的な手段としての認識が強まったと考えられるのである。

では近世の地鎮遺構と比較するとどうか。近世の地鎮遺構の詳細は明らかでないが、中世の地鎮作法を引き継いだ可能性があり<sup>(38)</sup>、地鎮遺構については中世と近世にそれほど差異は認められないかもしれない。しかし墓地埋納銭では、中世後半～近世にかけて六道銭が成立する。六道銭は一途の川の渡費といわれている。六道銭の成立は、近世においてよりいっそう貨幣経済が発達したことを示唆する可能性がある。

中世において縞銭や土器皿に銭貨を置くという作法が生まれたことは、中世後半が本格的な貨幣経済社会の萌芽の時期もしくは貨幣経済への胎動の時期であったことを示唆する可能性がある。

広島県備後国府跡910aTP 1  
長径102cm、短径76cmの不整  
楕円形ピットから、土師質土器皿  
と景德元寶1が出土した。銭貨は  
皿内に置かれていた。  
広島県サコ田遺跡SK 3 (図118)  
掘立柱建物内に位置するピット  
から、土師質土器皿2枚、淳化元  
寶1、祥符元寶1、元符通寶1、  
皇宋通寶1が出土した。銭貨は皿  
に2枚ずつ置かれていた。

次に特徴（2）について考慮したい。集成した遺構のほとんどが中世後半の遺構であるという資料的な偏りがあるが、碗+銭貨の組み合わせや陶磁器碗皿+銭貨の組み合わせは今のところ存在しない。すべて土師質土器皿+銭貨の組み合わせである。これは入手可能な容器が限られていたためとは思えない。少なくとも15・16世紀においては、輸入陶磁器はほぼ普遍的に存在していたと考えられるからである。このことは銭貨を供獻するための器として、意図的に土師質土器の皿を選択したと考えられるのである。さらに土師質土器皿が成立していなかったと思われる中世前期において土器に銭貨を供獻した地鎮遺構が知られていないのも示唆的である。土師質土器皿の成立の一つの契機として、銭貨などの供獻という新たな祭祀作法の成立を想定しうるのである。

以上、銭貨と土師質土器を組み合わせた中国地方の地鎮遺構から若干の考察を行った。銭貨の取り扱いの差異から、（1）中世において本格的な貨幣経済の萌芽がみられる可能性があること、（2）土師質土器皿の成立の一つの契機として、地鎮などの宗教作法の変化が考えられる可能性があることを指摘した。もっと多くの地鎮遺構の資料を集成して分析すること、考古資料から明確な地鎮遺構の定義づけを改めて行うこと、古代や近世の地鎮の実態のさらなる解明、土師質土器や陶磁器の地域的な組成からの細密な分析といったことが今後の課題である。

（伊藤 創）

（註1）出土銭貨研究会『中世の地鎮と銭貨』第9回出土銭貨研究会資料2002の集成による。

（註2）鷗谷和彦1997「中世の“地鎮”と銭貨」『出土銭貨』第7号出土銭貨研究会

青島啓2002「中国地方」『中世の地鎮と銭貨』第9回出土銭貨研究会資料

（註3）小池寛1997「京都府内における地鎮遺構出土の銭貨について」『出土銭貨』第7号 出土銭貨研究会

（註4）分類③④の銭貨の取り扱いについては触れないことにする。③は「地鎮め」の主要構成要素は鍋もしくは釜+皿にある」という指摘があり、主に「五穀粥」の供獻と関連づけられており、①・②とは祭祀の質が大きく異なる可能性がある。同様に④も①②とは地鎮具の組み合わせが大きく異なるので比較から除外した。鷗谷和彦1997「中世の“地鎮”と銭貨」『出土銭貨』第7号出土銭貨研究会

（註5）岡山県津寺跡遺跡掘立柱建物14北西検出縄錢など

（註6）鷗谷和彦1997「中世の“地鎮”と銭貨」『出土銭貨』第7号出土銭貨研究会、森郁夫1998「地を鎮めるまつり」、金子裕之編『日本の信仰遺跡』雄山閣

（註7）関口慶久2002「近世の地鎮－江戸の地鎮と銭貨－」『中世の地鎮と銭貨』第9回出土銭貨研究会資料2002出土銭貨研究会

#### （参考文献）

鷗谷和彦1997「中世の“地鎮”と銭貨」『出土銭貨』第7号出土銭貨研究会

青島啓2002「中国地方」『中世の地鎮と銭貨』第9回出土銭貨研究会資料

小池寛1997「京都府内における地鎮遺構出土の銭貨について」『出土銭貨』第7号 出土銭貨研究会

森郁夫1998「地を鎮める祭り」金子裕之編『日本の信仰遺跡』雄山閣

関口慶久2002「近世の地鎮－江戸の地鎮と銭貨－」『中世の地鎮と銭貨』第9回出土銭貨研究会資料2002出土銭貨研究会

藤澤典彦1994「六道銭の成立」『出土銭貨』第2号出土銭貨研究会

大庭俊次・足立克己・間野人承1999『渡橋沖遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告3 建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会

岡山県古代吉備文化財センター1994『三寺跡 津寺跡』山陽自動車道建設に伴う発掘調査9 日本道路公团  
広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会